



平成19（2007）年3月
沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は平成 17（2005）年度に国営沖縄記念公園事務所から委託を受けて沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した首里城跡御内原西地区における埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

昭和 61（1986）年度から首里城跡の復元整備事業が着手され、平成 4（1992）年度に正殿、北殿、南殿、奉神門等が復元されてからも、城跡以外の周辺の整備も引き続いて行われており、現在、一帯は首里城公園として県民に広く親しまれています。

その整備事業の一環として、御内原西地区の発掘調査が実施されました。調査対象区域は首里城跡の内郭の中央部、正殿の東側でかつて「御内原」と呼ばれていた部分で「世添殿」、「寄満」、「門番詰所」等の建物、そして「後之御庭」と呼ばれる庭があった場所です。「世添殿」は御内原を管理しており、「門番詰所」は御内原の出入りを管理した建物です。また「後之御庭」は間得大君や上級神女が儀式を執り行った庭と、首里城内でもとりわけ重要な位置を占めていました。これらの構造物は近代以降の熊本鎮台沖縄分遣隊等による建物破壊や、県社沖縄神社設置に伴う建物解体、そして沖縄戦に伴う空襲によって壊滅的な被害を受けました。そのため近世の絵図から当時の様子が窺えるのみであり、正確な位置や建物構造については未だ解っていません。

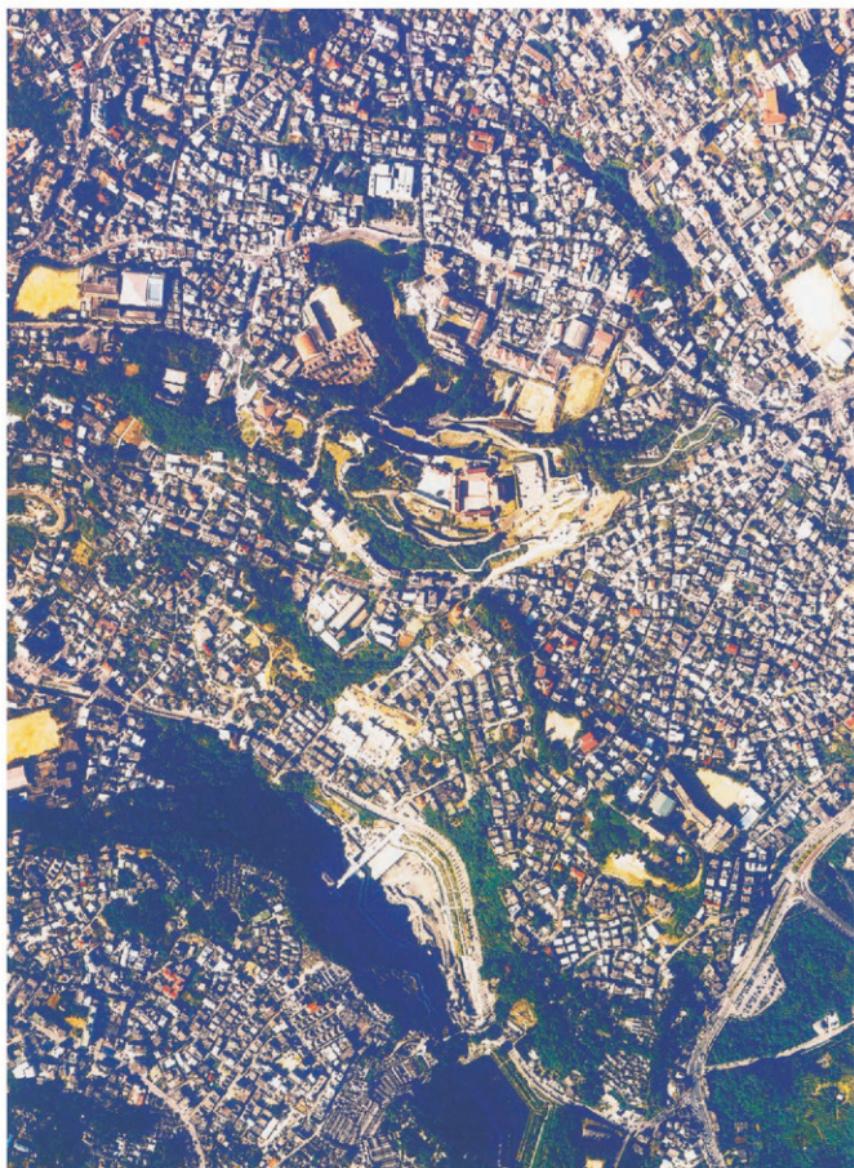
この調査では「寄満」と「門番詰所」の遺構が確認されたものの、それ以外は後世の破壊が予想以上に著しく、痕跡すら確認することができませんでした。その一方で、中世相当にまで遡る遺構を多く確認することができ、「御内原」の変遷をある程度まで知ることができました。また調査に伴って膨大な瓦類をはじめとする多種多様な出土品が得られました。

これらの成果をまとめた本報告書が、沖縄における王国時代の歴史や首里城の様相を知る上で貴重な資料として活用されるとともに、文化財保護への理解を深めることにもつながれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査や資料整理を行うにあたって御指導を賜った諸先生をはじめ、調査に御協力いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成 19（2007）年 3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 田場 清志



卷首図版 1 首里城跡（航空写真：1998年）



調査区北側



調査区南側



右廻い遺構、石列 1~4



調査区北側 焼土面 (B・C-2 グリッド)



沖縄神社参道



後之御庭床面 (C-2~4 グリッド)



後之御庭造成状況 (C・D-5 グリッド)



集石遺構全景 (B・C-4・5 グリッド)



S R O 2 柱穴群 (B-2, C-2・3 グリッド)



岩盤削平状況 (C・D-8 グリッド)



集石遺構一括遺物



六葉形釘隠し



後之御庭地区出土銭貨

例　　言

1. 本書は平成17（2005）年度に実施した、首里城跡「御内原西」地区発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査は沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所より委託を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 資料整理作業は、平成18（2006）年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
4. 本書に使用した1/25000地形図は国土地理院発行の資料によった。
5. 本書に表した高度値は海拔高である。
6. 本書に掲載した遺構図の座標軸は国土座標軸（第XY座標形）を使用した。
7. 土層の色調については『新版標準土色帳26版』小山正忠、竹原秀雄監修2004による。
8. 本文中で使用した引用・参考文献は結語の後にまとめて掲載した。
9. 資料整理にあたり、下記の方々には遺構解釈及び遺物の同定をお願いした。記して謝意を表したい。

（五十音順）

家田淳一（佐賀県立名護屋城博物館）、久保智康（京都国立博物館）、平良啓（株式会社 国建）、
高橋誠一（関西大学文学部）、野上建紀（有田町歴史民俗資料館）、森綱（大阪市教育委員会）

10. 本書の編集は伊集ゆきの、岸本竹美他の協力を得て山本正昭が行った。
11. 各章の執筆は下記のように分担した。なお、第3章の遺構原稿は山本が、各遺物の観察所見については第4章に示した担当者が執筆した。

山本　正昭	第1章、第2章、第3章、第4章 第6・7節、第14節、第5章
長濱　健起	第4章 第9・10節、第15節、第18・19節
伊藤　圭	第4章 第2節、第4・5節、第8節、第11節、第16節
岸本　竹美	第4章 第1節、第3節、第17節、第20節
上原　静	第4章 第12・13節
12. 本書に記載された写真は山本正昭、岸本竹美、山田浩久が、出土遺物は矢船章浩、光嶋香の撮影によるものである。
13. 本書に掲載した御内原地区発掘調査に関する写真、実測図などの記録は全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。
14. 発掘調査・資料整理などの調査体制については第1章の第2節で記した。

目 次

序

卷首図版

例言

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査経過	3
第4節 調査区の設定	4
第2章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 遺構と遺物	14
第1節 層序	14
第2節 遺構	15
第3節 門番詰所・中門・寄満地区の遺構と遺物	16
第4節 S R O 2 と遺物	19
第5節 後之御庭地区の遺構と遺物	20
第6節 石闘い遺構と遺物	36
第7節 石列遺構と遺物	40
第8節 石積み遺構と遺物	42
第9節 石壠遺構と遺物	52
第10節 集石遺構と遺物	54
第11節 G – 8 ~ J – 8 柱穴群と遺物	64
第12節 沖縄神社参道	67
第13節 掘乱層等からの出土遺物	67
第4章 遺物の種類別概観	106
第1節 青磁	106
第2節 白磁	107
第3節 染付	108
第4節 黒釉陶器	109
第5節 タイ産土器	111
第6節 黒釉陶器	111
第7節 その他の輸入陶磁器	112
第8節 本土産陶磁器	112
第9節 沖縄産施釉陶器	114
第10節 沖縄産無釉陶器	115
第11節 土器	116
第12節 屋瓦	118
第13節 墓瓦	122
第14節 金属製品	123
第15節 銭貨	123
第16節 骨製品	123
第17節 玉製品	124
第18節 煙管	124
第19節 石製品	124
第20節 円盤状製品	124
第5章 結語	161
参考文献	169
報告書抄録	

図 目 次

第1図	平成17年度調査区全体図	5	第46図	G－8～J－8柱穴群 平面図	65
第2図	調査区周辺の地質図	6	第47図	搅乱層等の出土遺物（1）	68
第3図	沖縄本島の位置	7	第48図	搅乱層等の出土遺物（2）	70
第4図	首里城跡の位置及び周辺の遺跡	8	第49図	搅乱層等の出土遺物（3）	72
第5図	首里城平面図	9	第50図	搅乱層等の出土遺物（4）	74
第6図	旧琉球大学校舎配置図	9	第51図	搅乱層等の出土遺物（5）	76
第7図	調査区位置図	11	第52図	搅乱層等の出土遺物（6）	78
第8図	「沖縄県首里旧城図」御内原地区	12	第53図	搅乱層等の出土遺物（7）	80
第9図	旧琉球大学本館周辺校舎配置図	12	第54図	搅乱層等の出土遺物（8）	82
第10図	首里城跡周辺遺跡地図	13	第55図	搅乱層等の出土遺物（9）	84
第11図	門番詰所・中門・寄満地区 遺構平面図	16	第56図	搅乱層等の出土遺物（10）	86
第12図	門番詰所・中門・寄満地区 柱穴及び 溝断面図	17	第57図	搅乱層等の出土遺物（11）	88
第13図	門番詰所・中門・寄満地区 出土遺物	18	第58図	搅乱層等の出土遺物（12）	90
第14図	S R O 2 遺構図	19	第59図	搅乱層等の出土遺物（13）	91
第15図	S R O 2 出土遺物	20	第60図	搅乱層等の出土遺物（14）	92
第16図	後之御庭地区 平面図及びピット断面図	21	第61図	搅乱層等の出土遺物（15）	94
第17図	後之御庭地区		第62図	搅乱層等の出土遺物（16）	95
	ピット断面図及び土層図（1）	23	第63図	搅乱層等の出土遺物（17）	96
第18図	後之御庭地区 土層図（2）	25	第64図	搅乱層等の出土遺物（18）	97
第19図	後之御庭地区 出土遺物（1）	26	第65図	搅乱層等の出土遺物（19）	98
第20図	後之御庭地区 出土遺物（2）	28	第66図	搅乱層等の出土遺物（20）	100
第21図	後之御庭地区 出土遺物（3）	30	第67図	搅乱層等の出土遺物（21）	102
第22図	後之御庭地区 出土遺物（4）	32	第68図	搅乱層等の出土遺物（22）	104
第23図	後之御庭地区 出土遺物（5）	34	第69図	青磁	125
第24図	石匂い遺構 平面図	36	第70図	白磁	125
第25図	石匂い遺構 立面図及び土層図	37	第71図	染付	126
第26図	石匂い遺構 出土遺物	38	第72図	褐釉陶器（中国産）	126
第27図	石列遺構 出土遺物	40	第73図	褐釉陶器（タイ産）	126
第28図	石列遺構 平面図	41	第74図	骨製品	126
第29図	調査区南側全体図	43	第75図	黒釉陶器	126
第30図	石積み1 遺構図	45	第76図	タイ産土器	126
第31図	石積み3～6 遺構図（1）	45	第77図	その他の輸入陶器	127
第32図	石積み3～6 遺構図（2）	47	第78図	本土産陶器	127
第33図	石積み遺構 出土遺物（1）	48	第79図	沖縄産施釉陶器	127
第34図	石積み遺構 出土遺物（2）	50	第80図	沖縄産無釉陶器	127
第35図	石甃1 平面図及び断面図	52	第81図	土器	128
第36図	石甃2 平面図及び断面図	53	第82図	玉製品	128
第37図	石甃遺構 出土遺物	53	第83図	石製品	128
第38図	集石遺構土層図	54	第84図	埠瓦	128
第39図	集石遺構 小グリット設定及び コーラルの範囲	55	第85図	円盤状製品	128
第40図	集石遺構 平面図	57	第86図	煙管	128
第41図	集石遺構 出土遺物（1）	58	第87図	金属製品	129
第42図	集石遺構 出土遺物（2）	60	第88図	錢貨	129
第43図	集石遺構 出土遺物（3）	62	第89図	屋瓦（高麗系）	130
第44図	G－8～J－8柱穴群 断面図	64	第90図	屋瓦（大和系）	130
第45図	G－8～J－8柱穴群 出土遺物	64	第91図	屋瓦（明朝系）1	131
			第92図	屋瓦（明朝系）2	132
			第93図	御内原及び二階殿地区遺構図	165

表 目 次

第1表	首里城跡「御内原西」地区遺構表	15	第6表	後之御庭地区出土遺物一覧（3）	31
第2表	門番詰所・中門・ 寄満地区出土遺物一覧	18	第7表	後之御庭地区出土遺物一覧（4）	33
第3表	S R O 2 出土遺物一覧	20	第8表	後之御庭地区出土遺物一覧（5）	35
第4表	後之御庭地区出土遺物一覧（1）	27	第9表	石匂い遺構出土遺物一覧	39
第5表	後之御庭地区出土遺物一覧（2）	29	第10表	石列遺構出土遺物一覧	41
			第11表	石積み遺構出土遺物一覧（1）	49

第12表	石積み遺構出土遺物一覧（2）	51
第13表	石罌遺構出土遺物一覧	53
第14表	集石遺構出土遺物一覧（1）	59
第15表	集石遺構出土遺物一覧（2）	61
第16表	集石遺構出土遺物一覧（3）	63
第17表	G-8～J-8柱穴群出土遺物一覧	64
第18表	ピット出土の遺物一覧（1）	66
第19表	ピット出土の遺物一覧（2）	67
第20表	撲乱層等出土遺物一覧（1）	69
第21表	撲乱層等出土遺物一覧（2）	71
第22表	撲乱層等出土遺物一覧（3）	73
第23表	撲乱層等出土遺物一覧（4）	75
第24表	撲乱層等出土遺物一覧（5）	77
第25表	撲乱層等出土遺物一覧（6）	79
第26表	撲乱層等出土遺物一覧（7）	81
第27表	撲乱層等出土遺物一覧（8）	83
第28表	撲乱層等出土遺物一覧（9）	85
第29表	撲乱層等出土遺物一覧（10）	87
第30表	撲乱層等出土遺物一覧（11）	89
第31表	撲乱層等出土遺物一覧（12）	93
第32表	撲乱層等出土遺物一覧（13）	99
第33表	撲乱層等出土遺物一覧（14）	101
第34表	撲乱層等出土遺物一覧（15）	103
第35表	撲乱層等出土遺物一覧（16）	105
第36表	タイ産半練の分類	111
第37表	明朝系丸瓦・玉縁部（凸面）出土状況	122
第38表	明朝系丸瓦 端部（凹面）出土状況	122
第39表	明朝系平瓦面の組圧痕出土状況	122
第40表	沖縄諸島出土骨鑑	124
第41表	青磁出土状況	133
第42表	白磁出土状況	134
第43表	染付出土状況	134
第44表	褐釉陶器出土状況	135
第45表	本土產陶磁器出土状況	137
第46表	沖縄產施釉陶器出土状況	139
第47表	沖縄產無釉陶器出土状況	141
第48表	土器出土状況	141
第49表	その他の近現代磁器出土状況	143
第50表	明朝系瓦出土状況	143
第51表	明朝系丸瓦出土状況	143
第52表	明朝系平瓦出土状況	145
第53表	大和系瓦出土状況	147
第54表	高麗系瓦出土状況	148
第55表	博瓦出土状況	148
第56表	釘出土状況	149
第57表	玉製品出土状況	150
第58表	玉製品計測一覧（実測外）	150
第59表	貝類出土状況（1）巻貝	151
第60表	貝類出土状況（2）二枚貝	153
第61表	魚類出土量	155
第62表	ウミガメ出土一覧	156
第63表	ニワトリ出土量	156
第64表	トリ類出土一覧	156
第65表	ネズミ出土一覧	157
第66表	イヌ出土一覧	157
第67表	ブタ出土量	157
第68表	ブタ齒出土一覧	157
第69表	ジエゴン出土一覧	159
第70表	ウマ出土一覧	159
第71表	ウシ出土量	159
第72表	ウシ齒出土一覧	159
第73表	ヤギ出土一覧	159

図 版

図版1	首里城空撮写真	11
図版2	発掘前の調査区全景（東から）	173
図版3	完掘後の調査区全景（東から）	173
図版4	調査区北側全景	174
図版5	調査区南側全景	174
図版6	調査区及び遺構検出状況（1）	175
図版7	遺構検出状況（2）	176
図版8	遺構検出状況（3）	177
図版9	遺構検出状況（4）	178
図版10	調査風景及び出土不発弾	179
図版11	上：門番所・中門・寄満地区 下：S.R.O.2 出土遺物	180
図版12	後之御庭地区 出土遺物（1）	181
図版13	後之御庭地区 出土遺物（2）	182
図版14	後之御庭地区 出土遺物（3）	183
図版15	後之御庭地区 出土遺物（4）	184
図版16	後之御庭地区 出土遺物（5）	185
図版17	上：石匂い遺構 下：石列遺構 出土遺物	186
図版18	石積み遺構 出土遺物（1）	187
図版19	石積み遺構 出土遺物（2）	188
図版20	上：石罌遺構 下：集石遺構（1）出土遺物	189
図版21	集石遺構 出土遺物（2）	190

図版22	上：集石遺構 出土遺物（3） 右下：G-8～J-8柱穴群 出土遺物	191
図版23	撲乱層等の出土遺物（1）	192
図版24	撲乱層等の出土遺物（2）	193
図版25	撲乱層等の出土遺物（3）	194
図版26	撲乱層等の出土遺物（4）	195
図版27	撲乱層等の出土遺物（5）	196
図版28	撲乱層等の出土遺物（6）	197
図版29	撲乱層等の出土遺物（7）	198
図版30	撲乱層等の出土遺物（8）	199
図版31	撲乱層等の出土遺物（9）	200
図版32	撲乱層等の出土遺物（10）	201
図版33	撲乱層等の出土遺物（11）	202
図版34	撲乱層等の出土遺物（12）	203
図版35	撲乱層等の出土遺物（13）	204
図版36	撲乱層等の出土遺物（14）	205
図版37	撲乱層等の出土遺物（15）	206
図版38	撲乱層等の出土遺物（16）	207
図版39	撲乱層等の出土遺物（17）	208
図版40	貝（1）巻貝	209
図版41	貝（2）上：巻貝 下：二枚貝	210
図版42	骨（1）	211
図版43	骨（2）	212

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

首里城跡は琉球王国歴代国王の居城として、そして政治、文化の中心として約550年間の長きに亘って機能してきた。明治以降も学校や博物館、神社として建造物や敷地は利用されてきたが昭和20（1945）年の沖縄戦による空襲で建造物は全壊し、戦後の琉球大学設置により石積み等の遺構も徹底的に破壊を受けた。昭和47（1972）年の沖縄本土復帰に伴って首里城復元の気運は高まっていくことになる。そして、昭和61（1986）年の閣議決定により、内郭4.2haが建設省所管の「ロ号国営公園」に指定され、国の都市公園整備事業（国営沖縄記念公園事務所首里城地区）で復元整備されることが決定するとともに、城郭外側の区域の約17.8haを県営公園として整備することが決定されるに至る。これを受け、首里城公園の整備が都市計画決定し、都市公園としての首里城公園整備が具体化するとともに、年次的に現在も続く整備事業が進められていくこととなる。

今回報告する調査区は首里城跡正殿東側一帯で、かつて「御内原」と呼ばれていた地区である（第7図）。平成17（2005）年度までは調査区周辺に隣接する正殿、二階殿、御内原地区等の発掘調査、史跡整備は完了しており、都市公園並びに管理施設として機能している。国営沖縄記念公園事務所は上記の整備計画に基づいて御内原西地区の遺構確認調査を実施して欲しい旨を沖縄県教育委員会文化課に要望してきた。沖縄県教育委員会文化課は調査対象地区が国指定史跡の敷地内であることから文化庁への現状変更許可の手続きが必要であるとともに、埋蔵文化財の発掘調査が必要である旨の回答を出した。それを踏まえて平成17（2005）年度に国営沖縄記念公園事務所より沖縄県教育委員会文化課が予算の委託を受けて、遺構確認調査を目的とした発掘調査を沖縄県立埋蔵文化財センターが実施する運びとなった。

第2節 調査体制

現地調査（平成17年度）から資料整理及び報告書の刊行（平成18年度）まで、下記の体制で実施した。

a 平成17（2005）年度の調査体制

事業主体・・・沖縄県教育委員会

教育長	仲宗根用英
沖縄県教育庁文化課 課長	千木良芳範
〃 課長補佐	島袋 洋、崎濱文秀
〃 主幹及び記念物係長	盛本 熱
〃 専門員	新垣 力

調査主体・・・沖縄県立埋蔵文化財センター

所長	田場清志
調査事務	
副所長兼庶務課 課長	赤嶺正幸
庶務課 主査	比嘉美佐子
〃 主事	城間奈津子

調査総括

調査課 課長	岸本 義彦
--------	-------

調査員

調査課 専門員

山本正昭、岸本竹美

調査補助員

文化財調査嘱託員

喜多亮輔

調査及び資料

久保智康（京都国立博物館工芸室）

整理指導

森 穏（大阪市教育委員会）

上原 静（沖縄国際大学文学部助教授）

久手堅憲夫（南島地名研究センター評議員）

平良 啓（株式会社国建建築設計部）

高橋誠一（関西大学文学部教授）

西岡尚也（琉球大学教育学部助教授）

発掘調査作業員

安次富マサ子、石垣浩光、泉谷里、油崎京子、大宜味より子、
大城孝仁、大城誠、我如古みどり、嘉味田千枝子、川上益子、
呉我フジ子、佐渡山正子、島仲恵子、仲田均、中村フサ子、
比嘉剛、比嘉洋子、真志喜正枝、宮城悦子、宮国恵子、
諸見里幸子、吉村政博、与那嶺勢津子

資料整理作業員

赤嶺雅子、新垣利津代、石嶺敏子、上原園子、上原美穂子、
大村由美子、荻堂さやか、喜屋武朋子、金城克子、
国場のりえ、崎原美智子、城間いづみ、城間千鶴子、
平良貴子、玉城恵美利、照屋利子、比嘉孝子、比嘉登美子、
比嘉洋子、諸久村泰子

b 平成18（2006）年度の調査体制

事業主体・・・沖縄県教育委員会

教育長

仲宗根用英

沖縄県教育庁文化課 課長

千木良芳範

〃 課長補佐

島袋 洋、崎濱文秀

〃 主幹及び記念物係長

盛本 熊

〃 専門員

新垣 力

調査主体・・・沖縄県立埋蔵文化財センター

所長

田場清志

調査事務

副所長兼庶務課 課長

瑞慶覧康博

庶務課 主査

山田恵美子

〃 主事

城間奈津子

調査総括

調査課 課長

岸本 義彦

調査員

調査課 専門員

山本正昭、岸本竹美

調査補助員

文化財調査 嘴託員

喜多亮輔、山田浩久

調査及び資料

整理指導

上原 靜（沖縄国際大学総合文化学部助教授）

岡田康博（文化庁文化財部文化財調査官）

久保智康（京都国立博物館工芸室室長）

栗国恭子（那覇市文化財審議会委員）

野上建紀（有田町歴史民俗資料館）

家田淳一（佐賀県立名護屋城博物館）

資料整理作業員

赤嶺雅子、石嶺敏子、池原直美、喜屋武朋子、金城克子

瑞慶賀尚美、高良三千代、玉寄智恵子、照屋利子、

友利映子、仲地和美、野村知子、比嘉なおみ、吉村綾子

資料整理作業協力者

真榮平房敬、久手堅憲夫、伊集ゆきの、玉城恵美利

第3節 調査経過

平成17（2005）年度の調査区は近世まで「御内原」と呼称されていた地区で平成12（2000）年度に発掘調査を実施した「御内原」地区の西側と南側に相当する。調査面積は565m²で近世の絵図では門番詰所、中門、寄溝、世添殿といった建物が存在していた場所で、また「後之御庭」と呼ばれる庭があった区域である。沖縄戦後の旧琉球大学造成工事により、広く削平を受けていることから調査前に遺構の残存度が良好でないことが予想された。また昭和61（1986）年に発掘調査された正殿地区では不発弾が確認されていることから（沖縄県教育委員会 当真、上原1987）正殿に隣接している「後之御庭」からも不発弾が確認されることが予想された。更に昨年度の調査まで排出した廃土の処理を今年度までにまとめて行う必要があり、その受け入れ先が決定するまで表土を剥ぐことができないという状況にあった。

これらの問題を抱えながらも、廃土の受け入れ先が決定したため、7月24日からユンボによる戦後の表土層除去作業を行うことになった。まずは調査区の北側、後之御庭に相当する区域を北地区とし、調査区の南側、門番詰所、中門、寄溝に相当する区域を南地区とした。南地区は国営沖縄記念公園事務所首里出張所から正殿、南殿、北殿に向て送電線が埋設されていることから、調査期間前半は北地区を、送電線が移設される11月以降に南地区的調査を実施する事となった。戦後の表土を除去した後の8月1日に磁気探査を北地区において実施した。探査では異常点が40点とかなりの密度で確認されたが、幸い不発弾は出土せず、砲弾片や戦後の金属スクラップに限られた。正殿地区的調査では砲弾による陥没痕が多数、確認されているため、砲弾片はそれらに関わる遺物であるものと考えられた。8月2日から調査区東西南北端各1箇所づつ1×1 mの試掘を行い、堆積状況の確認を行った後に戦前、戦後の表土層の除去に取り掛かった。8月11日には性格不明の建物礎石を検出し、完掘後に写真撮影と平面実測作成作業を行った。更に8月17日に琉球大学本館前の建物基壇の一部を、18日には沖縄神社の参道を検出したので写真撮影による記録を行った。8月23日に後之御庭の北側を画する基壇の根石が確認されたことで、近世段階まで遡る遺構面を想定することができ、手掘りによる後之御庭床面の検出に努めた。その結果、24日に床面と思われる珊瑚礁混じりの粘質土が確認されたため、精査を行い、遺構の検出を行った。30日には調査区西側は戦後の造成によってかなり深く搅乱を受けていることが判明し、引き続いて人力による荒掘りを行った。その際に真管の抜かれた砲弾が出土したため国営沖縄記念公園事務所首里出張所に報告、その後、自衛隊によって引き取られる。完全に搅乱層を除去し終えたのは9月12日で、その後にレベル移動及び世界座標に沿ってグリッド設定を行った。20日に調査区西側において下

層の集石遺構を確認したのを契機に、北地区においては遺構検出と遺構実測へと作業を移行した。一方、南地区においては10月末に送電線の移設工事が完了したので、10月31日に当該地区的磁気探査を実施、とくに問題が無かつたため、11月1日からエンボによる表土除去作業を開始した。10月21日に北地区的発掘及び実測作業が完了したため、平成16年度の黄金御殿地区において掘り残し部分の発掘作業に入り、その間にレベル移動及びグリッド設定を行う。11月16日から南地区的手掘りによる表土除去作業を開始。近代の搅乱層は北地区においてある程度、確認されていたため次の日には石畳及び石列遺構が確認された。30日には寄満、中門、門番詰所の遺構は全て検出し、12月2日からは寄満周辺の下層遺構の検出作業に移行した。他方で北地区的南側と南地区的北側において柱穴の確認作業も並行して行った。27日には現場の状況を首里城復元整備委員会に説明を行い、委員の方々他から多くのご教示を得ることができた。平成18年1月初め頃に南地区はほぼ完掘し、以降は実測作業ならびに写真撮影作業を中心にして進めていく。31日にスカイマスターによる空撮、そして17日(株)パリノサーヴェイによる土壤サンプリングを実施。31日に再度、スカイマスターによる空撮を行い、ブルーシートで全体を覆って発掘調査を終了した。出土遺物は1月中の雨天時に漸次、埋蔵文化財センターへ移動させ、1月31日にはすべての出土遺物の移動は完了した。2月3日にはプレハブ撤去を完了させ、発掘作業における全ての工程を終えた。

第4節 調査区の設定

当初、平成12年度調査時のグリッドをそのまま転用させる予定であったが、その後の首里城公園整備等で基準杭が撤去せられていたことから新たなグリッドを設定する必要があった。

調査区は前年度の調査区である淑順門地区から座標値を調査区内に移動させ、国土座標に合わせて4m×4mの大グリッドを対象地全域に設定した。調査区そして北から1、2、3と算用数字を付けていき、東西ライン即ちX軸とした。同時に西からA、B、Cとアルファベットを付けていき、南北ライン即ちY軸とした。

グリッド名称についてはアルファベットと算用数字を組み合わせて用い、各グリッドの示準は北西隅の交点で示した。更に調査の進行に伴って、集石遺構が検出されたB-4、5、6、C-4、5、6はA、B、C、Dと4つの小グリッドを設定し、出土遺物の取り上げを実施した。この小グリッドは大グリッドを均等に4分割し、2m×2mグリッドとした。

なお、当初は後之御庭地区を中心とする部分並びに搅乱層の遺物をグリッド毎に取り上げていたが、石積み、石列、石垣の遺構が密に検出された南地区的調査以降は遺構毎に取り上げていった。



第1図 平成17年度調査区全体図

第2章 位置と環境

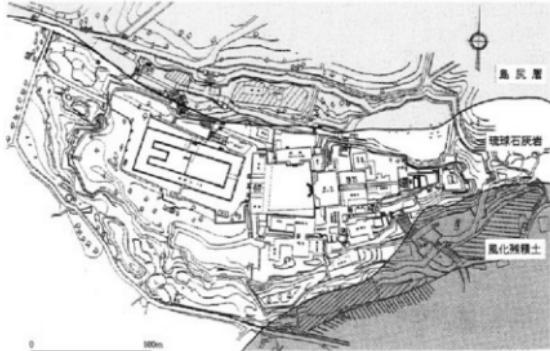
第1節 地理的環境

首里城跡は現在の那覇市首里当蔵3丁目1番、那覇市北東部、琉球石灰岩丘陵地（通称首里台地）の最高部（標高136m）に立地する。

首里台地の特徴としては、島尻層と呼ばれる新第三紀与那原層下部のシルト岩、泥岩や砂岩を基盤とし、その上を琉球石灰岩（第四紀層・琉球層群下部）が覆って複雑な谷が発達していることである（第2図）。また、龍池や寒川（スンガ）など、島尻層と琉球石灰岩との不整合部分から湧き出す湧水が数多くみられる。

北方には末吉山、虎頭山から東方の弁ヶ嶽にいたる丘陵を頂き、弁ヶ嶽を起点として台地北側には真嘉比川、南側には金城川が流れ安里川で合流、東側には南風原町との境界にナゲーラ川が流れしており、他地域とは隔絶されている。これらのことから、首里城は水源に恵まれ、自然の障壁を利用することによって防御に優れた立地となっている。北側は緩斜面となり、首里当蔵町や汀良町、真和志町の街区が広がり、南側は急斜面となり首里金城町や崎山町、寒川町の街区が広がる。

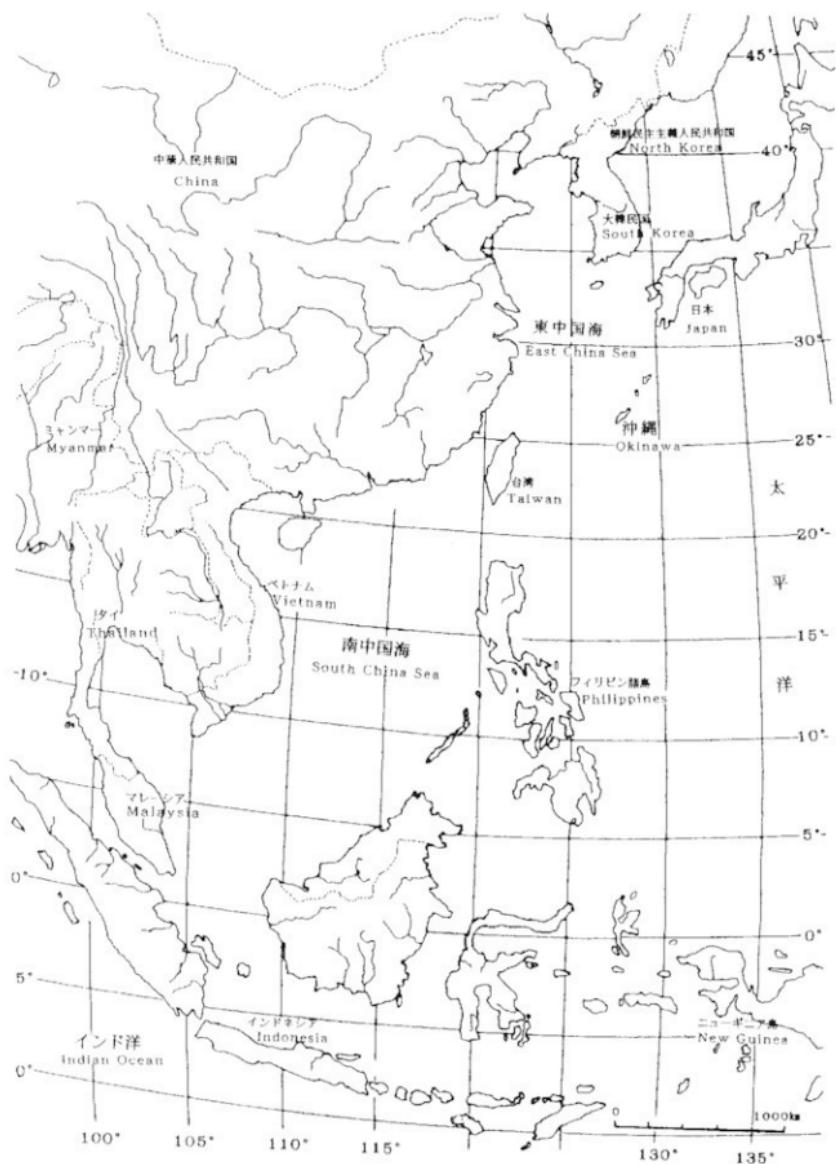
歴史的背景からこの立地状況を見ると、首里城南西側には那覇市街及び貿易港であった那覇港を眺望することができる。貿易によって大きな利益を得ていた琉球王国にとって、良港の確保は必須条件であったことから考えても、首里城の立地は王城として相応しい機能を十分に備えていたことが窺える。加えて首里城東のアザナ、西のアザナ、京の内南側物見台からは、北は座喜味城跡、浦添城跡、東は久高島や大里城跡、糸数城跡、南側は多々名グスク、具志頭グスク、西側は渡名喜島、粟国島が一望することができる極めて眺望の利く場所であることから沖縄本島中南部の拠点としては好条件の場所といえる。



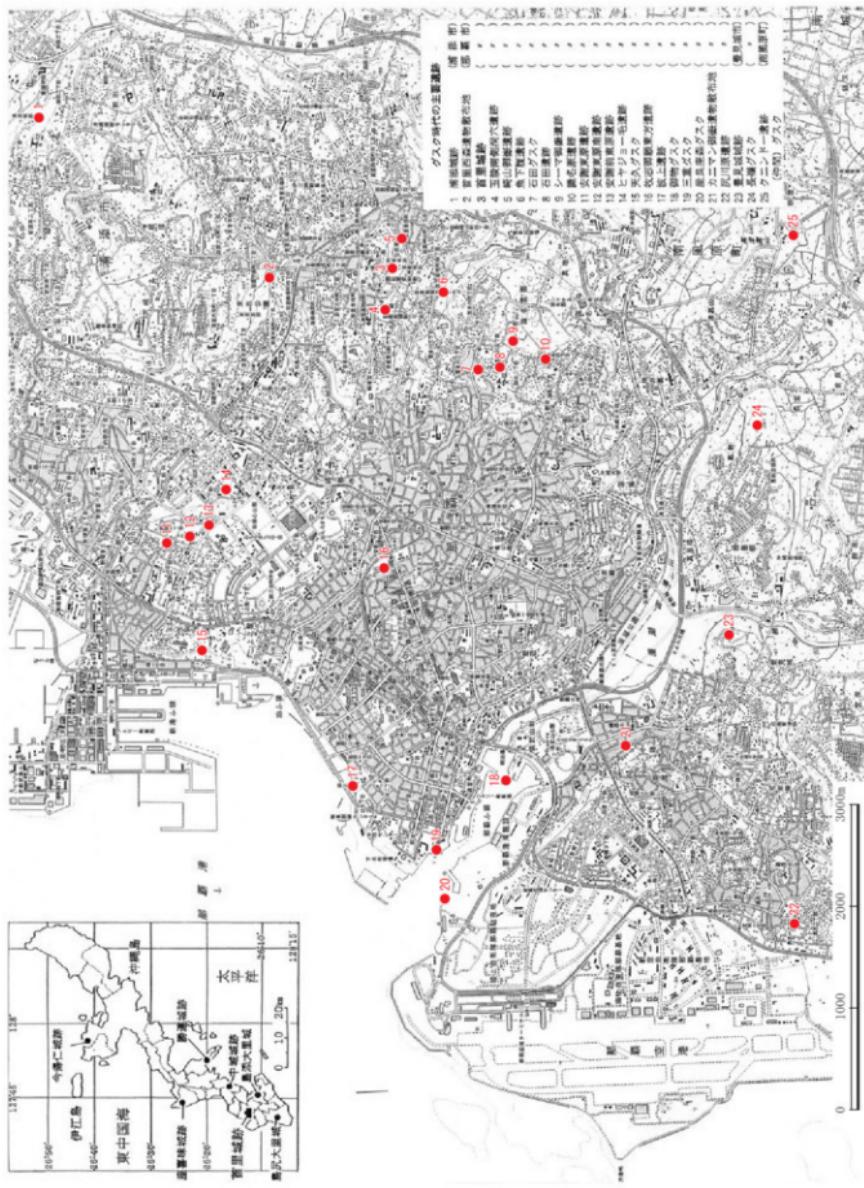
第2図 調査区周辺の地質図（沖縄県土木建築部 1988年）

第2節 歴史的環境

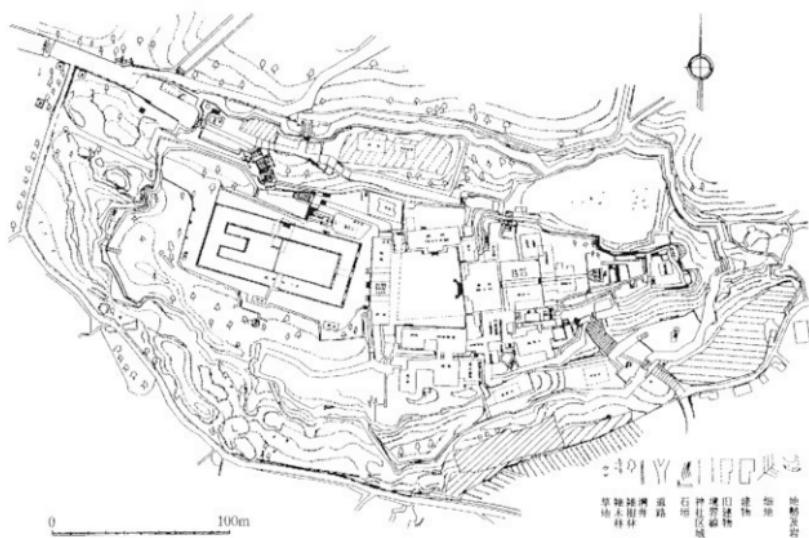
首里城の築城年代はこれまでの発掘調査の成果からおよそ14世紀中頃と考えられ、伝承では14世紀の察度王代説と15世紀前半の尚巴志王代説があるが（角川書店1986）、未だ不明な点が多くその起源については明確にされていない。しかし1427年に建立された「安国山樹花木記碑」（1427年建立）に、城外に龍潭と称する人工池を掘って安国山を築き、周辺の造園整備事業を行ったとの記録があることから、少なくとも15世紀前半の尚巴志王代には王宮としての機能をそなえていたことが窺える。その後、第二尚氏第3代尚真王代（在位1477年～1526年）から第4代尚清王代（在位1527年～1555年）にかけて外郭の拡張や歓会門、維世門、久慶門の造営などが行われ、現在に近い形に定まったと考えられる（第5図）。



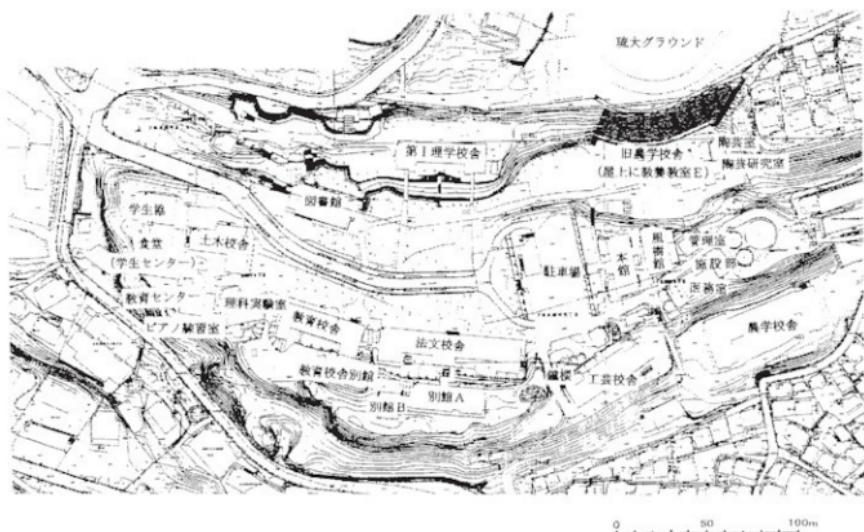
第3図 沖縄本島の位置



第4図 首里城跡の位置及び周辺の遺跡



第5図 首里城平面図（昭和6年頃、阪谷良之進原図、沖縄県立図書館蔵）



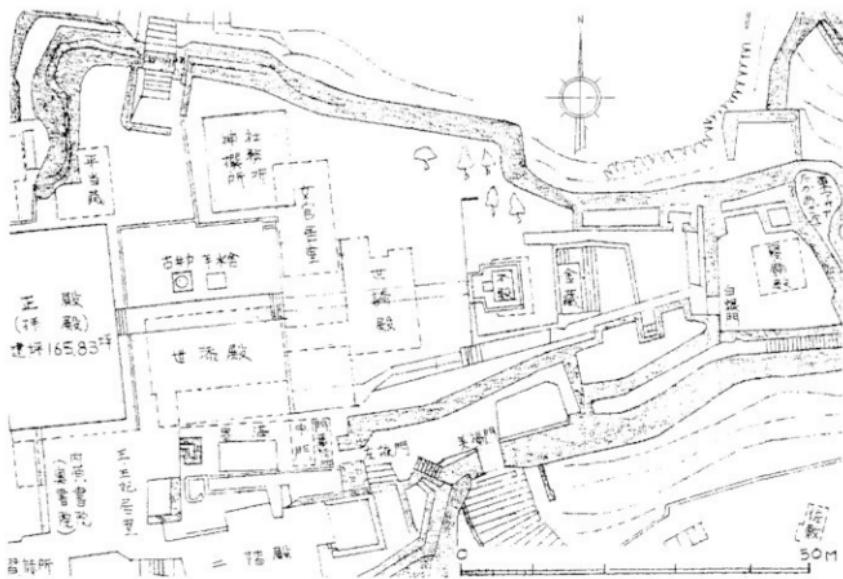
第6図 旧琉球大学校舎配置図

今回の調査区である御内原（ウーチバラ）は主に正殿裏側の区域を指す。王や王の家族が私生活を営む場所で、王以外の男子は立ち入りが禁止されていた。この区域内には金御殿、世誦御殿、世孫御殿、寄満、門番詰所、二階御殿、女官居室、西当藏火神、金御藏、西ノ当藏などといった建物があった。京都大学所蔵の『琉球資料』「御城内并諸座御藏万事寄」(18世紀)では御内原の門内外なわち境界内に許可無く立ち入った者は寺入り90日、御内原の建物内に立ち入った者は同100日、室内に入った者は一生流刑という取り決めがなされていた。門番に関しても侵入者を許した場合、同様の罰則が設けられていた。これら御内原にある建物とは別に正殿、世誦殿、世孫殿に開まれた空闊地を「後之御庭」と呼び、『女官御双紙』(1706年)では聞得大君による儀礼「御新下り」や、伊平屋や今帰仁、久米島、宮古、八重山の上級神女がこの場所で進物儀礼を行っていることが窺われる。(国営沖縄記念公園事務所 2002)。このように首里城の中でも立ち入りが制限され、また儀礼を執り行う空間として極めて重要な場所であったと同時に、正殿西側つまり奉神門、南殿、北殿に開まれた「御庭」に特徴付けられる諸氏百官が集まる場所とは対照的な空間であったと位置付けることができる。久手堅憲夫によると首里の方言では側を「クヌハラ」「アヌハラ」と言い、内の側を「ウチヌハラ」と言うことから御内原は「内の方」を意味するとしている(久手堅 2000)。文献資料では『琉球国日記』では「内院」と記載されており、絵画資料では『首里古図』(1700年頃)『首里城古絵図』に後之御庭を画する石積み、世誦殿、黄金御殿、寄満、二階殿、世誦殿東側の石積み開いが描かれる。因みに世誦殿の北側には「世の頂」と呼ばれる建物があったと『琉球国由来記』に記されているが、規模や詳細な位置、創建、廃棄の時期については全く解っていない。

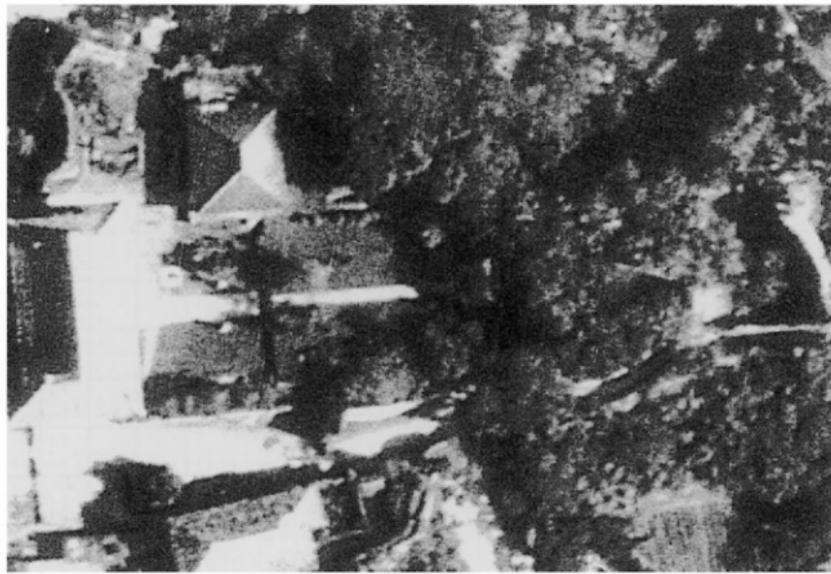
発掘調査を行ったのは後之御庭、世孫御殿、寄満、中門、門番詰所に相当する範囲である(第7図)。これらの成立時期については不明であるが前述の絵図等に一部、描かれていることから18世紀段階にはこれら建物等はすでに存在していたものと想定される。文献資料では『向成家譜』には、1715年に黄金御殿、奥書院、世誦殿、寄満といった建物修復が落成した記載がなされている。また1752年に世誦殿が創建されたことが、1765年には寄満に関する記載が『球陽』に見ることができる。世誦殿は王妃の次位にある妻妾が居住していた殿舎で、この妻妾は御内原を管理する役目が与えられており、表の書院から御内原へ用務を伝える際にこの世誦殿を取り次いで処理されたとされている(久手堅 2000)。寄満は国王およびその家族の食事を調理した台所で、その名前の由来は「よりみちへ」「よりみちゑ」と『おもろそうし』に記されており、その意味は「物資が寄り集まる」とされている(池宮 1995)。建物内部の間取りは、東側は土間で、西側は床張りであった(真榮平房敏氏談)。この寄満の東側に中門と呼ばれる御内原へ入る南の出入り口があり、更に東側には中門、門番の役目を与えられた「じゅうのあなくもい」と呼ばれる女性が詰めていた番所が付属していた。1660年と1709年に2度の火災が正殿周辺であり、先述した1715年に御内原の黄金御殿、奥書院、世誦殿を修復した記事は1709年に遭った火災と関係する可能性が指摘できる。

これら18世紀以降、首里城の御内原の施設として活用されていた建物群に関しては昭和初めにおいては既に撤去されているため、建築構造の詳細についてはほとんど判っていない。後之御庭に関しては沖縄神社設置後、周辺は大幅な改変を受けたものの、庭を画する北側と東側の石積みがそのまま、使用されたために戦前の古写真でその一部を窺い知ることができる。

1879年の琉球処分後、首里城には明治12(1878)年から明治29(1896)年まで熊本鎮台沖縄分遣隊(以下、分遣隊)が駐留した。この分遣隊駐留時に御内原の建物はかなり荒れ果てその様子が明治15(1882)年に首里城を訪問したイギリス人ギルマードの手記に見ることができる。以下、紹介すると「我々は部屋から部屋へとさまよった。回廊や接見の間や召使いの室や、全く迷子になりそうな建物などをぐるぐる歩いたが何れも言語に絶する荒廃の状態にあった。長い間、誰も住んでいなかったに違いない。あらゆる装飾品は取り除かれていた。小壁に掲げられた絵は引き剥がされ、埃と星霜とで見分けが付かない」とある(須藤 1974)。また分遣隊によって床や壁板が剥ぎ取られ、薪等の燃料として使用されていた(真榮平 1993)。



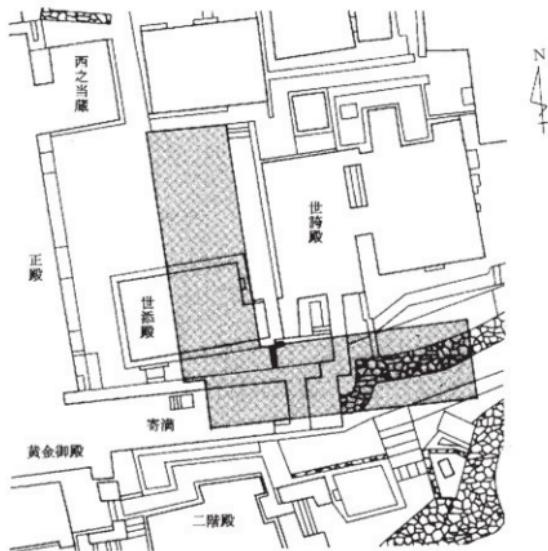
第7図 調査区位置図



図版1 首里城空撮写真（昭和20年4月2日米軍撮影、県公文書館蔵）

大正 12 (1923) 年には首里市によって正殿の解体が決議されたが、伊藤忠太・鎌倉芳太郎らの尽力により沖縄神社の拝殿となって、解体をまぬがれた。一方、御内原は明治 41 (1908) 年に工芸学校が城内に移転し、二階殿、黄金御殿、寄満等の建物を校舎として利用している。寄満や二階殿といった建物内部の欄間や各種装飾は取り外され、教室としての改裝がなされた。現状改変が行われたものの、工芸学校による建物の維持管理がなされ、荒廃の進行は免れることとなった。因みに寄満は藍染の実習室として使用され、床下には藍染用の藍壺が並べ置かれていた（真榮平房敬氏談）。

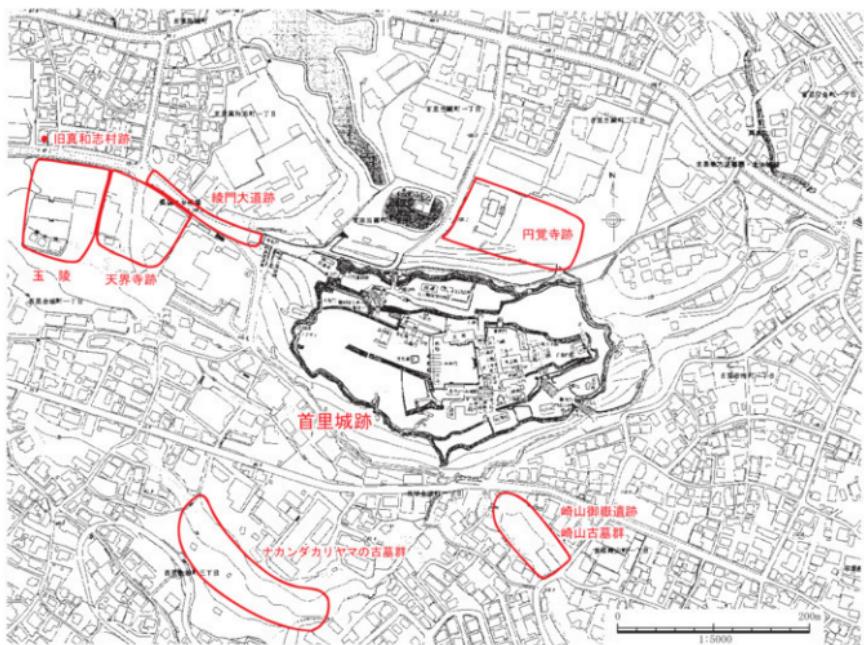
大正 13 (1924) 年には金御蔵のあった場所に沖縄神社の本殿が造営され、世説殿は北側に移築されて社務所に変貌、御内原の様相は一変することとなる。その当時における御内原の様子が阪谷良之進によって作成された測量図によって窺い知ることができる（第5図）。この測量図にはすでに寄満、中門、門番詔所は記載されていないことからこれらの建物は大正から昭和初めの間に撤去されたものと考えられる。聞き取り調査では、昭和 8 (1933) 年の工芸学校が城外へ移転して少し間を置いて寄満の建物解体工事が始まったとのことである。撤去後の寄満、中門、門番詔所跡は黄金御殿と美福門を結ぶ首里第一小学校の通学路となり、後之御庭には芝が



第8図 「沖縄県首里旧城図」御内原地区（那覇市歴史資料館蔵を再トレーク）



第9図 旧琉球大学本館周辺校舎配置図（1985年頃、トーンは調査区）



第10図 首里城跡周辺遺跡地図

敷かれ、一帯は沖縄神社によって維持、管理がなされていた（久手堅憲夫氏談）。

首里城内の他の建物では、正殿に関しては老朽化と台風被害によって荒廃が進んでいたのを、昭和16（1931）年から昭和8（1933）年にかけて阪谷良之進・柳田菊藏らの尽力によって修復がなされ、同年には国宝に指定されている。

しかし1945年の沖縄戦において、首里城には日本陸軍の總司令部壕が置かれたことにより、首里一帯が集中砲火を浴びたため、城及び城下は壊滅的な被害を受けた。その後、1950年琉球大学が創設されたことにより、さらに造構の破壊が進行し、女官居室があった場所には本館、世誇殿があった場所には風樹館、金御蔵があった場所には管理室が建設された（第6図）。このように破壊、消失した文化財を復元しようとの世論が高まり、琉球政府文化財保護委員会が中心となって守礼門、円覚寺總門、園比屋武御嶽石門、歓会門、久慶門、玉陵などの戦災文化財の復元が次々と行われた。

その後、昭和59（1984）年の琉球大学の移転にともない、沖縄県により「首里城公園基本計画」が策定された。昭和61（1986）年には沖縄復帰記念事業として「国営沖縄記念公園首里城地区」として整備復元することが閣議決定され、現在に至るまで調査と整備が進められている。

第3章 遺構と遺物

第1節 層序

平成 12（2000）年度の御内原地区発掘調査（沖縄県立埋蔵文化財センター2006）並びに平成 15（2003）年度の黄金御殿地区発掘調査において、昭和 25（1950）年旧琉球大学設置時の造成層（以下、琉大造成層）が表土層下に厚く堆積していた状況と同様、隣接する本調査区においてもほぼ全城において表土層下に琉大造成層が堆積している状況であった。但し、C-3 グリッド周辺のように 3 m 近く堆積していた区域もあれば、F・G-9・10 グリッドのように 1 m 弱しか堆積していない区域も見られた。また南地区では琉大造成層除去後すぐ岩盤が検出されており、調査区の最東端では旧琉球大学本館建物の基礎を設置するために岩盤を削り込んでいるのが確認された。

平均して概ね 1 ~ 2 m ほどの厚さで琉大造成層が堆積していたが、先述したように C-3 グリッド周辺のように現地表面から深さ 3 m 近くの陥没坑が見られる部分もあった。この陥没坑からは主に礎石といった石造製品や自然石、赤瓦、コンクリート片、ガラス片、砲弾片をはじめとする金属片がとりわけ多く出土していることから、廃墟となっていた首里城跡一帯を戦後、整地する際に設置された廃棄坑であると考えられる。那覇市首里在住の真榮平房敬氏によると沖縄戦直後、旧東のアザナ付近に星条旗を米軍が立てた際、一帯を重機で整地したという聞き取りを得ることができた。今回の調査区は東のアザナと隣接していることからその際の整地層であると思われる。

近世の絵図等に見られる後之御庭の床面が調査区北側 EL=128.800m ~ 128.500m で見られた。珊瑚礁混じりの粗砂質土が B-2、C-2 ~ 7、D-5 ~ 7 グリッドを中心に検出されており、平成 12 年度発掘調査で確認された珊瑚礁混じり粗砂質土に同定された。この層は最も堆積している場所で約 1 cm とかなり薄く、一部検出されない場所も見られた。よって後之御庭には玉砂利を意識して珊瑚礁が敷かれていたものの長期間、維持・管理されたのではない可能性が指摘できる。

珊瑚礁混じりの粗砂質土の下部は後之御庭の造成層、黄褐色と黄白色の微砂層が確認された（第 1 図トーン部分）。何れも小礫が僅かに混じるが概ね細かい砂で構成されており、かなり硬く締められている。遺物はほとんど出土していない。また、黄褐色と黄白色の微砂層が版築状に互層を成している部分も見られる。層自体は約 20 cm の厚みでほぼ水平に堆積している。これらの土は外部から後之御庭の造成層として持ち込まれたものと考えられる。また、これらの層の間に焼土層が薄くほぼ全面にわたって水平に堆積しているのが確認できた。つまり後之御庭の造成層が確認できる部分、EL=128.480m に確認することができる。首里城跡は過去 1660 年と 1709 年の 2 度にわたって正殿一帯が焼失していることから何れかの火災層であるものと考えられ、出土遺物から後者の可能性が指摘できる。黄褐色微砂層の下部に黄色砂質土がみられ、C-5 グリッドの一部に拳大の礫を大量に含んでいるのが確認されている。この層は後之御庭造成の際に嵩上げした層で全体的に約 30 cm 堆積している。

当該調査区の最下層に相当するオリーブ黒色粘質土層は前述の黄色砂質土の直下に見られ、大量の高麗系・大和系瓦が出土している。集石遺構の埋土で 14 世紀末から 15 世紀前半頃の遺物包含層である。出土遺物の詳細については後述するが、小礫や瓦片といった廃棄物と共に埋め立て造成を行ったものと考えられる。この層は B-4 東側、C-5・6 グリッドのみで確認されている。また D ラインの断面で確認できないことから、範囲は極めて限られているものと思われる。

地山は赤土でさらに下部から石灰岩の岩盤が検出された。B-4 ~ 6 グリッドでは岩盤が灰オリーブ黒色粘質土層まで露頭しているが上面は平坦にはつられているのが確認できる。岩盤は南側に向かって漸次、高くなり南地区では EL=127.850m で完全に露頭し、全面的に削平されている。後述する門番詰所・中門・寄溝の礎石を据え

る部分を方形に穿っていることや石畳にそのまま上面を合わせて削平されていることからも近世段階で南地区はかなりの規模の地拵えを行ったことが窺われる。

南地区では南西端では石積み3周辺から黒褐色粘質土層が検出されている。石積み4～6周辺では埋土となっており、その南西側C-10グリッドからは焼土層が見られる。焼土層は黒褐色粘質土層の下部に位置し、出土遺物から15世紀中頃に比定できる。おそらく1453年尚布里・志魯の乱の火災層であると考えられる。

第2節 遺構

御内原西地区では建物基礎、石段、石積み、石開い遺構、石列、柱穴、石敷きといった遺構が検出された。近世の絵図資料等に見られる施設としては礎石を設置するための岩盤掘り込みが門番詰所、中門、寄溝に比定できるのと、中門から後之御庭へ下りる石段といった遺構が見られた。また後之御庭の北側を画する石積みや二階殿前の石疊も絵図等で詳細は確認できないが、近世の遺構であるものと思われる。中世相当期の遺構としては石敷きと石列、石開い遺構、柱穴が見られる。但し石列1～4と石積み3～6、柱穴の一部については出土遺物が僅少であることから時期判断が難しく、近世初め頃まで時期が新しくなる可能性がある。中世相当期の遺構について全般的に言えることは後世の破壊が著しく、その全容について把握することのできる遺構が確認されなかつたため、それぞれの機能については不明である。近代以降としては昭和8（1933）年に沖縄神社が設置された際に敷設したコンクリート造りの参道が確認されている。

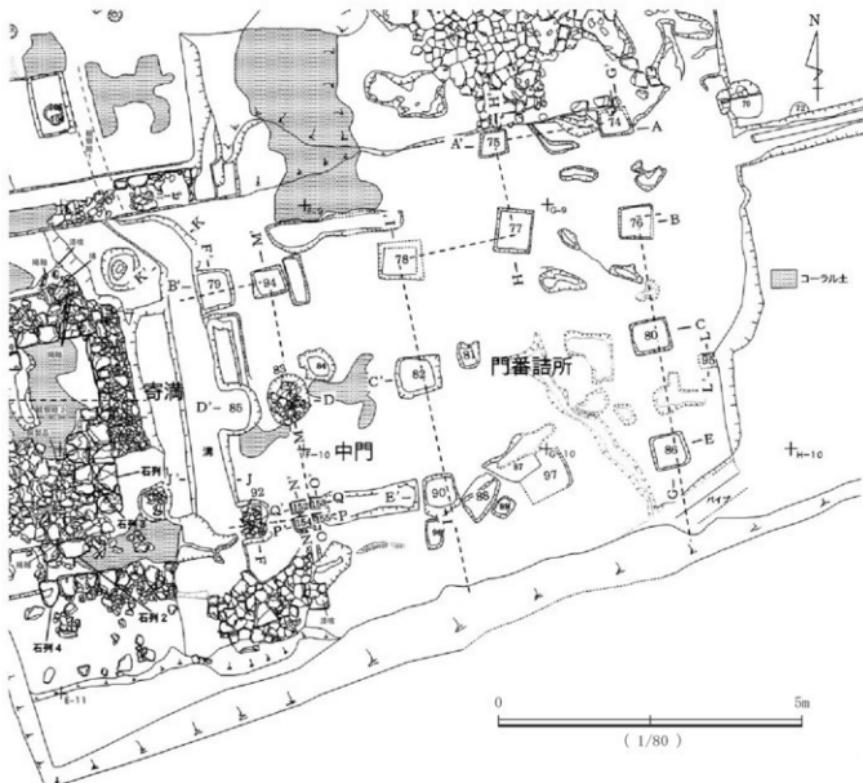
今回、詳細な報告は行わないが旧琉球大学本館の基礎（以下、本館基礎）並びに本館前の土留め状の石積みも検出されている。本館基礎はコンクリートの梁が検出されている。一部岩盤を削平しており、梁の下部は小蝶を詰めて梁を安定させる工法が採られている。平成12年度の御内原地区発掘調査時にも検出されており（沖縄県立埋蔵文化財センター2006）、その南端部分が今回、確認されている。土留め状の石積みは正殿跡発掘調査時まで残っていた本館前の石積み（沖縄県教育庁文化課1986）で、長方形に加工した石灰岩をブロック状に積み上げていき、目地はモルタルで接着しているのが窺えた。また戦後に設置されたと思われる礎石がD-2グリッドから検出されている。上面をはつた細粒砂岩と石灰岩を東西方向に並べているが1列のみの検出で、建物規模等、詳細は不明である。礎石は全て戦後の搅乱層に据えられており、琉球大学の建物に関係する遺構と思われるが当時の校舎配置図や写真等で確認することができなかった。

第1表 首里城跡「御内原西」地区遺構表

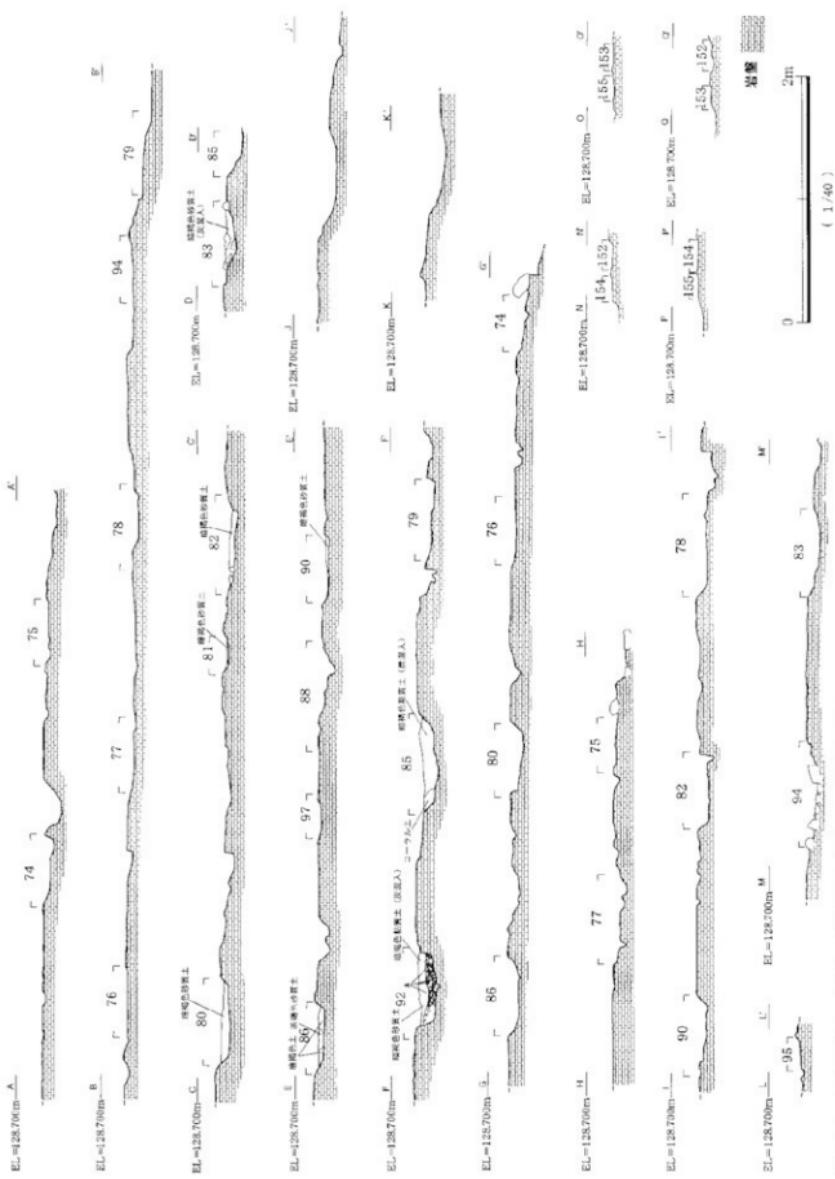
番号	遺構名	地区	残存長		残存高	方向	標高	備考
			東西	南北				
1	S R O 2	B-C-1	3.3m	-	66cm	W8° N	EL=129.300～128.500m	
2	集石遺構	B-C-4～6	3.3m	5m	-	-	EL=128.200～127.900m	
3	石積み1	E-8	1.1m	-	80cm	W10° N	EL=128.200～127.700m	
4	石開い遺構	D-E-9	2.5m	2m	46cm	N4° W, W10° N	EL=128.300～127.900m	コの字型
5	石積み3	C-D-10	-	0.5m	32cm	N12° W	EL=128.100～127.800m	
6	石積み4	D-10	-	0.5m	46cm	N2° W	EL=128.200～127.800m	
7	石積み5	D-10	0.4m	-	26cm	W6° S	EL=128.000～127.800m	
8	石積み6	D-10	0.4m	-	44cm	W6° S	EL=128.200～127.800m	
9	石疊1	F-G-7・8	-	-	-	-	EL=128.400～128.420m	
10	石疊2	E-10	-	-	-	-	EL=128.500m	
11	石列1	E-9・10	-	1.7m	-	N8° E	EL=128.300m	
12	石列2	D-E-10	0.7m	-	-	W10° N	EL=128.300m	
13	石列3	E-9・10	-	1.3m	-	N6° E	EL=128.300m	
14	石列4	D-E-10	1.4m	-	-	W8° N	EL=128.400m	
15	石段	E-8	-	-	-	W12° N	EL=128.500～128.000m	

第3節 門番詰所・中門・寄満地区の遺構と遺物

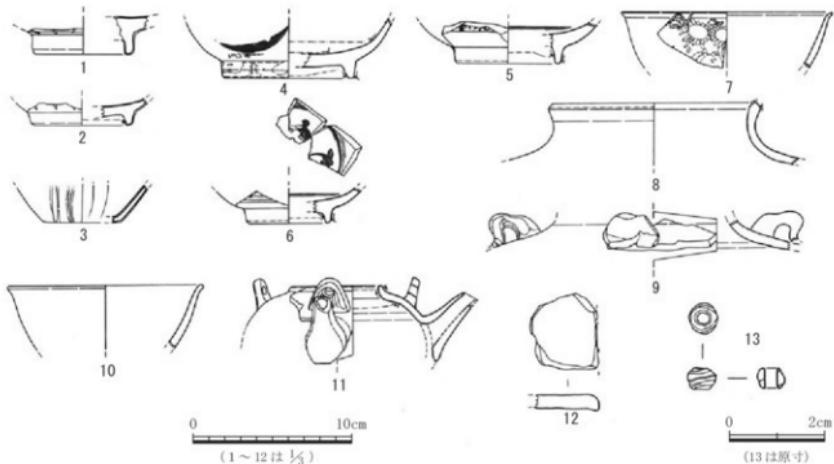
近世に描かれた絵図等に見られる門番詰所・中門・寄満の建物跡。E～G-9・10 グリッドに位置する。岩盤を平面形状で正方形にはつり、柱穴としている。二階殿跡では岩盤を掘り込んだ部分に礎石を据えている事例が確認されていることから、この正方形状の柱穴に礎石を据えていた可能性が指摘できる（沖縄県立埋蔵文化財センター2005）。今回の調査では門番詰所付近からは7基の柱穴が検出され、二階殿地区においてもこの柱列に沿って1基検出されている。このことから門番詰所は3間×1間であったことが解った。寄満付近からは5基の柱穴が確認されたが、南北列の3基のみで東西列は琉大造成層等により確認することができなかつた。南北列の柱穴に沿って岩盤をはつったN $^{\circ}$ W方向の溝が確認された。この溝の全長は5.5mで、北側は西へや屈曲し、石積み1まで続く。中門は東西幅1.6m、南北4.2mで南から2間目の柱間を繋ぐ形で岩盤をはつったE4 $^{\circ}$ N方向の溝が確認された。寄満の柱穴の底面はEL=128.440m～127.500mで掘り込みの深度は18.0cm、門番詰所が柱穴の底面はEL=128.480m～EL=127.600m、掘り込みの深度は6.0cm。



第11図 門番詰所・中門・寄満地区 遺構平面図



第12図 門番詰所・中門・寄満地区 柱穴及び溝断面図



第13図 門番詰所・中門・寄満地区 出土遺物

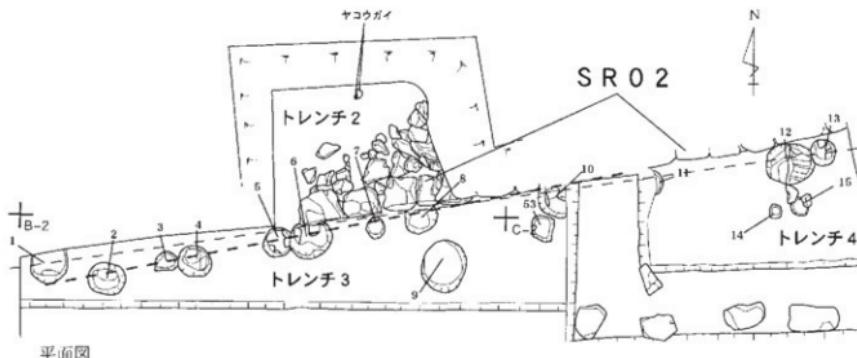
第2表 門番詰所・中門・寄満地区出土遺物一覧

単位: cm

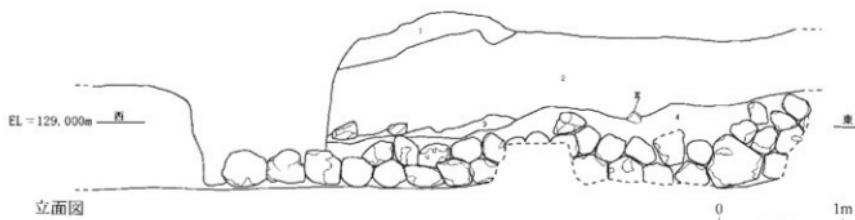
挿図番号 図版番号	種類	器種	分類	残存部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
第13図 図版 11	1	青磁	碗	—	—	6.4	—	外面に蓮弁文を描く。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。14世紀後半～15世紀前半。	
	2		—	底部	—	6.3	—	外面に線描蓮弁文を描く。素地はやや粗く灰黄色、釉薬は鈍い黄緑色。	
	3		皿	—	底部	—	4.8	型作りの菊花皿になると思われる。器面に細かな貫人が入る。表面は拔熱しためざらついており、素地は密で淡茶色。16世紀頃か。	
	4	染付	碗	—	底部	—	8.2	腰部が丸みを持ち、高台が逆「ハ」の字状に開く。内底は蛇の目釉剥ぎとする。外面胴部には『コンニャク印判』の文様がみられる。福建・広東系、17世紀～18世紀。	E-9・10 構内
	5		皿	—		—	6.4	疊付けのみ補削ぎする。高台脇に1条、外面胴部に2条圍線をめぐらせ。文様構成は不明。	
	6		皿	—	底部	—	5.0	疊付けのみ補削ぎする。高台脇に1条、外面胴部に2条圍線をめぐらせ。文様構成は不明。内底には2条の圍線をめぐらせ、唐草文を描く。素地は密で淡茶色、釉はくすんだ乳白色。	
	7	中国産 色絵	碗	口縁部～胴部	13.2	—	—	型造り、口縁部直下で「く」の字状に折れて外反する。上繪はほとんど剥落しており、僅かに菊葉の花文と草文が描かれている。胎土は密で白色微粒子が僅かに混入する。透明釉を内外面に薄く施している。	F-9 褐色砂質土
	8	中国産 褐釉陶器	壺形	口縁部	13.2	—	—	釉の色調：不明。素地の色調：橙色。密度：細。混入物：白色砂粒、赤褐色砂粒。	E-9・10
	9	—	—	胴部	—	—	—	同一個体。釉薬は剥がれる。ロクロ時計回りか。この他、同じ遣構内から同一個体の口縁部片が発見されたが接合せず。	E-9・10 構内
	10	碗	—	口縁部～胴部	12.2	—	—	僅かに外反する口縁資料。残存する資料の両器面に黒釉が施釉される。	E-10 暗褐色土
	11	沖繩産 施釉陶器	急須	口縁部～胴部	5.8	—	—	口縁部は釉剥ぎするが、口縁内面には釉が残る。外器面には三角形の把手が貼付され、5.7mmの穴が穿孔される。穴の周辺には2条の曲線が施される。外器面全体に黒釉が施釉されるが、内器面の胴部以下は露胎とすると思われる。また注口と胴部の接合部に約7mmの穴が穿たれる。	F-9 黒色灰質土
	12	土器	扁平 蓋	—	底部	—	—	色調：内外はぶい穂。焼成：不良。胎土の密度：やや粗。胎土の混入物：赤色砂粒、白色砂粒、雲母。胎土泥質。	E-9・10 構内
	13	玉製品	丸玉	—	完形	—	—	高さ：4.1mm、最大径：6.0mm、孔径：2.8mm、重量：0.19g。材質：ガラス。色調：水色。表面に螺旋状の筋が明瞭に観察できる。	

第4節 S R O 2と遺物

平成12年度に実施した御内原地区発掘調査において確認された石積みで、近世段階の世誇殿基壇から東側に折れて、淑順門付近へと繋がる基壇状の遺構である（沖縄県立埋蔵文化財センター2006）。昭和初めには沖縄神社社務所の基壇として機能していた。今回の調査においては根石近くしか検出されず^a、西端は琉大造成層による破壊を受けていた。検出部分は長さ3.3mで残存高は0.7mの相方積み、石材は丁寧に加工がされている。面石は控えを余り取っておらず、栗石が確認されるが比較的、少量である。B・C-1グリッドに位置し、遺構の主軸はW8°Nを測る。根石は後之御庭造成層の直上に据えられている。また、当該遺構とほぼ同方向に延びる柵列が検出され、一部、切り合っている柱穴も見られた。柱径20.0~28.0cmで一部、根石に切られている部分も見られた。これらのことから後之御庭の北側を画する当該遺構が構築される以前は当該遺構と同方向の柵列が配置されており、複数回の建て替えがあったと考えられる。



平面図

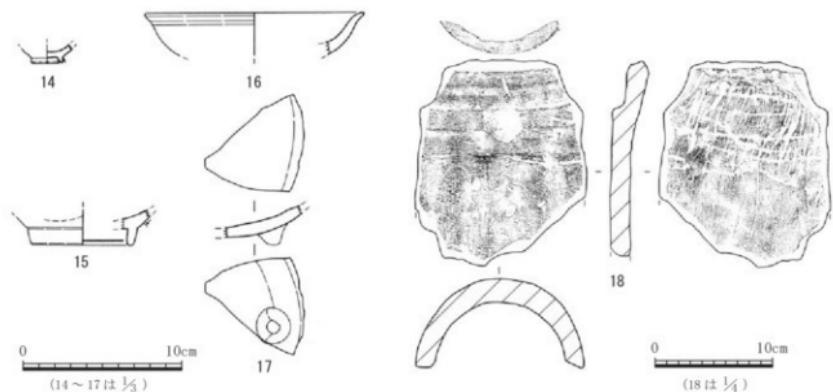


立面図

SRO2			
層序	色調	土質・混入物	備考
1	灰色土	粘質土。	擾乱層
2	明褐色土	砂質で、礫を含む。	擾乱層
3	黄褐色土	砂質土。	
4	暗褐色土	粘質で、礫を含む。	

(1/40)

第14図 S R O 2 遺構図



第15図 S R O 2 出土遺物

第3表 S R O 2 出土遺物一覧

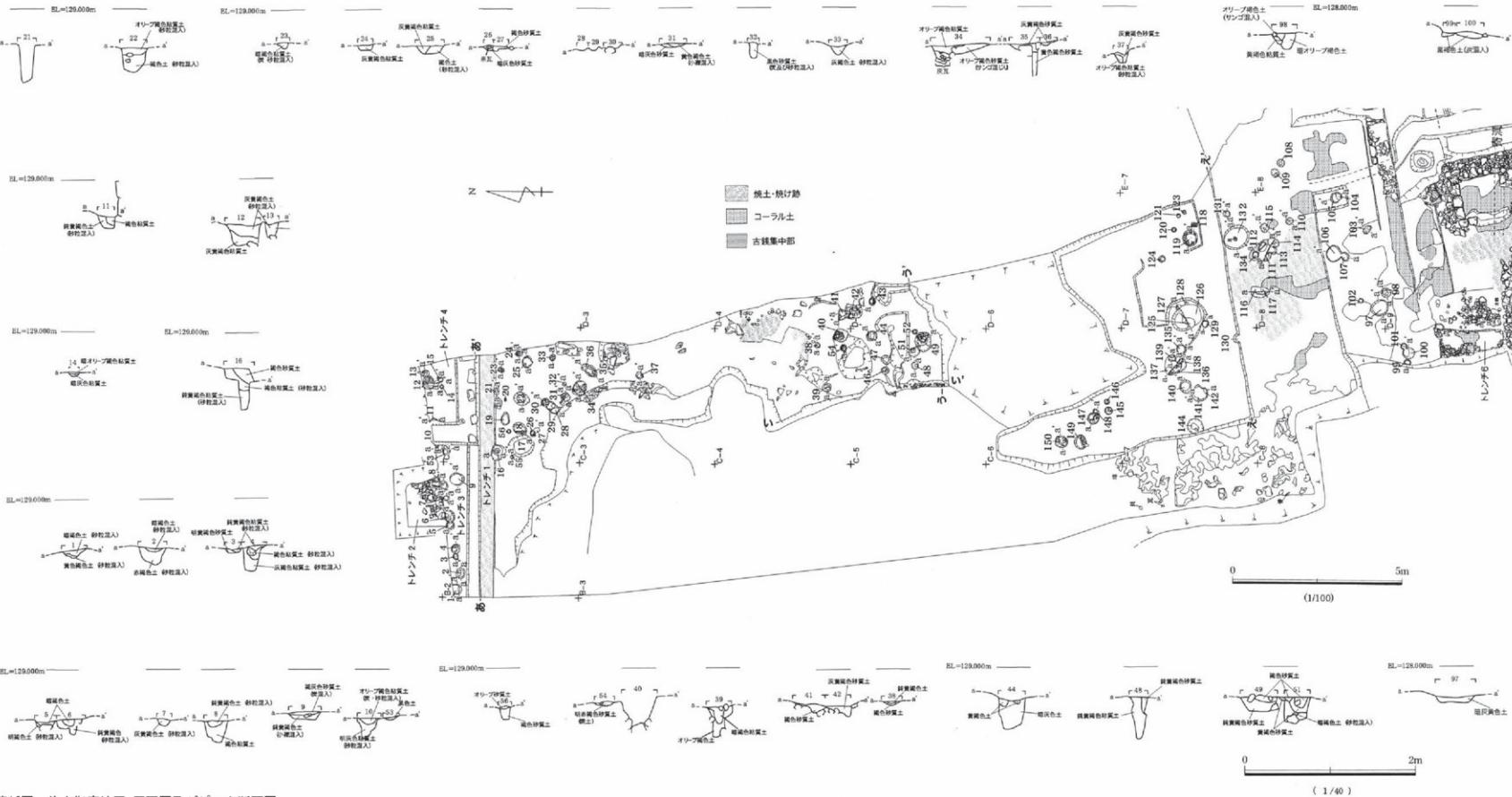
単位: cm

捕団番号 図版番号	種類	器種	分類	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
第15図・ 図版11	14	白磁	小杯	底部	—	—	2.0	施釉状況: 着付け露胎。貢入なし。釉の色調: 青白色(白色に近い)。素地の色調: 灰白色。素地の密度: 細。混入物: 微細粒子。	トレンチ2 (1層北壁石積み構)
	15	陶器	碗	底部	—	—	6.4	外表面に灰釉が施されているが、高台までは及んでおらず、外底面は露胎する。内底面も露胎するが、施釉の輪巻れと溶着痕がみられる。	
	16	沖縄産 施釉陶器	皿	口縁部	13.7	—	—	外反口縁を示す資料。全体的に白化粧がなされる。	トレンチ2 1層
	17	鍋	—	底部	—	—	—	円錐状の脚が貼付される。外底面は露胎するが、内底面は鉄釉が施される。	
捕団番号 図版番号	造瓦 系統	種類	残存 部位	分類	色調	施成	—	文様、形態、成形、保存状況など	出土地
第15図・ 図版11	18	明治系瓦	丸瓦	玉縁部	a	灰色	良好	玉縁の長さ3cm。凸面側は継ぎ平撫で板がみられる。凹面の玉縁側は横位の細かい瓦布の糸痕が数条に平行してみられる。	トレンチ2 2層
図版番号	種類	器種	分類	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地点
図版11 596	本土産磁器	碗	印判手	口縁部	—	—	—	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 細。口縁直状。側張転等。	トレンチ2 1層

第5節 後之御庭地区の遺構と遺物

前節でも触れたが近世の絵図等で見られる後之御庭が EL=128.800～128.500m で確認された。B-2、C-2～7、D-5～7 グリッドを中心にして珊瑚礫混じりの粗砂質土層が検出され、平成 12 年度調査において確認された後之御庭の床面と類似していることから、同層を後之御庭の床面に同定した。検出範囲は第1図トーン部分に示す。北側は S R O 2 の南側まで、南側は 8 ラインまで確認された。なお、西側は琉大造成層で搅乱を受けていたため、ほとんど検出されなかった。因みに B-3 と C-5 から C-6 にかけては戦後のスクラップや廃土が埋まつた搅乱坑が確認されている。

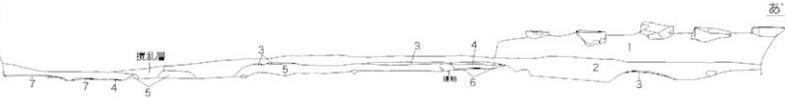
後之御庭掘り込みの柱穴は 94 基、確認されている。柱径の大小は様々で、掘り込みの深度も区々である。大半が後之御庭の造成土である黄褐色と黄白色の微砂層に掘り込んでおり、岩盤掘り込みのものも少ないながらも検出されている。また、炭が大量に混入した柱穴が切り合って検出されていく (No.106, 107)、遺物が出土した柱穴並びにプランが把握できる。柱穴は断面図を掲載した (第16図・17図)。最後に、S R O 2 に並行して柱径 20.0～28.0cm の柱穴が 2 条 (No.2～8 と No.1・5～8・10～13) 並んで検出された (第14図)。このことから後之御庭の北側を画する S R O 2 構築以前は柵列によって画されていた可能性が指摘される。



第16図 後之御庭地区 平面図及びピット断面図



あ



トレシチ1 北壁土層図

層序	色調	土質・混入物	備考
1	暗褐色土	粘質で、サンゴマカイ・赤瓦・礫を含む。	
2	黄褐色土	砂質。	
3	灰白色土	砂質土。固く締まる。	
4	黄褐色土	粘質で、礫や砂を含む。固く締まる。	
5	暗褐色土	粘質で、礫を含む。	
6	黄褐色土	粘質で、礫や砂を含む。	
7	赤褐色土	粘土層。	

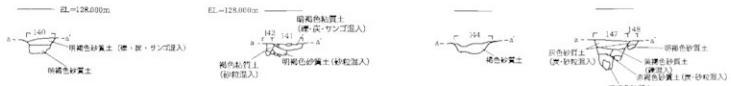


え



C-D-7 南壁土層図

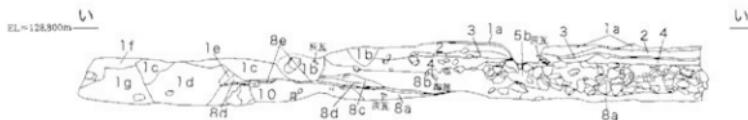
層序	色調	土質・混入物	備考
1	純黄褐色土	砂質で、炭・小礫を含む。	
2	純黃褐色土	砂質。	
3	明赤褐色土	粘質土。燒土層。	
4	純黃褐色土	粘質で、砂粒を含む。	
5	明黃褐色土	砂質土。固く締まる。	
6	灰白色土	砂質土。	
7	黄褐色土	砂質土。	
8	浅黄色土	砂質で、小礫・サンゴを含む。	
9	純黃褐色土	砂質で、小礫を含む。	
10	浅黄褐色土	砂質土。	
11	純黄褐色土	砂質で、炭・小礫を含む。	



岩盤

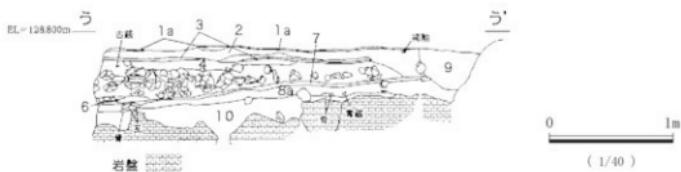


第17図 後之御庭地区 ピット断面図及び土層図（1）



C-4-5 西壁土層図			
層序	色調	土質・混入物	備考
1a	淡黄色土	砂質土で、コーラルを含む。	C・D-5 南壁 1a 層と同一。
1b	黄灰色土	灰葉を含む。	
1c	乳黃色土	粘質土で、粘土塊・小礫を含む。	
1d	黃褐色土	砂質土で、防土塊・白砂を含む。	
1e	乳黃褐色土	砂質土で、大小礫を含む。	
1f	黃褐色土	砂質土で、白砂を含む。	
1g	褐色土	粘質土で、粘土・白砂を含む。	
2	純黃褐色土	砂質土。	C・D-5 南壁 2 層と同一。
3	橙色土	砂質土を含む。	C・D-5 南壁 3 層と同一。
4	淡黃色土	砂質で大小礫を含み、硬く固まる。	C・D-5 南壁 4 層と同一。
5a	黄色土	砂質土。	C・D-5 南壁 5a 層と同一。
5b	明黃褐色土	砂質で、大小礫を含む。	
8a	オリーブ墨色粘質土	粘質で、炭を含む。	C・D-5 南壁 8a 層と同一。
8b	暗オリーブ褐色土	粘質で、炭を含む。	
8c	深黃色土	砂質で、小礫を含む。	
8d	暗褐色土	粘質で、炭を含む。	
8e	炭白色土	砂質土。	
10	赤褐色土	粘質土。	C・D-5 南壁 10 層と同一。

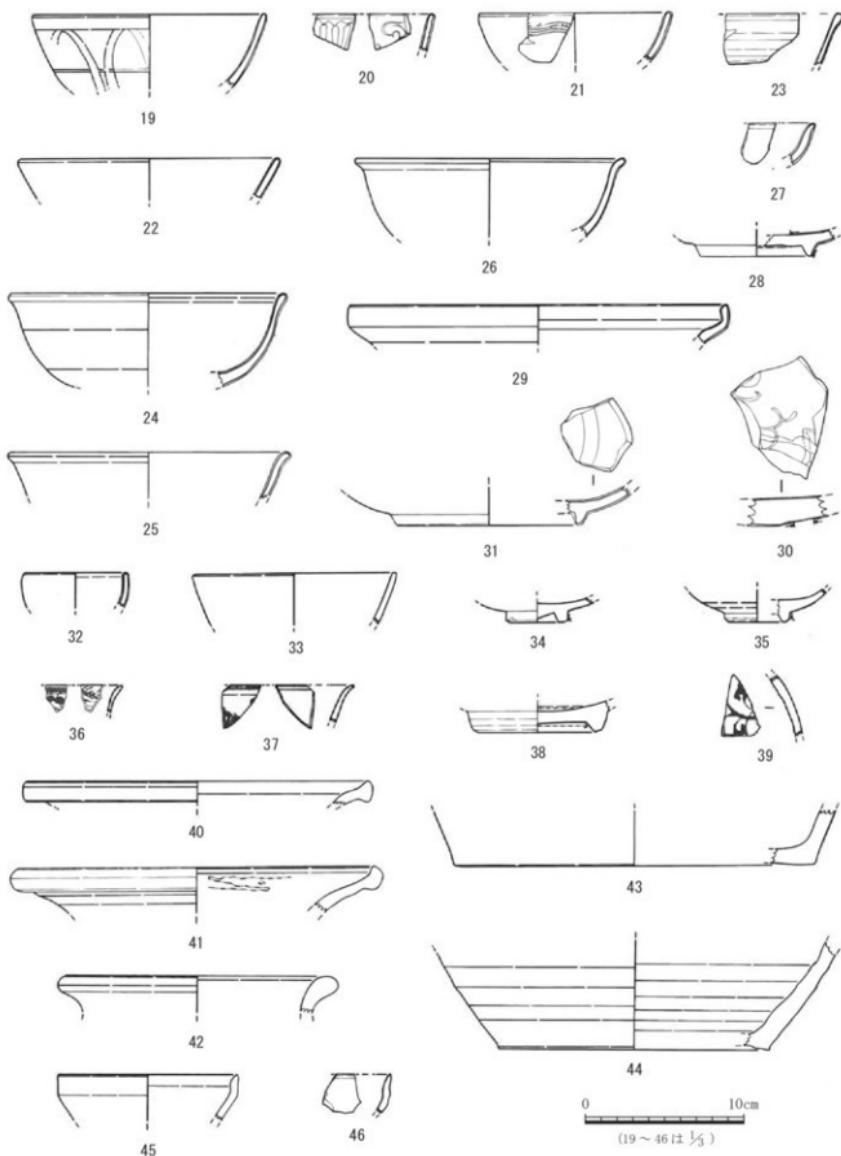
0 1m
(1/40)



C-D-5 南壁土層図			
層序	色調	土質・混入物	備考
1a	淡黄色土	コーラル層上層。	C-4・5 西壁 1a 層と同一。
2	純黃褐色土	コーラル層下層。	C-4・5 西壁 2 層と同一。
3	橙色土	砂質・古鉢を含む。	C-4・5 西壁 3 層と同一。
4	淡黃色土	砂質で大小礫を含み、硬く固まる。	C-4・5 西壁 4 層と同一。
5a	黄色土	砂質で、古鉢を含む。	C-4・5 西壁 5a 層と同一。
6	明褐色土	砂質土。	
7	淡黄色土	コーラル層。	
8a	オリーブ墨色粘質土	粘質で、炭・灰瓦・骨を含む。	C-4・5 西壁 8a 層と同一。 集石遺構を伴う層。
9	褐色土	砂質で、礫を含む。	
10	赤褐色土	粘質土。	C-4・5 西壁 10 層と同一。

0 1m
(1/40)

第18図 後之御庭地区 土層図（2）

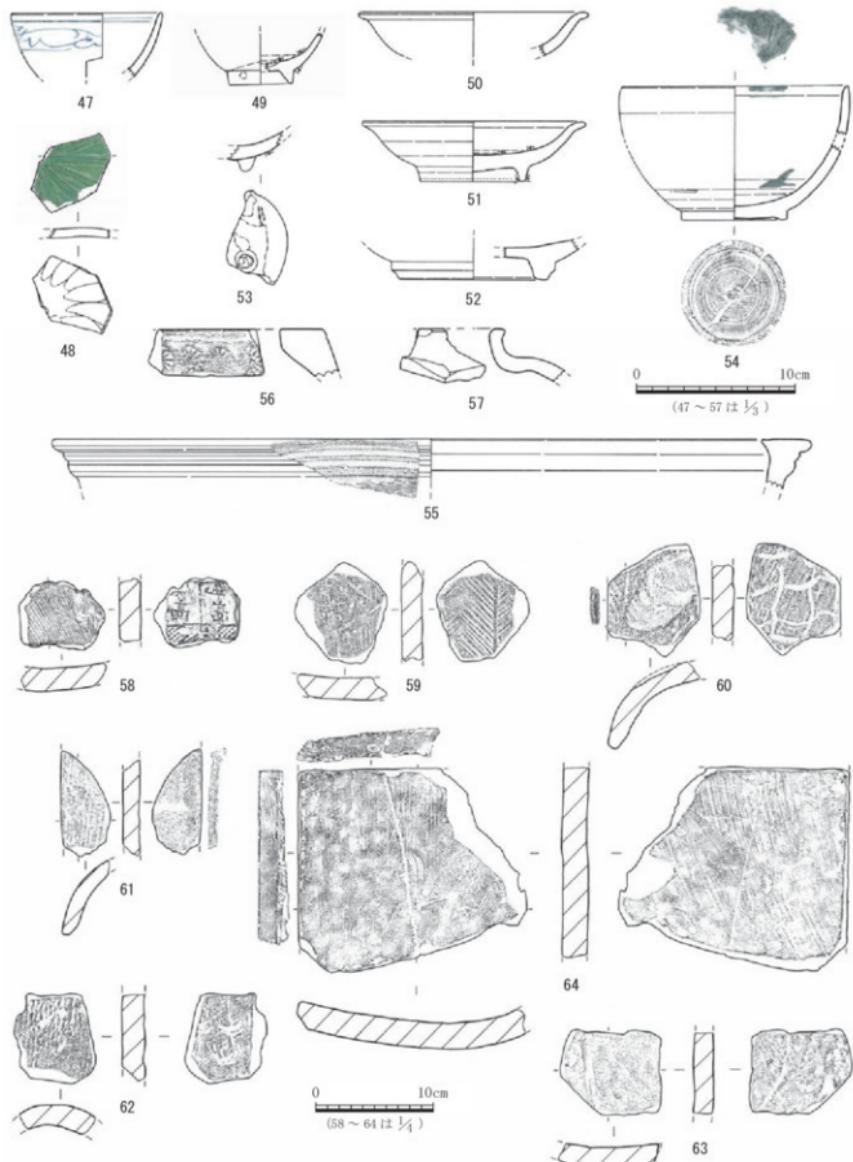


第19図 後之御庭地区 出土遺物（1）

第4表 後之御庭地区出土遺物一覧（1）

単位：cm

種類	器種	分類	残存部	口径	器高	底径	観察事項	出土地	
青磁	碗	I B	口縁部～胴部	14.6	—	—	口唇を丸くおさめる。外面に幅の広い捺彫りの無輪運弁文を描く。胴部に張りをもたない器形。素地は密で灰白色。14世紀後半～15世紀中頃。	B-5 6層	
				—	—	—	口唇をやや平坦にくる。外面には一条圓線をめぐらせ、細運文文を描く。内面には草花文を描く。素地は密で褐色、釉色は青緑色。15世紀後半。	C-2 3層	
		I C		12.0	—	—	口唇を丸くおさめる。外面には無題文を描き、内面は無文。素地はやや粗く灰黄色、釉色は純い青緑色。細かな貫入が入る。15世紀中頃～15世紀後半。	C-5 6層	
				16.4	—	—	内・外面無文。口唇を丸くおさめる。被熱のためか表面はアバタ状を呈する。素地は粗く黄白色、釉色は黄褐色。14世紀後半～15世紀中頃。	C-4 10層	
				—	—	—	内・外面無文。口唇部が逆三角形に肥厚する。胴部に棱を持ち、素地はやや粗く灰黄色。釉色は純い灰黃緑色で、細かな貫入が入る。14世紀後半～15世紀中頃。	トレンチ3 1層	
	皿	II		17.2	—	—	内・外面無文。口唇の肥厚が強い。器形は丸みを持つ。素地は密で灰色、釉色は純い青灰色。14世紀前半～15世紀中頃。	B-7	
				17.6	—	—	内・外面無文。素地は密で暗灰色、釉色は純い黄緑色。14世紀後半～15世紀中頃。	D-9 明褐色土	
		III		16.8	—	—	胴部の張りが弱い器形。素地は粗く茶色を呈し、釉色は純い青緑色。14世紀～15世紀中頃。	B-7	
				—	—	—	内・外面無文。口唇部の肥厚が強烈。素地は密で灰白色、釉色は透明感のある青緑色。15世紀中頃～15世紀後半。	赤褐色粘質土	
				—	—	—	内・外面無文。高台は低く、台形につくる。受け付けから外底にかけて無輪。内底は蛇の目軸割ぎによる可能性がある。素地は粗く淡茶色、釉色は淡褐色。	E-9 焼土	
白磁	盤	I	口縁部	23.8	—	—	内・外面無文。口唇部がやや肥厚している。釉は薄く、素地は密で淡茶色、釉色は灰緑色。	B-7	
				—	—	—	内底に片切り彫りで刻花文を描く。外底は蛇の目軸割ぎする。器形に大きく貫入がある。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。14世紀後半～15世紀前半頃。	赤褐色粘質土	
		II		—	—	—	内・外面無文。高台は低く、台形につくる。受け付けから外底にかけて無輪。内底は蛇の目軸割ぎによる可能性がある。素地は粗く淡茶色、釉色は淡褐色。	C-5 6層	
				—	7.0	—	内・外面無文。内底には圓線が一条めぐらされる。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。15世紀後半～15世紀後半。	トレンチ1 2層	
				—	—	—	内・外面無文。口唇部が丸く厚壁をしている。釉は薄く、素地は密で淡茶色、釉色は灰緑色。	D-9 焼土	
		III		—	—	—	内底に片切り彫りで刻花文を描く。外底は蛇の目軸割ぎする。器形に大きく貫入がある。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。14世紀後半～15世紀前半頃。	C-8 焼土直上	
				—	—	—	内・外面無文。内底には圓線が一条めぐらされている。内底には圓線が一条めぐらされる。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。細かな貫入が入る。15世紀中頃～15世紀後半。	トレンチ1 2層	
	皿	I	口縁部	6.7	—	—	直口口縁。ストレートに立ち上がる器形で、器面に貫入がある。素地は淡茶色で釉色は青緑色。14世紀後半～15世紀前半。	赤褐色粘質土	
				—	—	—	内底に片切り彫りで刻花文を描く。外底は蛇の目軸割ぎする。器形に大きく貫入がある。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。14世紀後半～15世紀前半。	E-9 焼土	
		II		—	—	—	内・外面無文。高台は低く、台形につくる。受け付けから外底にかけて無輪。内底は蛇の目軸割ぎによる可能性がある。素地は粗く淡茶色、釉色は淡褐色。	B-7	
				—	—	—	内・外面無文。内底には圓線が一条めぐらされる。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。15世紀後半～15世紀後半。	トレンチ1 2層	
				—	—	—	内・外面無文。内底には圓線が一条めぐらされる。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。15世紀後半～15世紀後半。	D-9 焼土	
白磁	盤付	I	口縁部	12.8	—	—	施釉状況：貫入なし。釉の色調：青白闊色。素地の色調：灰白色。密度：やや粗。混入物：黒色、白色砂粒、茶褐色粒。	C-8 褐色土層	
				—	—	—	施釉状況：貫入なし。釉の色調：青白闊色。素地の色調：灰白色。密度：細。混入物：黑色微妙。	B-5 10層	
		II		—	—	—	施釉状況：受け付け・外底露胎。貫入なし。釉の色調：青白色。素地の色調：灰白色。密度：やや粗。混入物：黑色微妙。	C-4 8層	
				—	—	—	施釉状況：受け付け・外底露胎。貫入なし。釉の色調：青白色。素地の色調：灰白色。密度：やや粗。混入物：黑色微妙。	C-4 17世紀	
				—	—	—	外反口縁で、小片のため内・外面の文様構成は不明。素地は密で灰白色。16世紀～17世紀。	トレンチ1 1層	
		III		—	—	—	外反口縁で、内面に2条。外面に1条の圓線をめぐらせる。外面の文様構成は不明。素地は密で灰白色。16世紀後半～17世紀。	トレンチ1 2層	
				—	—	—	大型の皿になると思われる。高台の幅が厚く、台形を呈する。高台脇から高台内面半ばまで無輪。内底は蛇の目軸割ぎする。福建、廣東系。17世紀～18世紀。	トレンチ1 2層	
	瓶	I	胴部	—	—	—	外面に『花唐草文』を描く。15世紀前半～15世紀中頃。	C-4 8層	
				—	—	—	釉の色調：黒褐色。素地の色調：赤灰色、黃灰色。密度：やや粗。混入物：白色粒子、黑色砂粒、赤褐色砂粒。口縁内面露胎。	C-4 6層	
		II		21.2	—	—	釉の色調：黒褐色。素地の色調：赤灰色、黃灰色。密度：やや粗。混入物：白色粒子、黑色砂粒、赤褐色砂粒。口縁内面露胎。	C-4 6層	
				22.2	—	—	釉の色調：黒褐色。釉の色調：赤灰色。密度：粗。混入物：白色粒子、黑色砂粒。口縁外面から端部外縁に丸味を持たせる。	C-4 6層、複数	
				16.4	—	—	釉の色調：黒褐色？。素地の色調：赤灰色、黃灰色。密度：やや粗。混入物：白色粒子、黑色砂粒、赤褐色砂粒。クロコ時計回りか、釉薬一部剥る。	トレンチ1 2層	
タイ産 褐釉陶器	不明	—	底部	—	—	—	釉の色調：不明。素地の色調：赤灰色、黃灰色。密度：粗。混入物：白色粒子、黑色砂粒。釉薬一部剥るものの、釉色不明。	B-7 地山直上	
		—		22.4	—	—	釉の色調：黒褐色。素地の色調：褐灰色。素地：粗。混入物：白色粒子、黑色砂粒、赤褐色砂粒。粘土紐約1.3cm。	C-2 3層。 C-5 複数	
	中国產 褐釉陶器	I a	底部	—	—	—	釉の色調：黒褐色。素地の色調：褐灰色。素地：粗。混入物：白色粒子、黑色砂粒、赤褐色砂粒。粘土紐約1.3cm。	ビット 106, 107 上層	
		II a 2	口縁部	—	—	—	口縁部は折り返しが見られるがあまり強調はされていない。口唇部は丸みを帯び、胴部はやや膨らみをしながら底へ移行する。外縁は2次的に火を受けているのが確認できる。素地はやや軟質で浅黃褐色を呈する。粒子は細かく、黒色粗砂が僅かに混入する。外縁がやや厚い。	D-9 晴褐色土	
		II b	—	—	—	—	口縁部は折り返しが見られるがあまり強調はされていない。口唇部は丸みを帯び、胴部はやや膨らみをしながら底へ移行する。外縁は2次的に火を受けているのが確認できる。素地はやや軟質で浅黃褐色を呈する。粒子は細かく、黒色粗砂が僅かに混入する。外縁がやや厚い。	—	
黒釉 陶器	不明	—	底部	—	—	—	口縁部は折り返しが見られるがあまり強調はされていない。口唇部は丸みを帯び、胴部はやや膨らみをしながら底へ移行する。外縁は2次的に火を受けているのが確認できる。素地はやや軟質で浅黃褐色を呈する。粒子は細かく、黒色粗砂が僅かに混入する。外縁がやや厚い。	—	
	—	—	口縁部～胴部	—	—	—	口縁部は折り返しが見られるがあまり強調はされていない。口唇部は丸みを帯び、胴部はやや膨らみをしながら底へ移行する。外縁は2次的に火を受けているのが確認できる。素地はやや軟質で浅黃褐色を呈する。粒子は細かく、黒色粗砂が僅かに混入する。外縁がやや厚い。	—	
46	—	—	—	11.3	—	—	口縁部は折り返しが見られるがあまり強調はされていない。口唇部は丸みを帯び、胴部はやや膨らみをしながら底へ移行する。外縁は2次的に火を受けているのが確認できる。素地はやや軟質で浅黃褐色を呈する。粒子は細かく、黒色粗砂が僅かに混入する。外縁がやや厚い。	D-9 晴褐色土	

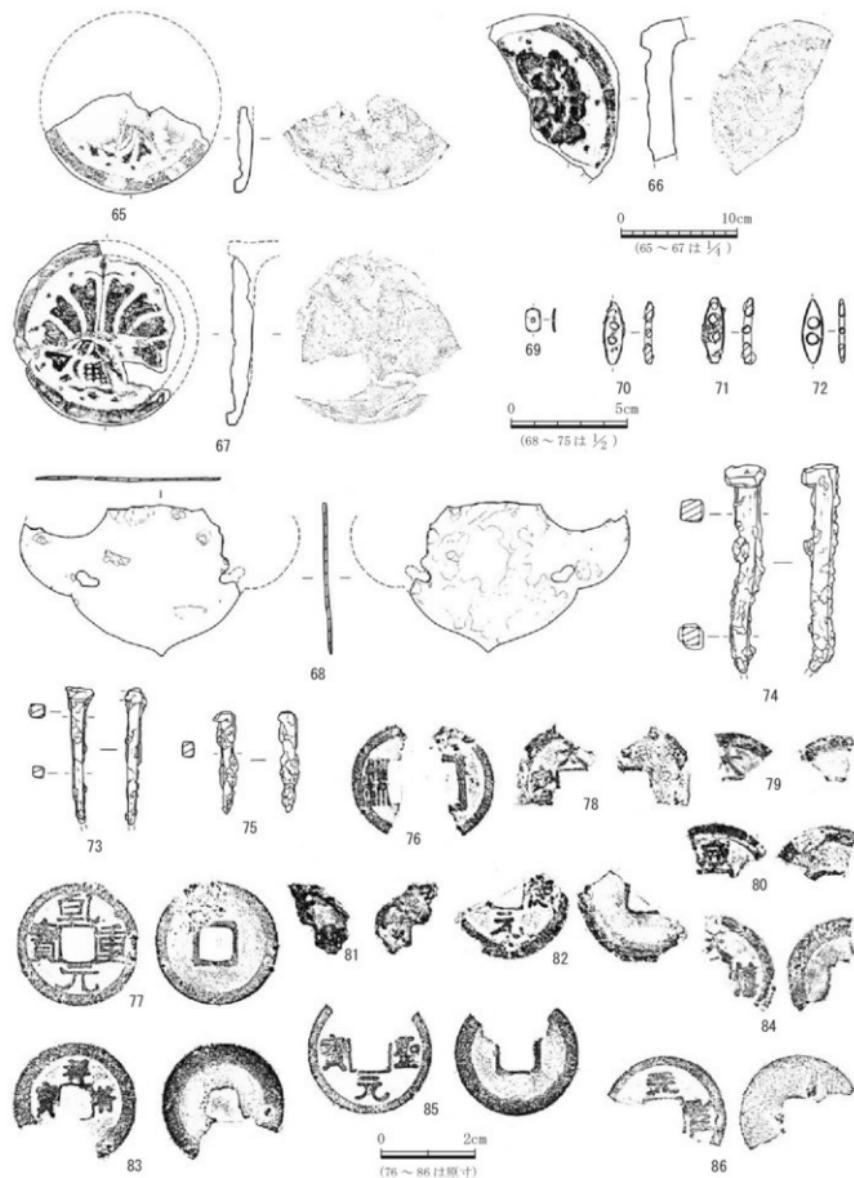


第20図 後之御庭地区 出土遺物（2）

第5表 後之御庭地区出土遺物一覧（2）

単位：cm

種類	器種	分類	残存部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
47	ヘトケム産 染付	碗	—	口縁部 ～胴部	9.4	—	小振りな直口碗。器面は火を受けて茶褐色に変色している部分が見られる。外面には筆書きの簡略化された花草文が細線で描かれている。内面には2条一組の團線が口縁部直下に見られる。質感は薄く、境がある。内外面共に細かい質入が見られる。	D-9 暗褐色土
48	彩繪陶器	壺の蓋	—	頂部	—	—	頂部近くで錦運弁文が見られる。下面にも上面の運弁文に対応する形で印みが見られる。型押しか。鋼線袖が上面のみ施され、くすんだ緑色を呈する。胎土は密で白色、褐色粗粒子が多く見られる。小さい気泡も多く見られる。	C-6 1層
49	沖繩産 施釉陶器	碗	II B-b	底部	—	—	外器面は黒釉で施釉し、内器面は灰釉を施す。内底面は蛇の目釉剥ぎがされており、外底面は高台まで施釉されずに露胎する。	トレンチ3 1層
50	—	皿	I B-a	口縁部	14.4	—	外反口縁資料。全体に白化粧がなされている。内器面には質入が認められる。	C-5 6層
51	—	皿	I B-a	口縁部 ～底部	14.0	3.7	白化粧した外反口縁資料で、内底面は蛇の目釉剥ぎ。質付に白土が付着する。	トレンチ1 1層
52	—	鉢	IVB	底部	—	—	内底面は灰釉が施され、胎土に上る文様が見られる。また、一部に砂が付着する。外底面は露胎する。	トレンチ1 2層
53	—	急須	I	底部	—	—	円錐形の脚が貼付される。外底面の袖は灰釉が施され、内底面は露胎する。	トレンチ1 1層
54	沖繩産 無釉陶器	碗	—	口縁部 ～底部	14.2	8.3	6.6 底部から胴部へ緩やかに湾曲しながら立ち上がる。高台内の挿がりが深く形成される。見込み部に「L」、外底面に「=」の判がみられる。外器面ともに轆轤痕が確認できる。	ピット 125, ピット126
55	—	甕	II類	口縁部	47.4	—	口唇部を平坦にし、口縁内面は緩やかにカーブする。外器面には2条の團線を周縁させ、その直下に数条の波状紋を施す。	C-6 岩盤直上
56	瓦質 土器	火鉢	—	口縁部	—	—	色調：外面は明黄褐色、内面は灰オリーブ。焼成：良。密度：細。混入物：黒色微粒子、黒色砂粒、雲母。輪積み部で破損。	C-6 灰色粘質 土層
57	—	壺	—	口縁部	—	—	色調：内外は灰黄色、断面は灰色。焼成：不良。密度：やや粗。混入物：黒色微粒子、雲母、石灰質砂粒。	C-2 2層(明褐色土)
種類	造瓦系	種類	残存部位	分類	色調	焼成	文様、形態、成形、保存状況など	出土地
58	高麗系	平瓦	筒部	—	灰色	良	「癸酉年高麗瓦造」銘の一部あり。凹面に糸切り痕明瞭。器面は風化が進み、著しく摩滅する。	C-6 赤褐色粘土質 土層
59	—	—	表面は褐色、胎土中央は灰色。	—	良	凸面に羽状打撃痕、凹面に糸切り痕と横位の紐圧痕がみられる。紐圧痕は最小幅2.09mm、最大幅3mm。器面風化あり。	C-5 6層	
60	丸瓦	筒部	—	灰色	良	器面の風化がみられるが、凸面に繩目叩き痕が残る。凹面には刺繍状の紐圧痕がみられ、縱横の幅は比較的狭い。器面は全体に摩滅。	トレンチ1 1層	
61	大和系 瓦	筒部	—	表面は褐色、胎土中央は灰色。	良	凸面に繩目叩き痕、凹面に糸切り痕と横位の紐圧痕がみられる。紐圧痕は最小幅3.79mm、最大4.44mmと比較的大い。器面の風化が認められる。	C-5 6層	
62	—	—	表面は暗褐色、胎土中央は灰色。	—	良	凸面に繩目叩き痕、凹面に刺繍状痕あり。紐圧痕は最小4.65mm、最大幅6.44mmと太い。	—	
63	平瓦	筒部	—	灰色	良好	器表面に白砂付着。風化を受ける。器厚は最小15.98mm、最大16.69mm。	—	
64	—	—	表面は褐色、胎土中央は灰色。	良好	側面の上げげは二面になる。凹面に幅が約5cmの無紋叩き板痕がみられる。器厚は最小17.94mm、最大21.98mm。	B-5 10層		

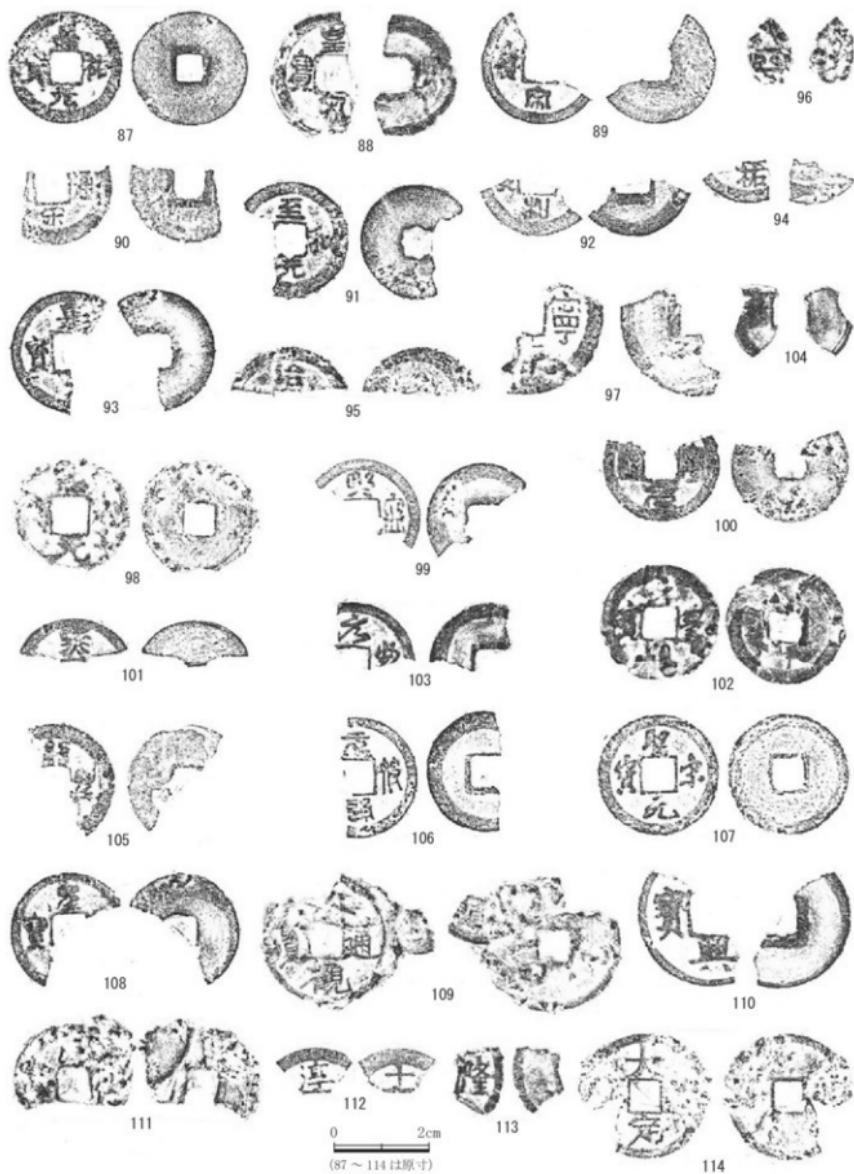


第21図 後之御庭地区 出土遺物（3）

第6表 後之御庭地区出土遺物一覧（3）

単位：cm

辨団番号 図版番号	造瓦 系統	種類	残存 部位	分類	色調	焼成	文様、形態、成形、保存状況など	出土地	
第 21 図 ・ 図 版 14	65 66 67	明朝系瓦 軒丸瓦	瓦当部	A	灰色（一部 に褐色）	良	瓦当面は大きく剥離している。頭部分の破片で、裏面は丁寧な撫で。頭の粘土厚は薄。	トレンチ1 2層	
				B b	赤色	良好	瓦当部が厚い。裏面の撫で極めて丁寧。全体にマンガン釉薬みられる。		
				A	灰色	良	器面の風化がみられ、凸面はクレータ状に剥離している。瓦当の粘土厚は薄。裏面は頭部分が丁寧な撫で、接合部はやや粗い。		
辨団番号 図版番号	種類	器種	分類/ 書体	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
第 21 図 ・ 図 版 14	68 69 70 71 72	飾り 金具 小形の 座金	銅製品	—	—	—	—	雲文を連續させた飾り金具で建物及び調度品に附属する金具と思われる。猪口状の透かしが見られる。全般的に薄く、厚さは1.1mmとなる。重量は26.0g。	C-8 岩盤直上
				—	—	—	—	縦9.1mm、横6mmの略方形で、中央に縦1.8×横1.4mmの方孔が見られる。小形の鉢の座金と考えられる。厚さは0.6mm、重量0.16g。	ピット 106
				—	—	—	—	断面がやや弓形状に僅かに屈曲する。全般的に鋒化が進んでいる。縦25.6mm、横9.1mm、厚みは3.1mm、重量2.18gとなる。	ピット 145
				—	—	—	—	断面がやや弓形状に僅かに屈曲する。全般的に鋒化が進んでいる。縦26.7mm、横9.2mm、厚みは2.7mm、重量3.2gとなる。	D-9 焼土面直上
				—	—	—	—	鉢は余り見られない。孔径は4.1mm、縦25.7mm、横8.3mm、厚みは2.6mm、重量2.24gとなる。	焼土面直上
	73 74 75	鉄釘	鉄製品	—	—	—	—	頭部は「T」字状となる。突端部に向けて漸次幅が細くなる。欠損しているため全長は不明。重量6.04g。	ピット 36
				—	—	—	—	頭部は3方、胴部より突出。突端部が欠損しているため、全長は不明。断面形は正方形に近い。重量27.8g。	ピット 25
				—	—	—	—	頭部頂部は丸く収める。全般的に鋒が覆っているため、現状では元来の形態を把握することは困難である。断面形は長方形状に近い。重量4.63g。	ピット 35
	76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86	○銖 丸元重寶 太○○寶 太○○○ 咸○○○ 景德○○ ○德元○ 祥符○寶 天祐○○ ○型元寶 天型○○	?	—	—	—	—	五銖錢。紀元前118年。錢文が明瞭で、輪および背の郭もはつきりする。外径22.1mm、内径18.5mm、孔幅8.4mm、最大銚厚0.9mm、残存重量0.90g。	C-3 2層
				—	—	—	—	錢文および両面の輪や郭が明瞭。初鑄年：758年。外径25.1mm、内径20.3mm、孔幅6.7mm、最大銚厚1.3mm、残存重量4.29g。	D-9 焼土
				—	—	—	—	太平通寶。初鑄年：976年。錢文が判読しやすく、また両面の輪も明瞭。背上に月か？最大銚厚1.7mm、残存重量0.96g。	D-9 古銭集中部
				—	—	—	—	太平通寶。初鑄年：976年。錢文や両面の輪が明瞭。最大銚厚1.5mm、残存重量0.51g。	岩盤直上
				—	—	—	—	咸平元寶。初鑄年：998年。錢文が判読でき、また両面の輪も明瞭で、凹凸感がある。最大銚厚1.8mm、残存重量1.01g。	E-9 焼土 古銭集中部
				—	—	—	—	景德元寶。初鑄年：1004年。薄手で錢文や輪などは不明瞭。最大銚厚1.1mm、残存重量0.63g。	岩盤直上
				—	—	—	—	景德元寶。初鑄年：1004年。錢文、輪、郭とともに確認できる。最大銚厚1.9mm、残存重量1.92g。	D-9 2層
				—	—	—	—	祥符通寶か祥符元寶。初鑄年：1009年。正面の輪幅が一定ではない。外径24.9mm、内径18.3mm、孔幅5.7mm、最大銚厚0.8mm、残存重量1.78g。	C-9 岩盤直上
				—	—	—	—	天祐通寶。初鑄年：1017年。錢文が若干潰れているが、判読は可能。孔剝に抉ったような加工痕が認められる。最大銚厚1.5mm、残存重量1.58g。	D-9 岩盤直上
				—	—	—	—	天聖元寶。初鑄年：1023年。錢文は判読可能で、両面の輪や郭も明瞭。外径25.3mm、内径21.5mm、孔幅6.7mm、最大銚厚0.9mm、残存重量2.23g。	C-9 岩盤直上
				—	—	—	—	天聖元寶。初鑄年：1023年。錢文ははつきりしているものの、背は輪も郭も不明瞭で、凹凸感がない。外径24.9mm、内径20.3mm、最大銚厚1.1mm、残存重量1.86g。	岩盤直上

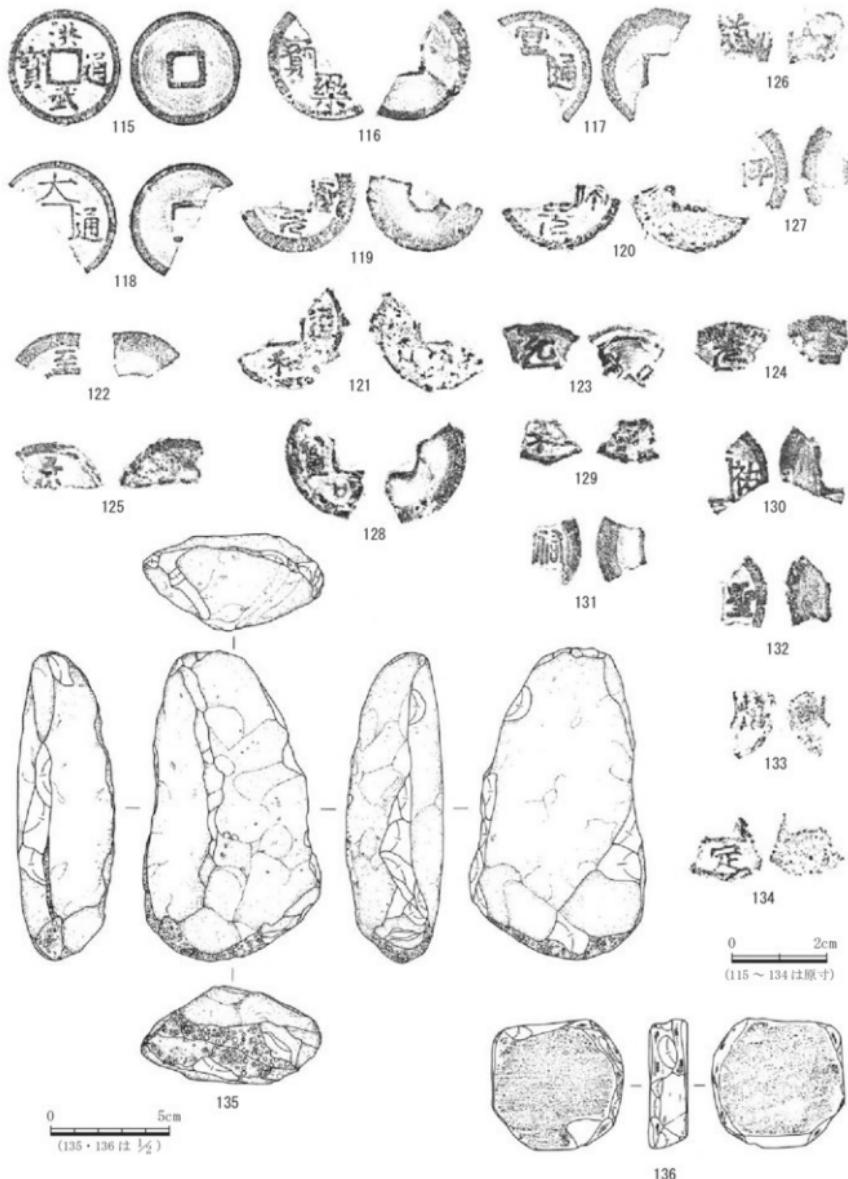


第22図 後之御庭地区 出土遺物 (4)

第7表 後之御庭地区出土遺物一覧（4）

単位：cm

拂岡番号 図版番号	種類	器種	分類/ 書体	残存 部位	口径	器高	底径	総察事項	出土地
87	口祐元寶	真書	—	—	—	—	—	嘉祐元寶。錢文がやや不明瞭だが判読可能。初説年：1056年。背は輪も郭も見られるものの、ほぼ平坦になる。外径23.7mm、内径18.1mm、孔幅5.5mm、最大銭厚1.2mm、残存重量3.75g。	D-9 焼土
88	皇宋〇寶	篆書	—	—	—	—	—	皇宋通寶。初説年：1038年。背の輪幅が一定ではない。外径24.2mm、内径21.4mm、孔幅6.7mm、最大銭厚1.7mm、残存重量1.78g。	岩盤直上
89	〇宋〇寶	篆書	—	—	—	—	—	皇宋通寶。初説年：1038年。背の輪、郭が不明瞭。外径24.4mm、内径19.8mm、最大銭厚0.9mm、残存重量1.54g。	
90	〇宋通〇	真書	—	—	—	—	—	皇宋通寶。初説年：1038年。錢文は判読でき、背の郭も確認できるが輪は不明瞭。孔幅6.1mm、最大銭厚1.1mm、残存重量1.66g。	
91	至道元〇	真書	—	—	—	—	—	至道元寶。初説年：1054年。正面の輪は明瞭であるが、背の輪はやや不明瞭。孔部に抉りを入れて加工する。外径23.6mm、内径17.8mm、孔幅5.5mm、最大銭厚0.8mm、残存重量1.85g。	C-9 岩盤直上
92	〇和〇口〇	篆書	—	—	—	—	—	至道通寶。初説年：1054年。正面は輪幅が一定しているが、背の郭は圓錐形。最大銭厚0.7mm、残存重量0.86g。	
93	嘉祐〇寶	真書	—	—	—	—	—	嘉祐通寶か嘉祐元寶。初説年：1056年。錢文が不明瞭だが同定可能。正面は輪も郭も明瞭だが、背の輪、郭は不明瞭。外径24.9mm、内径20.4mm、孔幅6.6mm、最大銭厚1.0mm、残存重量2.10g。	
94	〇祐〇〇	真書	—	—	—	—	—	嘉祐通寶。初説年：1056年。背の輪は正面と比較して幅がある。最大銭厚1.0mm、残存重量0.54g。	D-9 明褐色土層
95	治〇〇〇	真書	—	—	—	—	—	治平通寶か治平元寶。初説年：1064年。背の輪幅が一定ではない。最大銭厚1.5mm、残存重量1.32g。	E-9 焼土 古鉄集中部
96	〇平〇〇	篆書	—	—	—	—	—	治平通寶か治平元寶。初説年：1064年。背の輪の幅が一定でない。最大銭厚1.4mm、残存重量0.50g。	D-9 古鉄集中部
97	〇寧〇〇	真書	—	—	—	—	—	折二錢なので開元通寶。初説年：1071年。「重」に工具痕（？）が見られる。最大銭厚1.6mm、残存重量2.53g。	C-2 3層
98	熙〇口〇〇	真書	—	—	—	—	—	熙寧元寶。初説年：1068年。錢文は一部跡で見えないが、同定可能。輪幅が比較的狭い。外径23.3mm、内径21.2mm、最大銭厚1.3mm、残存重量2.74g。	D-9 2層
99	熙寧〇〇	篆書	—	—	—	—	—	熙寧元寶。初説年：1068年。孔部右側に工具による加工痕が見られる。外径23.4mm、内径18.8mm、孔幅5.8mm、最大銭厚1.0mm、残存重量1.45g。	C-8 岩盤直上
100	〇寧元寶	篆書	—	—	—	—	—	熙寧元寶。初説年：1068年。正面の輪および郭は明確だが、背の輪、郭は不明瞭。外径23.7mm、内径19.4mm、孔幅5.9mm、最大銭厚0.8mm、残存重量2.50g。	C-9 岩盤直上
101	熙〇〇〇	篆書	—	—	—	—	—	熙寧元寶。初説年：1068年。背の輪が不明瞭で凹凸感がない。最大銭厚1.0mm、残存重量0.96g。	
102	口豐〇寶	行書	—	—	—	—	—	元豐通寶。初説年：1078年。背に別の錢の一部がくっつく。外径24.0mm、内径18.8mm、孔幅6.2mm、最大銭厚1.2mm、残存重量2.91g。	D-9 古鉄集中部
103	元豐〇〇	行書	—	—	—	—	—	元豐通寶。初説年：1078年。両面ともに輪も郭も明瞭。最大銭厚1.3mm、残存重量1.16g。	
104	〇豐〇〇	篆書	—	—	—	—	—	元豐通寶。初説年：1078年。背の輪が二重に見える。最大銭厚1.1mm、残存重量0.54g。	E-9 焼土 古鉄集中部
105	紹聖〇〇	篆書	—	—	—	—	—	紹聖元寶。初説年：1094年。背の輪幅が狭い。外径24.5mm、内径18.5mm、最大銭厚1.1mm、残存重量1.34g。	C-9 岩盤直上
106	元符通〇	篆書	—	—	—	—	—	元符通寶。初説年：1098年。錢文、輪、郭ともに明瞭。別の錢の一部が一枚くっつく。外径24.5mm、内径19.8mm、孔幅6.1mm、最大銭厚1.2mm、残存重量2.24g。	
107	聖宋元寶	行書	—	—	—	—	—	両面の輪および郭は明瞭。初説年：1101年。外径24.8mm、内径19.4mm、孔幅6.2mm、最大銭厚1.2mm、残存重量3.77g。	D-9 1層
108	聖〇〇寶	篆書	—	—	—	—	—	聖宋元寶。初説年：1101年。背の輪幅が一定でない。外径24.1mm、内径19.5mm、最大銭厚1.2mm、残存重量2.08g。	D-9 2層
109	口縱通寶	真書	—	—	—	—	—	大縱通寶。初説年：1107年。錢文、輪、郭ともに明瞭。別の錢の一部が一枚くっつく。外径24.9mm、内径23.2mm、孔幅6.2mm、最大銭厚1.4mm、残存重量6.08g。	D-9 古鉄集中部
110	〇開〇寶	真書	—	—	—	—	—	折二錢の紹興通寶。初説年：1131年。輪、郭が明瞭ではあるが、背の孔郭は圓錐形で輪幅は一定ではない。最大銭厚1.7mm、残存重量3.12g。	D-8 6層
111	淳〇口〇〇	篆書	—	—	—	—	—	淳熙元寶。初説年：1174年。錢文は潰れるが同定可能。背文の確認は困難。別の錢の一部がくっつく。外径23.1mm、内径6.16mm、孔幅6.2mm、最大銭厚1.3mm、残存重量2.03g。	D-9 古鉄集中部
112	淳〇〇〇	真書	—	—	—	—	—	淳熙元寶か淳祐元寶であるが、書体から後者の可能性が高い。初説年：不明。背上「十」。最大銭厚0.9mm、残存重量0.77g。	C-9 岩盤直上
113	〇隆〇〇	真書	—	—	—	—	—	正隆元寶。初説年：1157年。錢文、輪、郭ともに明瞭で幅も一定になっている。最大銭厚1.1mm、残存重量0.66g。	
114	大定通寶	真書	—	—	—	—	—	大定通寶。初説年：1178年。輪や郭が両面とも明瞭で、幅も一定となる。外径25.8mm、内径22.6mm、孔幅6.5mm、最大銭厚1.4mm、残存重量3.22g。	D-9 焼土



第23図 後之御庭地区 出土遺物（5）

第8表 後之御庭地区出土遺物一覧（5）

単位：cm

種類	器種	分類/ 書体	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
115	決式通寶	真書	—	—	—	—	銭文、輪、郭とも明瞭。初鉄年：1368年。外径23.4mm、内径19.7mm、孔径5.0mm、最大鉄厚1.6mm、残存重量3.52g。	D-9 古銭集中部
116	○樂○寶	真書	—	—	—	—	水樂通寶。初鉄年：1409年。銭文および輪、郭が不明瞭。外径23.6mm、内径19.2mm、最大鉄厚1.3mm、残存重量1.62g。	岩盤直上
117	宣○通○	真書	—	—	—	—	宣和通寶か宣通寶。初鉄年：不明。両面の輪や郭は明瞭であるが、背の輪幅が一定しない。外径24.8mm、内径20.3mm、最大鉄厚0.9mm、残存重量1.37g。	C-9 岩盤直上
118	大○通○	真書	—	—	—	—	書体から大通寶の可能性が高い。初鉄年：不明。正面の郭と比較して、背の郭は闊縫。外径24.1mm、内径21.4mm、最大鉄厚1.6mm、残存重量2.45g。	
119	○聖元○	篆書	—	—	—	—	書体から聖元通寶と思われる。初鉄年：1094年から。孔郭に數ヶ所の抉りを入れる。背面に「一」のようなもののが見えるが、付着物だろうか？外径23.7mm、内径17.7mm、最大鉄厚1.1mm、残存重量1.58g。	D-9 2層
120	○宋元○	篆書	—	—	—	—	書体から聖元通寶。初鉄年：1101年。背の輪は不明瞭で、幅も一定していない。最大鉄厚1.6mm、残存重量1.37g。	D-9 古銭集中部
121	○和通○	真書	—	—	—	—	書体をみると、政和通寶か宣和通寶と思われる。初鉄年：不明。鋸がひどく、輪や郭が不明瞭。外径25.5mm、内径21.9mm、最大鉄厚1.5mm、残存重量1.43g。	岩盤直上
122	至○○○	真書	—	—	—	—	至和通寶か至元通寶の可能性がある。初鉄年：1054年。両面の輪が明瞭。最大鉄厚0.8mm、残存重量0.58g。	D-8 6層
123	元○○○	行書	—	—	—	—	書体から元祐通寶の可能性が高い。初鉄年：不明。背に別の銭の一部が付着する。最大鉄厚2.6mm、残存重量1.40g。	
124	元○○○	篆書	—	—	—	—	元豎通寶か元祐通寶か元符通寶。初鉄年：不明。銭文などは鋸で彫れる。最大鉄厚2.2mm、残存重量0.97g。	
125	景○○○	真書	—	—	—	—	景祐通寶か景祐元寶と思われる。初鉄年：不明。最大鉄厚0.9mm、残存重量0.67g。	
126	○道○○	真書	—	—	—	—	正面右側に「道」がくるのは、至道元寶、明道元寶、乾道元寶であるが、本資料は至道元寶の可能性がある。初鉄年：不明。最大鉄厚1.7mm、残存重量0.67g。	D-9 古銭集中部
127	○平○○	真書	—	—	—	—	最大鉄厚1.3mm、残存重量0.82g。	C-8 岩盤直上
128	○和○寶	篆書	—	—	—	—	書体から政和通寶か宣和通寶。初鉄年：不明。銭文は彫れる。最大鉄厚1.3mm、残存重量1.42g。	
129	○和○○	真書	—	—	—	—	至和通寶か政和通寶か宣和通寶。初鉄年：不明。鋸で銭文が彫れる。最大鉄厚1.4mm、残存重量0.50g。	
130	○祐○○	真書	—	—	—	—	正面右側に「祐」がくるのは、景祐元寶、嘉祐元寶、元祐通寶、淳祐元寶がある。初鉄年：不明。工具で切り取られたような痕がある。最大鉄厚1.0mm、残存重量0.69g。	
131	○祐○○	篆書	—	—	—	—	正面右側に篆書体の「祐」がくるのは、景祐元寶、嘉祐元寶、元祐通寶。初鉄年：不明。銭文、輪、郭などが不明瞭。最大鉄厚1.2mm、残存重量0.71g。	
132	○聖○○	真書	—	—	—	—	天聖元寶か昭聖元寶だが、書体から天聖元寶の可能性が高い。初鉄年：1023年か？背の輪は不明瞭。最大鉄厚1.6mm、残存重量0.91g。	
133	○輔○○	真書	—	—	—	—	天祐通寶か開祐通寶。初鉄年：不明。輪および郭が不明瞭。最大鉄厚0.8mm、残存重量0.42g。	D-9 2層
134	○定○○	真書	—	—	—	—	初鉄年：不明。正面右側が工具によって切り取られたような痕が見られる。最大鉄厚1.3mm、残存重量0.79g。	E-9 懈土 古銭集中部
135	石製品	敲き石	—	—	—	—	扁平な略三角形状に加工した敲き石で、下端部に敲打痕が見受けられる。長軸12.7cm、短軸7.3cm、厚さ4.0cm、重量378.7gである。	ピット6
136	円盤状 製品	—	—	完存	—	—	素材：大和系平瓦。長径：5.1cm、厚さ：1.5cm、重量：54.4g。打削調整の後、打削面を削って成形している。方形に近い形を呈する。	D-5 6層
594	本土産 磁器	碗	印 判手	口縁部	11.4	—	釉の色調：青白色。素地の色調：灰白色。密度：細。口縁直状。型式揃り。青海波紋を模とし、窓間に楕円、高足部に連続文。口縁内面、模文。	トレント3 1層
595	—	皿	—	口縁部	9.4	—	釉の色調：青白色。素地の色調：灰白色。密度：細。口縁直状。ゴム判。内面、連続文。	C-7 岩盤直上
619	金属 製品	粒上銅津	—	—	—	—	形状は小さな球状を呈している。幅5.2mm、重量0.4g。	D-9 懈土

第6節 石囲い遺構と遺物

東長1.7m、西残存長0.6m、南残存長0.5m、北長1.6m。D・E-9グリッドに位置する。切石で開った長方形形状の石囲い遺構で西側及び南側は琉大造成層による破壊を受けている。各面の控え部分には栗石が込められており、とくに東側は岩盤を南北方向に削り、その西側約50cmの場所に根石を据え、直に削った岩盤と根石控えとの間には大量の栗石を認めるといった構築方法が窺える。根石は黄褐色粘質土層(微砂層)にそのまま据えており、石囲い内部は平坦に造成されている。上部は残存しておらず、面石の面側並びに上面に残る面石の控え部分に火を受けた痕跡が確認された。埋土は主に大量の礫を含む淡黄色粗砂層で人為的に埋められている可能性を指摘できる。裏込めから沖縄産陶器が、石囲い内部からは近世期相当の遺物が出土したことから絵図等に描かれる寄溝に関係する遺構と考えられる。しかし、その詳細については不明で今後の資料増加を俟つところである。



第24図 石囲い遺構 平面図

EL=128.600m

西

東



北壁立面図

EL=128.600m

東

西

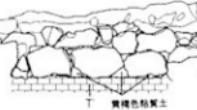


南壁立面図

EL=128.600m

北

南



東壁立面図

EL=128.600m

南

北



西壁立面図

EL=128.600m

西

T



断面図

0

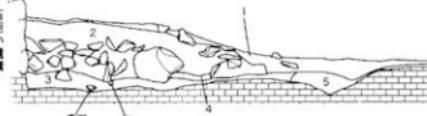
2m

(1/40)

EL=128.400m

西

石固い遺構



観察坑2

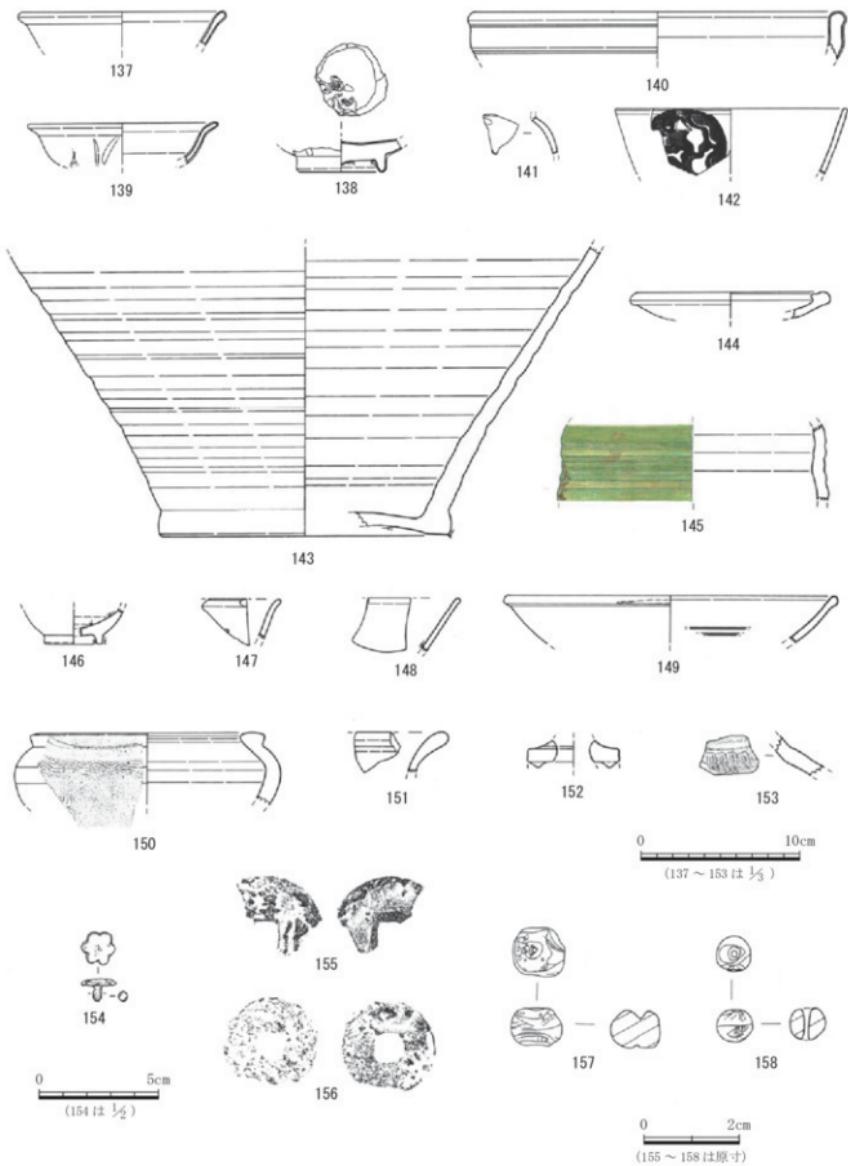
岩盤



観察坑2 北壁土層図

層序	色調	土質・混入物	備考
1	オリーブ色土	粘質で、礫をやや含む。	
2	淡褐色土		石材片が混入。
3	黄褐色土	粘質で、炭を大量に含む。	
4	明褐色土	粘質で、小砾を含む。	
5	浅黄褐色土	砂質で、礫を含む。	

第25図 石固い遺構 立面図及び土層図



第26図 石圓い遺構 出土遺物

第9表 石圓い遺構出土遺物一覧

単位: cm

備考番号 図版番号	種類	器種	分類/ 書体	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
137	青磁	碗	III 口縁部 ～胴部	13.0	—	—	—	内・外面無文。素地は密で暗灰色、釉色は純い青緑色。貫入が入る。14世紀後半～15世紀中頃。	石圓い遺構 埋土
138								小型の碗。外側に無縫蓮弁文を描く。内底に印花文を施し、外底は蛇の目釉剥ぎとする。高台は低く、逆「八」の字状に開く。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。14世紀後半～15世紀前半。	
139	青磁	皿	II A 口縁部	11.8	—	—	—	片切り彫りで幅広の無縫蓮弁文を描く。釉は比較的厚く、素地は密で灰白色、釉色は青緑色。15世紀前半～15世紀中頃。	石圓い遺構 埋土
140								口唇部が玉縁状に肥厚し、外面に團繩を2条施らせる。釉はやや厚みを持つ。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。	
141	白磁	壺	—	肩部	—	—	—	施輪状況：貫入なし。釉の色調：青白色。素地の色調：灰白色。密度：細。混入物：微細粒子。	石圓い遺構 埋土
142	染付	碗	I 口縁部	14.4	—	—	—	直口口縁で口唇部がわざかに肥厚する。外面は『コンニャク印列』の文様がみられる。素地はやや粗と黄白色。福建・廣東系、17世紀～18世紀。	石圓い遺構 埋土
143	中国産 褐釉 陶器	壺形	I a 底部	—	—	—	18.0	釉の色調：オリーブ褐色。素地の色調：褐灰色。密度：やや粗。混入物：白色砂粒、黒色砂粒、赤褐色砂粒。細かい貫入る。	石圓い遺構埋土、 門番館所・中門・茶窓(E-9・10) 境内
144	半鍊	蓋	III b 端部 径 12.4	—	—	—	—	色調：内外は橙色、断面は灰色。焼成：良。密度：粗。混入物：赤色粒子、黒色微粒子、石英微量。ロクロは時計回りか。回転ヘラ削り→回転ナダ。ナダは徹底される。	石圓い遺構 埋土
145	彩繪 陶器	壺	— 肩部	—	—	—	—	壺の肩部か、2条の團繩が沈線によって施される。胎土は表面で白色微粒子が多く見られる。また気泡も多く見られる。團繩釉が表面のみ施され、全体的にくすんだ緑色を呈する。胴径16.8cm。	石圓い遺構 埋土
146								全体に白化粧をし、内底面は蛇の目釉剥ぎがなされ、盤付も釉剥ぎをされる。	
147	沖縄産施 釉 陶器	碗	— 口縁部	—	—	—	—	若干の外反を示す資料である。明瞭な施線がみえる。灰釉を單擲けした内外向器面に又様の一部が確認できる。	石圓い遺構 埋土
148								真っ直ぐに立ち上がる直口口縁で、口唇部が玉縁状に肥厚する。鉄輪を表面に施す。また、細かい貫入も確認できる。	
149	—	皿	— 口縁部	20.8	—	—	—	口唇部が肥厚する。内外両面とも灰釉が施されているが、口唇部で一部釉が剥がれている。口縁内面には1条の團繩が、胴部には2条の團繩がある。	石圓い遺構
150	—	鉢	I 口縁部	14.7	—	—	—	口縁断面が三角状に肥厚する資料。肩部で最大径を持ち、その直上に4条の波状文を施す。	石圓い遺構 埋土
151	沖縄産 褐釉 陶器	瓶	— 口縁部	—	—	—	—	口縁部が肥厚する資料。口縁部はラッパ状にひらく。外器面に施被痕を明瞭に残す。	石圓い遺構 埋土
152	—	不明	—	—	—	—	—	火を受けている。残存部が少なく用途が判然としないが、蓋の可能性があると思われる。	石圓い遺構
153	瓦質 土器	壺	— 肩部	—	—	—	—	色調：内外は灰黄色。焼成：良。密度：やや粗。混入物：赤色砂粒、白色砂粒、黒色砂粒。晝文：波状文、約0.5cm単位の押圧文。	石圓い遺構 栗石内
154	金属 製品	管	— 首部	—	—	—	—	花形で水仙を象る。首は六角形。重量1.35g。	石圓い遺構
155	錢貨	淳化〇〇 真書	—	—	—	—	—	初鑄年：990年。淳化元寶。篆が明瞭。最大錢厚1.6mm、残存重量1.20g。	石圓い埋土
156		無文	—	—	—	—	—	孔部の隅が丸みを帯びる。外径18.9mm、最大錢厚0.9mm、孔幅6.2mm、残存重量0.87g。	石圓い遺構 銀財庫2・5層
157	玉製品	丸玉	— 完形	—	—	—	—	高さ7.5mm、最大径10.2mm、孔径1.8mm、重量0.45g。材質：ガラス。色調：白。被熱の為変形し、表面が粉状になっている。	石圓い遺構 埋土
158			— 完形	—	—	—	—	高さ6.1mm、最大径6.6mm、孔径1.8mm、重量0.45g。材質：ガラス。色調：半透明。内側から細かなビグが入っている。	

第7節 石列遺構と遺物

石列1

残存長1.7m。E-9・10グリッドに位置し、遺構の主軸はN8°Eを測る。北側は石囲い遺構によって切られ、南側は岩盤に接続する。東側に面取りがなされており、個々の石材は大振りで加工は粗い。また礎層が全体を覆っていることから、人為的に埋められた可能性を指摘できる。控え部分には栗石が見られることから、ある程度の高さを有していたと考えられる。なお、石列3は当該遺構の栗石によって埋め殺されている。

石列2

残存長0.7m。D・E-10グリッドに位置し、遺構の主軸はW10°Nを測る。大振りの、2つの石材から成り、北側に面取りがなされ、その加工は粗い。控え部分に栗石は確認されておらず、東西端は後世の破壊を受けており、現存状況は極めて悪い。面側は礎層で埋まり、上面は全体的に琉大造成層が覆う。構築時期については不明。

石列3

残存長1.3m。E-9・10グリッドに位置し、遺構の主軸はN6°Eを測る。粗割り面取り加工した自然石で構成され、控え部分に栗石が見られる。石材はやや小振りで黄褐色粘質土層（微砂層）に直に据えられており石列1と同様に東側に面取りがなされている。上面一帯は火を受けており一部、赤色に変色している。上部と南北端は後世の破壊を受けている。全体的に上面は琉大造成層によって覆われており、面側は石列1に伴う栗石で埋め殺されている。

石列4

残存長1.4m。E-10グリッドに位置し、遺構の主軸はW8°Nを測る。北側に面取りがなされており、個々の石材は大振りで加工は比較的丁寧に成されている。東西端は琉大造成層により切られている。横目地が通っているため、天端部分のように見えるが、控え部分の上面が加工されていないことから上面は破壊を受けていることが窺える。控え部分は琉大造成層が見られることから、戦後に建造された旧琉球大学に關係する構築物の可能性が高い。因みに控え部分の近くからは細粒砂岩製の礎石が1点、琉大造成層から出土している。



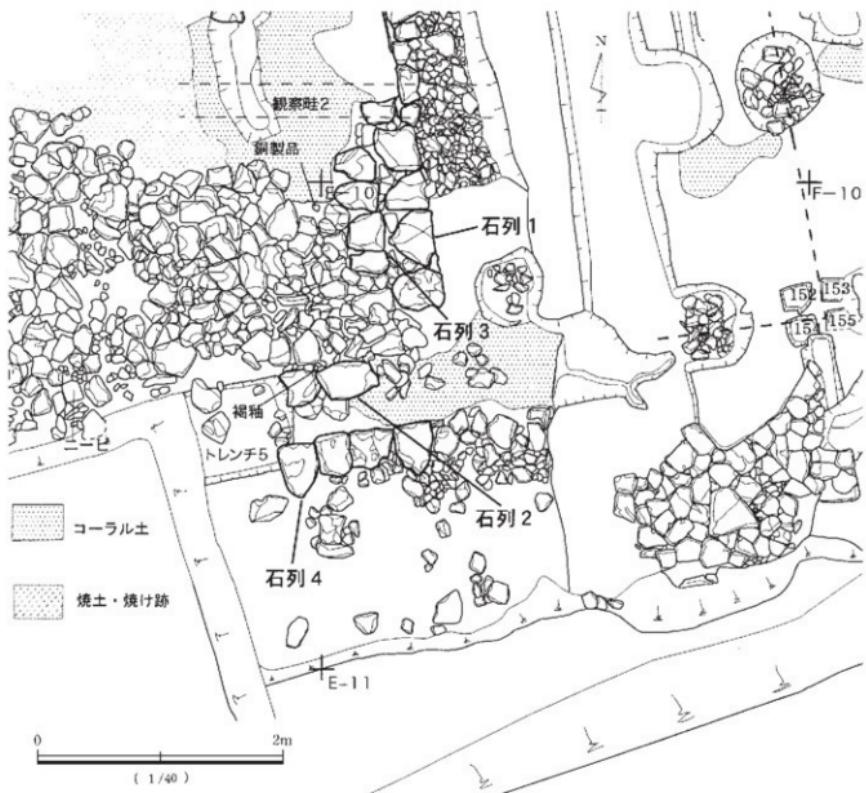
159



160



第27図 石列遺構 出土遺物



第28図 石列遺構 平面図

第10表 石列遺構出土遺物一覧

単位: cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	分類	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
第27 図 ・ 図版 17	159 染付	碗	I	口縁部	10.8	—	—	直口口縁で、外面に圓線を1条刻らせる。文様構成は不明。器面に繊かな貫入が入る。素地はやや粗く茶色がかった灰色。福建・廣東系、17世紀～18世紀。	石列4 黄褐色土
	160 黒釉陶器	碗	—	胸部～底部	—	—	6.0	高台の内側りは浅く、高台際を水平に削る。内底面で折れて平坦になる。外面は二次的に火を受けている痕跡が複数ある。素地は灰白色で硬く焼き締められている。粒子は細かく、小さい気泡が僅かに見られる。鈍い光沢を有する黒褐色の釉薬を薄く施す。	石列1内

第8節 石積み遺構と遺物

石積み1

残存高 0.8m、残存長 1.1m。E-8 グリッドに位置し、遺構の主軸はW10° Nを測る。上部は完全に破壊され、根石のみ残存する。切り石積みで丁寧に加工した石材で構成され、岩盤直上に据えられている。全体的に琉大造成層に覆われていた。控え部分は岩盤を垂直にはつり、その前面に面石となる石材を据える。垂直にはつった岩盤の壁と面石との間には栗石を入れるが、それほど大量に入れていない。面石東側は石段に据え付くように設置されており西側は、E-8 グリッド以西が戦後の搅乱が著しいことによってその痕跡を残していない。石積み1の控え部分、栗石の下部には黄褐色微砂層が敷かれているのが確認されるが、面石を据えている部分には敷かれておらず、削平された岩盤が確認できる。また、後之御庭側の岩盤は更に2cm下げて削平している。削平状況並びにこの岩盤が露頭している部分が石積み1 西側から黄金御殿跡方向へ直線状に伸びていくことから、西側へ石積み1は伸びていたと想定される。この石積み1は近世の絵図から、寄満の北側基壇と同定される。

石段

岩盤を加工した階段で、南側の一部のみが検出された。西側に下る階段で3段から成り、かなり丁寧に削り出している。面側は磨いていたためか、加工痕は見られない。北側は近代の搅乱により原形を止めておらず、一部火を受けた痕跡が見られる。寄満の基壇である石積み1が取り付いていることから、『沖縄県首里旧城図』(第8図)に見られる中門北側の階段に相当する。

石積み3

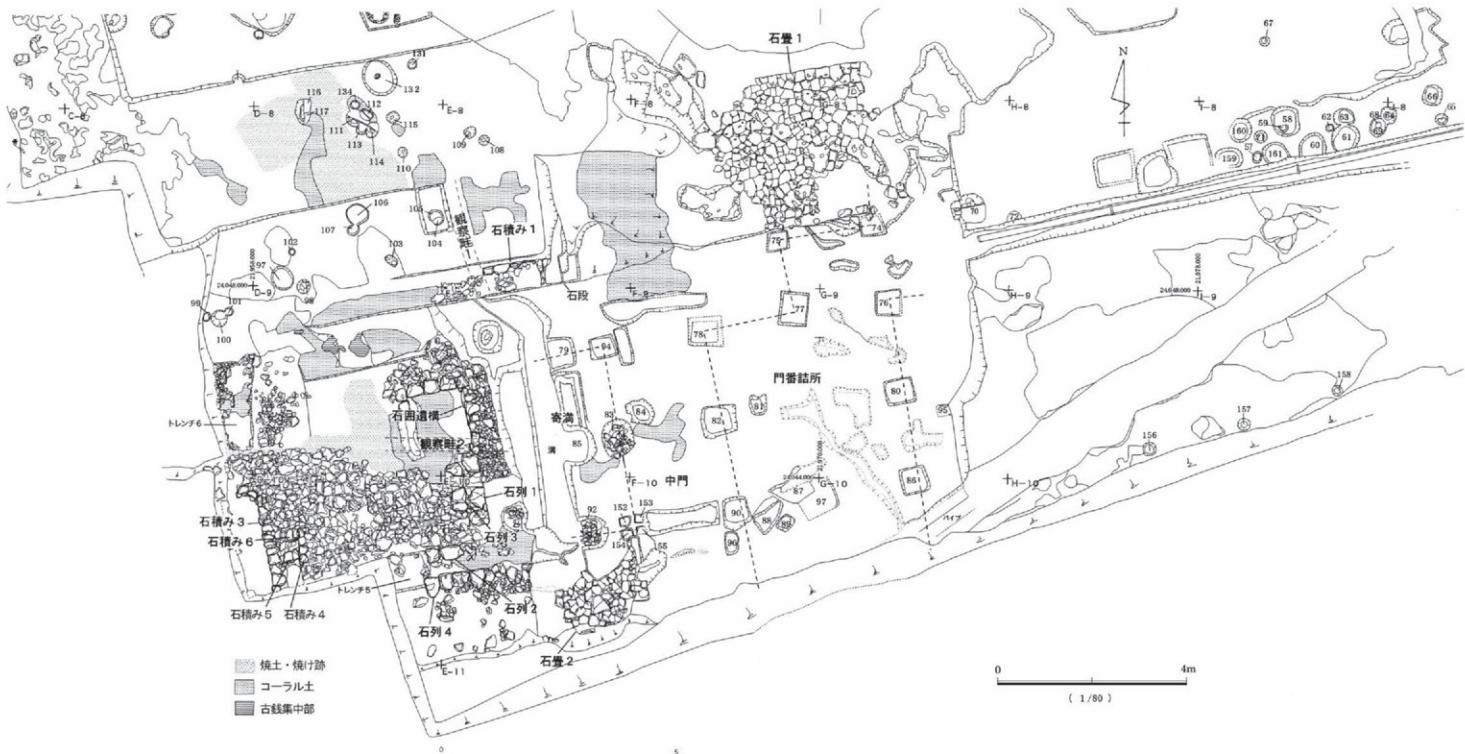
残存高 0.3m、残存長 0.5m。C・D-10 グリッドに位置し、遺構の主軸はN12° Wを測る。Dラインから西側に屈曲するが、その延長部は琉大造成層により破壊されている。切石積みで控え部分には大量の栗石が込められている。面石の大きさ並びに加工度は区々である。残存度は良好ではなくほとんどが根石部分である。石積み5・6の西端は当該遺構によって切られている。また、根石の面側には炭、焼土が混入の黒褐色砂質土層と淡橙色砂質土層が堆積しており、火災後も使用されたと想定される。この炭、焼土を含む黒褐色砂質土層はD-9 グリッドに広がる当該遺構の栗石下部で確認される焼土層とは異なり、時期は17世紀後半～18世紀前半頃か。焼土層は当該遺構の根石基部に見られ、出土遺物から15世紀前～中頃に比定される。

石積み4

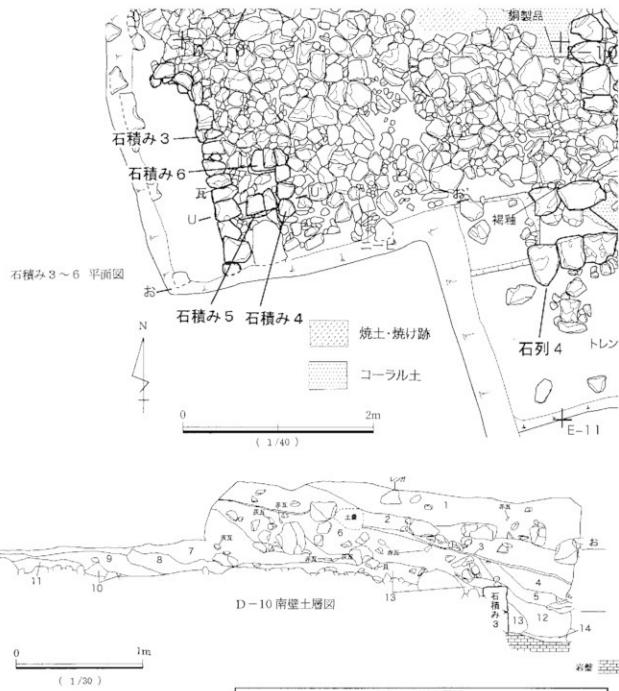
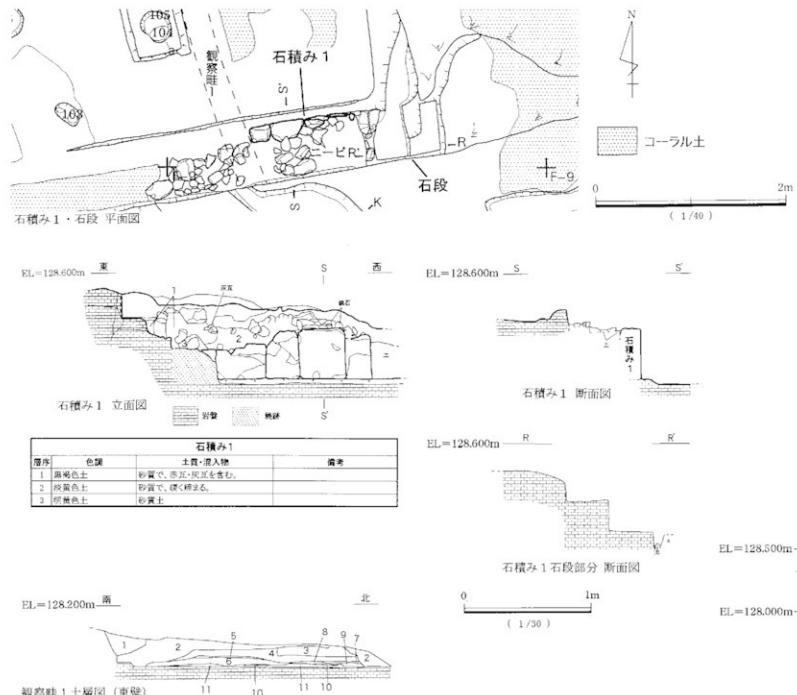
確認高 0.5mで根石は岩盤に据えられている。残存長 0.5m。D-10 グリッドに位置し、遺構の主軸はN2° Wを測り石積み3とは並行しない。切石積みで控え部分には大量の栗石が込められている。面石の表面は丁寧に面取りされる。上部と南側は後世の破壊を受けており、北側は石積み6に接続している。構築時期については不明であるが、石積み3の栗石によって完全に埋め殺されていたことから、18世紀前半には機能していなかったと考えられる。また全体的に炭が大量に混じる黒褐色粘土層が覆っていたことから、火災後の廃土と共に廃棄された遺構と想定される。

石積み5

確認高 0.3mで根石は岩盤に据えられている。残存長 0.4m。D-10 グリッドに位置し、遺構の主軸はW6° Sを測る。切石積みであるが面石の加工はやや粗い。面石の控え部分と石積み6の面側まで栗石が混められている。面石と上部は破壊を受けており、東側は石積み4に接続し、西側は石積み3によって切られている。石積み4と同様に石積み3の栗石によって完全に埋め殺されていたことから、18世紀前半には機能していなかったと考え



第29図 調査区南側全体図



第30図 石積み1 遺構図

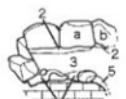
第31図 石積み3～6 遺構図 (1)

られる。全体的に炭が大量に混じる黒褐色粘質土が覆っていたことから、火災後の廃土と共に廃棄された遺構と想定される。

石積み 6

確認高 0.4m で根石は岩盤に据えられている。残存長 0.4m。D-10 グリッドに位置し、遺構の主軸は W 6° S を測る。相方積みで、控え部分に大量の栗石が込められている。面石の大きさは区々で加工はやや粗い。上面と東側は破壊を受けており、西側は石積み 3 によって切られている。また、石積み 4 が面側に取り付いている。石積み 4・5 と同様に石積み 3 の栗石によって完全に埋め殺されていたことから、18世紀前半には機能していなかったと考えられる。全体的に炭が大量に混じる黒褐色粘質土が覆っていたことから、火災後の廃土と共に廃棄された遺構と想定される。

EL=128.600m
西 東



石積み 3 立面図（北面）

EL=128.600m 北



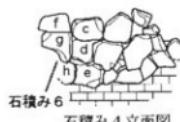
石積み 3 立面図（東面）

石積み 3			
層序	色調	土質・混入物	備考
1	黒色土	砂質で、櫻炭を含む。	
2	淡橙色土	砂土層	
3	灰黃褐色土	砂質で、櫻を含む。	
4	明黃褐色土	砂質で、大櫻を含む。	
5	黒褐色土	砂質で、小櫻を含む。	

EL=128.600m

北

南



石積み 6 立面図
石積み 4 立面図

EL=128.600m

西

東



石積み 6 立面図
石積み 4

石積み 3 の 1 層

EL=128.600m U

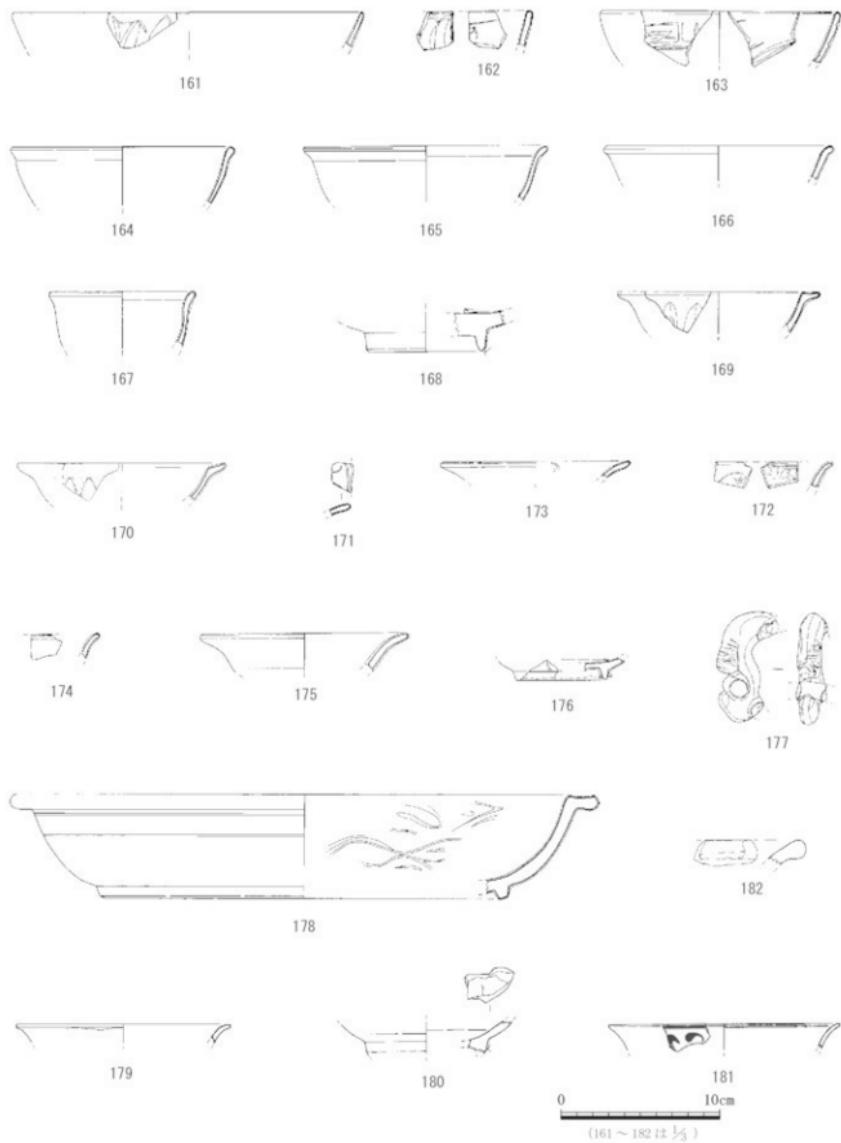
石積み 3・4 断面、石積み 5 立面図

岩盤



0 1m
(1/30)

第32図 石積み 3～6 遺構図（2）

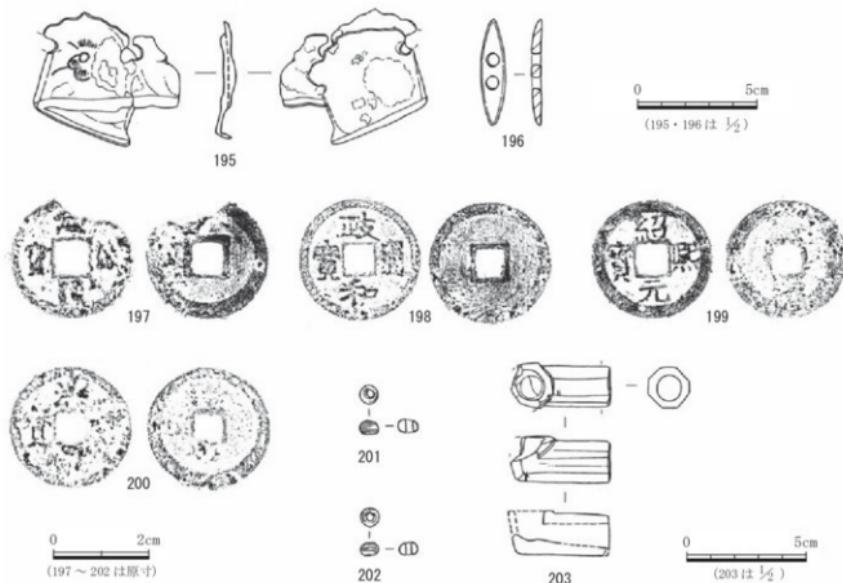
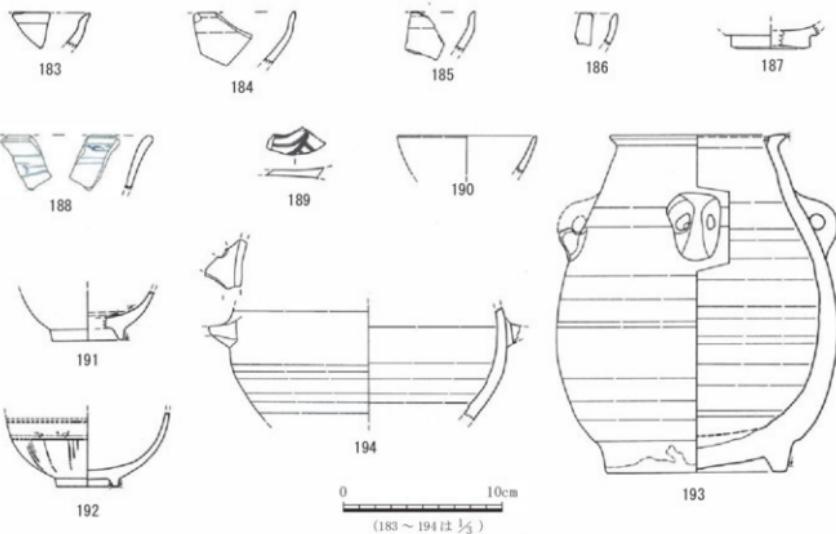


第33図 石積み遺構 出土遺物（1）

第11表 石積み遺構出土遺物一覧（1）

単位：cm

拂団番号 國版番号	種類	器種	分類	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
161 162 163 164 165 166 167 168 169 170	碗	IA	口縁部	21.8	—	—	—	片切り彫りによる鋸籠弁文。弁間は簡略化されている。口唇を舌状につくる。素地は密で灰色、釉色は鈍い青緑色。13世紀末～14世紀前半か。今帰仁城跡、系数城跡に類例あり。	石積み3 栗石内
								口唇をやや平坦につくる。外面には線描蓮弁文を描くが、弁先と弁間は離れている。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。細かな貫入が入る。15世紀後半。	
								15.0 — — 口唇は丸くおさめる。外面には片切り彫りで雷文帯を描く。内面の文様構成は不明。素地は密で灰色、釉色は鈍い青緑色。15世紀頃。	
		ID	口縁部～胴部	13.8	—	—	—	内・外面無文。口唇部の肥厚が微弱。強く被熱したため外面から内面の一部にかけて茶色く変色し、砂等が付着している。素地は密で灰色、釉色は鈍い水色。14世紀中頃～15世紀後半。	石積み3 栗石内
								15.2 — — 内・外面無文。素地は密で灰色、釉色は薄い青緑色。14世紀後半～15世紀中頃。	
		II	口縁部～胴部	14.4	—	—	—	内・外面無文。素地は密で灰色、釉色は薄い青緑色。14世紀後半～15世紀中頃。	石積み3 栗石内
								9.2 — — 小型の碗。内・外面無文。素地は密で灰色、釉色は鈍い灰緑色。14世紀後半～15世紀中頃。	
								— 底部 — — 7.4 内・外面無文。高台はやや内側へ傾く。疊付けから外底にかけて無釉。素地は密で灰白色、釉色は鈍い青緑色。大きな貫入が入る。	
青磁	IA	口縁部～胴部	12.6	—	—	—	—	外面に無籠蓮弁文を描く。素地は密で灰白色、釉色は透明感のある淡緑色。貫入が入る。14世紀後半～15世紀中頃。	石積み3 栗石埋土
								外面に片切り彫りで無籠蓮弁文を描く。被熱したため表面がアバタ状を呈す。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。14世紀後半～15世紀中頃。	
	II C	口縁部	13.0	—	—	—	—	稜花皿。口唇部に文様あり。素地は密で灰色、釉色は透明感のある淡緑色。15世紀中頃～16世紀前半。	
								外面の文様構成は不明、内面には圓線を3条めぐらせ線描きの雷文帯を描く。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。14世紀後半～15世紀初頭か。	
	V	口縁部	11.9	—	—	—	—	内面有文・外面無文。素地は密で灰白色、釉色は光沢のあるオリーブ色。15世紀後半～16世紀中頃。	
								内・外面無文。被熱したため、大部分が白茶けて変色している。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。細かな貫入が入る。15世紀中頃～16世紀初頭か。	
	II D	口縁部	13.0	—	—	—	—	腰折皿になると思われる。内・外面無文。素地は密で灰色、釉色は青緑色。15世紀後半～16世紀中頃。	
								— 底部 — — 5.7 外面有文。小型の皿になると思われる。高台を低くつくり、疊付けのみ釉剥ぎする。内底に圓線を1条めぐらせる。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。	
第33 図 ・ 國 版 18	瓶	耳	—	—	—	—	—	双耳環瓶の耳にあたる。龍をかたどっていると思われる。被熱したため器面がアバタ状を呈す。素地は密で灰色、釉色は青緑色。14世紀後半～15世紀中頃。今帰仁城跡に類例あり。	石積み3 栗石埋土
								外面胴部に2条の圓線を廻らせ、内面には唐草文を描く。貫入が細かく入り、素地は密で灰白色、釉色は淡い青緑色。14世紀後半～15世紀中頃。京の内に類例あり。	
	盤	口縁部～底部	36.8	6.5	25.6	—	—	外反口縁で内面に2条、外面に1条の圓線をめぐらせる。外面に『唐草文』を描き、また貫入が入る。被熱したため器面がざらついている。素地は密で灰白色。16世紀後半～17世紀。	
								釉の施釉状況：施釉にムラあり。貫入なし。釉の色調：青白濁色。素地の色調：灰白色。密度：細。混入物：微細粒子。	
	白磁	皿	口縁部	13.4	—	—	—	施釉状況：外底露胎。貫入なし。釉の色調：白濁色。素地の色調：灰白色。密度：細。混入物：微細粒子。	
								外反口縁で内面に2条、外面に1条の圓線をめぐらせる。外面に『唐草文』を描き、また貫入が入る。被熱したため器面がざらついている。素地は密で灰白色。16世紀後半～17世紀。	
181 182	染付 タイ産 褐釉 陶器	碗 壺形	II b	口縁部	14.4	—	—	釉の色調：黒褐色。素地の色調：赤灰色。密度：やや粗。混入物：白色粒子、雲母。ロクロは、時計回りか。	石積み3 埋土



第34図 石積み遺構 出土遺物（2）

第12表 石積み構造出土遺物一覧（2）

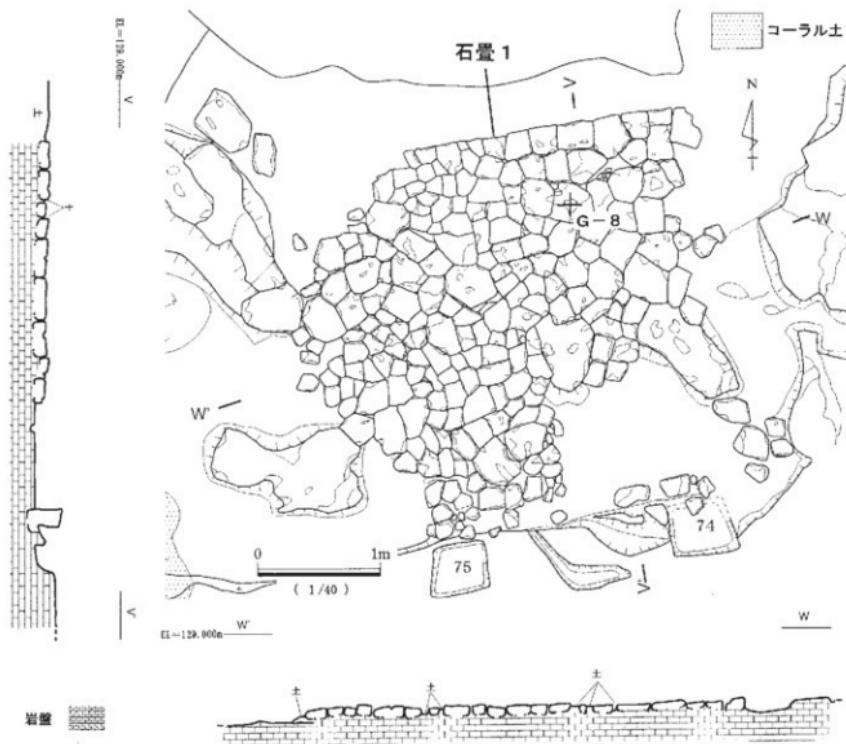
単位：cm

部品番号 図版番号	種類	器種	分類/書体	残存 部位	口径	器高	底径	概観事項	出土地
183 184 185 186	黒釉 陶器	碗	—	口縁部～ 胸部	—	—	—	口縁部は折り返しが見られるがあまり強調はされていない。口唇部は尖り、胸部は膨らみを有しながら底部へ移行する。素地はやや軟質で淡黄橙色を呈する。粒子は細かく、黒色の微粒子が混じて混入する。気泡が多く見られる。光沢を有する暗褐色の釉を薄く施す。	石積み3 栗石埋土
								口縁部は折り返しが見られるがあまり強調はされていない。口唇部は尖り、胸部は若干、膨らみを有しながら底部へ移行する。素地は灰白色で硬く焼き締められている。粒子は細かく、白色粗砂の鳴きが混入する。気泡が細かに見られる。光沢を有する黒褐色の釉を薄く施す。	
								口縁部は折り返しが見られるがあまり強調はされていない。口唇部は丸みを帯び、胸部はやや膨らみを有しながら底部へ移行する。素地は灰白色で硬く焼き締められている。粒子は細かく、黒色粗砂の鳴きが混入する。気泡が細かに見られる。光沢を有する黒褐色の釉を薄く施す。	
								口縁部は厚まら門口に面した個体に肥厚する。口唇部は丸みを帯びる。素地はやや軟質で浅黄色を呈する。粒子は細かく、気泡が僅かに見られる。光沢を有する暗褐色の釉を薄く施す。内底面には大粒の白色粗砂が付着する。黒褐色の釉を全体的に薄く施す。	
187 188	—	胸部～ 底部	—	5.0	—	—	—	高台の斜面は浅く、高台部を水没・削み、内底面は丸みを有しながら平坦になる。底面は丸く、特に断台部が多く見られる。素地は灰白色で硬く焼き締められている。粒子は細かく、大粒の気泡が多く見られる。白、黒色の粗砂が混入する。光沢を有する暗褐色の釉を薄く施す。内底面には大粒の白色粗砂が付着する。	石積み3 栗石内
								内外面共、口縁部直下に鉄化された唐草文が施される。具頭部は丸んだ青色と藍色との2種類が見られる。内外面共に粗い貫入が見られる。	
189 190	本土産磁器 —	三？	染付	底部	—	—	—	釉の色調：青灰色、測地の色調：灰白色。密度：やや粗。文様の構図不明。肥前。18C。	石積み1 栗石埋土
191 192 193	沖縄産 無釉 陶器	碗	I A-a III B I A-a 分類ナシ	口縁部 底部 胸部～ 底部 口縁部～ 底部	8.7 — — 11.0 21.0	— — — 11.2	— — — —	直口縁資料。外器面の口線上端部に細かい貫入が密に見られる灰釉を全体に施す。	石積み3 栗石埋土
								灰釉を单擱した後に内底面は蛇の目釉剥ぎを施し、豊付から外底面まで剥離する。	
								灰釉單擱けの外器面に白土象嵌で二重輪廻や葉文を施す。豊付のみ灰釉が施されている。	
								耳を縦に貼付する「ゆるいアンダーガーミ」、口縁内面で掌まり、口唇部を手平にする。頭筋から開きながら腰部にいたる。黒釉は台面中まで施し、口唇部および豊付の釉を搔き取る。高台や外底面に粗砂が付着する。	
194 195	アカムヌー 火炉	—	胸部	—	—	—	—	色調：内は桜、焼成：良。密度：細。混入物：赤色砂粒、白色粗砂粒、黒色鐵砂粒、雲母、灰石質砂粒。白色化粧土の剥離。ロクロは剥離引手。	石積み3 栗石埋土
196	金属 製品	飾り金具	銅製品	—	—	—	—	裏面を剥離させた形になった飾り金具で裏面に付く草花彫であると思われる。鋸歯と破損が著しいため、全形を窺うことではないが、厚さは1.6mmとやや厚手となる。端部は90°に折れる。重量30.6g。	石積み3 栗石底
197		鍾	銅製品	—	—	—	—	前面がやや弓形に僅かに屈曲する。端部は面取りされず、丸く収める。孔径は4.6mm、闊4.26mm、横4.7mm、厚みは3.5mm、重量6.59gとなる。	石積み3 栗石内
198		元口口寶	篆書	—	—	—	—	初跨年：1086年。元祐通寶。縁は1枚縁。外径24.9mm、内径20.5mm、孔幅6.6mm、最大錢厚1.4mm、重量3.40g。	石積み3 栗石底
199		政和通寶	真書	—	—	—	—	初跨年：1111年。篆文および輪が明顯。外径24.8mm、内径20.6mm、孔幅5.7mm、最大錢厚1.5mm、重量3.98g。	石積み3 栗石内
200	載貨	紹熙元寶	真書	—	—	—	—	初跨年：1190年。篆文も輪も明顯。孔郭に4カ所の抉りを入れる。背下「四」。外径24.6mm、内径19.4mm、孔幅6.0mm、最大錢厚1.3mm、重量3.20g。	石積み3 栗石内
201		洪口口寶	真書	—	—	—	—	初跨年：1268年。洪武通寶。一部の錢文は不鮮明だが、輪は明顯。背上に「浙」。外径24.8mm、内径19.7mm、孔幅5.6mm、最大錢厚1.3mm、重量3.65g。	石積み3 栗石埋土
202		—	完形	—	—	—	—	高さ2.2mm、最大径3.5mm、孔径1.5mm、重量0.06g。材質：ガラス。色調：水色。表面に螺旋状の筋が明顯に観察できる。	石積み3 栗土
203		連管	—	沖縄産無釉 陶器	雁首	—	—	高さ2.1mm、最大径3.7mm、孔径1.4mm、重量0.05g。材質：ガラス。色調：水色。表面に螺旋状の筋が明顯に観察できる。	石積み3 栗石埋土
204 205	金屬 製品	小玉	—	—	—	—	—	多面的な作形になっている。外径19mm、内径10mm、高さ18mm、残存長軸40mm、残存重量12.5g。	石積み3 栗石埋土
206 207			粒状銅滓	—	—	—	—	形状は至る球状を呈している。幅5.8mm、重量0.32g。	石積み3 栗石埋土
208 209	金屬 製品	粒状銅滓	—	—	—	—	—	形状は至る球状を呈している。幅6.2mm、重量0.58g。	石積み4 栗石埋土

第9節 石壘遺構と遺物

石壘1

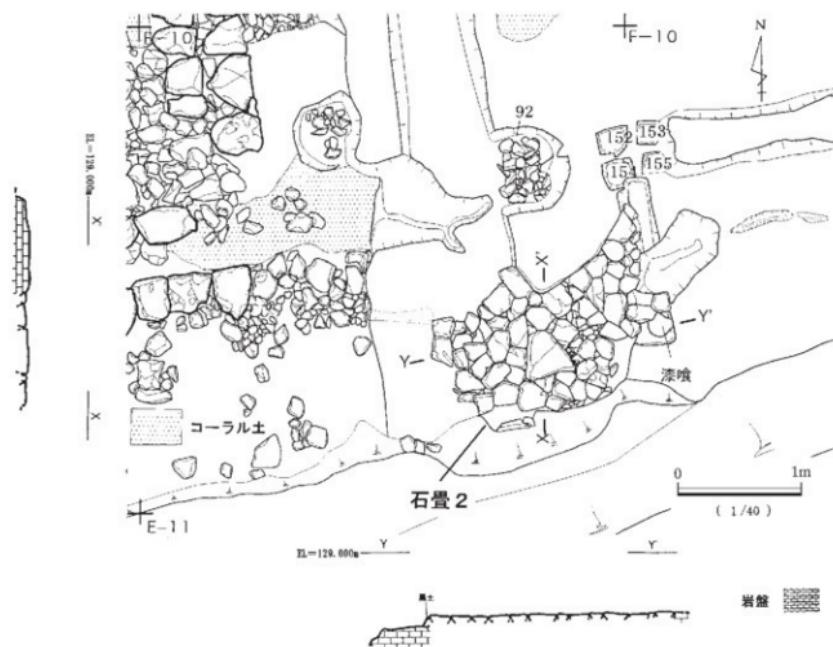
切り石で構成された石壘道で、南北幅3.2m。F・G-7・8グリッドに位置し、東西は後世の搅乱によって破壊を受けている。切り石の大きさは区々で、上面は少し磨耗しており、下部は岩盤直上に据えられている。上面はほぼ水平でEL=128.400～128.420mとなっている。西側は岩盤が露頭しており、石壘面に合わせて水平に削平している。北端の縁石は東西面に合わせて加工しており、南端は露頭した岩盤に摺り付く形で加工が成されている。



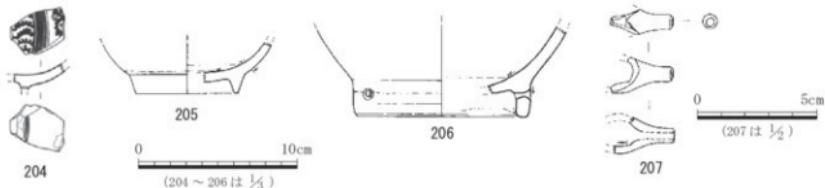
第35図 石壘1 平面図及び断面図

石壘2

E-10グリッドに位置する。切り石で構成された石壘道で、周辺の破壊が著しいため原状を把握することが困難である。露頭している岩盤も上面を削平し、石壘の一部として利用している。上面は概ねEL=128.500mに合わせている。上面から約10cm下部には削平された岩盤が確認でき、その上部に大量に炭が混入する粘質土層があり、さらにその上面に石壘を構成する切り石を据えている。戦前の古写真に見られる二階殿前の石壘に比定できる。



第36図 石疊 2 平面図及び断面図



第37図 石疊遺構 出土遺物

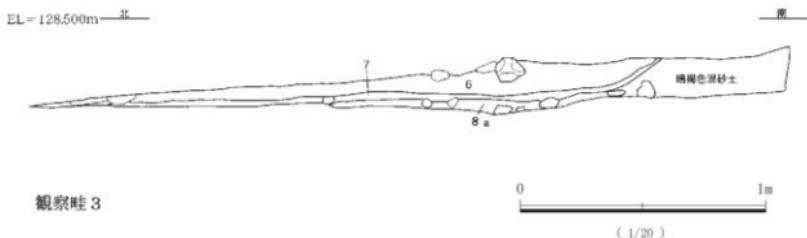
第13表 石疊遺構出土遺物一覧

単位: cm

掲図番号 図版番号	種類	器種	分類	残存部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
第37 図 ・ 図版 20	204	染付	Ⅲ	—	底部	—	—	高台脇には2条の圓線を廻らせ、内底には『波文?』を描く。内面 胴部の文様構成は不明。素地は密で白色。16世紀中頃～17世紀前半。	石疊 2 下 明褐色土
	205	沖縄産 施釉陶器	碗	Ⅲ A	底部	—	—	内底面は蛇の目釉剥ぎ。外器面は高台まで鉄釉が施釉されておらず 露胎する。	
	206	鉢	IV a	底部	—	—	10.8	外器面、内器面とともに灰釉が施されるが、内底面は釉剥ぎがなされ る。外器面においては、疊付から高台外側途中まで釉剥ぎがなされ ており、それ以外の外底面などは灰釉が施釉される。高台には内側 と外側から約5.2mm穿孔される。	石疊 2 下 暗褐色土
	207	煙管	—	—	吸口	—	—	沖縄産施釉陶器。灰釉が外面に施される。吸口外径6mm、内径4 mm、残存長軸26mm、残存重量1.5g。	石疊 1 内

第10節 集石遺構と遺物

B・C-4～6グリッドに位置し、南北約8m×東西約4mの範囲に石灰岩の小礫を敷き詰めている。場所によって粗密が窺われ、輪郭も明瞭でない。南北に岩盤が露頭し、その間に赤土が堆積し、更にその上面に小礫を敷いているのが確認された。南北に見られる岩盤の外側は琉大造成層によって搅乱を受けていることから、僅かに岩盤間のみ残存しているといった状況である。集石に混じって大量の高麗系瓦、大和系瓦、獸骨片が見られ、僅かに陶器や土器、金属製品、錢貨が確認される。出土遺物から14世紀後半～15世紀前半頃に位置付けることができる。因みに、南北に露頭している岩盤の上面は平坦に、はづられているのが確認された。

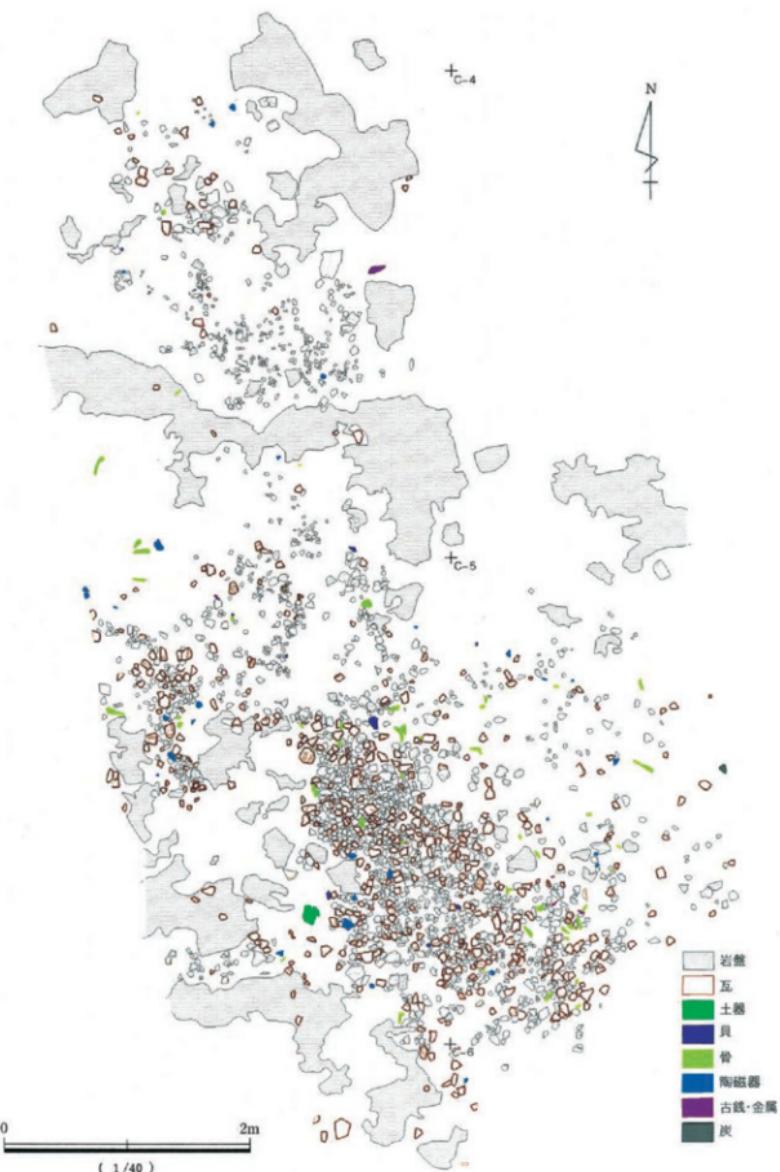


観察畦 3			
層序	色調	土質・混入物	備考
6	明褐色土	粘質土	
7	淡黄色土	コーラル層	層番号はC-5-D-5南壁土層図と対応。
8a	オリーブ黒色粘質土	粘質で、炭・灰瓦・骨を含む。	

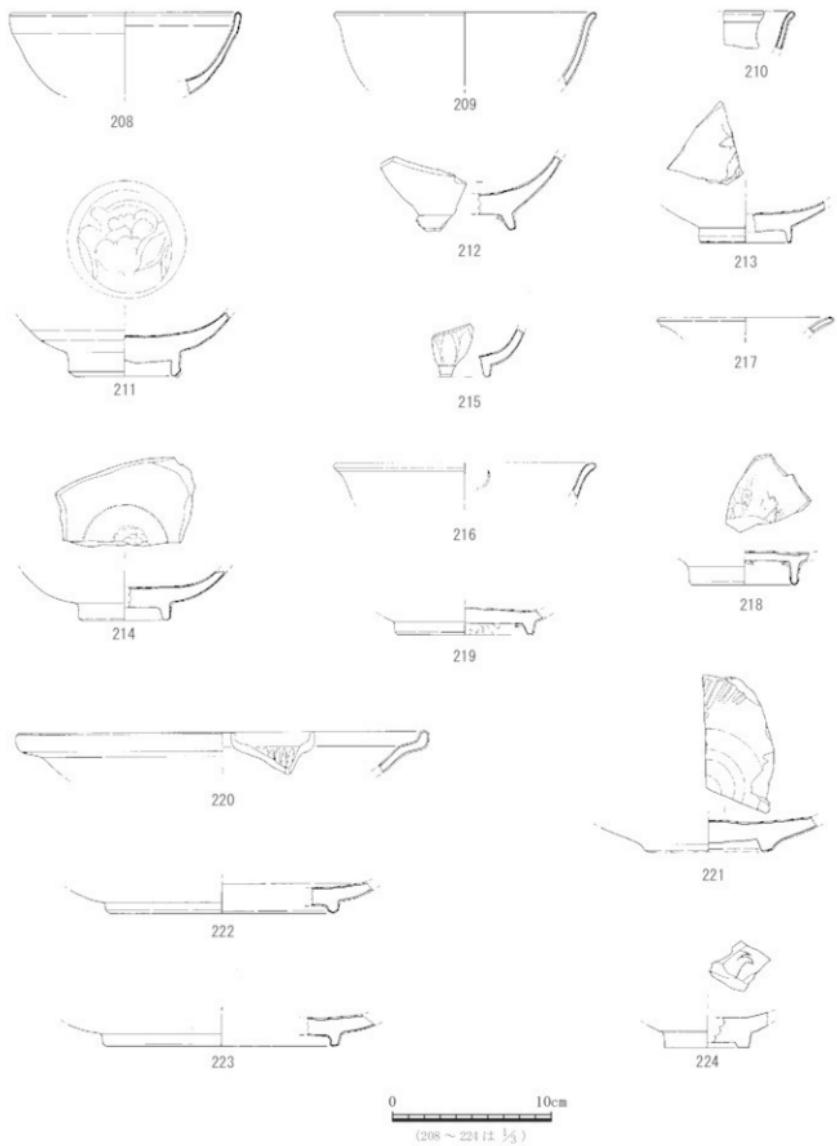
第38図 集石遺構 土層図



第39図 集石造構 小グリット設定及びコーラルの範囲



第40図 集石遺構 平面図

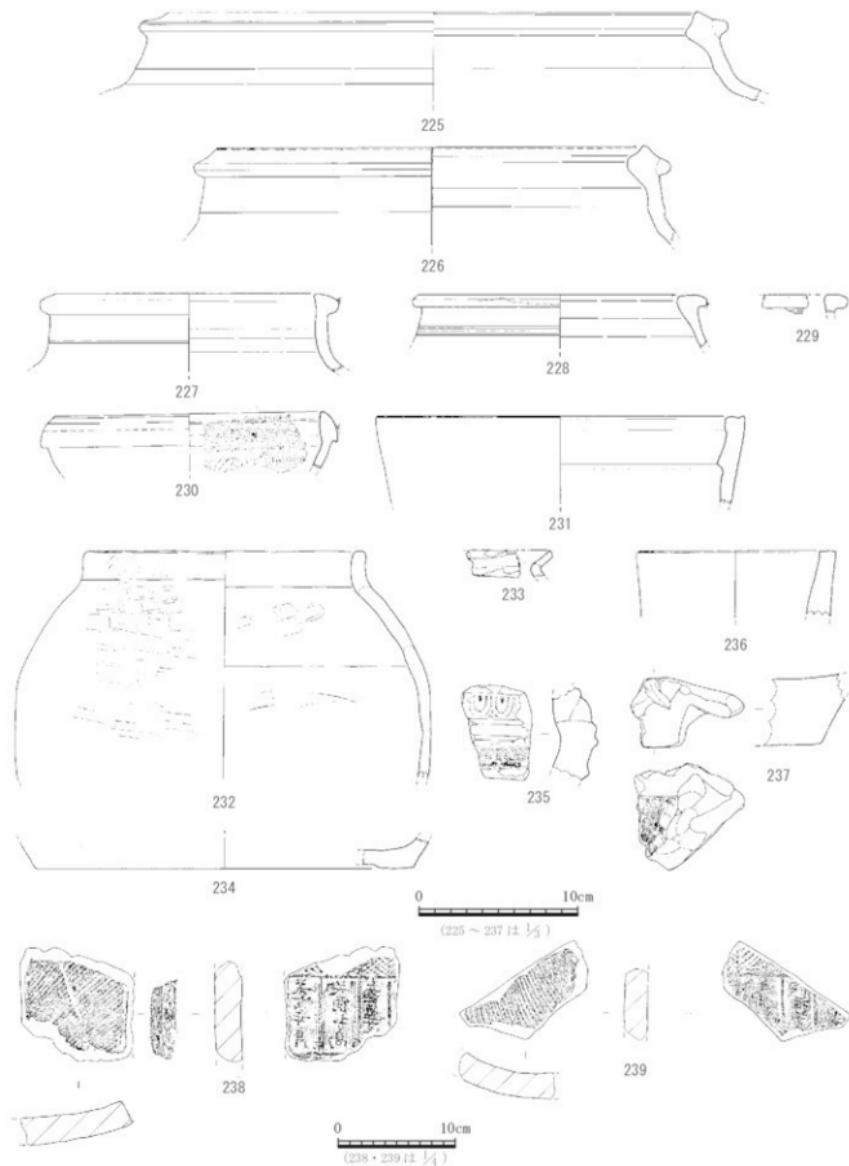


第41図 集石造構 出土遺物（1）

第14表 集石遺構出土遺物一覧（1）

単位：cm

種類 図版番号	器種	分類	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
208	碗	I F	口縁部 ～胴部	14.5	—	—	内・外面無文。口唇を丸くおさめる。被熱のためか表面はアバタ状を呈する。素地は密で灰色、釉は比較的薄く、釉色は鈍い灰黄緑色。15世紀前半～15世紀中頃。	B-4-D
209				16.4	—	—	内・外面無文。素地は密で灰色、釉色は鈍い青緑色。表面に大きく貫入が入る。14世紀後半～15世紀中頃。	B-5-A
210				—	—	—	内・外面無文。素地は密で灰色、釉色は鈍い黄緑色。14世紀後半～15世紀中頃。	C-5-C
211		II	底部	—	—	6.4	大型の碗。高台は高めで厚みを持つ。内底に印花文を施す。外底は無釉。素地は暗灰色、釉色は鈍い青緑色。細かな貫入が入る。14世紀後半～15世紀初頭。	B-5-D
212				—	—	—	内・外面無文。高台は低めで高台内側まで施釉。胴部の張りは弱い。素地は密で灰色、釉色は黄緑色。大きく貫入が入る。14世紀後半～15世紀中頃。	
213				—	—	5.7	内・外面無文。高台は薄く、高台半ばから外底にかけて無釉。内底に印花文。素地は灰色、釉色は透明感のある青緑色。15世紀中頃～15世紀後半。	
214				—	—	5.8	内・外面無文。内底に圓線を1条めぐらせる。疊付けから外底にかけて無釉。素地は密で暗灰色、釉色は鈍い黄緑色。15世紀前半～15世紀中頃。	B-4-C
215				—	—	—	外面に片切ぎりによる無錫蓮弁文を描く。高台は低く、疊付けが丸く作られている。素地は密で灰白色、釉色は淡青緑色。細かな貫入が入る。14世紀後半～15世紀中頃。	C-5-C
青磁 図・図版 20	皿	II C	口縁部	16.4	—	—	内面の文様は不明、外面無文。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。14世紀後半～15世紀中頃。	C-6-A
				—	—	—	内・外面無文。器面に貫入が入る。素地が淡茶色、釉色が青緑色。14世紀後半～15世紀前半。	ピット 162内
		II D	底部	11	—	—	高台は高く、疊付けを丸つくる。外底を蛇の目釉剥ぎし、内底に印花文を施す。素地は密で灰白色、釉色は透明感のある青緑色。14世紀前半～15世紀前半。	B-5-A
				—	—	6.8	高台を台形につくり、釉は内底部をまだらに搔きとっている。素地は密で赤褐色、釉色は灰緑色。14世紀後半～15世紀中頃か。	B-5-A 10層
				—	—	8.5	内面に櫛描きで蓮弁文を描く。外面は無文。素地はやや粗く茶色、釉色は淡オリーブ色。細かな貫入が入る。15世紀前半～15世紀中頃。	B-5-D
	盤	I	口縁部	25.8	—	—	内面に丸彫りによる蓮弁文を描く。外面は無文。釉は高台外側まで施釉。高台内側の抉りがやや深く、器面に細かな貫入が入る。素地はやや粗く淡茶色、釉色はオリーブ色。15世紀前半～15世紀中頃。	B-5-A
				—	—	8	内面に丸彫りによる蓮弁文を描く。外面は無文。釉は高台外側まで施釉。高台内側の抉りがやや深く、器面に細かな貫入が入る。素地はやや粗く淡茶色、釉色はオリーブ色。15世紀前半～15世紀中頃。	B-5-A
		II	底部	—	—	14.6	内・外面無文。高台を方形につくる。器面に細かな貫入が入り、素地は密で灰色、釉薬は鈍い青灰色。	C-5-A
				—	—	14.8	内・外面無文。高台を方形につくる。素地は密で灰色、釉は鈍い青灰色。14世紀後半～15世紀中頃。	B-5-A
				—	—	5.2	施釉状況：底部下位以下露胎。貫入あり。釉の色調：白濁色。素地の色調：浅い黄橙～にぶい黄橙色。密度：粗。混入物：白色砂粒。	B-5-D
224	白磁	碗	—	底部	—	—		

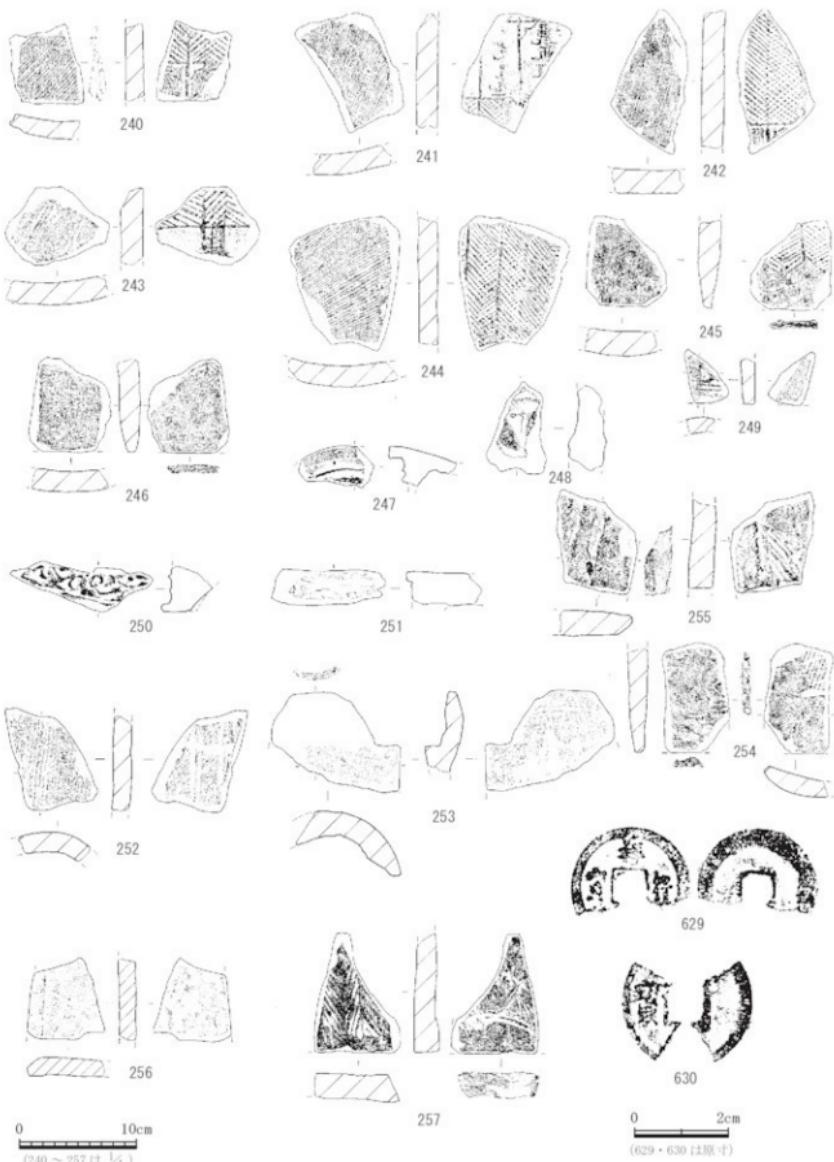


第42図 集石造構 出土遺物（2）

第15表 集石遺構出土遺物一覧（2）

単位：cm

種団番号 図版番号	種類	器種	分類	残存 部位	口径	器高	底径	総察事項	出土地
225	中国産 褐釉 陶器	I a	口縁部	36.6	—	—	軸の色調：灰褐色～暗赤褐色。素地の色調：灰黄褐色。密度：細。混入物：白色粒子、黒色砂粒。施釉は徹底されず、部分的に露胎。釉色、元は黒褐色か。	B-4-D、 B-5 摂乱	
226				29.6	—	—	軸の色調：灰褐色～褐色。素地の色調：灰黄褐色。密度：細。混入物：白色粒子、黒色砂粒。施釉は徹底されず、部分的に露胎。釉色、元は黒褐色か。	C-5-C	
227	中国産 褐釉 陶器	I b ₁	口縁部	18.7	—	—	軸の色調：オリーブ褐色。素地の色調：灰白色～灰色。密度：やや粗。混入物：白色粒子、赤褐色砂粒。ロクロ時計回り。粘土紐約1.8cm。	C-5-C	
228				18.4	—	—	軸の色調：オリーブ褐色。素地の色調：灰白色～灰色。密度：やや粗。混入物：白色粒子、黒色砂粒。ロクロ時計回りか。	B-5-A	
229				—	—	—	素地の色調：橙色。密度：やや粗。混入物：白色粒子、赤褐色砂粒。釉裏は剥がれる。	C-5-C	
230	鉢形	—	口縁部	16.8	—	—	軸の色調：黒褐色。素地の色調：橙色。密度：粗。混入物：白色粒子、赤褐色砂粒。筆による施釉。	B-5-B、 B-5-D	
231	タイ産 褐釉 陶器	不明	—	口縁部	23.0	—	—	素地の色調：橙色、灰色。密度：粗。混入物：白色粒子、黒色砂粒、赤褐色砂粒。釉裏は剥がれる。	C-5-C
232	233	グスク 土器	鉢か 鍋	—	口～胴	17.4	—	色調：橙色。焼成：良。密度：粗。混入物：赤色砂粒、黒色微砂粒、石灰質砂粒、橙色砂粒（粘板岩か）。最大胴径約26.0cm	B-5-D
234				—	口縁部	—	—	色調：橙色。焼成：良。密度：粗。混入物：赤色砂粒、黒色微砂粒、石灰質砂粒。	B-5-B
235	瓦質 土器	風炉	—	胴下部	—	—	色調：内外は灰色、断面は灰白～浅黄色。焼成：良。密度：やや粗。混入物：白色微砂粒、黒色砂粒、雲母、石英。	C-5-C	
236				—	口縁部	12.4	—	色調：内外は褐色、橙色、断面は灰色。密度：良。胎土：やや粗。混入物：黒色微砂粒、雲母、石灰質砂粒。	C-5-C
237	火炉 か 香炉	—	脚部	—	—	—	色調：灰色。焼成：良。密度：細。混入物：黒色微砂粒、雲母、石灰質砂粒。	C-5-C	
238				—	—	—			
239	高麗系 瓦	平瓦	筒部	—	表面は 褐色、 胎土中 央は灰 色。	良	「癸酉年高麗瓦匠造」銘の一部あり。分割瓦刀の切り込み二分の一。 風化が進む。器厚は最小厚19.14mm、最大幅22.97mm。	B-5-D	
239				—	灰色	良好	「癸酉年高麗瓦匠造」銘の一部あり。微細粒子が表面に付着。器厚は最小厚18.78mm、最大厚20.37mm。	C-5-C	



第43図 集石遺構 出土遺物（3）

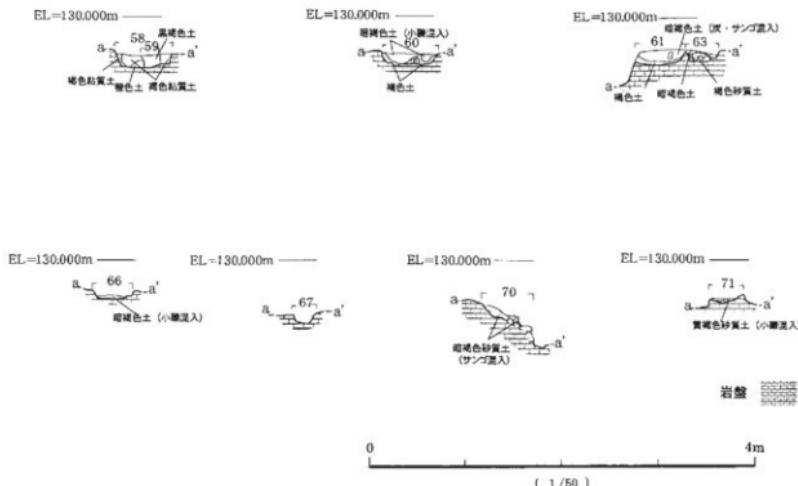
第16表 集石造構出土遺物一覧（3）

単位：cm

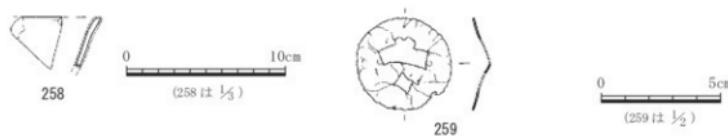
辨団番号 図版番号	造瓦 系統	種類	残存 部位	分類	色調	焼成	文様、形態、成形、保存状況など	出土地	
第43 図 版 22	高麗系瓦	平瓦	筒部	—	灰色	良好	「癸酉年高麗瓦匠造」銘の角文様一部あり。器厚は最小厚13.41mm、最大厚14.21mm。	B-5-A	
				—	灰色	良	「癸酉年高麗瓦匠造」銘の一部あり。器厚は最小厚17.41mm、最大厚18.04mm。	B-5-A	
				—	暗灰色	良好	「癸酉年高麗瓦匠造」銘の一部あり。凹面の布目が細かく明瞭に残る。器厚は最小厚16.93mm、最大厚19.83mm。	B-5-D	
				—	黒灰色	良	格子模様の一部分残る。布目、糸切痕がみられるが、風化が進み、器面が摩滅する。器厚は最小厚17.68mm、最大厚20.03mm。	C-5-C	
				—	暗灰色	良好	凸面の羽状叩き目文は明瞭。凹面に横位の細紐圧痕が認められる。器厚は最小厚14.67mm、最大厚16.51mm。	B-5-A	
		端部	—	灰色	良好	凹面の端部面に面取りが行われている。器厚は最小厚17.41mm、最大厚19.50mm。	B-4-B		
			—	灰褐色	良	凹面の端部に面取りがみられる。器面は風化し、保持が悪い。器厚は最小厚16.43mm、最大厚18.12mm。	B-5-A		
	軒丸瓦	瓦当部	—	灰色～ 灰褐色	良好	瓦当の一部分であるが珠文及び巴文の尾がみられる。外縁の残りがよく、高さが最小1cm、最大1.1cm。	B-5-B		
			—	灰色	良好	蓮弁の一部と線で繋がる珠文が確認される細片である。	B-5-B		
第43 図 版 22	丸瓦	端部	—	灰色	良好	羽状叩き文様の一部がこのる資料。凹面の端部側に面取りもみられる。最小幅8.10mm、最大幅13.12mm。	B-4-D 岩盤直上		
			軒平瓦	瓦当部	—	灰色	良好	瓦当面の一部分の破片である。唐草と中心飾りがみられる。中心飾りは5枚花弁のものであろうか。	B-5-B
					—	灰色	良好	唐草の一部分のみを残し大きく欠落した資料。剥離面に刻み痕がみられ、接合技法の一部が知られる。	B-5-A
	大和系瓦	丸瓦	玉縁部	—	灰色	良	凸面には繩目叩き痕、裏面には刺網状の紐圧痕が觀察される。紐圧痕の幅は最小2.53mm、最大幅4.62mm。	B-5-A	
				—	灰色	良好	玉縁をよく残した丸瓦破片。凸面は撫でか。著しくなされ、文様の確認が難しい。凹面には紐圧痕が明瞭にこのる。紐圧痕の幅は最小16.69mm、最大19.98mm。	C-5-C	
			端部	—	灰色	良	凹面の端部に幅は3cmの面取りがみられる。紐圧痕の幅は最小3.97mm、最大5.57mm。器面は風化し、保持が悪い。	C-5-C	
	雁振瓦	平瓦部	—	表面は褐色、胎土中央は灰色。	良好	裏面側に継縫の強い撫で痕が残り、白砂が多数付着する。側面の断面はやや丸みのある三角形を呈する。器厚は最小厚17.42mm、最大厚20.12mm。	C-5-C		
			—	表面は褐色、胎土中央は灰色。	良好	平瓦部は平坦を呈し、側面は二等分される面を残す。器厚は最小厚20.48mm、最大厚19.37mm。	B-5-A		
			—	灰色	良好	表面に羽状叩き文様が明瞭。裏面には紐圧痕が残る資料である。紐圧痕の幅は最小15.22mm、最大19.47mm。	B-5-D		
辨団番号 図版番号	種類	器種	分類/書体	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
第43 図	錢貨	祥符〇寶	真書	—	—	—	—	祥符通寶もしくは祥符元寶。初鑄年：1009年。輪および郭が不明瞭。外径24.9mm、内径19.1mm、孔幅5.91mm、最大錢厚1.2mm、残存重量2.22g。	B-5-D
		○〇〇寶	真書	—	—	—	—	「寶」のみ判読できるが、錢種は不明。最大錢厚1.2mm、残存重量1.30g。	B-5-B

第11節 G-8～J-8 柱穴群と遺物

総数19基の柱穴が確認されている。周辺は琉大造成層により改変を受けており、僅かにG-8～J-8グリッドの岩盤上面のみ現況を保っていた。岩盤掘り込みの柱穴が一部、切り合ひながら確認された。確認範囲が限られているため、その機能については言及することはできない。因みにG-8～J-8グリッドは近世の絵図等から東のアザナから延びる石積みの延長線上にあり、これらの柱穴群は近世段階には既に機能していなかったと考えられる。なお、遺物が出土している主な柱穴の断面図を第44図に示す。第18・19表には柱穴の法量ならびに出土遺物を記す。



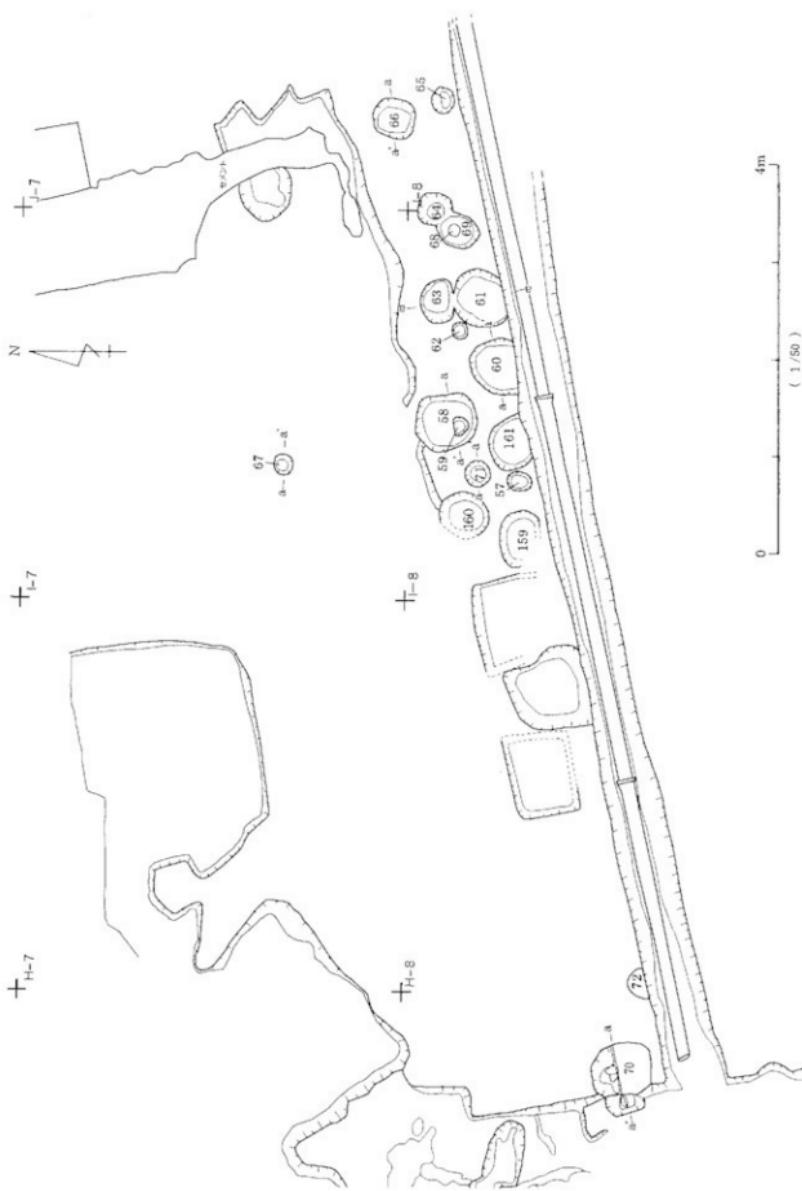
第44図 G-8～J-8 柱穴群 断面図



第45図 G-8～J-8 柱穴群 出土遺物

第17表 G-8～J-8 柱穴群出土遺物一覧

挿図番号 図版番号	種類	器種	分類	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	単位: cm 出土地
第45図・ 図版22	258	青磁	碗	I F 口縁部 ～胸部	—	—	—	内・外面無文。口唇を舌状につくる。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。14世紀後半～15世紀中頃。	ピット 60内
	259	金属 製品	不明	—	—	—	—	厚さ0.4mmと薄く、中央に方形と不整形の穴が開けられている。用途は不明。重量1.43g。	ピット 57内



第46図 G-8～J-8柱穴群 平面図

第18表 ピット出土の遺物一覧（1）

No.	法量(cm)		出土遺物
	径	深さ	
1	17	12	屋瓦1
2	32	21	掲軸陶器1 貝2
3	18	6	
4	28	30	屋瓦2 壁1
5	26	13	屋瓦1 貝1 骨1
6	30	22	掲軸陶器3 高麗系瓦1 銀貨1 石製品1 貝1
7	14	10	
8	28	26	タイ産掲軸陶器1 骨1
9	36	10	土器1 明朝系瓦1 屋瓦4 塼瓦1 銀貨2
10	24	24	タイ産掲軸陶器1 土器1 屋瓦1 貝2
11	20	22	
12	40	30	染付1 掲軸陶器2 タイ産掲軸陶器1
13	16	20	明朝系瓦1
14	12	5	掲軸陶器1 貝3
15	16	12	
16	36	48	染付2 屋瓦8 塼瓦1 貝2 骨1 壁11
17	68	18	
18	36	10	
19	40	12	
20	16	12	
21	18	46	瓦2 貝1 骨1
22	30	32	掲軸陶器5 本土産陶磁器1 沖縄産施釉陶器1 土器2 屋瓦6 貝4 骨1
23	16	8	壁1
24	18	7	貝1 壁3
25	33	8	本土産陶磁器1 金属製品1
26	12	6	掲軸陶器1 明朝系瓦1
27	20	6	
28	14	7	
29	20	7	屋瓦1 貝4
30	20	6	金属製品1
31	30	7	掲軸陶器1 金属製品1
32	10	20	屋瓦5 貝1
33	18	16	屋瓦1
34	40	24	土器1 明朝系瓦4 銀貨1 貝4 石1
35	36	38	青磁1 屋瓦3 金属製品1 銀貨1 貝3 石3
36	20	6	金属製品1 貝1
37	16	20	掲軸陶器1 土器1 屋瓦1
38	22	4	屋瓦3 貝1
39	30	38	明朝系瓦1 屋瓦6 銀貨2 貝1
40	44	38	明朝系瓦4
41	22	11	屋瓦2
42	30	12	掲軸陶器1 沖縄産無軸陶器1 屋瓦1 金属製品1
43	20	25	
44	30	44	掲軸陶器1 金属製品2 貝1 骨1 石1
46	22	32	
47	18	7	
48	20	50	屋瓦6 銀貨3 貝2
49	40	18	掲軸陶器1 沖縄産施釉陶器1 土器2 高麗系瓦1 大和系瓦1 金属製品1 銀貨2 貝2
51	30	32	掲軸陶器3 本土産陶磁器1 屋瓦1 銀貨1 石2
52	16	13	
53	20	10	貝1

No.	法量(cm)		出土遺物
	径	深さ	
54	22	6	土器1 金属製品1
55	12	12	沖縄産無軸陶器1
56	12	13	
57	20	13	金属製品1
58	58	17	
59	18	12	本土産陶磁器1 屋瓦1
60	58	17	青磁1 掲軸陶器1 大和系瓦1 屋瓦2 貝2
61	54	36	沖縄産無軸陶器1 土器2 屋瓦3 石1
62	16	5.0	
63	24	6.0	
64	36	18	
65	34	18	
66	42	8.0	掲軸陶器1 沖縄産無軸陶器1 貝3
67	22	14	染付1
68	14	8.0	
69	23	10	
70	74	10	染付1 掲軸陶器1 本土産陶磁器1 屋瓦1 貝1
71	30	13	沖縄産施釉陶器1 土器1 屋瓦8 金属製品1 貝4 骨1
72	30	18	
74	60	11	
75	53	4.5	
76	59	5	
77	73	10	
78	87	8.5	
79	69	4	掲軸陶器2 屋瓦1 金属製品3 銀貨1 貝1 石5
80	72	12.5	掲軸陶器2 沖縄産施釉陶器3 明朝系瓦1 屋瓦6 壁1 石2
81	38	5	掲軸陶器1 沖縄産施釉陶器5 土器3 屋瓦1 金属製品1
82	81	13	白磁1 掲軸陶器1 本土産陶磁器1 沖縄産施釉陶器1 土器1 屋瓦3 金属製品1 貝1 石7 壁2
83	70	10	色繪1 沖縄産施釉陶器1 土器1 明朝系瓦1 屋瓦6 壁9
84	46	—	本土産陶磁器1 沖縄産施釉陶器1 明朝系瓦1 屋瓦7 金属製品1
85	86	15	瑠璃輪1 掲軸陶器19 沖縄産施釉陶器1 沖縄産無軸陶器2 土器1 明朝系瓦9 屋瓦17 金属製品3 貝5
86	65	10	本土産陶磁器1 片縫施釉陶器1 土器1 屋瓦1 金属製品1 銀貨1 円盤状製品1 骨1
87	74	1	沖縄産施釉陶器2 金属製品1 貝1 骨1
88	90	14	
89	36	—	
90	67	9	
92	75	19	白磁1 掲軸陶器2 明朝系瓦2
94	55	10	
95	26.5	22	
96	28	—	
97	46	16	沖縄産施釉陶器2 屋瓦6 貝2 石1
98	28	20	屋瓦3 貝3
99	16	4	沖縄産施釉陶器1
100	32	8	屋瓦3 金属製品1 貝1 石1
101	16	7	
102	14	3	
103	16	16	沖縄産施釉陶器1 土器1
104	18	17	本土産陶磁器1 屋瓦2 金属製品1
105	14	18	土器1 明朝系瓦1 屋瓦2 骨2
106	36	4	黒釉陶器1 本土産陶磁器1 金属製品1 貝1 骨3
107	14	6	土器1 明朝系瓦1 屋瓦3 骨1 石1 壁1

第19表 ピット出土の遺物一覧（2）

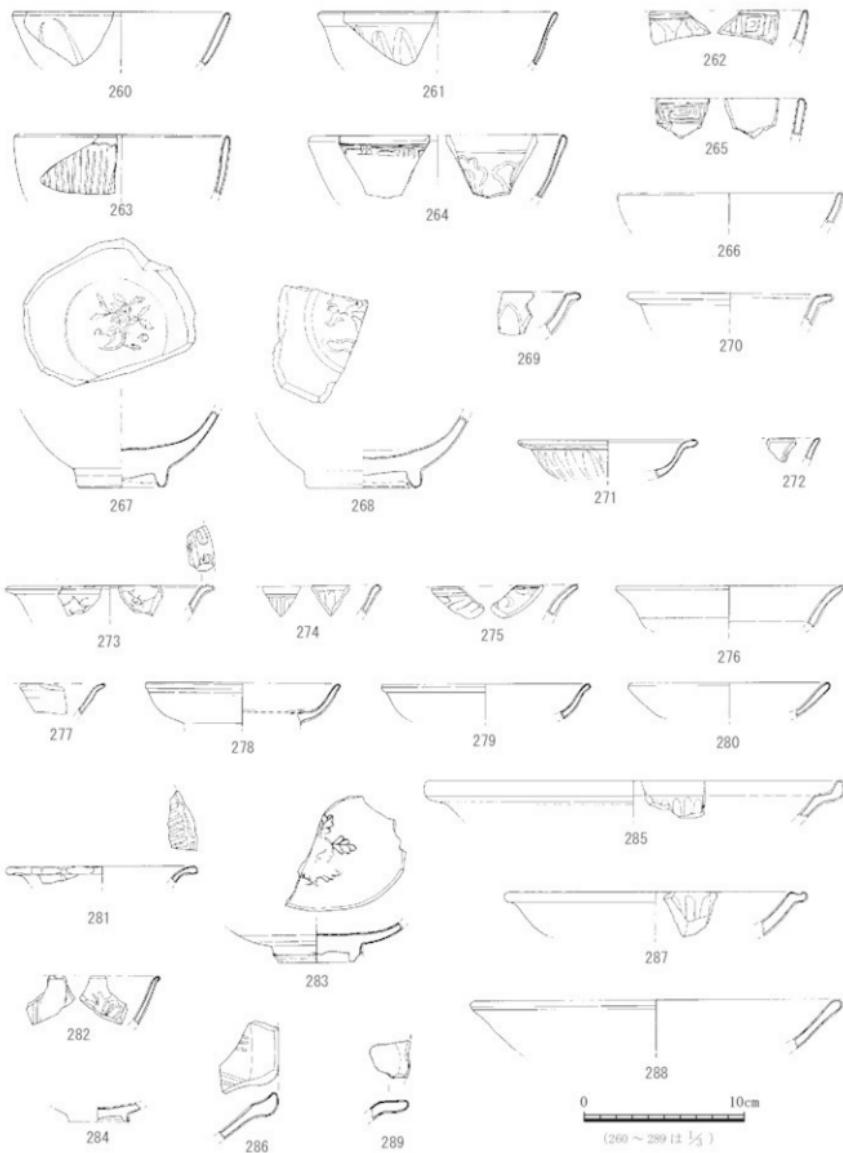
No.	法量(cm)		出土遺物	法量(cm)	径 深さ	出土遺物
	径	深さ				
108	16	24		136	26	6
109	28	16		137	22	29
110	22	20	屋瓦1 金属製品1 銀貨1	138	18	18
111	32	12	明朝系瓦1 屋瓦2 石1	139	16	22
112	32	16		140	30	17
113	18	10		141	32	8
114	26	28		142	12	12
115	24	20	銀貨2 石1	144	41	14
116	32	22	明朝系瓦1 塵瓦1 銀貨3	145	18	7
117	24	18	屋瓦3	146	13	20
118	12	10		147	36	33
119	46	18	高麗系瓦2 銀貨3	148	8	8
120	16	9		149	40	7
121	12	4		150	34	44
123	9	4		152	25	4
124	18	9	銀貨1	153	22	2
125	30	27	沖縄産無軸陶器2 明朝系瓦1 屋瓦9 塼瓦4 金属製品2 貝1	154	—	27
126	78	27	沖縄産無軸陶器2 明朝系瓦2 屋瓦7 塼瓦6 銀貨1	155	21.5	2
127	12	6		156	11	7
128	12	7		157	12	11
129	20	6	屋瓦1	158	10	8
130	25	11		159	46	8
131	16	5	金属製品1	160	44	12
132	99	13	青磁1 タイ産楕円陶器2 土器1 明朝系瓦1 大和系瓦1 屋瓦15 金属製品1 銀貨12 貝6 骨1	161	52	14
134	20	7	屋瓦1	162	22	—
135	26	11	明朝系瓦2 屋瓦23 銀貨2 石製品1			青磁1 白磁1 貝2 骨1

第 12 節 沖縄神社参道（巻首図版3）

D-4グリッドからコンクリート造りの床面が検出された。平成12年度の御内原地区発掘調査時に同様の構が検出されており（沖縄県立埋蔵文化財センター2006）今回、検出されたコンクリート造りの床面はその西側延長上にあることが確認された。このことからコンクリート造りの床面は昭和8（1933）年に設置された県社、沖縄神社の本殿と首里城正殿とを結ぶ参道であることが判明した。幅3.8m、コンクリートの下部は細粒砂岩、更にその下部には小礫を全面的に敷いているといった状況も平成12年度の御内原地区発掘調査時に検出されたコンクリート造りの床面と全く同様であった。なお、沖縄戦時の破壊を受けているために残存状況は良好ではなく、調査区の西半部は流大造成層により、全く痕跡を止めていない。

第 13 節 撃乱層等からの出土遺物

本項では近代以降の撃乱層から出土した遺物を紹介する。主に残存率が高い遺物、もしくは特徴的な遺物を取り上げて報告する。また砲弾片やガラス瓶、戦後の遺物に関しては貞の都合で割愛した。

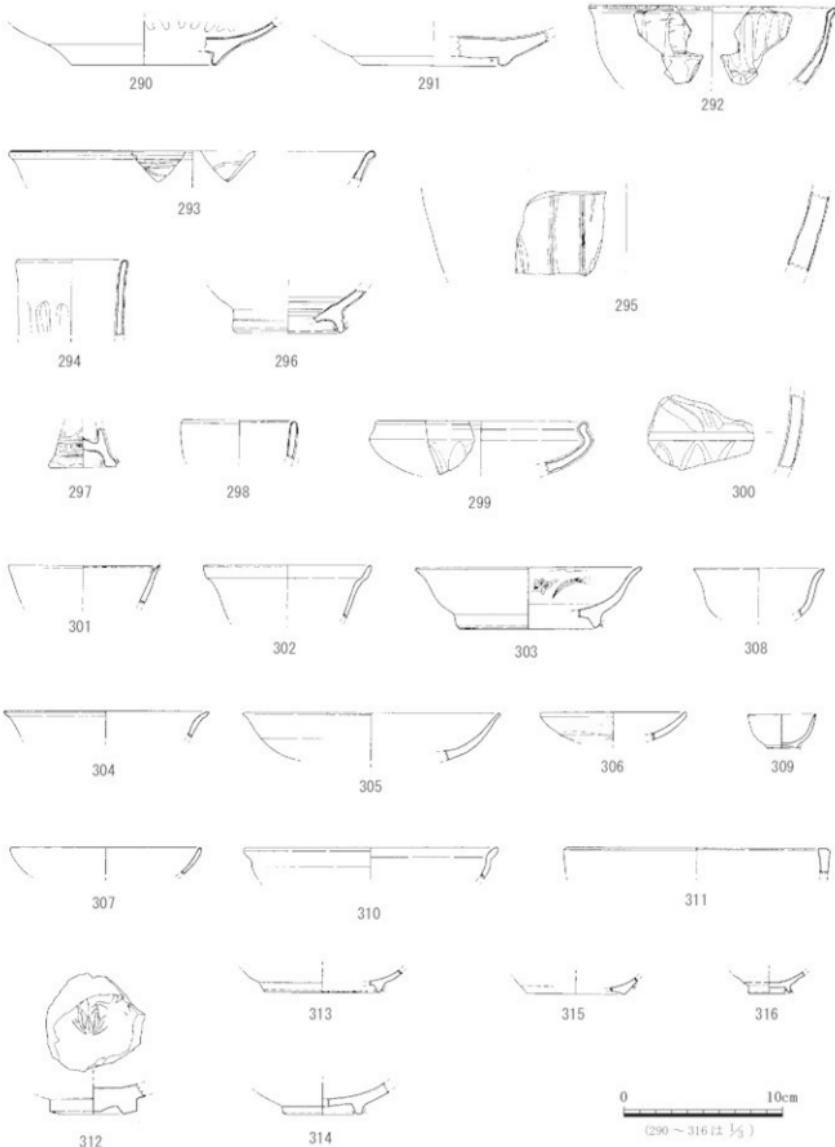


第47図 搅乱層等の出土遺物（1）

第20表 撫乱層等出土遺物一覧 (1)

単位：cm

掲番号 図版番号	種類	器種	分類	残存 部位	口径	器高	底径	総察事項	出土地
260	碗	I B	口縁部 ～胴部		13.6	—	—	外面に幅の広い無鉢蓮弁文を描く。内面は無文。口唇を丸くおさめる。素地は密で灰色、釉色は水色。14世紀後半～15世紀前半。	D-10 撫乱
261					15.0	—	—	外面に幅のせい無鉢蓮弁文を描く。外先が明瞭。口唇がやや扁平で厚壁する。素地はやや粗く灰色、釉色は純い灰黃褐色。14世紀後半～15世紀前半。	撫乱
262					—	—	—	外面に二重の圓線をめぐらし、弁先を接する形で明瞭な無鉢蓮弁文を描く。内面には1条の圓線をめぐらし、輪刻文帯を描く。口唇を丸くおさめる。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。二重線落ち込みに類例品が見られる。14世紀後半～15世紀前半。	D-10 撫乱
263		I C			13.2	—	—	口唇を丸くおさめる。外面に蓮瓣弁文を描くが弁先と弁開は離れている。素地は密で灰色、釉色は青緑色。15世紀後半～16世紀。	H-8 撫乱
264					16.2	—	—	外面には蟹押しの雷文帯、内面は牡丹唐草を描く。口唇は丸くおさめる。素地は密で灰色、釉色は純い青緑色。14世紀後半～15世紀前半。	撫乱
265					—	—	—	外面には蟹押しの雷文帯。内面は無文。口唇は丸くおさめる。素地はやや粗く灰黄色、釉色は淡褐色。15世紀。	赤褐色 貼質土
266	高台	I F	口縁部		14.0	—	—	内・外面無文。口唇を丸くおさめる。素地は密で灰色、釉は純い淡青灰色。15世紀中頃～16世紀初頭。	B-4 撫乱
267					—	—	5.2	外面は無文、内底に1条の圓線と印花文を施す。器形は胴部のふくらみが弱く、疊付けから外底にかけて無輪。素地は密で灰色、釉色は純い青緑色。細かな貫入がある。15世紀前半～15世紀中頃。	C-4 撫乱
268					—	—	6.8	外面は無文、内底に印花文を施す。高台は造「ハ」の字状に開く。高台内面半ばから外底にかけて無輪。素地は密で灰白色、釉色は純い青緑色。細かな貫入がある。15世紀前半～15世紀中頃。	撫乱
269		I A	口縁部 ～胴部		—	—	—	外面に蓮瓣文を描く。釉はやく掛かり、貫入がある。素地は密で灰色、釉色は青緑色。15世紀中頃。	—
270					—	—	—	内・外面無文。素地はやや粗く淡茶色、釉色は純い青緑色。釉が比較的厚く掛かっていい。15世紀中頃～16世紀前半。	C-7 撫乱
271			II A	口縁部 ～胴部	11.2	—	—	外面に蓮瓣文を幅の狭い無鉢蓮弁文を描く。素地は密で灰白色、釉色は黄緑色。15世紀中頃。	D-10 撫乱
272					—	—	—	外面に丸彫りで無鉢蓮弁文を描く。口唇を舌状につくる。大きく貫入がある。素地は密で淡灰色、釉色は淡い青緑色。	撫乱
273	青磁	II B	口縁部 ～胴部		13.0	—	—	内・外の結構構造不明。口唇部に墨文帯を描く。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。14世紀後半～15世紀前半。	D-10 撫乱
274					—	—	—	内・外とも墨書きの蓮瓣文を描く。素地は密で灰色、釉色は青緑色。	撫乱
275					—	—	—	八角足になる可能性あり。外面は牡丹唐草、内面は唐草文になると思われる。素地は密で灰色、釉色は光沢のある青緑色。14世紀後半～15世紀前半。	D-10 撫乱
276		III	口縁部		14.2	—	—	脚折足になるとと思われる。内・外面無文。素地は密で灰色。釉は透明感のある淡緑色。貫入がある。15世紀後半～16世紀中頃。	撫乱
277					—	—	—	内・外面無文。素地は密で灰色、釉色は薄い青緑色。15世紀中頃～16世紀初頭。	赤褐色 貼質土
278					12.2	—	—	内・外面無文。胴部に丸みをもつ器形。素地はやや粗く灰白色、釉色は淡緑色。細かな貫入がある。15世紀中頃～15世紀後半。	D-6 撫乱
279	白磁	IV	口縁部		13.0	—	—	内・外面無文。胴部に丸みをもつ器形。素地はやや粗く淡茶色、釉色は灰色。細かな貫入がある。15世紀中頃～15世紀後半。	—
280					12.6	—	—	内・外面無文。口唇部を舌状につくる。釉は薄く貫入がある。素地はやや粗く淡茶色を呈す。釉は純い青緑色。15世紀前半～15世紀中頃。	—
281					12.0	—	—	桜花皿。外面有文、内面に丸彫りで蓮弁文を描く。素地はやや粗く灰白色、釉色は黄味がかった青緑色。細かな貫入がある。14世紀後半～15世紀前半。	—
282		V	口縁部		—	—	—	桜花皿。外面有文、内面に丸彫りで蓮弁文を描く。素地は密で灰色、釉色は薄い灰緑色。細かな貫入がある。	D-4 撫乱
283					—	—	4.7	外面は無文。高台に強い削りが入っている。高台半ばから外底まで無輪。内底に印花文を施す。素地は密で灰色、釉は純い灰緑色。	B-6 撫乱
284					—	—	3.7	内・外とも無文。小型の皿。高台を低くつくり、疊付から外底まで無輪。素地はやや粗く灰色、釉色は淡緑色。細かな貫入がある。14世紀後半～15世紀中頃。	C-6 撫乱
285	盤	I	口縁部		26.2	—	—	内面に丸彫りで蓮弁文を描く。外面は無文。素地は密で灰色、釉色は光沢のある暗緑色。15世紀前半～15世紀中頃。	—
286					—	—	—	外面は無文、内面に2条もしくは3条一组で丸彫りの蓮弁文を描く。外面の一部は被熱のため黒く変色し、アバゲ状を呈する。素地はやや粗く淡茶色、釉色は淡緑色。貫入がある。15世紀前半～15世紀中頃。	—
287					18.9	—	—	外面は無文、内面に丸彫りで蓮弁文を描く。素地は密で灰色、釉色は青緑色。	—
288					23.0	—	—	内・外面無文。口唇部が肥厚している。釉は比較的薄く、貫入が細かく入る。素地は密で灰色、釉色は純い青緑色。15世紀前半～15世紀中頃。	—
289		II	IV		—	—	—	内・外面無文。素地は密で淡茶色、釉色は純い灰黄色。14世紀後半～15世紀中頃。	—

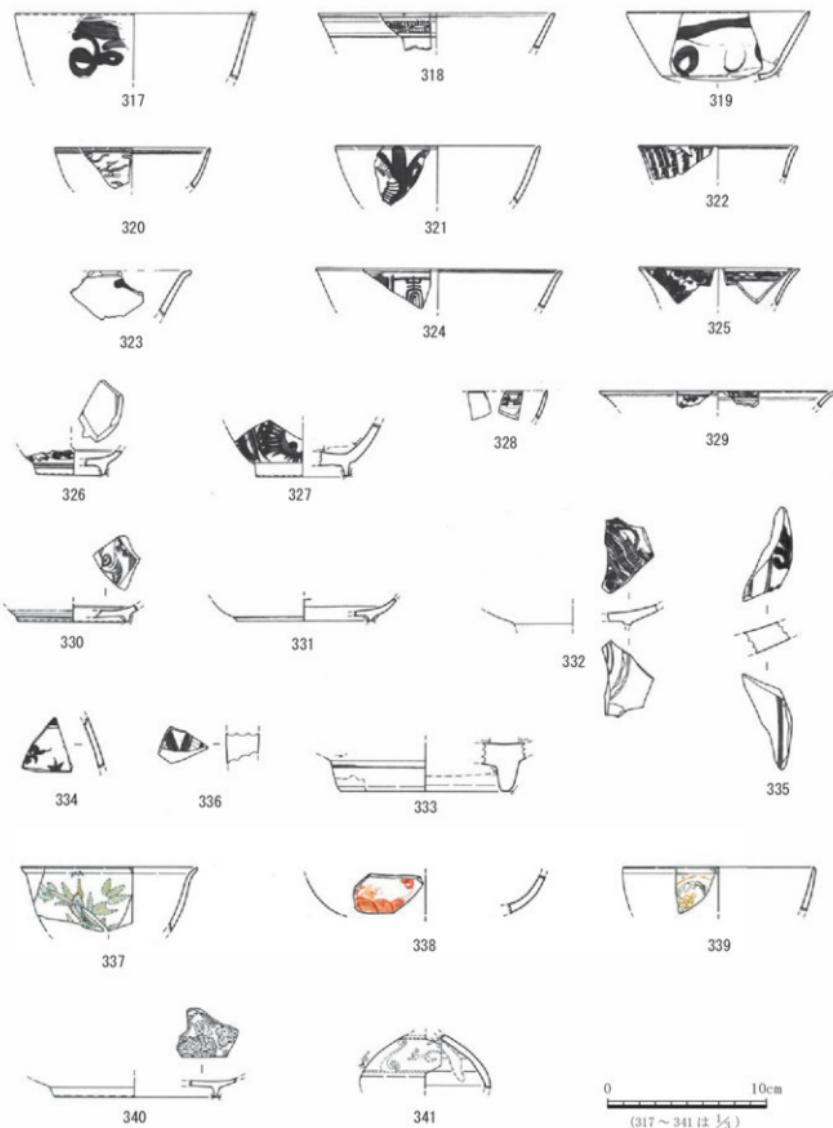


第48図 撓乱層等の出土遺物（2）

第21表 摂乱層等出土遺物一覧（2）

単位：cm

種類	器種	分類	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地	
青磁	盤	—	底部	—	—	9.2	外面は無文、内面に丸彫りによる蓮弁文を描く。疊付けを丸くつくり、素地は密で赤褐色、釉薬はオリーブ色。14世紀後半～15世紀中頃。	B-5 擾乱	
				—	—	9.0	内・外面無文。釉は高台内側まで施釉。器面に大きく貫入が入る。素地は密で灰色、釉色は青緑色。14世紀後半～15世紀中頃。	擾乱	
	鉢	—	口縁部～胴部	15.8	—	—	穂花鉢。口唇を浅く窪ませている。内・外面とも型起こしの蓮弁文。素地はやや粗く灰白色、釉色は透明感のある青緑色。	D-10 擾乱	
			口縁部	23	—	—	外反口縁で小片のため内外の文様構成は不明。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。	擾乱	
	瓶	—	口縁部	7.1	—	—	直口口縁。型押して外面に蓮弁文を施す。器面に細かな貫入が入る。素地は密で灰色、釉色は青緑色。	擾乱	
			胴部	—	—	—	大型の瓶。外面に片切り彫りで蓮弁文を描く。器面に細かな貫入が入る。素地は淡茶色で釉色は純い青緑色。		
	底部	—	—	—	—	7.0	高台が台形を呈し、疊付けのみ釉剥ぎする。素地が灰白色、釉色は青緑色。	D-10 擾乱	
	袋物	—	脚部	—	—	4.2	外面に雷文帯を描き、疊付けのみ釉剥ぎする。素地は密で灰白色、釉色は青緑色。14世紀後半～15世紀前半。	擾乱	
	香炉	—	口縁部	7.4	—	—	直口口縁。素地は密で淡茶色、釉色は青緑色。	擾乱	
	束口碗	—	口縁部	13.4	—	—	外面に蓮弁文。釉は比較的厚く、素地は密で灰色、釉色は純い青緑色。元代。	D-10 擾乱	
白磁	酒会壺 or大瓶	—	胴部	—	—	—	外面に圓線を2条廻らし、圓線下部には片切り彫りで幅広の蓮弁文を描く。圓線上部の文様構成は不明。素地は密で灰白色、釉は透明感のある青緑色。	A-2 擾乱	
				—	—	—	—	—	
	碗	—	口縁部	—	9.4	—	施釉状況：口唇露胎。貫入なし。釉の色調：青白色(白色に近い)。素地の色調：灰白色。密度：細。混入物：微細粒子。	擾乱	
				—	10.6	—	施釉状況：口唇露胎。貫入なし。釉の色調：青白色(白色に近い)。素地の色調：灰白色。密度：細。混入物：微細粒子。		
	皿	—	口～底	14.2	3.8	9.0	施釉状況：疊付け・外底露胎。貫入なし。釉の色調：青白濁色。素地の色調：灰白色。密度：細。混入物：黒色微砂粒。	D-10 擾乱	
				—	—	12.9	施釉状況：貫入なし。釉の色調：青白濁色。素地の色調：灰白色。密度：細。混入物：微細粒子。	D-10 擾乱	
	皿	—	口縁部	—	—	16.3	施釉状況：貫入なし。釉の色調：青白色。素地の色調：灰白色。密度：細。混入物：微細粒子。	擾乱	
				—	—	9.2	施釉状況：体部下位以下露胎。貫入あり。釉の色調：白濁色。素地の色調：淡黄色。密度：細。混入物：黑色微砂粒。	B-7 擾乱	
	杯	—	口縁部	—	—	12.0	施釉状況：貫入あり。釉の色調：灰白色。素地の色調：淡黄色。密度：細。混入物：微細粒子。	B-3 擾乱	
				—	—	8.2	施釉状況：貫入あり。釉の色調：白濁色。素地の色調：淡黄色。密度：細。混入物：黑色微砂粒。	B-3 擾乱	
	杯	—	口～底	—	4.2	2.1	1.9	施釉状況：疊付け・外底露胎。貫入なし。釉の色調：青白色(白色に近い)。素地の色調：灰白色。密度：やや粗。混入物：黑色砂粒、微細粒子。	擾乱
				—	—	—	—	—	
	鉢	—	口縁部	—	—	16.0	施釉状況：貫入なし。釉の色調：青白濁色。素地の色調：灰白色。密度：やや粗。混入物：黑色微砂粒。	擾乱	
				—	—	16.8	施釉状況：貫入あり。釉の色調：青白色(白色に近い)。素地の色調：灰白色。密度：やや粗。混入物：黑色微砂粒。	D-10 擾乱	
	碗	—	底部	—	—	5.5	施釉状況：体部下位以下露胎。貫入あり。釉の色調：白濁色。素地の色調：灰白色。密度：粗。混入物：黑色・白色砂粒、茶褐色粒。	擾乱	
				—	—	7.2	施釉状況：疊付け露胎。貫入なし。釉の色調：白濁色。素地の色調：灰白色。密度：細。混入物：微細粒子。		
	皿	—	底部	—	—	5.0	施釉状況：疊付け露胎。貫入なし。釉の色調：白濁色。素地の色調：淡黄色。密度：粗。混入物：黑色微砂粒、白色砂粒。	擾乱	
				—	—	6.2	施釉状況：疊付け露胎。貫入なし。釉の色調：青白色(白色に近い)。素地の色調：灰白色。密度：細。混入物：微細粒子。		
	杯	—	—	—	—	2.6	施釉状況：疊付け露胎。貫入なし。釉の色調：青白色(白色に近い)。素地の色調：灰白色。密度：細。混入物：微細粒子。	—	

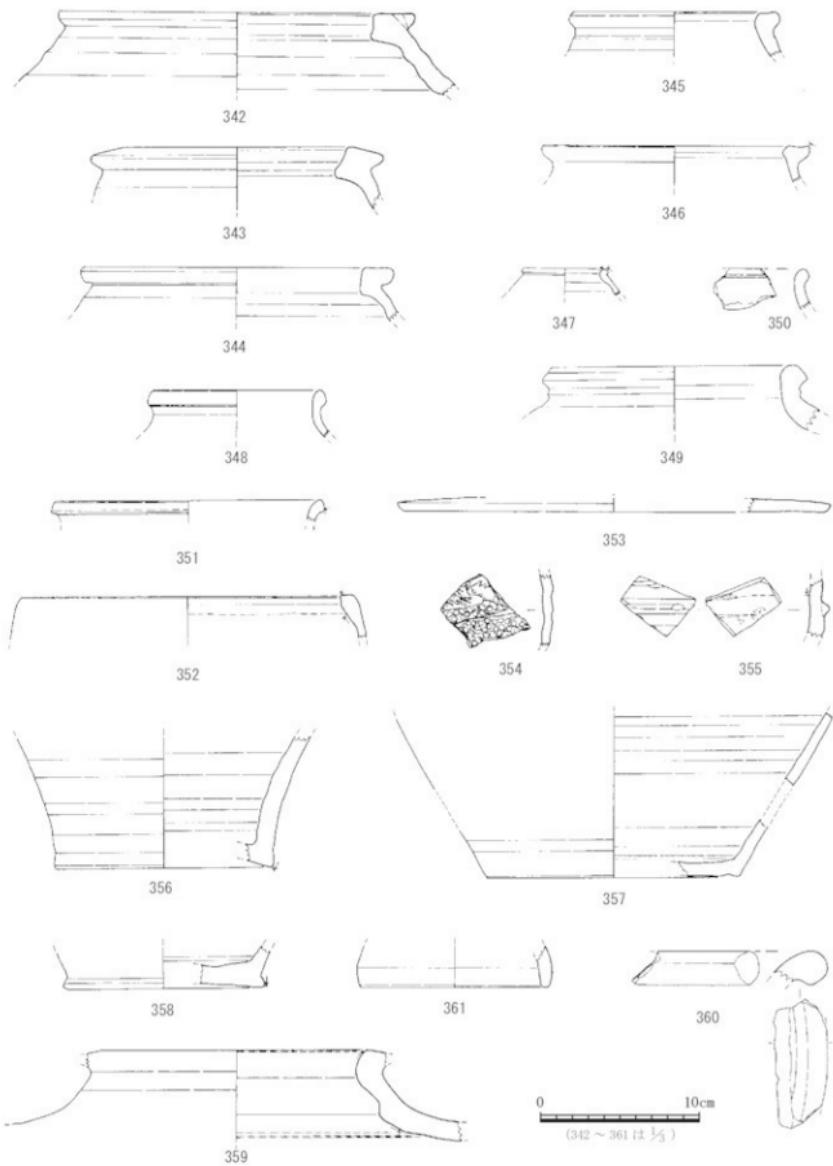


第49図 搅乱層等の出土遺物（3）

第22表 搾乱層等出土遺物一覧（3）

単位：cm

御図番号 図版番号	種類	器種	分類	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
317	碗	口縁部	I	-	14.8	-	-	外面に簡略化された『草文』を描く。素地は淡褐色。漳州窯系、17世紀～18世紀。	撲乱
318				-	14.8	-	-	内面に1条圓線をめぐらせ、外面は二重縁内に簡略化された『波頭文』を描く。素地は密で淡茶色。眞須の發色は鈍い。16世紀後半～17世紀。	C-5 撲乱
319				-	11.4	-	-	腰部からストレートに立ち上がる器形。口唇を舌状につくる。外面に簡略化された『草文』を描く。素地は密で灰白色。漳州窯系、17世紀～18世紀。	撲乱
320				-	9.7	-	-	小型の碗。内・外面上に2条の圓線を廻らせ、外面には『鳳凰唐草文』を描く。素地は密で灰白色。今帰仁城跡に類似あり。14世紀後半～15世紀前半。	
321				-	12.8	-	-	口唇部はわざかに肥厚する。外面の文様構成は不明。素地はやや粗且つ淡灰色。福建・廣東系、17世紀～18世紀。	
322		II	口縁部	-	10.0	-	-	外面に『梵字文』を充填し、内面に圓線を廻らせる。素地は密で白色。景德鎮窯系が、18世紀末～19世紀初頭。	G-9 撲乱
323				-	-	-	-	口唇がやや肥厚する。外面の文様構成は不明で、器面に貫入がある。素地はやや粗且つ淡茶色。福建・廣東系、17世紀～18世紀。	
324				-	15.4	-	-	内・外面上に圓線を一条廻らせ、外面には方形の区画をもじって『寿文』を描く。素地は密で灰白色。德化窯系、18世紀～19世紀前半。	B-3 撲乱
325				-	10.0	-	-	外面に簡略化された『花(蓮草)唐草文』、内面口唇部には二重界線直上に『花唐草文』を廻らせる。素地は密で白色。景德鎮窯系、16世紀後半～17世紀。	黒色炭渦 じり土
326	染付	底部	I	-	-	4.2	-	小型の碗。豊付けのみ輪郭はぎする。高台脇から高台半ばまで三重界線を割らせ、胴側には『花唐草文』を描く。内底には二重界線を廻らせる。素地は密で白色。福建・廣東系。	D-10 撲乱
327				-	-	5.8	-	高台は豊付けで輪刺ぎ、内底は蛇の目輪刺ぎする。腰部からストレートに立ち上がる器形。外面に草花文を描く。素地は密で白色。漳州窯系、17世紀～18世紀。	撲乱
328				-	-	-	-	外面部口縁部に圓線を1条、内面に四方襷文を描く。素地は密で灰白色。	C-6 撲乱
329				-	14.8	-	-	外面上に『寶草唐草文』、内面に四方襷文を描く。素地は密で灰白色。16世紀末～17世紀初頭。	撲乱
330				-	-	6.8	-	高台が低く、豊付けのみかけ無釉。高台外面に1条、高台脇から腰部にかけて2条圓線を廻らせる。内底には『玉取獅子文』を描く。15世紀後半～16世紀。	
331	皿	底部	II	-	8.4	-	-	型成形の皿。豊付けのみ輪刺ぎする。内底に1条圓線をめぐらせる。内面の文様構成は不明。素地は密で白色。釉は乳白色。16世紀初頭～17世紀末。	C-5 撲乱
332				-	-	-	-	見込みに『山水文』を描く。内底に圓線を2条めぐらせる。素地は密で白色。	
333				-	10.6	-	-	内底は蛇の目輪刺ぎ、高台は豊付けから高台半ばまで輪刺ぎする。器面にはこまかに貫入があり、高台外面に圓線を1条めぐらせる。素地は密で灰白色。漳州窯系、17世紀～18世紀。	撲乱
334				-	-	-	-	外面に『牡丹唐草文』を描く。素地は密で灰白色、釉は淡青灰色。	撲乱
335				-	-	-	-	見込みの部分にある。内面に『草花文』を描き、外面には1条圓線をめぐらせる。素地は密で灰白色。	B-1 撲乱
336	色絵	瓶	皿	-	-	-	-	小片のため外面の文様構成は不明。素地は灰色。	撲乱
337				外反	口縁部 ～副部	11.0	-	口縁部は緩やかに外反し、端部は肥厚する。型造り。上繪はほとんど剥落しており、僅かに斑状の草文が描かれているのが解る。胎土は密で白色微粒子が僅かに混入する。透明釉を内外面に薄く施している。	撲乱
338				-	胸部	-	-	全形は口縁部がやや外反し、高台の高い徳化窯系の碗と想定される。朱で蓮瓣文が、その上面に黄と朱で花文が描かれ。上繪は比較的良好に残っている。胎土は密で黒色微粒子が僅かに混入する。灰白色の透明釉を内外面に薄く施している。	
339				直口	口縁部 ～副部	11.8	-	胴部には丸文と共に梅花文が描かれている。上繪の剥落は著しい。胎土は密で赤色粗粒子が僅かに、そして黒色微粒子が混入する。透明釉を内外面に薄く施している。	
340				-	底部	-	10.0	薄手の皿の底部資料。高台は低く、やや内傾する。内底面に松葉文が描かれ。外面にも花文が描かれるが、上繪の剥落は著しいため詳細は不明である。胎土は密で黑色微粒子が僅かに混入する。透明釉を内外面に薄く施しているが、高台下部のみ露胎となる。	F-8 撲乱
341				-	胸部	-	-	小形瓶の胸上部資料。2条の圓線とその間に花文と蕨手状の文様が描かれ。上繪の剥落は著しい。内外面ともに回転糖纏成形が確認できる。胎土は密で混入物は見られない。やや青味がかった透明釉を外面のみに薄く施す。内面には釉垂れが見られる。	D-10 撲乱

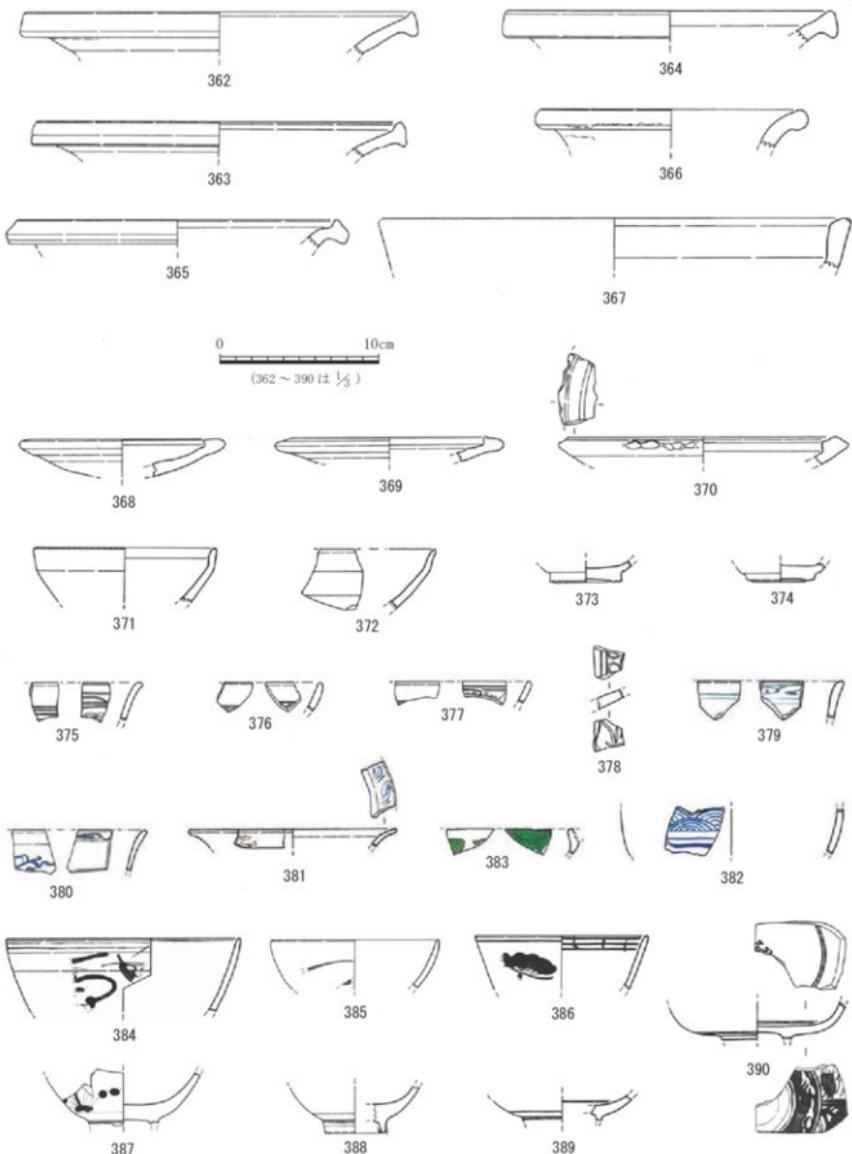


第50図 搅乱層等の出土遺物（4）

第23表 搅乱層等出土遺物一覧 (4)

単位: cm

測定番号 図版番号	種類	器種	分類	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
	中国産褐釉陶器	壺形	I a		22.2	—	—	釉の色調: 灰褐色～褐色。素地の色調: 灰褐色。密度: やや粗。混入物: 白色粒子、黒色砂粒、赤褐色砂粒。粘土紐約1.1cm。	擾乱
342					18.3	—	—	釉の色調: 黑褐色。素地の色調: 灰黄褐色。密度: やや粗。混入物: 白色粒子、黒色砂粒。露胎部なし。	
343					19.6	—	—	釉の色調: 黑褐色。素地の色調: 灰黄褐色。密度: やや粗。混入物: 白色粒子、黒色砂粒。施釉は徹底されず部分的に露胎。貫入あり。	
344					12.5	—	—	釉の色調: 不明。素地の色調: にぶい黄橙色。密度: 細。混入物: 白色粒子。ロクロ時計回りか。釉薬は剥がれる。	
345		壺形	口縁部		16.5	—	—	釉の色調: 不明。素地の色調: 褐灰色。密度: やや粗。混入物: 白色粒子、黒色砂粒、赤褐色砂粒。ロクロ時計回り。釉薬は剥がれる。	C-3 擾乱
346					5.4	—	—	釉の色調: 黑褐色。素地の色調: 橙色。密度: 細。混入物: 白色粒子、赤褐色砂粒。口唇上面、磨耗。	
347		II	I b a		10.4	—	—	釉の色調: 黑褐色。素地の色調: 褐灰色。密度: やや粗。混入物: 白色粒子。ロクロ時計回りか。	B-5 擾乱
348					15.2	—	—	釉の色調: 不明。素地の色調: にぶい赤褐色。密度: 粗。混入物: 白色粒子、黒色砂粒。ロクロ時計回りか。釉薬は剥がれる。	
349					—	—	—	釉の色調: 不明。素地の色調: 橙色。密度: やや粗。混入物: 白色粒子。釉薬は剥がれる。	B-3 不明
350					16.6	—	—	釉の色調: 不明。素地の色調: 灰褐色。密度: 粗。混入物: 白色粒子、赤褐色砂粒。釉薬は剥がれる。	
351	鉢形	口縁部	II		20.6	—	—	釉の色調: 不明。素地の色調: 橙色。密度: やや粗。混入物: 白色粒子、黒色砂粒。釉薬は剥がれる。	擾乱
352					—	—	—	釉の色調: 暗オリーブ褐色。素地の色調: にぶい橙色。密度: やや粗。混入物: 白色粒子、赤褐色砂粒。ロクロ時計回り。内面露胎。	
353		蓋	端部	端径 27.0	—	—	—	釉の色調: オリーブ褐色。素地の色調: 橙色。密度: やや粗。混入物: 白色粒子、黒色砂粒、赤褐色砂粒。粘土紐約1.3cm。	
354					—	—	—	釉の色調: にぶい黄褐。素地の色調: 灰黄褐色。密度: やや粗。混入物: 白色粒子、黒色砂粒、赤褐色砂粒。突帯貼付。何らかの印刻施す。	C-3 擾乱
355					—	—	—	釉の色調: 黑褐色、オリーブ褐色。素地の色調: 灰黄褐色。密度: やや粗。混入物: 白色粒子、黒色砂粒、赤褐色砂粒。細かい貫入する。	
356	壺形	I a	底部		13.4	—	—	釉の色調: 不明。素地の色調: 赤橙色、褐灰色。密度: やや粗。混入物: 白色粒子、黒色砂粒。破片全体露胎。	擾乱
357					15.8	—	—	釉の色調: 灰褐色～暗赤褐色。素地の色調: 橙色、褐灰色。密度: 粗。混入物: 白色粒子、黒色砂粒。外底露胎。	
358		鉢形	底部		12.6	—	—	釉の色調: 黑褐色。素地の色調: 灰黄褐色。密度: 細。混入物: 白色粒子、黒色砂粒。粘土紐約1.2cm。	
359	タイ産褐釉陶器	壺形	I	口縁部	—	—	—	釉の色調: 灰褐色。素地の色調: 褐灰色。密度: 粗。混入物: 白色粒子、黒色砂粒。露胎部なし。	不明
360		鉢形	—	口縁部	—	—	—	釉の色調: 無釉。素地の色調: 灰黄色～浅黄色。密度: やや粗。混入物: 白色粒子、赤褐色砂粒、雲母。肥厚部、斜位の調整痕。	
361		器台?	—	脚?	端部 径11.8	—	—	釉の色調: オリーブ褐?。素地の色調: 褐灰色。密度: 粗。混入物: 白色粒子、黒色砂粒。ロクロ反時計回りか。釉薬一部残る。	C-3 擾乱

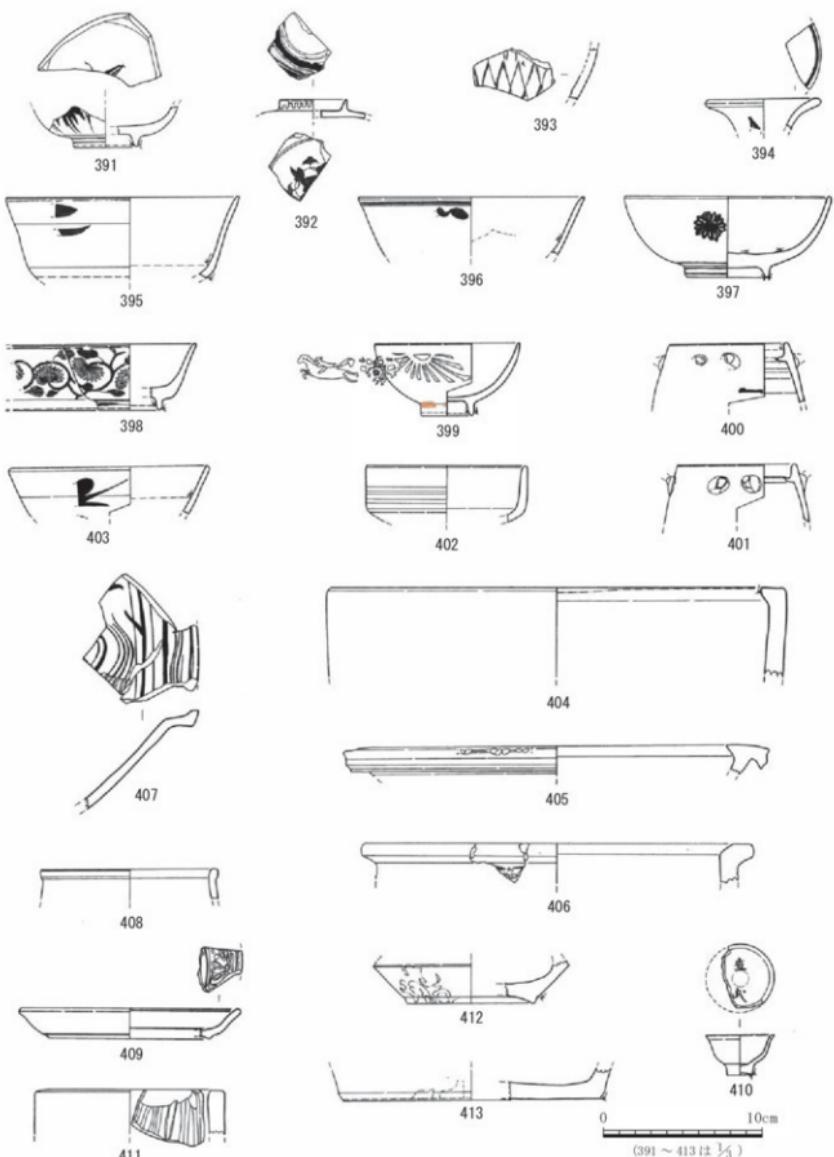


第51図 搅乱層等の出土遺物（5）

第24表 搅乱層等出土遺物一覧（5）

単位：cm

種類	器種	分類	残存部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
ダイ座 等輪陶器	口縁部	II a ₁	口縁部	24.0	—	—	釉の色調：黒褐色。素地の色調：赤灰色、黄灰色。密度：やや粗。混入物：白色粒子、黑色砂粒。口縁内部約1.1cm幅で露胎。	複乱
				22.6	—	—	釉の色調：黒褐色。素地の色調：褐灰色。密度：やや粗。混入物：白色粒子、黑色砂粒、赤褐色砂粒。釉裏一部残る。口縁端部外縁回頭變る。	D-5 複乱
				20.0	—	—	釉の色調：黒褐色。素地の色調：灰色。密度：粗。混入物：白色粒子、黑色砂粒。口縁端部上の突起は微弱。	複乱
		II a ₂	口縁部	20.0	—	—	釉の色調：黒褐色。素地の色調：赤灰色。密度：細。混入物：白色粒子、黑色砂粒、赤褐色砂粒。口縁端部外縁は丸味を帯びて突出する。	
		II b		16.2	—	—	釉の色調：黒褐色。素地の色調：赤灰色、黄灰色。密度：やや粗。混入物：白色粒子。釉裏は光沢を持つ。	
	不明	—	口縁部	29.4	—	—	釉の色調：不明。素地の色調：褐色、灰色。密度：粗。混入物：白色粒子、黑色砂粒、赤褐色砂粒。基盤の保存状態悪く、釉裏は剥がれる。	D-10 複乱
	半縁	II C		—	—	—	色調：内外一様。断面一灰色。焼成：良。密度：粗。混入物：赤色粒子、黑色微砂粒、石英。ロクロの回転方向不明。回転ハラ削り→回転ナダ。ロクロ成形後による調整痕見。端部径約12.8cm。	B-5 複乱
黒輪陶器	蓋	II C	端部片	—	—	—	色調：外面一褐色、内面・断面に赤い褐色。焼成：良。密度：粗。混入物：赤色粒子、黑色微砂粒、石英は微量。ロクロは反時計回りか。回転ヘラ削り→回転ナダ。ロクロ成形後にによる調整痕見。端部径約14.2cm。	複乱
				—	—	—	色調：外面一褐色。内面一黄灰至灰白色（内外まだらに褐色）。焼成：良。密度：粗。混入物：赤色微砂粒、石英、雲母。ロクロの回転方向不明。回転ハラ削り→回転ナダ。回転速度遅く。端部を設置し成形。被状成形は難。端部径約18.0cm。	
	I b	—	口縁部～胴部	11.4	—	—	口縁部は折り返しで構成される。口唇部は丸みを帯び、器壁は全体的に厚い。脚部は直線形状に底部へ移行する。外面は2次的に火を受けている。素地は軟質で淡褐色を呈する。粒子は細かく、白色の微粒子が混入する。気泡が見られる。唯褐色の釉薬であるが全体的に火を受けているため本来の釉色は薄くなっている。	C-9 複乱
第51回 ・回版	瓶	—	口縁部～胴部	—	—	—	口縁部は折り返しで見られるが、強調はされていない。口唇部は尖り、脚部は膨らみを有しながら底部へ移行する。素地は灰褐色で硬く燒き締められているが、一部褐色となるため全体的に底が見られる。粒子は細かく、白、褐色の微粒子が混入する。気泡が僅かに見られる。鋭い光沢を有する黒褐色の釉を薄く施す。器表に白い粗砂が付する。	複乱
				—	—	—	高台の内側りは浅く、高台際を水平に削る。内底面は丸みを有しながら平坦になる。高台の成形は底面で粘土塊と大穀の白色粗砂が付着する。素地は灰褐色を呈する。粒は粗大で黒褐色が多く混入する。光沢を有する暗褐色の釉を薄く施す。	
373	瓶	—	底部	—	—	4.4	高台の内側りは浅く、高台際を水平に削る。内底面は丸みを有しながら平坦になる。高台の成形は底面で粘土塊と大穀の白色粗砂が付着する。素地は灰褐色を呈する。粒は粗大で黒褐色が多く混入する。光沢を有する暗褐色の釉を薄く施す。	B-3 複乱
				—	—	4.2	高台の内側りは浅く、高台際を水平に削る。内底面は丸みを有しながら平坦になる。高台の成形は底面で外底面に凹むが見られる。脚部の立ち上がりは急である。素地は灰褐色で粗い燒き締められている。粒子は細かく、白色粗砂が多く混入する。気泡が見られる。鋭い光沢を有する黒褐色の釉を薄く施す。	D-10 複乱
27	韓平 鳥足輪陶器	不明	口縁部	—	—	—	外反する口縁部資料で内面には雲文帶と雲龍文の一部か。外面には横縞が3条見られる。黄緑色の釉を内外面に施し、象嵌はやや不明瞭となる。内外面共に細かい貢入が見られる。印押としては粉青色器に近い。	C-3 複乱
375				—	—	—	やや器壁が厚く、外反の口縁部で、器壁は全体的に火を受けているのが見える。内面口縁部直下に簡略化された雲文帶が、外面には圓縞と筆書きの草花文が見られる。透明感が底され、直頸と薄く膨らむ。内面共に細かい貢入が見られる。	D-5 複乱
376				—	—	—	やや内傾する口縁部資料で内外面共に見られる。象嵌は明瞭であるが小片のため、文様構成は不明である。緑灰色の釉を内外面に施す。	B-3 複乱
377				—	—	—	内傾する口縁部資料で内外面共に文様が見られるが全体構成は不明。緑灰色の釉を内外面に施す。	D-10 複乱
378		瓶	胸部	—	—	—	脚部資料で内面には横縞と連續した丸文、外面には花文も一部が見られる。黄緑色の釉を内外面に施し、象嵌はやや不明瞭となる。印象としては粉青色器に近い。	複乱
379	ペトナイト 等輪染付	瓶	口縁部	—	—	—	やや器壁が厚く、外反の口縁部で、器壁は全体的に火を受けているのが見える。内面口縁部直下に簡略化された雲文帶、外面には圓縞と筆書きの草花文が見られる。透明感が底され、直頸と薄く膨らむ。内面共に細かい貢入が見られる。	D-10 複乱
380				—	—	—	外反の口縁部。内面には簡略化された筆書きの雲文帶が見られる。外面は無文。器面は凸凹が顕著に見られ、一部、施釉されていない部分が見られる。胎上は密で大きい気泡が見られる。	複乱
381				13.0	—	—	外反の口縁部。内面には簡略化された筆書きの雲文帶が見られる。外面は無文。器面は凸凹が顕著に見られ、一部、施釉されていない部分が見られる。胎上は密で大きい気泡が見られる。	D-10 複乱
382				瓶	胸部	—	瓶の胴部で器面は火を受けて全体的に変色している。	複乱
383	彩繪 陶器	角皿	口縁部	—	—	—	角皿の口縁部か。口唇部は平坦で、底部から口縁部へ緩やかに立ち上がる。内外面ともに線彫が施されている。胎土は薄で白色微粒子が僅かに見られる。型造りか。	複乱
384	本土 座器	染付	口縁部	14.6	—	—	釉の色調：青白色。素地の色調：灰白色。密度：やや粗。暗藏文？肥前。17C末。	複乱
385				10.5	—	—	釉の色調：青白色。素地の色調：灰白色。密度：粗。いわゆる「くらわんか瓶」。文様の構図不明。肥前。18C。	
386				10.8	—	—	釉の色調：青白色。素地の色調：灰白色。密度：細。草花文。肥前。19C。	
387				—	—	—	釉の色調：青白色。素地の色調：灰白色。密度：やや粗。いわゆる「くらわんか瓶」。折枝文。肥前。17C末。	
388			底部	—	—	3.7	釉の色調：青白色。素地の色調：灰白色。密度：粗。いわゆる「くらわんか瓶」。肥前。18C。	
389				—	—	—	釉の色調：青白色。素地の色調：灰白色。密度：細。貢入あり。肥前。18C。	
390				—	—	—	釉の色調：青白色。素地の色調：灰白色。密度：やや粗。見込み五弁花を描く。肥前。18C。	

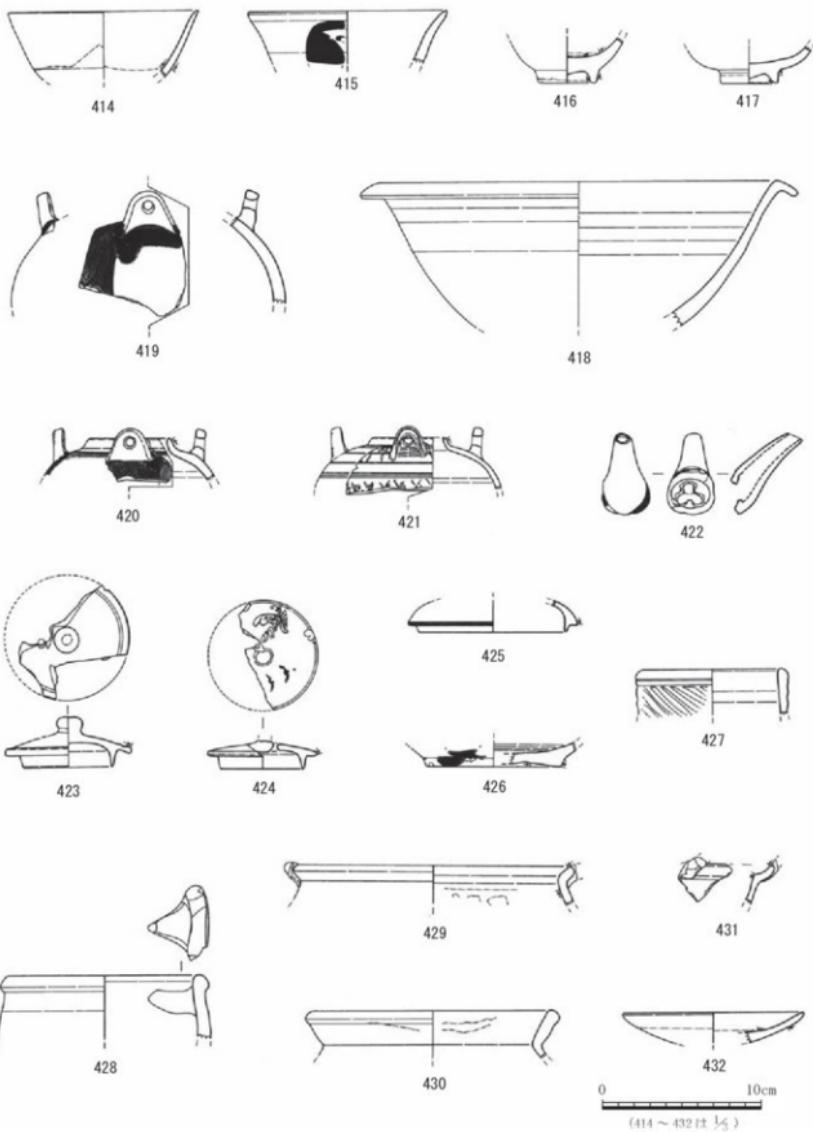


第52図 搅乱層等の出土遺物（6）

第25表 損乱層等出土遺物一覧 (6)

単位: cm

標印番号 回収番号	種類	器種	分類	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
391	本土産 磁器	碗	染付	底部	—	—	4.0	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。何らかの文様を描く。肥前。近代。	複乱
392				振部	—	—	4.2	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: やや粗。高台板状で剥げ。肥前。19C。	複乱
393				胴部	—	—	—	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 細。網目文。肥前。17C。	E-10 複乱
394				口縁部	7.2	—	—	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口唇に1条の細線。	複乱
395		碗	染付	口縁部	13.6	—	—	釉の色調: 青白褐色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。文様の構図不明。見込み露胎。	F-10 複乱
396				～腰部	14.1	—	—	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。文様の構図不明。見込み露胎。	複乱
397				印判手	12.9	5.0	5.0	釉の色調: 灰白色～灰オーリーブ。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。いわゆる「くらわんか碗」。コンニャク乳。花弁文。回転ヘラ削。見込みの目状に袖剥ぎ。肥前。18C。	複乱
398				～底部	7.2	4.1	3.6	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 細。口縁端反り。鋼版転写。花唐草文。	複乱
399		本土産 陶器	碗	色絵	9.0	3.3	4.5	釉の色調: 白色。素地の色調: 灰白色。密度: 細。完形。口縁直状。内面無文。	E-10 複乱
400				急須	—	—	—	釉の色調: 透明。素地の色調: 灰白色。密度: 細。口縁内傾。横位の把手を貼付(破損)。貢人あり。	複乱
401				—	—	—	—	釉の色調: 透明。素地の色調: 灰白色。密度: 細。口縁内傾。横位の把手を貼付(破損)。貢人あり。	複乱
402				—	—	—	—	釉の色調: 透明。素地の色調: 灰白色。密度: やや粗。口縁直状。口唇舌折れ。	複乱
403				—	—	—	—	釉の色調: 透明。淡い黄色。密度: 細。口縁直状外傾。口唇平坦。	複乱
404				口縁部	12.5	—	—	釉の色調: 口唇一深い青色。脚部一オーリーブ割。素地の色調: にぬい黄色。密度: 粗。脚部剥離。内面無釉。陶掌系。	E-10 複乱
405				鉢	—	—	—	釉の色調: 無釉。素地の色調: 灰黄褐色。密度: 粗。跨縫口縁。陶掌系。	D-10 複乱
406				—	—	—	—	釉の色調: 暗赤色。素地の色調: にぬい赤褐色。密度: 粗。口縁断面逆L字状。	複乱
407				—	—	—	—	釉の色調: 暗オーリーブ灰。素地の色調: にぬい橙色。密度: やや粗。口縁端丸。内外面施釉。唐津。17C。	複乱
408				壺	—	—	—	釉の色調: 褐色。素地の色調: 灰白色。密度: やや粗。口縁端面方形状に肥厚。陶掌系。	複乱
409		本土産 陶器	碗	皿	—	—	—	釉の色調: 淡い青色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁直状外傾。高台丸足を帯びる。見込みは盤を形成。内面、菊の文様。関西系か。	E-10 複乱
410				小杯	—	—	—	釉の色調: 淡い黄色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。内底部に「宣武」の文字。貢人あり。	複乱
411				不明	—	—	—	釉の色調: オーリーブ黒色。素地の色調: 暗褐色。密度: 粗。口縁直状。内面位凹彎曲がる。内外面無釉。陶掌系。	複乱
412				壺	—	—	—	釉の色調: 淡い黃褐色。素地の色調: 淡い黄色。密度: やや粗。腰部で角度を変えて成形する。内面無釉。	複乱
413				不明	—	—	—	釉の色調: オーリーブ黒色。素地の色調: 暗褐色。密度: 粗。ベタ底。立ち上がりは急。陶掌系。	複乱
597				—	—	—	—	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁外反。型紙摺り。青海波文と切妻形の地文、間に草花文。高台笠に連続文。口縁内面、隈路文。	複乱
598				—	—	—	—	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁外反。型紙摺り。花文。	複乱
599				皿	—	—	—	釉の色調: 青白褐色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁直状。型紙摺り。青海波文の地、花文。口縁内面、隈路文。	複乱
600				碗	—	—	—	釉の色調: 青白褐色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁直状。棱花。型紙摺り。内面、馬蹄形の地文。	B-3 複乱
601				皿	—	—	—	釉の色調: 青白濃色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。型紙摺り。青海波文、花文。	D-10 複乱
602		本土産 磁器	碗	印判手	—	—	—	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁直状。型紙摺りか。	複乱
603				口縁部	8.6	4.4	3.0	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁直状。ゴム判。雨文、花文。	複乱
604				—	8.4	—	—	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁直状。ゴム判。破綻文。	複乱
605				—	8.7	—	—	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁直状。ゴム判。花文。	複乱
606				—	6.8	4.2	3.2	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁直状。ゴム・銅版。	複乱
607				口縁部	11.3	—	—	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁直状。ゴム・銅版。	複乱
608				底	—	—	2.9	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。ゴム判。	複乱
609				口縁部	3.6	2.6	9.6	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁端反り。銅版。	複乱
610				底	7.8	4.3	3.2	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁端反り。銅版。	複乱
611				碗	—	—	4.0	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。銅版転写。縁文と波文。	複乱
612		段重	皿	—	—	—	—	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁直状。波文。	複乱
613				口縁部	11.2	2.3	6.4	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁直状。銅版転写。縁文と波文。	複乱
614				底	10.2	2.1	7.8	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁直状。銅版転写。縁文と波文。	複乱
615				—	10.4	2.0	9.8	釉の色調: 青白色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁直状。底部やや上げ底。銅版転写。花文。	複乱
616				碗	—	—	—	釉の色調: 淡い青緑色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。銅版転写。縁文。	表探
617		クロム 青磁	皿	口縁部	8.0	4.0	3.4	釉の色調: 淡い青緑色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。口縁直状。高台内袖剥ぎ。	複乱
618				底	—	—	6.8	釉の色調: 淡い緑色。素地の色調: 灰白色。密度: 粗。型紙摺り。縁文。	複乱

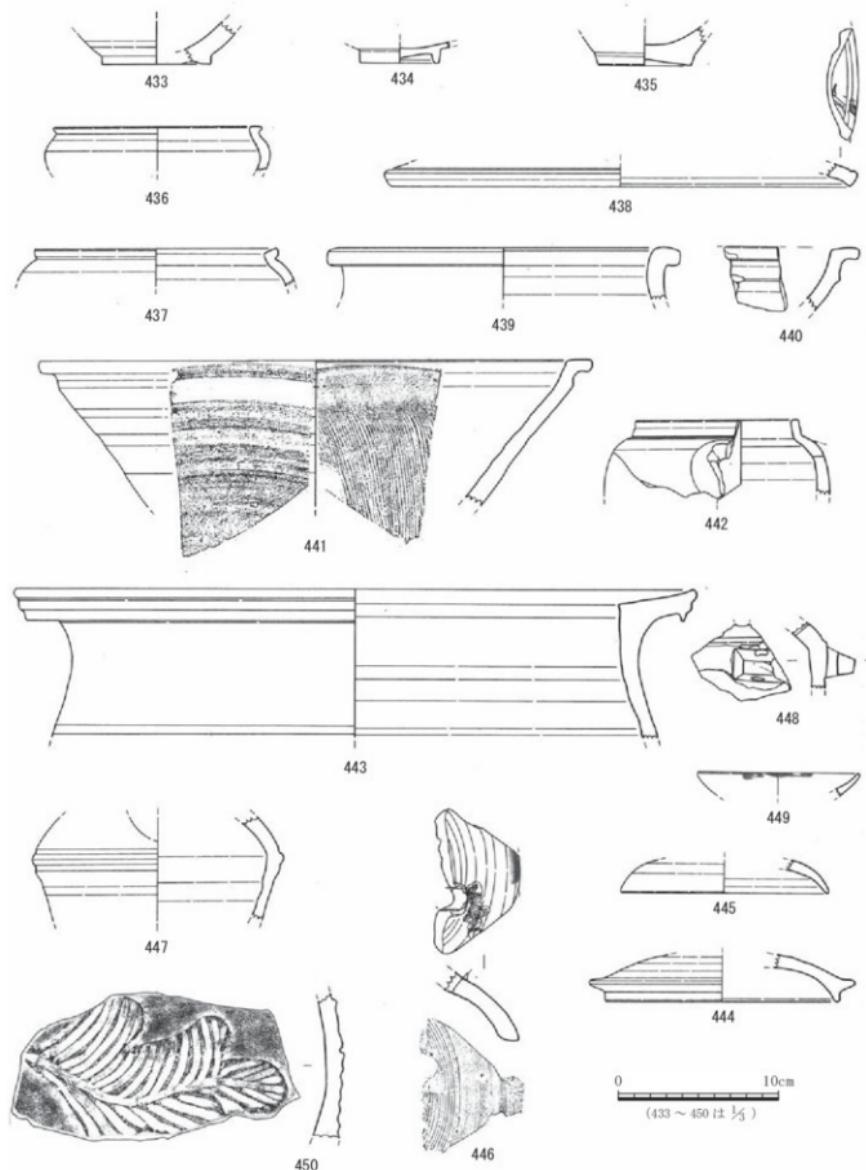


第53図 搅乱層等の出土遺物（7）

第26表 搅乱層等出土遺物一覧（7）

単位：cm

所蔵番号 図版番号	種類	器種	分類	残存 部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
414	碗	IB-a	口縁部 ～胴部	11.8	—	—	—	微弱に外反する。内外両面ともに灰釉を施すが、胴部下までは施釉しない。	擾乱
415			口縁部	12.4	—	—	—	断面形態が僅かに三角状を示す外反口縁の資料。全体的に白化粧がされているが、外器面に呉須で絵付けが施される。貫入も確認できる。	
416		III A	底部	—	—	3.6	—	全体的に白化粧し、内底面を蛇の目釉剥ぎするが、溶着痕が残る。疊付も露胎するものの、白土が付着する。	表採
417				—	—	3.6	—	内器面に灰釉、外器面に鉄釉を施すが、高台外側の途中から疊付までは釉剥ぎがなされている。	
418		鉢	I	口縁部 ～胴部	27.2	—	—	鈎線状の口唇部をもつ鉢。鈎線下面から胴部にかけて灰釉が、口唇部から内器面にかけては白化粧がなされるが、鈎線上には一部灰釉が及ぶ。	擾乱
419	急須	I	胴部	—	—	—	—	外器面には継位沈線および斜め格子状の線彫りを施す。そのほかに菱形内に花文が施される。また胴部上端には三角状の把手が貼付され、直径6.4mmの穴が穿孔される。継線が把手下まで流し掛けられる。内器面は白化粧される。	D-10 擾乱
420			口縁部 ～胴部	5.0	—	—	—	口唇部から口縁内面にかけて釉剥ぎがなされる。外器面には斜め格子文と二重の継位沈線を施す。また外器面上には略三角の把手が貼付され、上部に5.2mmの穴を穿つ。施釉は灰釉の上から継線を二重掛けする。	
421		I		4.6	—	—	—	口唇部を釉剥ぎし、内器面は露胎する。外器面には三角状の把手が貼付され、6.2mmの穴を穿つ。穴の直下には横位の継が隅割られ、把手端部に曲線を施す。また外器面上端および把手下には2条の継線がめぐり、文様の区画となす。第一文様帶には横位、継位の沈線や1条の継線、第二文様帶には白土象嵌による斜沈線で施文される。釉は灰釉を施す。	F-8 擾乱
422		I	注口	—	—	—	—	灰釉で施釉された注口の基部に継線を流し掛けする。また注口と胴部の接合部に直径約6.2mmの穴が3つ穿孔される。	擾乱
423	沖縄産施釉陶器	蓋	撮～底	7.8	3.1	5.6	—	扁平な撮みが付く急須の蓋。尾上面端部に1条の継線をめぐらせているが、撮みから園線までは灰釉が施され、園線から端部にかけては呉須をうすぐ施す。下面是露胎する。撮みの付け根近くに直径3.8mmの穴を穿つ。	E-10 擾乱
424				6.8	—	5.2	—	撮みが欠損する急須の蓋。外面に呉須と飴釉で蝶の文様を描く。内面は露胎する。撮みの根元付近に2.9mmの穴を穿つ。	
425			屁～底	10.5	—	9.2	—	撮みが欠損する資料。屁から端部付近までは灰釉が施され、端部には飴釉が施釉される。資料内面は施釉されずに露胎する。	擾乱
426		酒器	I	底部	—	—	8.4	白化粧した外器面に継線を流し掛けける。外底面は蛇の目釉剥ぎがなされ、白土が溶着する。内底面は飴釉痕が明瞭に残り、露胎する。	B-1 擾乱
427		火取	—	口縁部	9.4	—	—	断面が若干肥厚する直口口縁。外器面上端に2条の継線をめぐらし、直下に丸彫りの斜沈線を施文する。内器面には飴釉痕が残る。施釉は飴釉を施す。	擾乱
428	鍋	火炉	—	口縁部	13.0	—	—	肥厚口縁。口縁内面に逆弧状の器物受けが貼付され、その端部は面取りがなされる。外器面に継線を1条めぐらせる。釉は飴釉を施す。	表採
429		I	口縁部	17.4	—	—	—	口頸部に紐状の把手を貼付する。口唇部から外器面にかけては飴釉が施釉されるが、口頸部内面の蓋受け部は釉剥ぎされており、胴部内面にも釉が残っている。	擾乱
430				15.8	—	—	—	頸部が「く」の字状に折れ、口唇部が肥厚する。継線を施釉した後に口唇部およびその周辺の釉を搔きとるが、内器面は完全に搔きとれておらず、釉垂れがみられる。	
431			II	—	—	—	—	鈎線状の口縁形態を示す鍋。口頸部に紐状の把手を貼付する。外器面から口唇部までは灰釉を施すものの、蓋受けから内器面にかけては施釉されない。	B-3 擾乱
432		灯明皿	—	口縁部	11.3	—	—	直口する口縁形態である。外器面は胴部まで飴釉が施されており、内器面でも見込み部付近で釉が搔きとられている。	擾乱

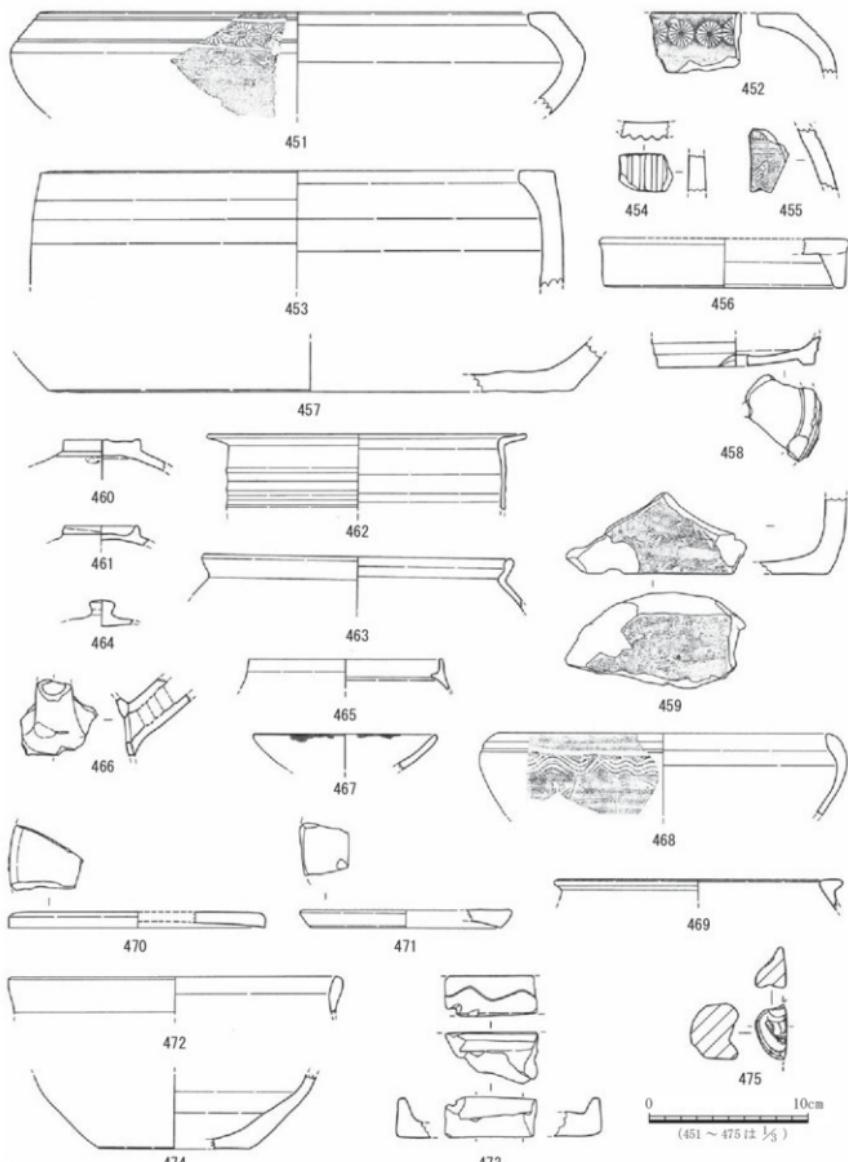


第54図 搅乱層等の出土遺物（8）

第27表 搅乱層等出土遺物一覧（8）

単位：cm

種類	器種	分類	残存部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
	433	碗	—	底部	—	—	6.8 逆八の字状に立ち上がる資料。高台内はほとんど抉り取らずに浅く仕上げる。内外の器面に轆轤痕が残る。	
	434	皿	—	底部	—	—	5.0 胎土に白色粒子を含む資料。見込み部の中心が僅かに盛り上がり、また外底面中央部も凸部をもたせる。	
	435	壺	—	底部	—	—	5.6 高台際から直線的に立ち上がる資料。外底面は上げ底状になっている。	
	436	I類	口縁部	13.1	—	—	口縁部の断面が三角状を呈する資料。外器面は無文となる。	搅乱
	437	I類	口縁部	15.0	—	—	口縁形態が三角状を呈する資料。残存資料の外器面は無文。	
	438	II類	口縁部	29.4	—	—	鉗縁状に折り曲げた資料。鉗上面および鉗端部に1条ずつの圓線をもつ。	
	439	II類	口縁部	22.1	—	—	口縁形態が逆L字状に折れ曲がる資料。内器面には轆轤痕がみられる。	
440	—	口縁部	—	—	—	口縁部を鉗縁状に折り曲げる資料。口縁下を丸彫りすることで、その下の三角状突起を目立たせる。	I-8 黄褐色土	
441	冲縄產無釉陶器	—	口縁部～胴部	34.5	—	—	鉗縁状に折り曲げた資料。内器面に数本の櫛目を密に施すものの、口縁内面はナデ消す。外器面には轆轤痕が明瞭に残る。	
442	急須	—	口縁部～胴部	10.2	—	—	肩部からほぼ一直線に底部へと移行する資料。蓋受けを有しない。火を受けた痕が確認できる。	
443	甕	I類	口縁部	42.6	—	—	口唇部が緩やかに内面に向かって傾斜する資料。逆L字形状の口縁端部に2条の圓線をもち、内外器面に轆轤痕が残る。内面には漆喰が付着する。	搅乱
444		I類	屁～底	16.4	—	14.6	轆轤痕が明瞭に残る資料。壺に対応。	
445		蓋	屁	13.0	—	—	屁がハの字状に傾斜する資料。外面と内面に轆轤痕が明瞭に見える。	
446		II類	屁	—	—	—	下面から穿孔された資料。外面および内面に轆轤痕が明瞭に残り、また内面には櫛目を施す。屁端部に一部煤が付着する。火炉に対応。	C-8 搅乱
447	火炉	—	胴部	—	—	—	火窓をもつ資料。肩部の上下に1条ずつ圓線をめぐらせる。内器面には若干轆轤痕が確認できる。	
448		—	胴部	—	—	—	肩部の下に把手を有する資料。肩部の直上には1条の圓線が確認でき、その上には孔が穿たれる。台形状の把手には直径8.2mmの孔が穿たれる。	
449	灯明皿	—	口縁部	10.2	—	—	口唇部に煤が付着する資料。外器面に轆轤痕が残る。	
450	鉢	—	胴部	—	—	—	胴部に草文の貼り付けが見られ、内外面共にマンガン釉が薄く施される。内面は赤褐色を呈していることから焼成に斑が見られる。胎土は密であるが、雲母、白色粗砂が大量に混入する。	搅乱

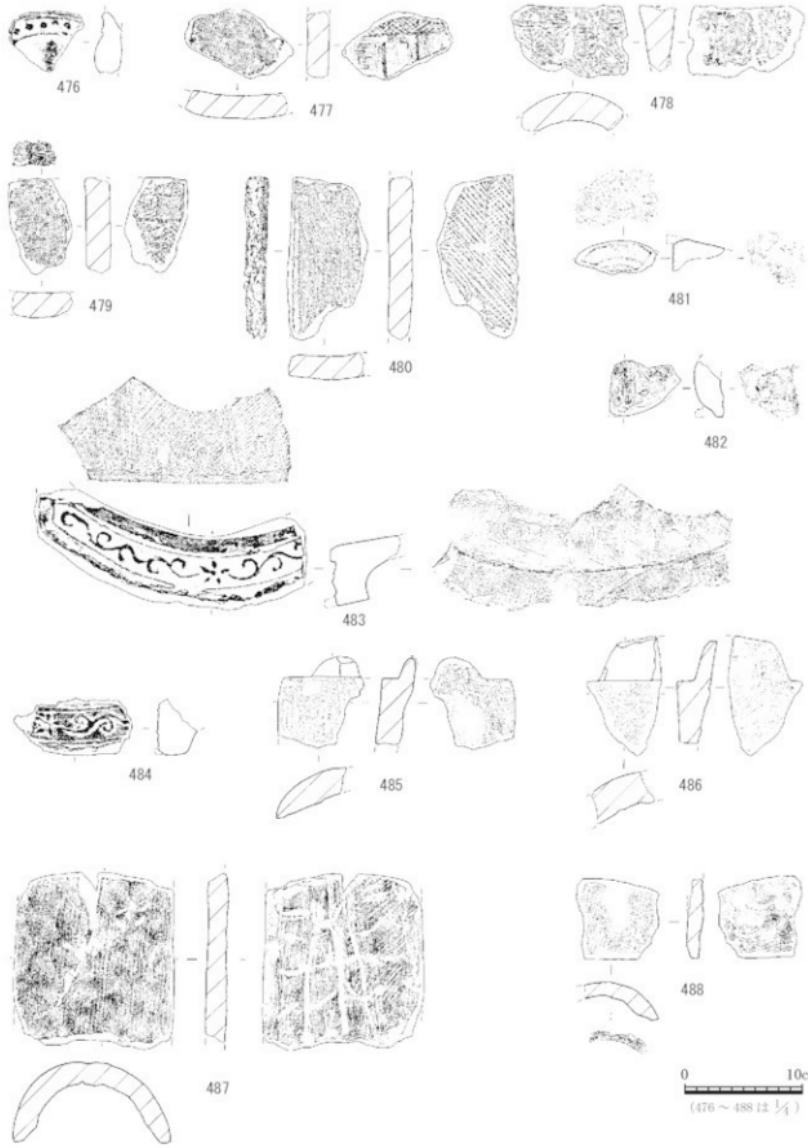


第55図 搅乱層等の出土遺物（9）

第28表 搅乱層等出土遺物一覧 (9)

単位: cm

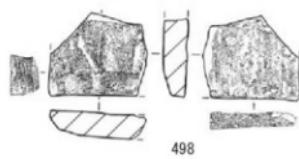
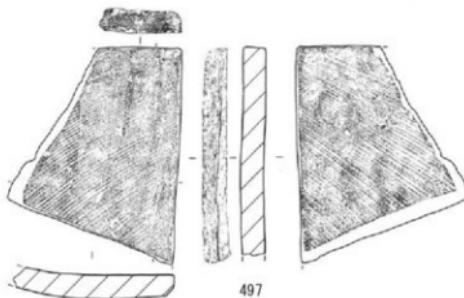
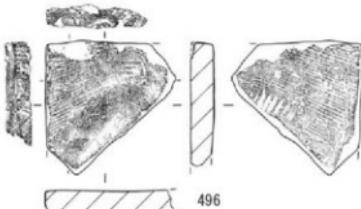
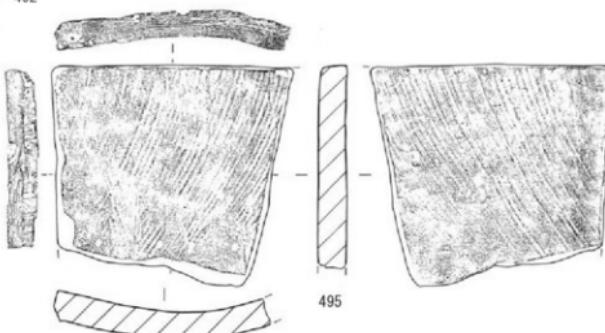
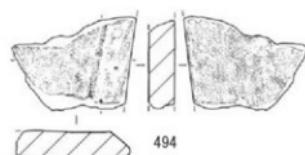
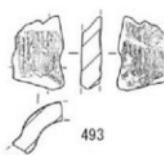
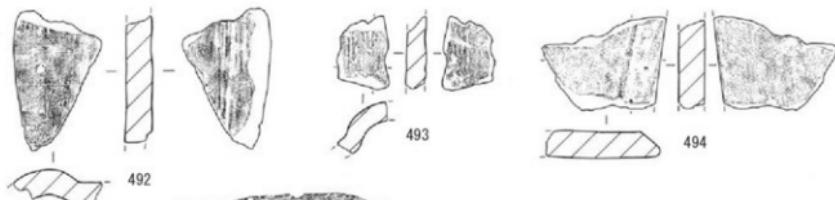
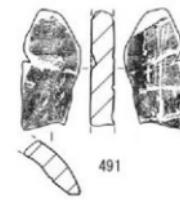
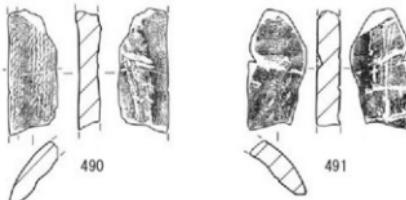
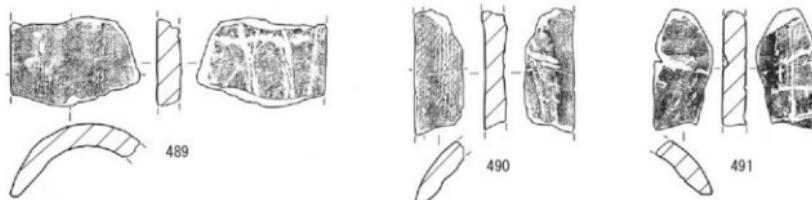
種類	器種	分類	残存部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
瓦質土器	火鉢	—	口縁部	32.2	—	—	色調：内外一橙色、断面一灰色。焼成：良。密度：やや粗。混入物：赤色砂粒、黒色微砂粒、雲母、石灰質砂粒。	赤褐色 粘質土
							色調：内外一灰、断面一灰黃。焼成：良。密度：細。混入物：黒色微砂粒、雲母。	搅乱
	火炉	—	—	32.0	—	—	色調：内外一橙色。焼成：良。密度：やや粗。混入物：赤色砂粒、黒色微砂粒、石灰質砂粒。	
							色調：外面一橙色、内面一灰黄色。焼成：良。密度：やや粗。混入物：白色微砂粒、黒色微砂粒、雲母。	G-9 搅乱
	風炉	—	不明	—	—	—	色調：内外一灰～暗灰色。断面一灰黄色。焼成：良。密度：細。混入物：白色微砂粒、黒色砂粒、雲母。	搅乱
							色調：内外一灰～暗灰色。断面一灰黄色。焼成：良。密度：粗。混入物：白色微砂粒、黒色砂粒、雲母。	
	不明	—	胴部	—	—	—	色調：外面一灰～暗灰色。断面一灰黄色。焼成：良。密度：細。混入物：白色微砂粒、黒色砂粒、雲母。	B-1 搅乱
							色調：内外一灰～暗灰色。断面一灰黄色。焼成：良。密度：粗。混入物：白色微砂粒、黒色砂粒、雲母、石英。端部径約15.6cm。	
	蓋	—	底部～端部	—	—	—	色調：内外一ぶいの橙色。焼成：良。密度：粗。混入物：白色砂粒、黒色砂粒、雲母、石英。馬蹄形の可能性。	搅乱
							色調：内外一ぶいの橙色、断面一灰色。焼成：不良。密度：やや粗。混入物：黒色微砂粒、雲母、石灰質砂粒。	
アカムヌリ	植木鉢	—	底部	—	9.8	—	色調：外面一明赤褐色、内面一橙色。焼成：良好。密度：細。混入物：赤色砂粒、黒色微砂粒、石灰質砂粒。	搅乱
							色調：内外一橙色。焼成：不良。密度：やや粗。混入物：赤色砂粒、白色微砂粒、黒色微砂粒、雲母。馬蹄形の可能性。	
	火炉	—	—	—	—	—	色調：内外一橙色。焼成：不良。密度：細。混入物：赤色砂粒、白色微砂粒、黒色微砂粒、雲母。	搅乱
							色調：内外一明赤褐色、内面一白色。焼成：不良。密度：やや粗。混入物：赤色砂粒、白色微砂粒、雲母、石灰質砂粒。直径約4.8cm。	
	鍋蓋	—	撮部	—	—	—	色調：内外一橙色、断面一灰色。焼成：不良。密度：やや粗。混入物：赤色砂粒、白色微砂粒、黒色微砂粒、雲母、石灰質砂粒。撮径約4.8cm。	E-10 搅乱
							色調：内外一橙色。焼成：不良。密度：細。混入物：白色微砂粒、黒色微砂粒、雲母。撮径約4.6cm。撮部スス付着。	
	鍋	—	口縁部	21.0	—	—	色調：内外一橙色。焼成：不良。密度：細。混入物：赤色砂粒、白色微砂粒、黒色微砂粒、雲母、石灰質砂粒。	搅乱
							色調：内外一橙色。焼成：良。密度：細。混入物：赤色砂粒、黒色微砂粒、雲母。蓋受け径約17.4cm。	
	急須蓋	—	撮部	—	—	—	色調：内外一橙色。焼成：良。密度：やや粗。混入物：赤色砂粒、白色微砂粒、黒色微砂粒、雲母、石灰質砂粒。撮径約1.6cm。撮は上部が平坦状。	C-2 搅乱
							色調：内外一橙色。焼成：良。密度：細。混入物：赤色砂粒、白色微砂粒、黒色微砂粒、雲母。蓋受け径約10.6cm。	
	急須	—	注口	12.0	—	—	色調：内外一橙色。焼成：不良。密度：やや粗。混入物：赤色砂粒、白色微砂粒、黒色微砂粒、雲母。	C-3 搅乱
							色調：内外一橙色。焼成：不良。密度：やや粗。混入物：赤色砂粒、白色微砂粒、黒色微砂粒、雲母。	
土器	灯明皿	—	—	11.4	—	—	色調：内外一明黄褐色。焼成：不良。密度：細。混入物：赤色砂粒、黒色微砂粒、雲母。口唇スス付着。	搅乱
							色調：内外一橙色。焼成：良好。密度：細。混入物：赤色砂粒、白色微砂粒、黒色微砂粒、雲母。丸彫りの團線・波状文。ロクロ時計回り。	
	水鉢	—	口縁部	20.6	—	—	色調：内外一橙色。焼成：良。密度：粗。混入物：赤色砂粒、黒色微砂粒、雲母。口径約20.6cm。首里城右城門地区や天界寺跡に類似資料あり。	搅乱
							色調：内外一橙色。焼成：良。密度：粗。混入物：赤色砂粒、黒色微砂粒、雲母。口径約17.8cm。首里城右城門地区や天界寺跡に類似資料あり。	
	鉢	—	—	17.8	—	—	色調：内外一橙色。焼成：良。密度：粗。混入物：赤色砂粒、黒色微砂粒、雲母。口径約17.8cm。首里城右城門地区や天界寺跡に類似資料あり。	搅乱
							色調：内外一ぶいの赤褐色。焼成：良。密度：やや粗。混入物：白色砂粒、黒色砂粒、雲母。端部径約16.0cm。滑り止め塗装に造り出す。	
	福平蓋	—	底部	—	—	—	色調：内外一灰白～淡橙色。焼成：不良。密度：細。混入物：黒色微砂粒。端部径約13.2cm。	D-4 搅乱
							色調：内外一橙色。焼成：良好。密度：粗。混入物：赤色砂粒、白色微砂粒、黒色砂粒、雲母。口径約20.8cm。混入物が半棘に類似。	
その他土器	器種不明	—	口縁部	20.8	—	—	色調：内外一橙色。焼成：不良。密度：粗。混入物：赤色砂粒、白色微砂粒、黒色砂粒、雲母、石灰質砂粒。胎土記質。側面棘な波状沈線。	搅乱
							色調：内外一橙色。焼成：良。密度：細。混入物：白色砂粒、黒色微砂粒、雲母。	
474	ダスク土器	器種不明	—	底部	—	—	9.4	色調：内外一ぶいの橙色。焼成：良。密度：細。混入物：白色砂粒、黒色微砂粒、雲母。
475	土製品	人形？	—	不明	—	—	—	色調：橙色～褐灰色。焼成：良。密度：細。混入物：白色砂粒。耳のような形状を呈する。



第56図 搅乱層等の出土遺物 (10)

第29表 搾乱層等出土遺物一覧 (10)

辨認番号 図版番号	造瓦系統	種類	残存部	分類	色調	焼成	文様、形態、成形、保存状況など	出土地
		軒丸瓦	瓦当部	—	表面は褐色、胎土中央は灰色。	やや良好	蓮華文瓦当片である。體節形の蓮弁と、外縁に小さい珠文が残る破片。	地山直上
476	高麗系瓦	平瓦	筒部	—	灰色	良好	「癸酉年高麗瓦匠造」銘の一部残す破片。右枠の部分は文様は不明瞭。器厚は最小厚17.03mm、最大厚18.45mm。	B-5 擾乱
477				—	灰色	良好	格子状打捺痕と空白の枠が認められる。凹面に細かい布目あり。器厚は最小厚19.21mm、最大厚20.79mm。	
479				—	灰色	良好	凸面に羽状打捺痕。一側面は分割面が残る。分割瓦刀の深さは三分の一と浅い。側面には分割目安の溝が明瞭に見られる。器厚は最小厚18.16mm、最大厚19.45mm。	
480				—	灰色	良好	玉縁を欠く。凸面に羽状文叩き目。凹面に刺網状の紐圧痕がみられ、離型材の白砂粒が付着する。紐圧痕幅は最小17.03mm、最大30.14mm。	
478	丸瓦	筒部	—	表面は褐色、胎土中央は灰色。	やや良好	玉縁を欠く。凸面に羽状文叩き目。凹面に刺網状の紐圧痕がみられ、離型材の白砂粒が付着する。紐圧痕幅は最小17.03mm、最大30.14mm。	擾乱	
481				表面は褐色、胎土中央は灰色。	やや良好	巴文の尾が一部観察できる。頂部は丸瓦で表面は撫でがよく、無模様。		
482	軒丸瓦	瓦当部	—	黑色	やや良好	瓦当部分の細片。表面には細かい白砂付着。文様は蓮弁と線でつなぐ珠文がみられる。	B-5 擾乱	
483	軒平瓦	瓦当部	—	表面は褐色、胎土中央は灰色。	良好	5枚の花弁を有する中心飾り、左側に線描の唐草が残る。花弁の形状は小さなながらも軒丸瓦の蓮華文の花弁と類似する。瓦当裏の顎は縱方向に撫で成形を行う。顎部分の幅は最小22.10mm、最大28.72mm。	B-5 擾乱	
484			—	灰色	良好	中心飾り文を残す破片。花は5枚の花弁を有する。表面に細かい白砂付着。顎は丁寧な撫で。		
485	大和系瓦	玉縁部	—	淡灰色	良好	玉縁は小さい。凸面に比較的粗い繩目の叩き文、凹面は面取りがなされている。細かい白砂が大量に付着。玉縁の長さは最小長20.21mm、最大長23.16mm。	B-4 擾乱	
486			—	黑色	良好	玉縁頂部は一定の面あり。凸面に羽状文叩き目。凹面は糸切り痕と紐圧痕あり。玉縁の長さは39.84mm。紐圧痕の幅は最小2.38mm、最大3.83mm。		
487		丸瓦	筒部	表面は褐色、胎土中央は灰色。	良好	凸面に繩目の叩き文が認められるが撫で消し作業が行われている。刺網状の紐圧痕は縦35.90×横23.97mm、幅は最小3.99mm、最大7.46mm、器厚は最小厚16.12mm、最大厚19.11mm。	B-5 擾乱	
488		端部	—	灰色	良好	凸面に繩目の叩き目痕。凹面には端部側に面取りがなされ器壁が薄くなる。端面も面取りがなされている。器厚は最小厚12.14mm、最大厚15.44mm。	B-6 擾乱	

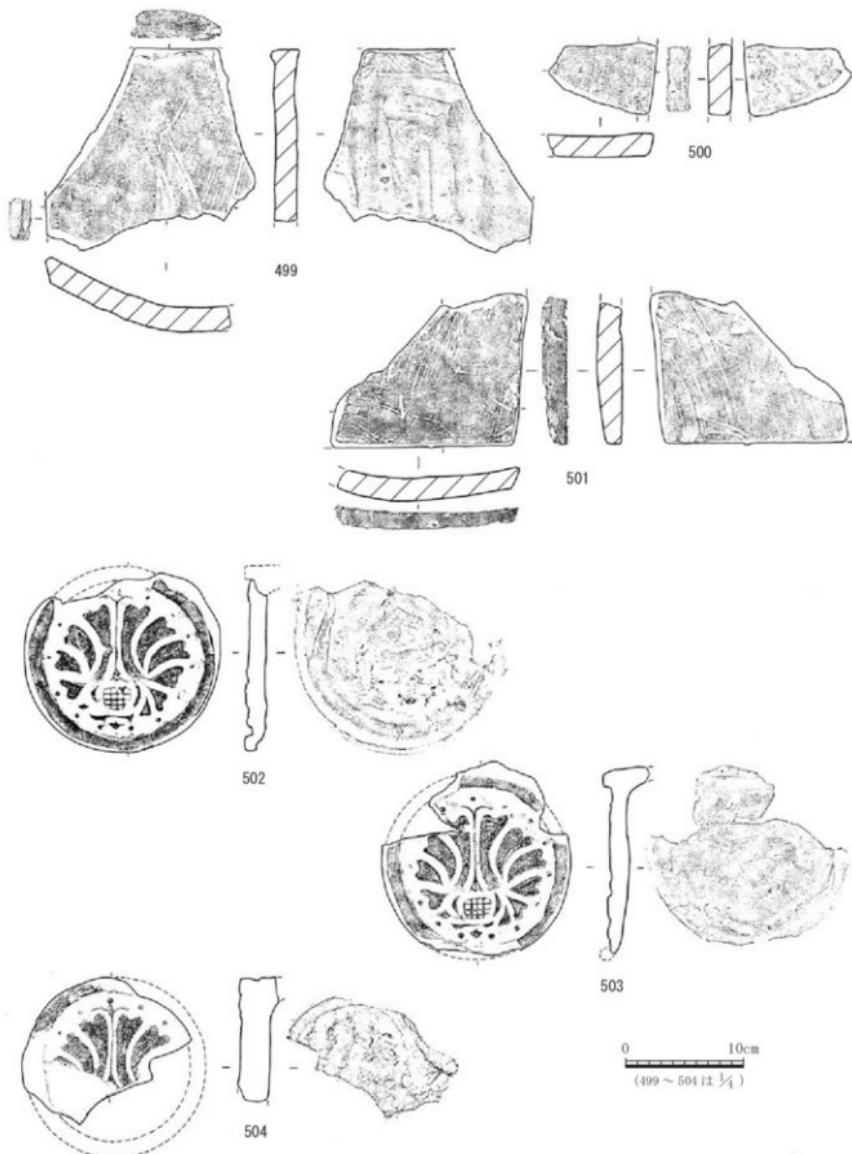


0 10cm
(489 ~ 498 は $\frac{1}{4}$)

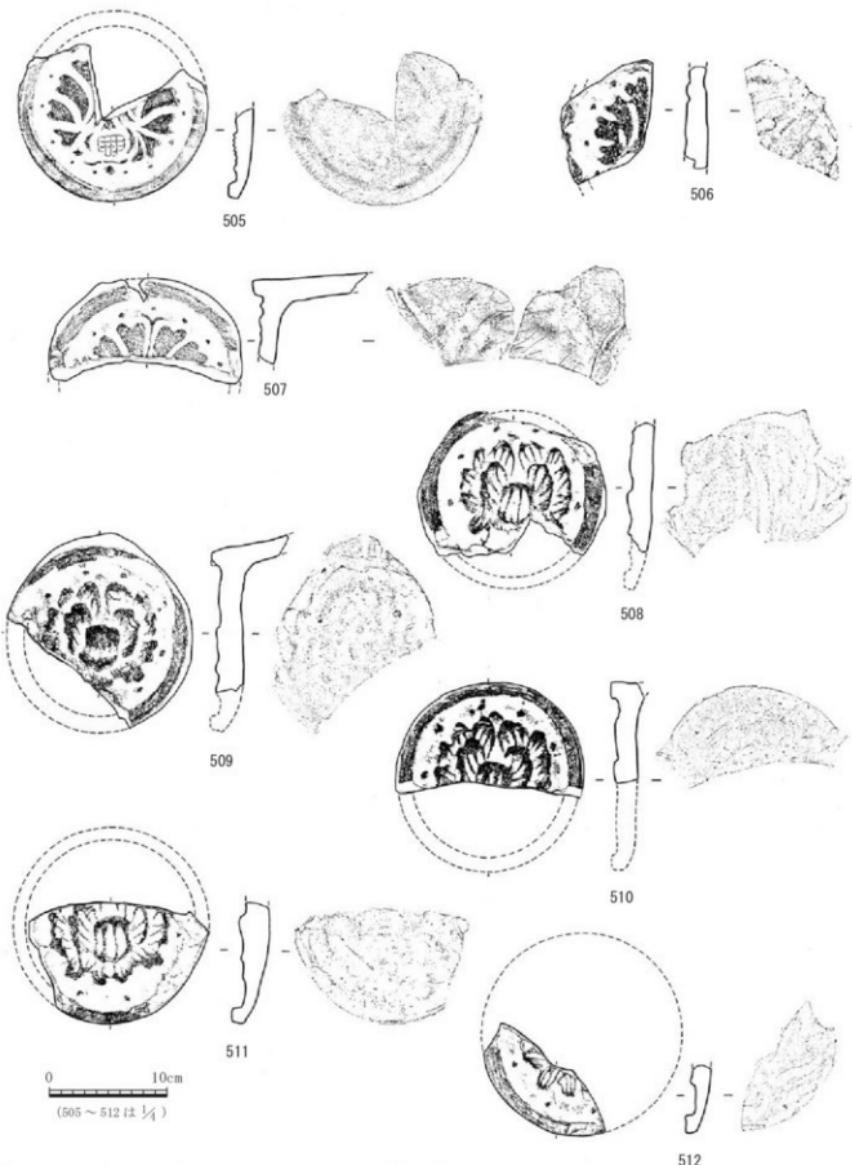
第57図 搅乱層等の出土遺物 (11)

第30表 搾乱層等出土遺物一覧 (11)

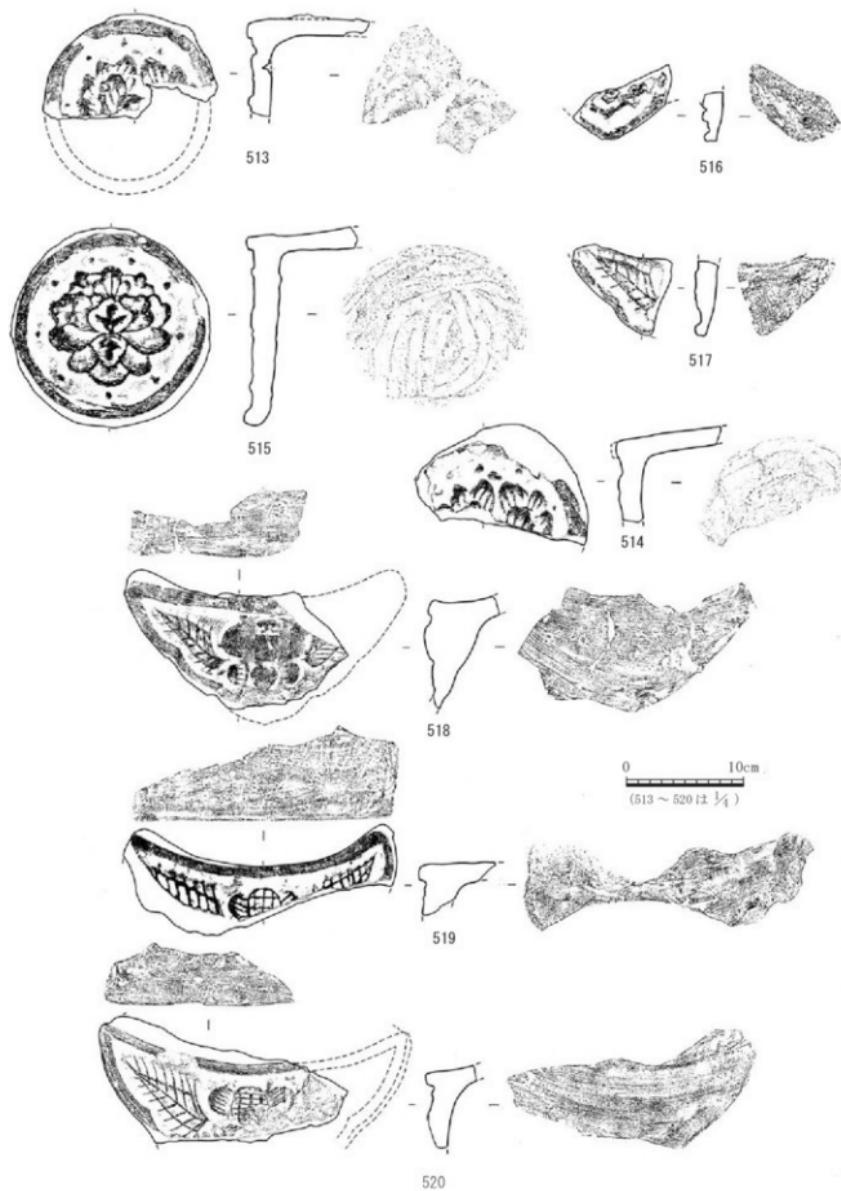
種図番号 國版番号	造瓦 系統	種類	残存 部位	分類	色調	焼成	文様、形態、成形、保存状況など	出土地	
489				-	灰色	やや良好	凸面は撫でがなされているが僅かに縄目叩き痕がみられる。凹面の紐圧痕の幅は最小1.95mm、最大7.49mmと大きい。器厚は最小厚18.91mm、最大厚19.31mm。	擾乱	
490		丸瓦	筒部	-	灰色	やや良好	玉縁側の細片。凸面に縄目の叩き目が明瞭。側面は面取りされる。器厚は最小厚14.73mm、最大厚20.26mm。	地山 直上	
491				-	表面は褐色、胎土中央は灰色。	やや良好	凸面に太めの羽状叩き目痕有り。凹面の紐圧痕の幅は最小1.44mm、最大厚4.25mmあり、刺網状は縦約22.62mm×横約8.42mmと狭いタイプ。	C-5 擾乱	
492				丸瓦 (筒部)	-	表面は褐色、胎土中央は灰色。	やや良好	凸面の撫でが徹底し羽状叩き痕が不明瞭。凹面は縦位に強い撫でが確認される。器厚は最小厚16.72mm、最大厚21.85mm。	
493		雁振瓦			-	表面は褐色、胎土中央は灰色。	やや良好	上記資料と同じ筒部片。同様に白砂が器面上に付着。器厚は最小厚14.15mm、最大厚18.59mm。	
494	大和系瓦		平瓦 (側面部)	-	表面は褐色、胎土中央は灰色。	やや良好	平瓦部分の側面。断面三角になる。表裏面とも文様がみられない。器厚は最小厚19.74mm、最大厚21.59mm。	擾乱	
495		平瓦	広端部	-	表面は褐色、胎土中央は灰色。	やや良好	平瓦の角片。側面の断面は二面になる。表面は糸切り痕と白砂粒子がみられる。器厚は最小厚20.98mm、最大厚21.55mm。		
496		雁振瓦	広端部	-	暗灰色	良好	平瓦の角片。器形が平坦であり雁振の平瓦の可能性もあるが、細片のため不明。側断面は二面になる。表面は糸切り痕と白砂粒子がみられる。器厚は最小厚15.77mm、最大厚19.42mm。	B-5 擾乱	
497		平瓦	広端部	-	表面は褐色、胎土中央は灰色。	やや良好	平瓦の角片。側面の断面は二面になる。凸面は糸切り痕と白砂粒子がみられる。凹面に無紋叩き板の跡が観察される。幅は16.65mm。器厚は最小厚18.17mm、最大厚18.84mm。		
498		雁振瓦	狭端部	-	表面は赤褐色、胎土中央は灰色。	良好	平瓦の角片。端部側に面取りがみられる。面取り幅18.65mm。器厚は最小厚16.52mm、最大厚20.88mm。	擾乱	



第58図 搅乱層等の出土遺物 (12)



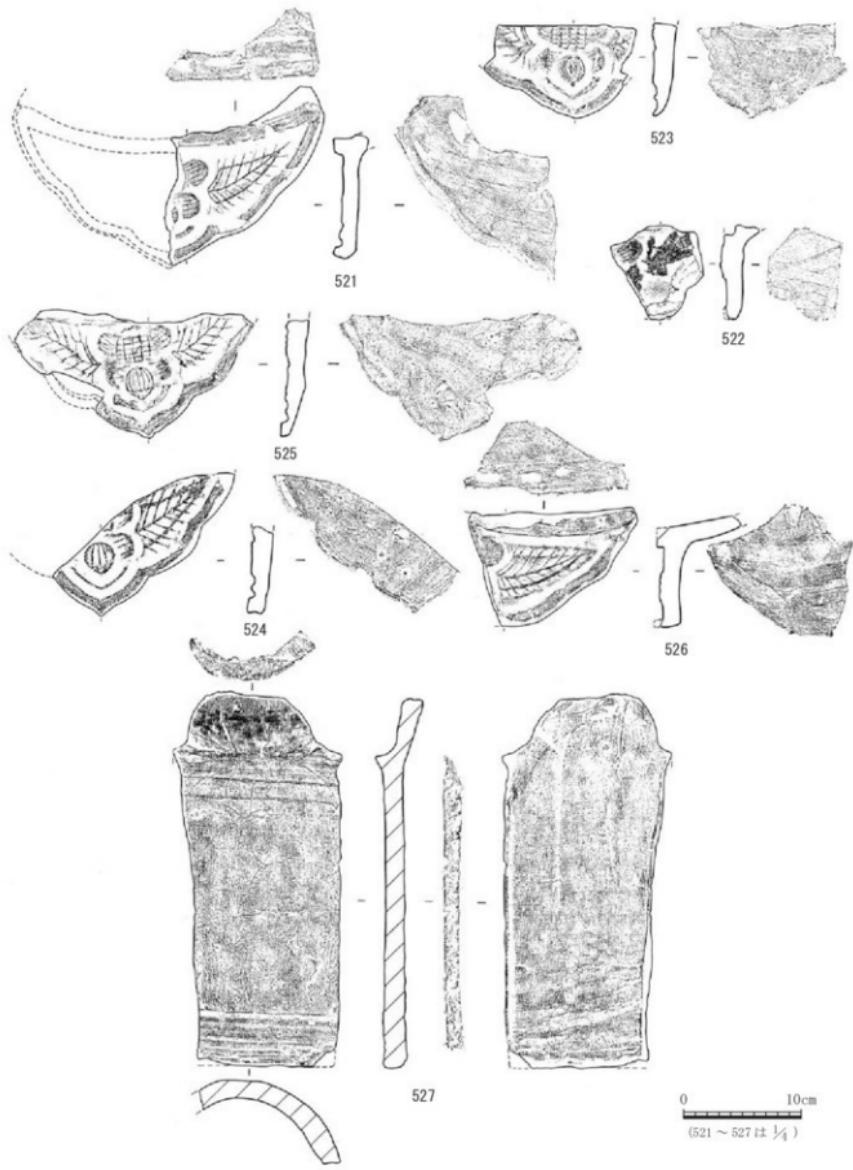
第59図 搅乱層等の出土遺物 (13)



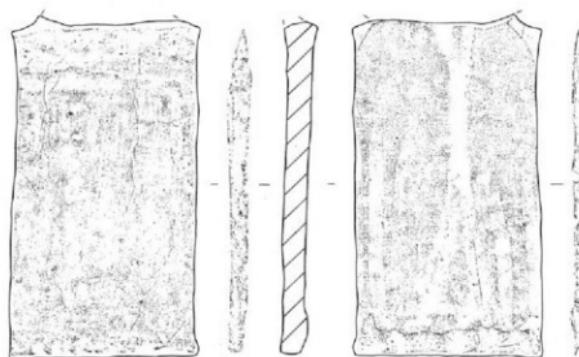
第60図 搅乱層等の出土遺物 (14)

第31表 搾乱層等出土遺物一覧 (12)

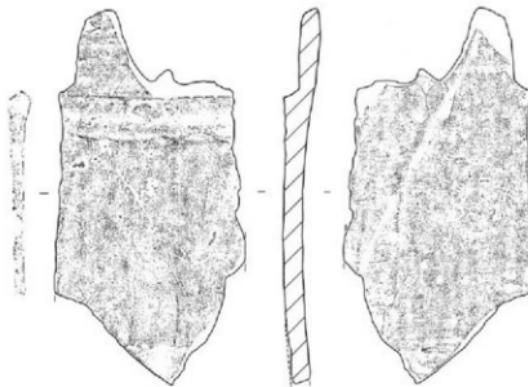
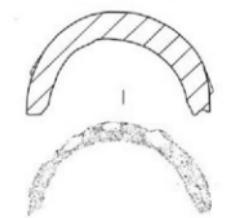
種類	残存部位	分類	色調	焼成	文様、形態、成形、保存状況など	出土地		
499 500 501	筒部 側面 表面は褐色、胎土中央は灰色。	平瓦 平瓦 平瓦	良好 良好 やや良好	灰色	凸面側に珍しく指撫でが粗く残る。側面は断面が隅丸の三角。器厚は最小形を呈する厚18.68mm、最大厚20.36mm。	B-5 押乱		
					側面が四角になるタイプである。表面は無紋。器厚は最小厚17.31mm、最大厚18.78mm。			
					端部の面取りが32.58mmと広く、また、端面も削りがなされている。器面に白砂が顯著。器厚57.61mm。			
502 503 504	軒丸瓦	瓦当部	赤色	良好 良好	仏桑花タイプ。マンガン釉を施す。漆喰付着。瓦当裏の外周は内部に比べ薄く、段差がつけられる。丸瓦部分は欠落。	B-5 押乱		
					仏桑花タイプ。瓦当裏の撫で良好。瓦当裏の成形は前502と類似する。マンガン釉を施す。漆喰付着。			
			灰色	やや良好	仏桑花タイプ。瓦当裏の撫で成形は荒く、指跡あり。漆喰付着。			
			A	良好 良好 良好	仏桑花タイプ。瓦当裏の撫で良好。頭裏の周縁は薄く緩やかな段差。マンガン釉を施す。漆喰付着。瓦当径15cm。	C-5 押乱		
505 506 507	軒丸瓦	瓦当部			仏桑花タイプ。瓦当面は粗い。裏は調整の指痕明瞭に残る。器面の風化が進み、胎土の粉末が付く。残存厚は最小厚7.10mm、最大厚18.79mm。			
					仏桑花タイプ。マンガン釉かかる。瓦当面は極め細かい。裏面の撫で良好。頭裏の周縁は薄く緩やかな段差。セメント付着確認。			
					牡丹タイプ。瓦当面は粗面。裏面は整形時の指痕明瞭。瓦当径約15cm。			
508 509	軒丸瓦	瓦当部	B b	良好 良好	牡丹タイプ。瓦当面は粗く、マンガン釉塗付。裏面は整形の指痕残る。頭裏の周縁は薄く緩やかな段差。瓦当径約14.5cm。	C-5 押乱		
					牡丹タイプ。瓦当面は粗い。裏面は指痕残る。瓦当径約15cm。			
			B a	赤色	牡丹タイプ。本資料は頭部分の資料。裏の指撫で良好ながら、上半分は指痕が明瞭。			
510 511 512	軒丸瓦	瓦当部	B b	良好 良好	牡丹タイプ。瓦当面は極め細かい。木范の痕跡明瞭。裏面は丁寧な撫で整形。頭裏の周縁は薄く緩やかな段差。	C-5 押乱		
					牡丹タイプ。瓦当面は粗い。陶器質に焼き縮まる。裏面は指撫で痕か。残り粗面。漆喰付着。			
			D	C	牡丹タイプ。瓦当面は粗面。セメント付着する。丸瓦との接合部が薄く成形。			
513 514 515	軒丸瓦	瓦当部	B b	良好 良好	文様は陰様で表現するタイプ。文様面は全体に肉薄である。瓦当径約15.8cm。瓦当面は比較的細かい。木范の痕がみられる。裏面は凹凸をなし、指痕が瓶位に流れるように残る。	C-5 押乱		
					牡丹タイプ。瓦当面は粗い。裏面は横位の撫で。マンガン釉塗付。			
			C		牡丹タイプ。瓦当面は細かい。裏面の撫で良好で、横位に刷痕がみられる。平瓦の桶絆圧痕は粘土で埋められている。			
516 517 518 519 520	軒平瓦	瓦当部	A	赤色 暗赤色	瓦当の側面端部の破片。瓦当面は細かい。裏面の撫でも丁寧な仕上げで、磨面になる。	B-5 押乱		
					焼成は陶器質に焼き絞められている。裏面は横撫でがなされ、スムーズな面になる。なお、焼損して焼き彫れになる。平瓦の桶絆圧痕は粘土で埋められている。			
			A	良好	瓦当面は極め細かい。裏面は横位の撫で。マンガン釉塗付。			
				良好	瓦当面は極め細かい。裏面の撫で良好で、横位に刷痕がみられる。平瓦の桶絆圧痕は粘土で埋められている。器厚は最小厚10.42mm、最大厚12.45mmと薄い。マンガン釉塗付。			



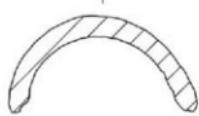
第61図 搅乱層等の出土遺物 (15)



528

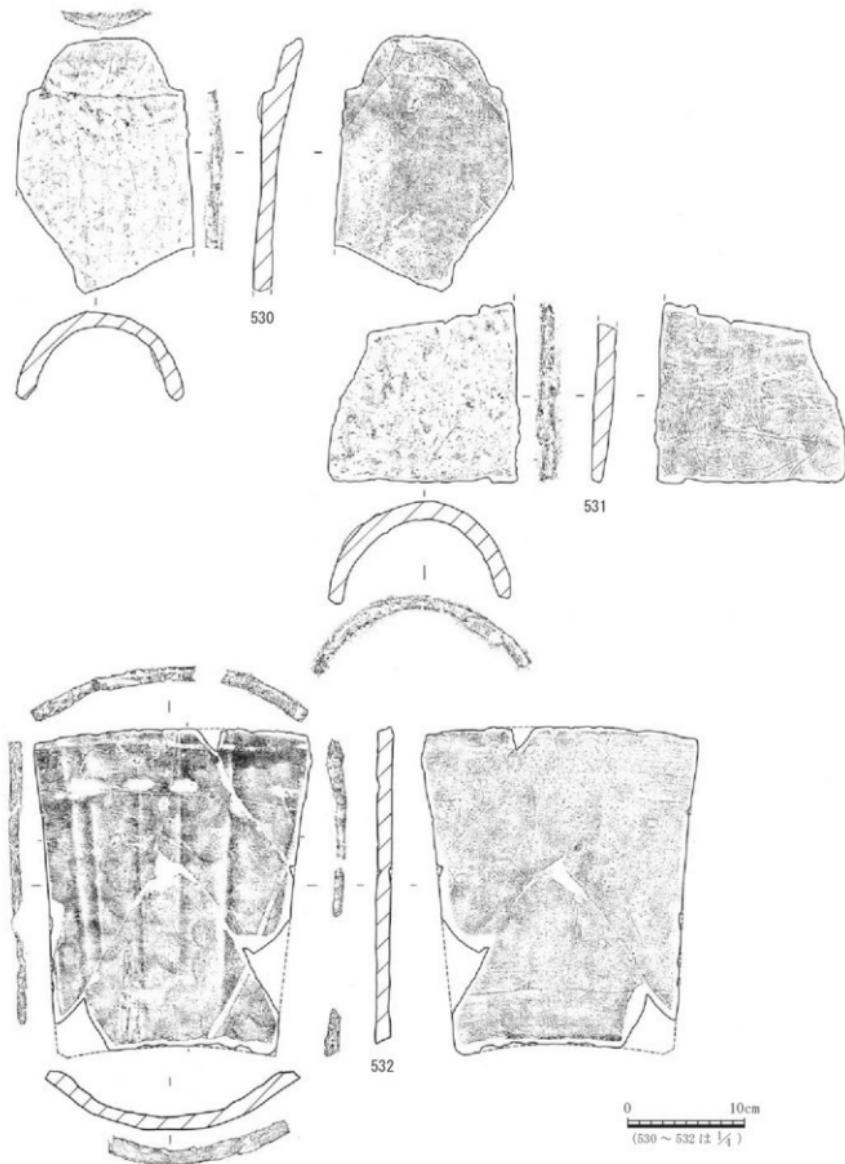


529

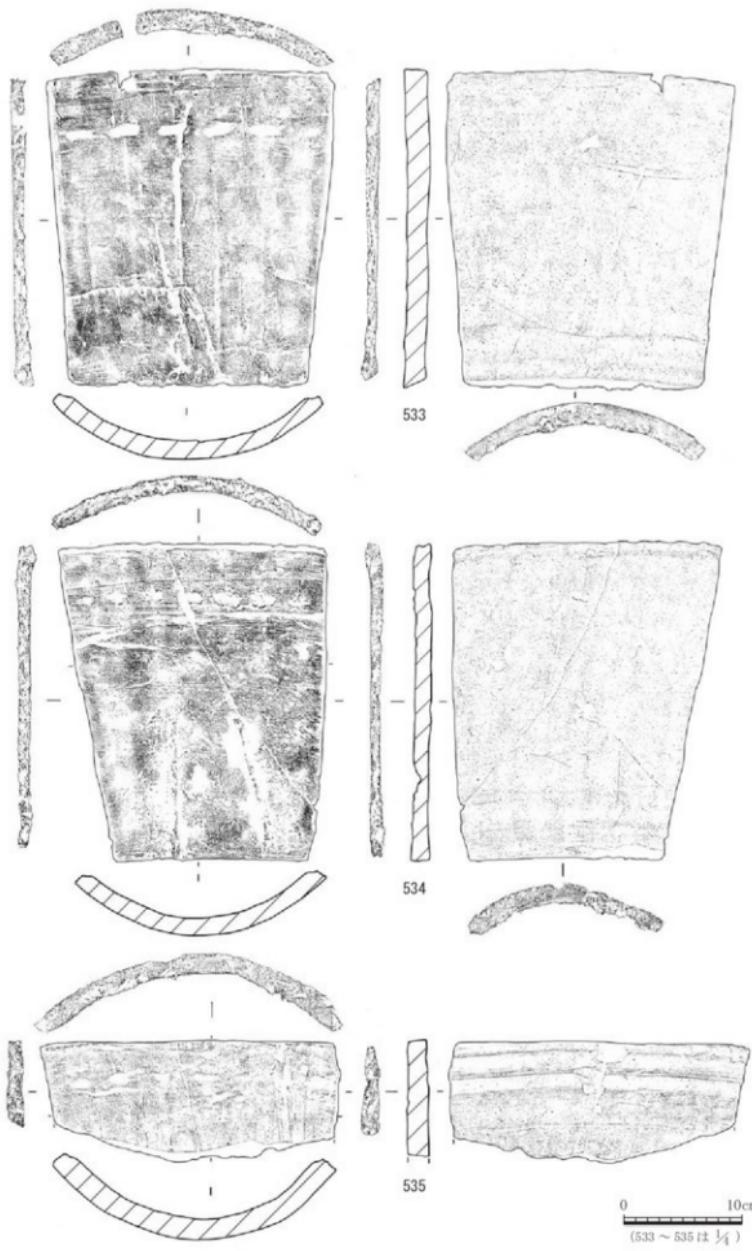


0 10cm
(528・529は $\frac{1}{4}$)

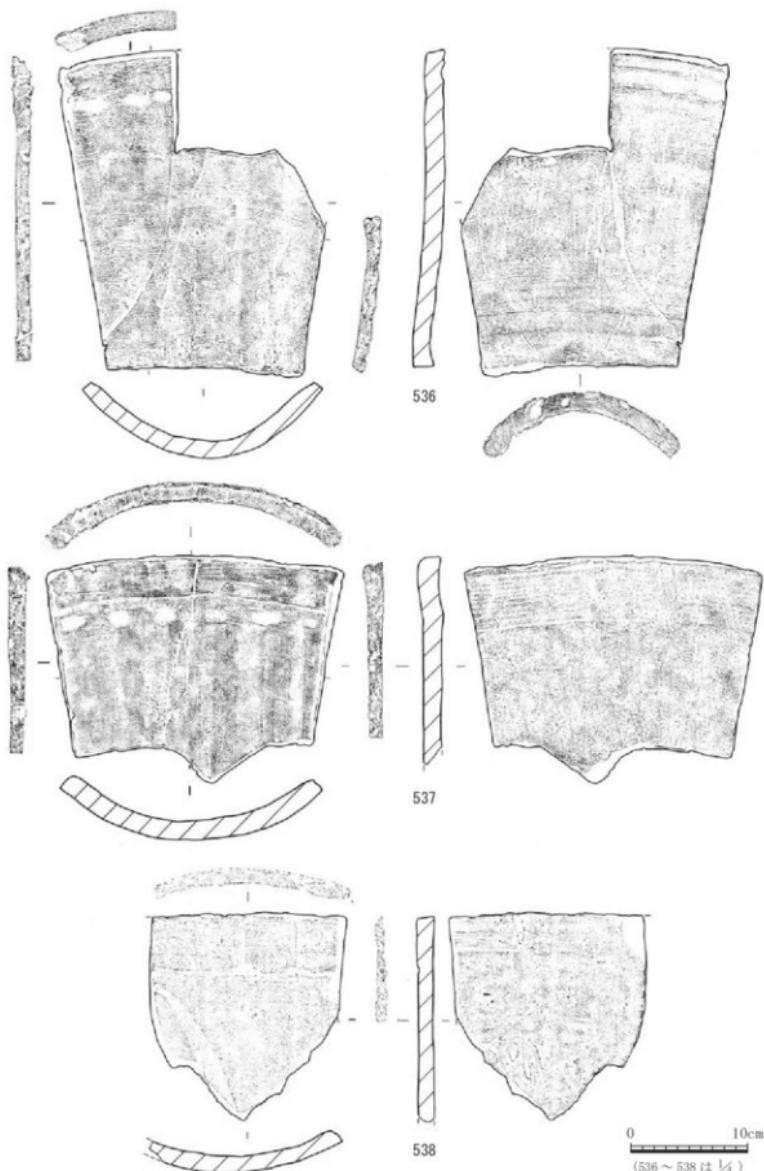
第62図 搅乱層等の出土遺物 (16)



第63図 搅乱層等の出土遺物 (17)



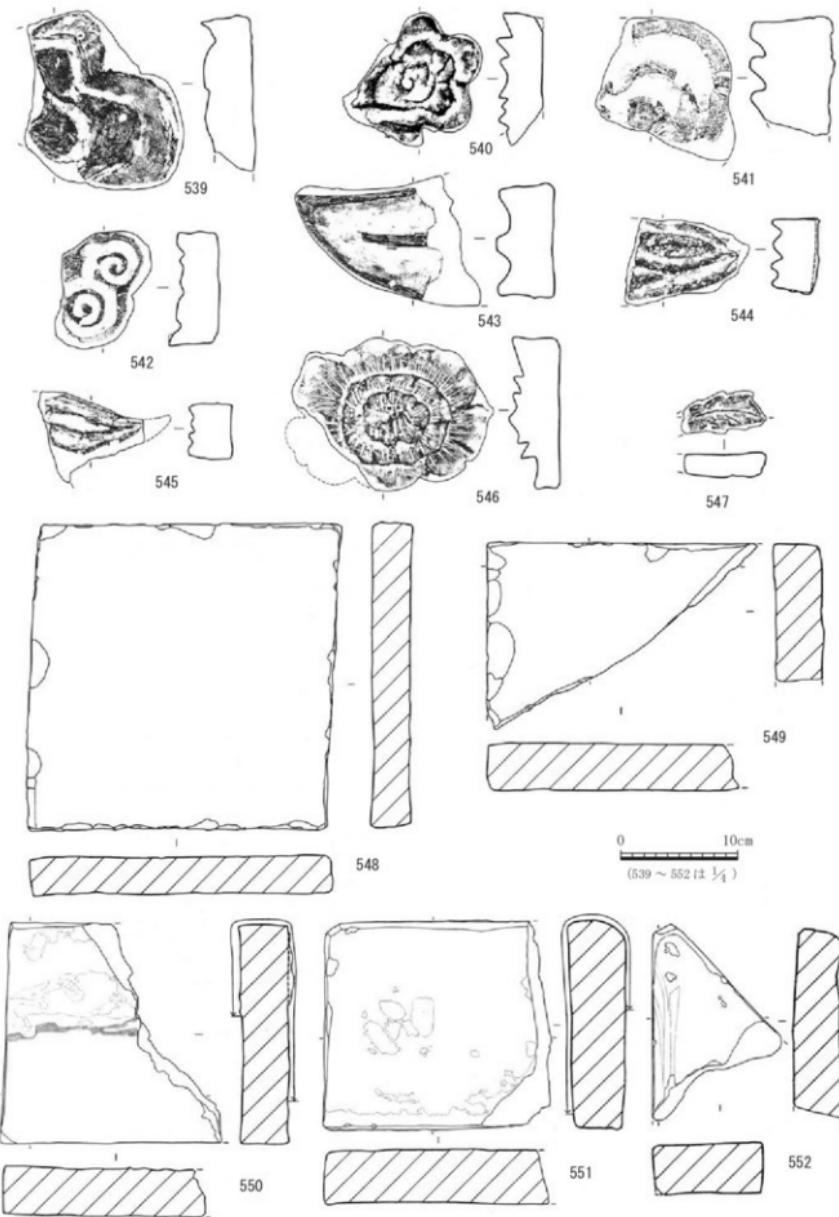
第64図 搅乱層等の出土遺物 (18)



第65図 搅乱層等の出土遺物 (19)

第32表 搾乱層等出土遺物一覧 (13)

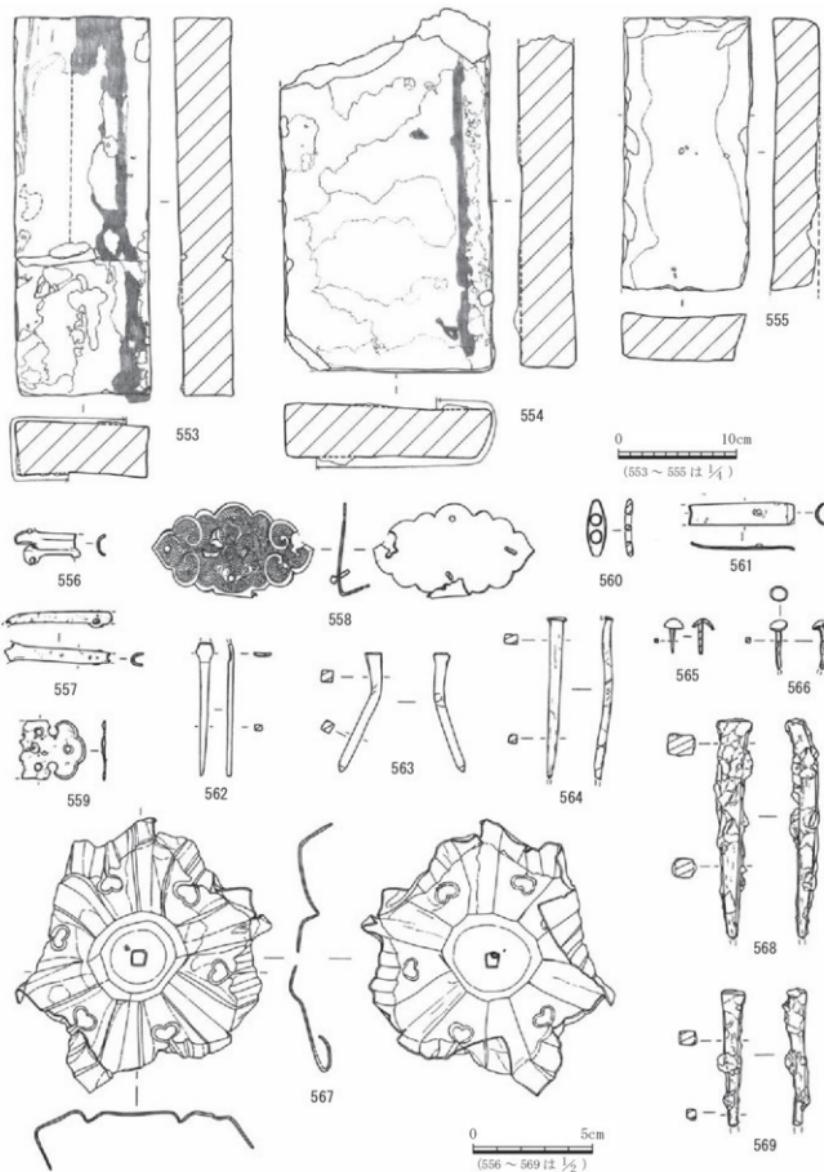
挿図番号 図版番号	造瓦 系統	種類	残存 部位	分類	色調	焼成	文様、形態、成形、保存状況など	出土地
第61 図 ・ 図版 36	軒平瓦	瓦当部	赤色	A	良好		瓦当面は極め細かい。瓦当裏は撫でが横位になされスムーズになる。平瓦の桶紐圧痕はそのまま残みのまま残る。瓦当残存厚約13.88mmと薄い。マンガン釉塗付。	B-3 擾乱
							瓦当面はやや粗く、瓦当器厚は一定して13.16mmと薄い。マンガ ン釉塗付。	擾乱
					良好		顎部分の破片。瓦当表面は粗いが、裏面は撫での擦痕が残るが良好。瓦当残存厚は20.76mm。	擾乱
							顎部分の破片。瓦当面は極め細かく、裏面も丁寧な撫で整形。瓦当残存厚は20.16mm。	
					良好		顎部分の破片。瓦当面は風化が著しく粗く、裏面の成形もやや粗い。瓦当面器厚は15.54mmと薄い。	
							瓦当面は極め細かい。瓦当器厚は14.15mmと厚い。平瓦の桶紐圧痕が残る。裏面は撫で良好。	
							凸面の両端側は横位のろくろ指撫で痕が凹線として明瞭に残る。表面にセメント付着。凹面の端部には面取りがみられない。	擾乱
第62 図 ・ 図版 36	丸瓦	筒部 (玉縁有)	c	赤色	良好		玉縁部分を欠損。凸面の指撫では弱い。凹面の端部には幅約2cmの面取りが残る。筒部の径は約15cmになる。	
明朝系瓦	丸瓦	玉縁部	b	灰色	良		玉縁側の破片。凸面は著しく風化し、剥離やクレータ状の孔がみられる。漆喰及びセメントが付着。	
第63 図 ・ 図版 36	丸瓦	玉縁部	c	赤色	良好		玉縁側の破片。玉縁頂部は斜めになる。凹面の玉縁は面取りがめぐる。漆喰付着する。	出土地 不明
第64 図 ・ 図版 36	平瓦	端部角	—	赤色	良好		筒部片。凹面の端部は約3cmの面取りがなされる。凸面は著しく風化し、器面の剥離がすすむ。漆喰付着。	
第65 図 ・ 図版 36	平瓦	完形	b	灰色	良		広端約22.3cm、高さ約26.2cm。紐圧痕の数は5個。漆喰付着確認。	
第66 図 ・ 図版 36	平瓦	完形	b	灰色	良好		6個の紐圧痕。圧痕は梢円形で深い。重量1.56kg。広端約23cm、狭端約19cm、高さ約25cm。	擾乱
		広端部	a	赤色	良好		7個の紐圧痕。細く小さい。重量1.29kg。広端22cm、狭端約16cm、高さ約26cm。	
第67 図 ・ 図版 36	平瓦	狭端部	a	赤色	良好		凸面の整形時についた、横位の撫で痕が凹線状を呈する。狭端側の表裏面にマンガン釉がかかる。漆喰付着。狭端約16cm、高さ約25.7cm。	
		広端部	a	赤色	良好		6個の紐圧痕。凹面の桶板紐圧痕は大きいが、痛みは浅い。陶器質に近い焼成良好。広端約23.9cm。	
第68 図 ・ 図版 36	平瓦	広端部角	a	赤色	良好		凹面の桶板紐圧痕は細く浅い。桶板痕が明瞭に残る。幅は4cmを計測する。漆喰付着。	



第66図 搅乱層等の出土遺物 (20)

第33表 搾乱層等出土遺物一覧 (14)

辨図番号 図版番号	造瓦 系統	種類	残存 部位	分類	色調	焼成	文様、形態、成形、保存状況など	出土地	
539	明朝系瓦	役瓦	頭部	大形	赤色	良好	表面にマンガン軸がかかる。ヒダは厚く稜が明瞭である。裏面に漆喰付着。厚さ約5cm。	撲乱	
540						良好	ヒダは細かく立ち上げてある。裏面に漆喰付着。厚さ約3cm。		
541			尾部	大形		良好	細片であるが、ヒダは厚く、その頂部も丸く表現されている。約5.7cm。		
542						良好	ヒダは浅く、丸く成形してある。裏面に漆喰。約3.8cm。		
543		花部分	花部分	大形		良好	ヒダの一部であるが、大きく立ち上がりも高い。約4.5cm。		
544						良好	ヒダは細く、多く立ち上がる。約3.4cm。	出土地 不明	
545			葉部	—	灰色	良好	ヒダは前資料同様に細く立ち上がる。約3.5cm。		
546						良い	花部分のみの造形。花弁の表面は線書きになる。花心は立体的に上面は円文を側面は直線をいれている。厚さ約4cm。	撲乱	
547						良い	葉状に輪郭を成形する。表面は葉脈が明確に描かれている。厚さ約2cm。		
548	明朝系埴瓦	敷瓦	完形	A	赤色	良好	表面は平面で撫でが良好であるが、僅かに凹面する。裏面は成形時の粗面をそのまま残す。縦×横=約25cm×約24.7cm。厚み3~3.3cm。重量2.9kg。	撲乱	
549			1/2欠落			良好	表面は平面で撫でがなされ、スムーズな面になる。器面は風化が認められる。裏面は粗面。側面は表面から裏面に向かい傾斜する。厚み3.8~3.9cm。		
550		壁瓦	一部分欠損	C-1	赤色	良好	一側面のみが風化し、その他の面はすべてにわたり漆喰の付着が認められる。また、一部にセメントもみられる。修理痕を示す。厚み約4cm。		
551						良好	基本的には還元焼成による灰色瓦。一側面と表面の一部が露出、その他の面には漆喰が覆う。器面風化が進む。厚み3.8~4.6cm。		
552		敷瓦	一部片	B	灰色	良好	三角の部分の資料。表面はスムーズで、凹面する。裏面も大きく凹面がみられる。厚み3.7~5cm。		

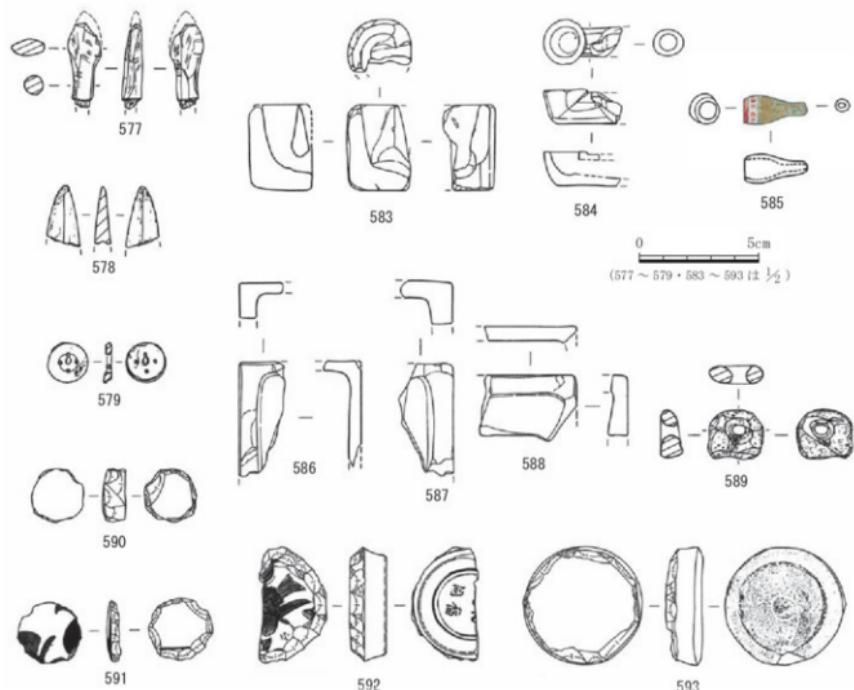
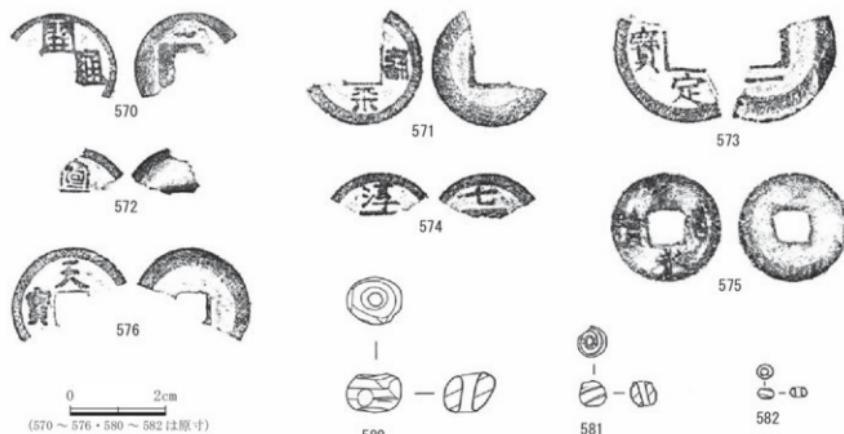


第67図 搅乱層等の出土遺物 (21)

第34表 損壊層等出土遺物一覧 (15)

単位: cm

種別	種類	残存部位	分類	色調	焼成	文様、形態、成形、保存状況など	出土地		
第 67 図 版 38	造瓦 系統	壁瓦	完形	C-2	赤色	良好 一側面と表面の一部が露胎し、その他の面は漆喰が付着する。縦×横=約31cm×約11cm。重量2.4kg。	撲乱		
			一部分欠損	C-1	灰色	良好 本製品にも漆喰の付着が著しく、付着の形状は前553資料と類似する。横約16cm、厚み4.5cm。	B-3 撲乱		
		敷瓦	完形	A	灰色	良好 正四角形製品の半分を割り取り、その面を細かく敲き整形した資料である。現場整形したものとみられ、一応完全形の製品とした。厚み3.8~3.9cm。表面が著しく窪み風化する。重量1.2kg。	撲乱		
種別	種類	器種	分類	残存部位	口径	器高	底径	観察事項	出土地
556			銅製 複輪	—	—	—	—	全体的に大きく開いて破損している。表面は鍍金されているが剥落が著しい。端部は鉛を留めるための孔が空けられている。重量1.66g。	B-5 撲乱
				—	—	—	—	端部に鉛が附属する。重量2.8g。	E-9 撲乱
557			銅製 飾り 金具	—	—	—	—	如意頭文を象った飾り金具で、端部は90°に折れる。柵や竿節に附属する飾り金具か、中央には毛彫りで唐草文が描かれる。魚々子は密に打たれており、切り合いで一部確認できる。毛彫りによって外縁が錆取られるが、魚々子によって切られている部分が確認できる。鋸で留めるための孔が開けられており、径は2.08mmとなる。外側は鍍金がなされているが、剥落が著しい。全体的に薄く、厚さは0.9mmとなる。総37.6mm、横6.5mm、重量0.8g。	撲乱
				—	—	—	—	如意頭文を象った飾り金具。鉛を留めるための孔が3箇所見られる。厚さは1.1mm、幅は36.9mm、重さは1.57gとなる。類何資料が直里城跡収蔵門地区から出土している。	南側 トレンチ
558			銅製 飾り 金具	—	—	—	—	如意頭文を象った飾り金具で、端部は90°に折れる。柵や竿節に附属する飾り金具か、中央には毛彫りで唐草文が描かれる。魚々子は密に打たれており、切り合いで一部確認できる。毛彫りによって外縁が錆取されるが、魚々子によって切られている部分が確認できる。鋸で留めるための孔が開けられており、径は2.08mmとなる。外側は鍍金がなされているが、剥落が著しい。全体的に薄く、厚さは0.9mmとなる。総37.6mm、横6.5mm、重量0.8g。	撲乱
				—	—	—	—	如意頭文を象った飾り金具。鉛を留めるための孔が3箇所見られる。厚さは1.1mm、幅は36.9mm、重さは1.57gとなる。類何資料が直里城跡収蔵門地区から出土している。	南側 トレンチ
559			銅製品	—	—	—	—	如意頭文を象った飾り金具。鉛を留めるための孔が3箇所見られる。厚さは1.1mm、幅は36.9mm、重さは1.57gとなる。類何資料が直里城跡収蔵門地区から出土している。	南側 トレンチ
				—	—	—	—	如意頭文を象った飾り金具。鉛を留めるための孔が3箇所見られる。厚さは1.1mm、幅は36.9mm、重さは1.57gとなる。類何資料が直里城跡収蔵門地区から出土している。	南側 トレンチ
560			小形の 鉗	—	—	—	—	両面共に鍍金がなされる。断面がやや弓形状に僅かに屈曲する。孔は大きき径は4mm。縦23.3mm、横7.3mm、厚みは2.5mm、重量1.77gとなる。	撲乱
				—	—	—	—	半管状の銅製品で用途は不明。端部の断面は「く」の字状に折れて、やや窄まる。厚さは0.7mm、重量2.07g。	撲乱
561			不明	—	—	—	—	半管状の銅製品で用途は不明。端部の断面は「く」の字状に折れて、やや窄まる。厚さは0.7mm、重量2.07g。	撲乱
				—	—	—	—	頭頂部は平坦で全体的に広がる。突端部は4面、面取りがなされる。断面形は正四角形に近い。重量7.78g。	撲乱
562			銅釘	—	—	—	—	頭頂部は平坦で全体的に広がる。突端部は4面、面取りがなされる。断面形は正四角形に近い。重量7.78g。	撲乱
				—	—	—	—	頭頂部は平坦で全体的に広がる。突端部は4面、面取りがなされる。断面形は正四角形に近い。重量7.78g。	撲乱
563			小型の 鉗	—	—	—	—	頭頂部は笠状となり、胸部の断面形は正方形形となる。頭部に芯部を貫通させて溶着している。全長は13.8mm、重量0.41g。	C-7 撲乱
				—	—	—	—	頭頂部は笠状となり、胸部の断面形は正方形形となる。頭部に芯部を貫通させて溶着している。全長は13.8mm、重量0.41g。	C-7 撲乱
564			銅製鉗	—	—	—	—	頭頂部は「T」字状となる。突端部が欠損しているため、全長は不明。断面形は長方形形に近い。重量5.58g。	撲乱
				—	—	—	—	頭頂部は「T」字状となる。突端部が欠損しているため、全長は不明。断面形は長方形形に近い。重量5.58g。	撲乱
565			銅製鉗	—	—	—	—	頭頂部は笠状となり、胸部の断面形は正方形形となる。頭部に芯部を貫通させて溶着している。全長は13.8mm、重量0.41g。	C-7 撲乱
				—	—	—	—	頭頂部は笠状となり、胸部の断面形は正方形形となる。突端部が欠損しているため、全長は不明。重量0.55g。	F-9 撲乱
566			銅製鉗	—	—	—	—	頭頂部は笠状となり、胸部の断面形は正方形形となる。突端部が欠損しているため、全長は不明。重量0.55g。	F-9 撲乱
				—	—	—	—	頭頂部は笠状となり、胸部の断面形は正方形形となる。突端部が欠損しているため、全長は不明。重量0.55g。	F-9 撲乱
567			銅製 釘頭	—	—	—	—	型造で中央に鉛を入れる5.6×5.6mmの孔が開けられている。猪目状の瘤みが見られるが、透かしにはなっていない。類何資料が直里城跡内原地区から出土している。重量52.3g。	撲乱
				—	—	—	—	頭頂部は平坦に仕上げる。頭部は「T」字状となり、断面形は長方形形に近い。突端部が欠損しているため、全長は不明。重量26.3g。	撲乱
568			鉄釘	—	—	—	—	頭頂部は平坦に仕上げる。頭部は「T」字状となり、断面形は長方形形に近い。突端部が欠損しているため、全長は不明。重量26.3g。	撲乱
				—	—	—	—	頭頂部は平坦に仕上げる。頭部は「T」字状となり、断面形は正方形形となる。突端部が欠損しているため、全長は不明。重量7.98g。	撲乱
622			粒状 銅滓	—	—	—	—	形状は歪な球状を呈している。幅5.9mm、重量0.4g。	F-9 撲乱
				—	—	—	—	形状は歪な球状を呈している。幅7.0mm、重量0.6g。	
				—	—	—	—	形状は歪な球状を呈している。幅6.7mm、重量0.5g。	
				—	—	—	—	形状は歪な球状を呈している。幅9.5mm、重量0.7g。	
623			銅製品	—	—	—	—	頭部は「L」字状となるが、僅かに下方に折れる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量76.6g。	
				—	—	—	—	頭部は「L」字状となる。やや頭部が内傾し、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.0cm。重量98.9g。	
				—	—	—	—	頭部は「ク」字状となる。頭部近くで「く」字状に曲がり、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量100.3g。	
				—	—	—	—	頭部は「ク」字状となる。頭部近くで「く」字状に曲がり、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量100.3g。	
624			鉄釘	—	—	—	—	頭部は「L」字状となるが、僅かに下方に折れる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量76.6g。	
				—	—	—	—	頭部は「L」字状となる。やや頭部が内傾し、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.0cm。重量98.9g。	
				—	—	—	—	頭部は「ク」字状となる。頭部近くで「く」字状に曲がり、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量100.3g。	
				—	—	—	—	頭部は「ク」字状となる。頭部近くで「く」字状に曲がり、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量100.3g。	
625			鉄製品	—	—	—	—	頭部は「L」字状となるが、僅かに下方に折れる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量76.6g。	
				—	—	—	—	頭部は「L」字状となる。やや頭部が内傾し、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.0cm。重量98.9g。	
				—	—	—	—	頭部は「ク」字状となる。頭部近くで「く」字状に曲がり、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量100.3g。	
				—	—	—	—	頭部は「ク」字状となる。頭部近くで「く」字状に曲がり、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量100.3g。	
626				—	—	—	—	頭部は「L」字状となるが、僅かに下方に折れる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量76.6g。	
				—	—	—	—	頭部は「L」字状となる。やや頭部が内傾し、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.0cm。重量98.9g。	
				—	—	—	—	頭部は「ク」字状となる。頭部近くで「く」字状に曲がり、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量100.3g。	
				—	—	—	—	頭部は「ク」字状となる。頭部近くで「く」字状に曲がり、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量100.3g。	
627				—	—	—	—	頭部は「L」字状となるが、僅かに下方に折れる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量76.6g。	
				—	—	—	—	頭部は「L」字状となる。やや頭部が内傾し、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.0cm。重量98.9g。	
				—	—	—	—	頭部は「ク」字状となる。頭部近くで「く」字状に曲がり、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量100.3g。	
				—	—	—	—	頭部は「ク」字状となる。頭部近くで「く」字状に曲がり、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量100.3g。	
628				—	—	—	—	頭部は「ク」字状となる。頭部近くで「く」字状に曲がり、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量100.3g。	
				—	—	—	—	頭部は「ク」字状となる。頭部近くで「く」字状に曲がり、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量100.3g。	
				—	—	—	—	頭部は「ク」字状となる。頭部近くで「く」字状に曲がり、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量100.3g。	
				—	—	—	—	頭部は「ク」字状となる。頭部近くで「く」字状に曲がり、頭頂部は平坦となる。断面形は正方形に近い。全長17.3cm。重量100.3g。	



第68図 搅乱層等の出土遺物 (22)

第35表 搅乱層等出土遺物一覧 (16)

種別番号 図版番号	種類	器種	分類/ 書体	残存 部位	口径	器高	底径	概要事項	出土地
570 571 572 573 574 575	銭貨	開○通○	真書	—	—	—	—	開元通寶。初鋤年：621年。銭文と輪が明瞭。背は輪および郭とともに潤線。背上に月。外径23.3mm、内径19.6mm、最大銭厚1.0mm、残存重量1.37g。	
		○平通○	篆書	—	—	—	—	治平通寶。初鋤年：1064年。銭文と輪が明瞭。背に關しては、輪が潤線。外径24.8mm、内径18.9mm、最大銭厚1.1mm、残存重量2.12g。	
		宣○〇〇	篆書	—	—	—	—	宣和通寶か宣和元寶。初鋤年：1119年。輪が明瞭。最大銭厚1.1mm、残存重量0.61g。	
		〇定〇寶	真書	—	—	—	—	嘉定通寶。初鋤年：1208年。背の輪は潤線。背下「一」。最大銭厚1.9mm、残存重量3.11g。	
		淳〇〇〇	真書	—	—	—	—	淳祐元寶。初鋤年：1241年。銭文および輪が明瞭。背の郭が潤線。背上「七」。最大銭厚1.1mm、残存重量1.01g。	
		寛永通寶	真書	—	—	—	—	重期。初鋤年：1697年。銭文はやや不明瞭だが、両面の輪は確認できる。外径22.6mm、内径19.1mm、孔径6.3mm、最大銭厚1.1mm、残存重量2.13g。	
576	骨製品	天〇〇寶	真書	—	—	—	—	銭文も輪も明瞭。郭は一部崩れ。背の輪は潤線となる。外径24.2mm、内径19.4mm、最大銭厚1.2mm、残存重量1.72g。	
577		—	骨越	—	—	—	—	刀部断面を菱形に加工して両刃を作り出すもの。刀部や基部の大半を失っており、縫合が不明瞭。刀部は研磨される。重量12.6gを測る。	不明
578		—		—	—	—	—	基部が欠損した方断片。両刃を作り出すもので、丁寧に研磨されている。重量1.3gを測る。	
579		ボタン	—	—	—	—	—	外縁部に段を作る。資料外面の形状と外縁部の磨耗状態から、段は外縁部全体に削られたものではなく、一部に作り出されたものと思われる。厚さも均等ではなく、難に成形されている。重量は0.5gを測る。	
580	玉製品	—	丸玉	—	—	—	—	彼然の為成形している。材質：ガラス。色調：黒。高さ7.1mm、最大径10.9mm、孔径3.2mm、重量1.43g。	
581		—		—	—	—	—	表面に螺旋状の筋が明瞭に観察できる。材質：ガラス。色調：水色。高さ4.5mm、最大径5.8mm、孔径1.8mm、重量0.23g。	D-10 搅乱
582		—		—	—	—	—	表面に螺旋状の筋が明瞭に観察できる。材質：ガラス。色調：水色。高さ1.4mm、最大径2.8mm、孔径1.1mm、重量0.02g。	C-6 搅乱
583 584 585	煙管	—	土製品	雁首	—	—	—	円筒形を呈する。温湿度に赤色、黒色、白色粒子がみられる。高さ3.5mm、残存長軸2.6mm、残存重量15.3g。	
		—			—	—	—	多角的に形作った後、器面を滑らかに整形する。外径1.8mm、内径1.2mm、高さ1.4mm、残存長軸3.2mm、残存重量5.4g。	
		—			吸口	—	—	小口周辺に連点記を配し、その周りに縁輪を施すが一部剥げる。小口外径10mm、内径7mm、吸口外径5mm、内径2mm、長軸26mm、重量2.3g。	
586	石製品	—	墨池	—	—	—	—	墨池部の資料であり、硯背が平坦に成形される。墨池部には使用痕が残る。本資料は硯片のため長軸、短軸、高さともに不明であるが、残存重量は15.6gである。	
587		—		硯側	—	—	—	硯側部の資料で、作製時の痕跡が硯側の内面に残る。硯面上には使用痕が確認できる。本製品は破損が著しいため長軸、短軸、高さともに不明で、残存重量23.8gである。	
588		—	墨池	—	—	—	—	墨池の資料である。墨池側から頬斜しており、その方向に沿って細かな使用痕が認められる。硯背は平面に成形されるものの、欠損が著しいため長軸、短軸、高さともに把握できないが、残存重量は13.9gとなっている。	
589		—	有孔製品	—	—	—	—	長軸6mm、短軸4mmの孔を穿った有孔製品である。上部から下部にかけて厚みを増し、下端部はほぼ平坦に仕上げる。また、表裏両面とも数ヶ所に面取りされる。本製品の長軸2.2cm、短軸2.0cm、平均厚約1.7cm、重量4.5gとなっている。	不明
590	円盤状製品	—	青磁	完形	—	—	—	脚部を打削調整して円形に仕上げている。長径2.0cm、厚さ1.9cm、重量5.6g。	
591		—	中国産 染付	完形	—	—	—	染付の脚部を丁寧に打削調整し、ほぼ円形に仕上げている。長径2.5cm、厚さ0.5cm、重量3.8g。	D-10 搅乱
592		—		1/2 残存	—	—	—	高台を残して丁寧に打削調整されている。見込みに鳥文を描き、外底に2条の團扇と口回りの文字を描く。長径4.3cm、厚さ1.5cm、重量12.0g。	C-6 搅乱
593		—	黒釉陶器	完形	—	—	—	高台を残して打削調整されている。長径4.8cm、厚さ1.2cm、重量35.0g。	

第4章 遺物の種類別概観

第1節 青磁

総数 1132 点が出土している。器種別にみると、碗、皿、盤、鉢、小杯、瓶、袋物の脚部、香炉、蓋、酒会壺などが出土しており、碗、皿が主体をなす。年代別にみると 14 世紀後半～15 世紀後半のものが主であり、15 世紀～16 世紀頃のものも若干出土している。碗・皿・盤に関しては口縁形態から分類を行った。以下に分類の詳細を記す。

1. 碗

a) 口縁部：口縁形態から I～III 類に分類し、さらに I 類は文様によって細分した。

I 類一直口口縁

- A 一外面に錦蓮弁文（第 33 図 161）
- B 一外面に無錦蓮弁文（第 19 図 19・第 47 図 260～262）
- C 一外面に線描蓮弁文（第 19 図 20・第 33 図 162・第 47 図 263）
- D 一外面に雷文帯（第 33 図 163・第 47 図 264・265）
- E 一その他の有文（第 19 図 21）
- F 一内・外面無文（第 19 図 22・第 41 図 208・第 45 図 258・第 47 図 266）

II 類一玉縁口縁（第 19 図 23・24・第 33 図 164）

III 類一外反口縁（第 19 図 25・26・第 26 図 137・第 33 図 165～167・第 41 図 209・210）

b) 底部：外面に無錦蓮弁文（第 13 図 1・第 26 図 138・第 41 図 215）外面に線描蓮弁文（第 13 図 2）内・外面無文（第 33 図 168・第 41 図 211～214・第 47 図 267・268）

2. 皿

a) 口縁部：口縁形態から I～V 類に分類し、さらに I・II 類は文様によって細分した。

I 類一口折皿

- A 一外面に無錦蓮弁文（第 33 図 169・170・第 47 図 269）
- B 一内・外面有文（小片の為図化略）
- C 一内・外面無文（第 47 図 270）

II 類一外反口縁

- A 一外面に無錦蓮弁文（第 26 図 139・第 47 図 271・272）
- B 一内・外面有文（第 33 図 172・第 47 図 273～275）
- C 一外面無文・内面有文（第 33 図 173・第 41 図 216）
- D 一内・外面無文（第 33 図 174・175・第 41 図 217・第 47 図 276・277）

III 類一玉縁口縁。内・外面ともに無文（第 19 図 27・第 47 図 278・279）

IV 類一直口口縁。内・外面ともに無文（第 47 図 280）

V 類一棱花皿（第 33 図 171・第 47 図 281・282）

b) 底部：内底に印花文（第 41 図 218・第 47 図 283）、内・外面無文（第 19 図 28・第 41 図 219）、小皿（第 33 図 176・第 47 図 284）、菊花皿（第 13 図 3）

3. 盤

a) 口縁部：口縁部の形態から I～IV 類に分類した。

I 類一跨縁口縁で端部を上方につまみ上げる（第 19 図 29・第 41 図 220・第 47 図 285）

II 類一跨縁口縁で、口唇をわずかに凹ませる（第 33 図 178・第 47 図 286・287）

III類一直口口縁（第47図288）

IV類一稜花盤（第47図289）

b) 底部：内面有文（第19図30・第41図221・第48図290）、内・外面無文（第19図31・第41図222～223・第48図291）

4. その他の器種

小杯（第19図32）、鉢（第26図140・第48図292・293）、瓶（第33図177・第48図294～296）、袋物の脚部（第48図297）、香炉（第48図298）、束口碗（第48図299）、酒会壺（第48図300）、蓋

第2節 白磁

白磁の出土数は、総計250点である。その中から特徴的なもの24点を図化した。福建省で焼かれたものでも景德镇産のものとの区別が難しいものも多い（田中2003）、产地での分類は行わなかった。そのため、产地については、判別可能なもののみを記した。年代や产地は、主に森田分類（森田1982）と新垣分類（新垣・瀬戸2005）を参考にした。

1. 遺構出土資料

S R O 2 第15図14は、型作りの角杯である。総釉後、豊付けの釉薬を搔き取り露胎させる。

後之御庭地区 第19図33は、無文の直口碗である。口縁は直状に開き、口唇を平坦に成形する。釉調は青白濁色を呈す。小片のため、明言はできないが、新垣分類の景德镇窑系白磁A類碗Iに属すると思われる。34・35は、底径の小さい皿である。器形は、口縁が広がり、比較的深底になると想われる。34は、高台の断面が方形を呈し、外底が円錐状に盛り上がるるものである。釉には細かい貫入があり、底部は露胎する。森本分類D類に相当する。35も底部が露胎し、高台は断面形状を呈すが、豊付け端部に段を付けて削る。また、約0.8cm単位の回転ヘラ削りの痕が確認できる。釉は透明な青白色を呈し、貫入は認められない。

石匣遺構 第26図141は小壺と思われる資料の肩部片である。ナデ肩を呈し、胴部で最大径を測るものと思われる。

石積み遺構3 第33図179は薄手の資料で、口径が13.4cmを測る皿である。釉調は、失透性の青白色で貫入は認められない。同図180は、高台の一部を欠損した皿の底部片である。透明な白濁色の釉薬が、見込みから高台外側まで施される。いずれも小片のため、森田・新垣両氏の分類に当てはめることは難しいが、15世紀前半までは遡らないと思われる。

集石遺構 第41図224は、高台内割りの浅い碗である。高台断面は方形を呈す。見込みには印花文を施す。釉には貫入があり、施釉範囲は見込みから体部下位までと思われる。ロクロの回転は反時計回りである。森本分類D群に相当すると思われる。

2. 遺構出土資料

i) 碗（第48図301・302・312）

口縁部 301は、口縁端部が僅かに反る碗で、徳化窑産のものと思われる。302は、鎌縁状の口縁を持つ資料で、蓋が付属すると思われるものである。総釉後、口唇は削られ釉剥ぎされる。

底部 312は、重量のある底部片である。高台の断面は方形で、高台内は円錐状に盛り上がる。豊付けは、若干斜位に削られており、内側端部のみが接地する。釉調は白濁色を呈し、貫入が認められる。見込みから体部下位までの施釉と思われる。見込みには印花文が施される。森本分類C群に相当するものである。

ii) 皿（第48図303～307・313～315）

外反 303・304は、口縁が外反する資料である。303は、豊付け際を面取りし、高台断面を三角状に削り出す。

腰に丸味を持ち、底部見込みには圓線が廻る。文様は、内体面に型押しの草花文を配す。釉色は青白濁色を呈し、外底は露胎で、高台内側に砂が付着する。新垣分類の景德鎮窯系白磁B類皿IIに相当する資料である。

端反り・直口・内湾 305は、いわゆる端反り口縁皿である。丸味を帯びた腰部から、緩やかに口縁へ移行するもので、文様は施されない。釉調は、透明な青白色を呈す。年代は、16世紀頃と思われる。306は、口縁が直口する浅皿である。釉薬の塗布は、外面腰部までしか施されず、釉には貫入がみられる。森本分類D群に相当すると思われる。307は、口縁が内湾する皿である。釉には貫入があり、焼成は悪い。

底部 313は、断面三角状の高台を有するものである。高台は薄く、比較的低い。総釉後、豊付けを斜位に削り、釉を剥ぐ。森田分類E群に相当する。314は、高台断面が方形形状を呈するものである。底面の器壁は薄い。315は、基筒底を呈す資料である。総釉後、豊付けの釉薬を搔き取り露胎にする。

iii) 杯 (第48図 308・309・316)

308は、腰に丸味を帯びるものである。高台を欠く資料だが、器形や胎土の特徴から、新垣分類福建・広東系白磁D類杯IIに属する資料と思われる。309・316は、型作りの小杯である。309は、全形が復元できる資料で、口縁は直口し、丸味を帯びた腰部からやや開き気味に立ち上がる。高台内削りは浅く、高台は“ハ”の字状に開く。透明な釉薬が底部を除いて施される。徳化窯産である。316は、底部片である。総釉後に豊付けを削り、釉剥ぎされる。

iv) その他の器種 (第48図 310・311)

鉢 310は、鼈甲口口縁の鉢である。器壁は厚手に造られる。釉調は青白濁色を呈す。新垣分類の福建・広東系白磁B類鉢IIに相当する資料と思われる。

香炉 311は、口縁内側を肥厚させた香炉と思われる口縁部片である。器形は、ほぼ筒状を呈すと思われる。透明な釉薬が施されており、貫入が入る。

第3節 染付

総数308点が出土している。器種別にみると、碗、皿、鉢、盤、瓶、大瓶などが出土しており、碗・皿が主体をなす。产地別にみると福建・広東系、景德鎮系、漳州窯系、徳化窯系などがある。年代別にみると16世紀～17世紀及び17世紀～18世紀のものが主体を占め、14世紀後半～15世紀後半のものが若干出土している。碗、皿に関しては口縁部の形態から分類を行った。以下に詳細を記す。

1. 碗

a) 口縁部：口縁部の形態から I～II類に分類した。

I類一直口口縁 (第26図142・第27図159・第49図317～321)

II類一外反口縁 (第19図36・37・第33図181・第49図322～325)

b) 底部：外面にコンニャク印判を施すもの (第13図4)、小型の碗 (第49図326)、外面に草花文を描くもの (第49図327)、文様構成不明のもの (第13図5)

2. 皿

a) 口縁部：口縁部の形態から I～II類に分類した。

I類一直口口縁 (第49図328)

II類一外反口縁 (第49図329)

B) 底部：内底に唐草文を描くもの (第13図6)、内底に玉取獅子文を描くもの (第49図330)、内底に山水文を描くもの (第49図332)、大皿 (第19図38)、文様構成不明のもの (第37図204・第49図331)

3. その他の器種

鉢 (第49図333)、瓶 (第19図39・第49図334)、大瓶 (第49図336)、盤 (第49図335)

第4節 褐釉陶器

1. 中国産

今回の調査では、計 3260 点 (33.6 kg) の資料が得られた。概ね壺形の資料であるが、他の器種も若干数検出された。壺形の資料は、様々な形態の口縁部が得られたので、口頸部の形態から以下のように大きく 3 類に分類し、I 類は 3 種に細分した。

I a 類：頸部が内傾する中～大型の四耳壺の一群（第 19 図 44・第 26 図 143・第 42 図 225・226・第 50 図 342～344・356）。

I b₁ 類：口頸部が内傾する有頸壺（第 42 図 227～229・第 50 図 345・346）。

I b₂ 類：口頸部が内傾する無頸壺（第 50 図 347）。

II 類：口頸部が直状のもの（第 13 図 8・9・第 50 図 348・349）。

III 類：口頸部が外反するもの（第 50 図 350・351）。

i) 遺構内出土資料

門番詰所・中門・寄溝地区／石囲い遺構 第 13 図 8 は、II 類の口縁部で、肥厚が微弱なものである。口唇は丸味を帯びる。肩部は、口頸部に対してほぼ垂直方向に張るため、胴上部に最大径を持つ器形となると思われる。9 は、8 と同一の個体のものと思われる肩部片で、縦耳の把手が貼付される。把手の形状は、ブリッジ外側が幅広く作られる。第 26 図 143 は、I a 類の底部で立ち上がり部外面に括れを持つものである。

後之御庭地区 第 19 図 44 は、壺形 I a 類の底部である。立ち上がり部外面の括れが微弱なもので、緩やかに立ち上がる。

集石遺構 第 42 図 225・226 は、I a 類の口縁部片である。両者とも断面方形状を呈す口縁の肥厚部が比較的薄いもので、いわゆる怒り肩を呈す。口縁内面の他に、口唇上面にも回転ナデによって凹線が形成される。口縁の肥厚が比較的薄いタイプで、口唇は幅広く作られている。

第 42 図 227・228・229 は、I b₁ 類の口縁部片である。227 は、頸部に 1 条の圓線が廻るものである。頸下部で屈曲し、肩部を作る。228 は、頸部に 2 ～ 3 条の圓線が廻るものである。227 よりも、若干口唇を幅広く作っており、口径は若干小さい。229 は、227・228 に比べて小型であるが、同様の器形を呈すと思われる。

第 42 図 230 は、擂鉢である。口縁部断面は鎌状を呈し、肥厚下部が突出する。また、口縁部は内湾し、金魚鉢状の器形を呈す。

ii) 遺構外出土資料

a. 壺形（第 50 図 342～351・356・357）

I a 類口縁部 肉厚で、外縁部を外に張り出して口唇を幅広く成形する。口縁内面は、回転ナデにより凹線を形成する。断面方形状を呈する口縁の肥厚部が、薄いもの（第 50 図 342）と比較的厚いもの（343・344）に分けられる。いわゆる怒り肩を呈す。

342 は、第 42 図 225・226 と同様の資料である。頸部から肩部にかけて曲線的に移行し、肩部から胴上部で最大径を測り、緩やかに底部へ移行すると思われる。内面は、頸部で段を形成する。

343・344 は、225・226・342 と比較して肥厚部は厚いものの、口径は小振りだが、同様の器形を呈すと思われる。また、343 は 344 と比較して口径は小さいが、肥厚部は厚く、口唇も幅広く作られている。

I a 類底部 上げ底になるもので、立ち上がり部外面に括れを持つもの（第 26 図 143）と持たないもの（第 50 図 356）がある。356 は、角度をもって立ち上がるもので、立ち上がり部外面は、内湾しながら胴部へ至る。

I b₁ 類 口縁外縁部が丸味を帯びる小型～中型の壺である。肩部が張る器形が想定される。絶種後に口唇・内器面を削り、露胎する。345 は、第 42 図 227・228 と同様の資料と思われるものである。全面的に釉薬が剥が

れどおり、器面の保存状態は悪い。

346 は、口縁部が断面三角状に肥厚するものである。口唇部は、平坦に成形されるが、口縁肥厚下部は丸味を帯びる。釉薬は剥がれているため判然としない。口唇は施釉後に削っていると思われる。

I b₂類 347 は小形の壺である。口縁部は端部の折り返しによって成形され、胴部から口縁部にかけて内傾する。口縁内面は、回転ナデによると思われる凹線が形成され、折り返しによって作られた口縁部の丸味を、より際立たせている。

II 類 348 は、口縁部の断面がカマボコ状に肥厚し、肥厚下部で稜を作るものである。頸部は、緩やかに角度を変えて肩部へ移行するため、ナデ肩状の器形を呈すると思われる。349 は、口縁部の断面が三角状になるものであるが、作りが難なため、切る場所によって断面の形状が異なる。348 と同様の器形を呈すと思われるが、348 に比べて器壁は厚く、若干大型の製品になると思われる。

III 類 350・351 は、両資料とも口縁の肥厚が微弱な小型の製品である。351 は、350 に比べて口頸部が外傾気味に聞くものである。350 は肥厚下部に、351 は肥厚中央にそれぞれ稜を作る。

その他底部 357 は、I a 類以外の資料に属する底部片である。上げ底状にはならず、底面と胴部の器壁がほぼ均等に成形される。

b. その他の器種（第 50 図 352～355・358）

鉢形 352 は、口縁部がやや内傾するもので、別の器種の可能性も考えられる。口縁部は内面を肥厚させ、口唇を幅広く成形する。358 は、擂鉢の底部と思われる資料である。底面外縁部は突出するため、立ち上がり部外面は括れが強調される。

蓋 353 のみが得られた。底が平坦に成形された端部片で、撮は確認されなかった。端部上面は稜を持つが、下面は丸味を持たせる。

器種不明胴部 354 は、文様が施される資料である。内面は強くナデされるため、器面の起伏が著しい。355 は、突帯が貼付された資料である。破片上部には、何らかの文様を施したと思われる沈線が確認できる。

2. タイ産

計 400 点 (6.6 kg) の資料が得られており、中国産と同じように壺形が大半を占めている。なお、第 50 図 360 は、無釉陶器と思われるが、便宜上本節で報告する。

I 類：頸部が内傾するもので、中国産掲釉陶器 I a 類と同様の器形を呈すもの（第 50 図 359）。

II 類：頸部が外反して聞くもの。口縁の形態によって 3 種に細分できる。

a₁：口縁部を内外断面三角状に肥厚させたもので、口唇を平坦に成形するもの（第 19 図 40・第 51 図 362 ～364）。

a₂：口縁部を内外断面三角状に肥厚させたもので、口唇を平坦に成形しないもの（第 19 図 41・第 51 図 365）。

b：口縁部外面が丸味を帯びて肥厚するもの（第 19 図 42・第 33 図 182・第 51 図 366）。

i) 遺構内出土資料

後之御庭地区 第 19 図 40・41・42 は、壺形の資料である。40 は、II a₁ 類の口縁部で、外側が厚く肥厚するものである。41 は、II a₂ 類の口縁部である。a₁ 類と b 類の中間形態で、口縁内面は断面三角状に肥厚し、口唇から口縁外面にかけて丸味を帯びて肥厚する。口唇は丸味を帯びる。42 は、II b 類の口縁部で、丸味を帯びて肥厚する。43 は、器種不明の底部で、破片上部に僅かに釉薬の残る資料である。立ち上がりは急で、底部外縁に稜を形成する。また、内面は段を作らず、丸味を帯びて立ち上がる。

石積み遺構 3 第 33 図 182 は、壺形 II b 類の口縁部片である。口縁内面の肥厚はみられず、外面のみが丸味をもって肥厚する。

集石遺構 第 42 図 231 は、器種不明の口縁部片で、口縁内面を耳状に肥厚させたものである。口唇部は、回

転ナデにより凹線を形成する。器形は、筒状になると思われる。

ii) 遺構外出土資料

a. 壺形 (第50図359・第51図362~366)

I類 359は、比較的大形の資料であるが、口縁部の磨耗が著しく、口縁外縁部は破損している。重量感のある資料で、このタイプの壺に特徴的な内面の段は、高く明瞭に成形される。

IIa₁類 口縁部の肥厚は、外側が厚いもの(362・364)と、内外ほぼ均等なもの(363)がある。363は、口唇上に凹線が施される。364は、口縁外側の肥厚が微弱なものである。

IIa₂類 365は、口唇上に粘土紐を貼付して、断面が緩やかな山状になるように肥厚させたものである。

b. 器種不明 (第50図361・第51図367)

口縁部 367は、外傾する口縁部を若干肥厚させる資料である。破片下部の形状から、内面に段を作つて口縁が開く器形を呈するか、比較的浅底になると思われる。

底部 361は、器台の脚部と思われる資料であるが、合子の可能性も考えられる。外面は丸味を帯び、破損部で角度を変えると思われる。

c. 無釉陶器 (第50図360)

360のみが得られた。大型になるとと思われる鉢の口縁部片である。パン・ブーン窯産のものと思われる。口縁は、外側に丸味を帯びて肥厚するもので、類似資料は、首里城跡城の下地区で得られている(羽方2004)。

第5節 タイ産土器

今回得られたタイ産の土器は、全て半練の蓋である。出土点数は13点で、比較的大形の破片4点を選んで図化した。全て端部片であり、振部は得られていない。本報告は、端部における突起の形態の他に、器形についても言及された『首里城跡一下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書』の分類(城間2001)を参考にした。

第51図368・369は、底面から緩やかに立ち上がり、端部付近で軽く外側に折れるタイプである。両資料とも、端部を折りたたみ、先端の突起を摘み上げて仕上げている(IIc類)。造りは、若干雑な印象を受ける。

第26図144は、底面から緩やかに立ち上がり、折りたたまれた端部が若干肥厚するもので、突起は断面三角状に成形されている(IIIb類)。調整は丁寧で、突起部は工具を使用して成形され、段を作る。

第51図370は、底面から緩やかに立ち上がり、端部に至るものである。断面三角状の突起を持つため、Ib類の範疇に入るとと思われるが、端部を指先あるいは丸味のある工具を使って潰し、波状に成形している。色調や胎土も異なるため、上記3点の資料とは産地が異なる可能性が考えられる。

第36表 タイ産半練の分類(城間2001)

蓋の形態	I	底面から穂やかに膨らみながら立ち上がり端部に至るもの。
	II	底面から穂やかに立ち上がり、端部付近で軽く外側に折れて端部へ至るもの。
	III	底面から穂やかに立ち上がり、端部が肥厚するもの。
	IV	底面から穂やかに立ち上がり、端部付近でIb類よりも内側に折れて端部に至るもの。
端部の突起	a	端部を折りたたみ、先端の突起を断面丸肩状に仕上げるもの。
	b	端部を折りたたみ、先端の突起を断面三角状に仕上げるもの。
	c	端部を折りたたみ、先端の突起を摘み上げて仕上げるもの。
	d	端部を折り曲げて内側に向かって水平にするもの。

第6節 黒釉陶器

今回、95点出土しており、うち12点を図示する。何れも碗で所謂「天目茶碗」である。口縁部が一端窄まつ

て外反し、高台内割りは浅く、高台際を水平に削る。釉調は黒褐色、灰黄褐色まで見られ、混入物も様々である。全体的に高台の成形は雑で白色砂粒や粘土塊が付着しているものも見られる。器形は全て新垣力の分類ではⅠ類（新垣 2004）、森本朝子の分類（森本 1994）ではⅧ類に相当する。口唇部が丸みを帯びるものと尖るものに細分することができる以外に器形が大きく異なることはない。時期は 14 世紀中頃から 15 世紀中頃に収まるものと考えられる。

第 7 節 その他の輸入陶磁器

韓半島産陶磁器（第 51 図 375～378）

今回、6 点出土しており、うち 4 点図示する。全て小片のため器種については不明である。全て胎土は密で灰白色を呈する。

ベトナム産染付（第 20 図 47・第 34 図 188・第 51 図 379～382）

今回、14 点出土しており、そのうち 6 点図示する。一部、器面に火を受けたものも見られる。器種は碗と瓶が見られる。

彩釉陶器（第 20 図 48・第 26 図 145・第 51 図 383）

今回、5 点出土しており、そのうち 3 点図示する。

瑠璃釉磁器

今回、3 点出土しているが、何れも胴部の小片のため図は割愛する。型造りで器種は杯と小碗か。何れも搅乱層からの出土である。

中国産色絵（第 13 図 7・第 49 図 337～341）

今回、7 点出土しており、そのうち 6 点図示する。

第 8 節 本土産陶磁器

本地区の調査によって得られた本土産陶磁器は 490 点余り（3.2 kg）にのぼる。中でも染付の出土量が最も多く、全体の 49% を占める。

1. 本土産磁器

i) 染付

a. 肥前系（第 34 図 189・第 51 図 384～390・第 52 図 391～393）

碗口縁 384・386 は、口縁が直状を呈す資料である。384 は、体部外面に荒磯文と思われる文様を施すもので、外面口唇直下には 2 条の、内面には 1 条の圓線が廻る。東南アジアに多く輸出されたものである。386 は小振りの碗で、草花文が施される。口唇直下外面には 1 条の、内面には 3 条の圓線がそれぞれ廻る。

385 は、いわゆる「くらわんか碗」に属する資料である。口縁がやや内湾する小型の資料で、体部外面に文様が施されるが、小片のため構図は不明である。

碗底部 387・388 は、いわゆる「くらわんか碗」の底部片である。両者とも小振りで、厚い高台を有する。387 は、388 に比べて若干大型の資料で、腰部が張らずに口縁へ移行するものである。文様は、外器面に折枝文を描く。388 は絶釉後、疊付けを粗く削って釉を搔き取る。圓線が腰部下位に 1 条、高台に 2 条施される。390・391 も高台は小振りだが、387・388 に比べると若干腰部が張るものである。391 は絶釉後、疊付けを釉剥ぎする。見込みには目跡が残る。外面腰部には何らかの文様（伝か）を連続して廻らせ、高台脇及び高台に計 3 条の圓線を施す。また、見込みにも文様を描き、1 条の圓線を施す。390 は、391 と似た器形を呈し、高台の径も概ね等しくなると思われるが、口径が若干大きくなると思われる。見込み部分が比較的広く成形されており、中央に五花弁

を描く。389 は、高台の一部を欠いた資料である。高台は低く、内底面の施釉は稚である。圈線は、腰部下位と高台にそれぞれ 1 条ずつ、見込みに 2 条が廻る。

皿 189 は、石積み遺構 1 より出土した皿の底部片と思われる資料である。高台を有さない小片のため、碗の可能性も考えられる。

蓋 392 は、見込みに 2 条の圈線の中に唐草文を描く。外面は、腰部に雲文（？）、高台に櫛齒状の連続文、底面に 1 条の圈線とその中央に何らかの文字を描く。

瓶 393 は胴部片である。外器面には、網目文が施される。

b. その他（第 52 図 394～396）

産地が特定できない資料を一括した。3 点を図化したが、これらは中国産に入る可能性もある。

394 は瓶の口縁部片である。395・396 は、口縁が直状に開く碗である。395 は、腰部にやや丸味を有し、頸部で若干角度を変えて開くもので、口唇は丸味を帯びる。器壁は比較的薄い。見込みは蛇の目状に露胎すると思われる。外面口唇直下には 1 条の圈線が施され、その下部に文様を施す。396 は、宝文または何らかの吉祥文を配すものと思われ、外面口唇直下には 1 条の圈線が廻る。内面体部下位は露胎となる。

ii) その他の磁器

第 52 図 399 は色絵、同図 397・398、図版 29 597～615 は印判手、同図版 616～618 はクロム青磁である。これらの資料は本文を割愛し、所見は第 25 表にまとめた。また、その他の近・現代の資料は集計（第 49 表）のみを行った。

2. 本土産陶器

急須 第 52 図 400・401 は、両資料とも同様の器形で、法量も概ね等しいと思われる。口縁は、内傾して蓋受けを有す。口縁直下には把手を横位に貼付するが、いずれも破損しておりその形状は不明である。

碗 第 52 図 402・403 は、口縁部片である。402 は、筒型碗と思われる資料で、腰部が屈曲して直状に口縁に至る。また、口唇は舌状を呈す。403 は、直状に外傾するもので、外器面には鉄絵による文様が施される。

鉢 第 52 図 404 は、円筒状の器形を呈す口縁部片である。口縁内側を肥厚させ、口唇を広く成形する。外器面は、鮫肌釉を施す。内面は無釉である。同図 405 は、逆 L 字状に屈曲した鉄縁口縁を有する資料である。口唇は波状に波打つが、その成形は稚である。同図 406 も逆 L 字状を呈する口縁部片であるが、口唇の加飾はみられない。胎土は粗く、成形は稚である。同図 407 は、口縁を鉄状に屈曲させるもので、大型の資料である。緑色系の釉を施し、内面下半は波状に施釉される。東南アジアに多く輸出されたものである。

壺 第 52 図 408 は、小壺の口縁部片である。口縁は、断面方形状に肥厚し、やや内傾する。口縁から頸部までの小片であるが、肩の張る器形を呈すと思われる。同図 412 は、腰部で器壁に厚みを有して屈曲する底部片である。高台内はアーチ状に成形される。内面は無釉である。

皿 第 52 図 409 は、全形を復元できる資料である。高台は、断面三角状を呈し、腰部でやや角度を変えて口縁に至る。見込み際には段が造られる。

小杯 第 52 図 410 は、全形のわかる資料である。高台は比較的厚く、見込みは段が形成される。腰部は張り、口縁部は外反する。内底面に、「宣武」の文字を記す。

器種不明 第 52 図 411 は、口縁部片である。内面には凹線が施される。破片横の面は破損しておらず、元の面が残るために、窓状に成形されていたと考えられる。同図 413 は、ベタ底の底部片である。底部から角度をもつて立ち上がると思われる。

第9節 沖縄産施釉陶器

陶器の表面に灰釉・鉄釉・飴釉・黒釉・白釉などの釉薬を施釉したもので、主に「上焼」^{ジョウヤオ}と呼称されるものである。本調査では、碗・皿・鉢・鍋・壺・瓶・急須・酒器・灯明皿・火取・火炉などの器種が見受けられ、その数1546点が出土したものの、大半が小破片のため、個々の全形が窺える資料は数点しかない。なお、今回、最も細かい分類に1色の釉を施す単掛け(a)と2色以上の釉薬を使い分けて施す掛け分け(b)の施釉法を用いた。以下に分類概念を提示して、詳細を観察表(第2・3・5・9・12・13・26表)に記した。

1. 碗

I類：腰部で丸みをもち、口縁部に向かって直線的に立ち上がる。直口口縁(I A)と外反口縁(I B)がある。

a : 単掛け

b : 掛け分け

II類：胴部で丸みを帯び、開くように立ち上がる。本類も直口口縁(II A)と外反口縁(II B)がある。

a : 単掛け

b : 掛け分け

III類：底部のみの資料で、外底面を施釉するもの(III A)と蛇の目釉剥ぎも含む外底無釉のもの(III B)がある。

a : 単掛け

b : 掛け分け

2. 皿

I類：胴部で丸みをもち、口縁部に向かって緩やかに開きながら立ち上がり、直口口縁(I A)と外反口縁(I B)がある。

a : 単掛け

b : 掛け分け

II類：腰部で丸みをもち、口縁部に向かって直線的に立ち上がり、直口口縁(II A)と外反口縁(II B)がある。

a : 単掛け

b : 掛け分け

3. 鉢

I類：高台脇から丸みをもち、外側に向かって開き、直口口縁にするもの。

II類：高台脇から丸みをもって外側に開き、外反口縁にする。

III類：高台脇から丸みをもって外側に開き、内湾口縁に仕上げるもの。

IV類：底部のみの資料で、外底面を施釉するもの(IV A)と蛇の目釉剥ぎも含む外底無釉のもの(IV B)がある。

4. 鍋

I類：口縁形態が「く」の字状になっているもの。

II類：口縁部が鏽縁状に開くもの。

5. 壺

黒釉のアンダーガーミ。口縁内面で窄まり、口唇部を平坦にする。頸部から開きながら腰部にいたる。

6. 瓶

今回は出土点数が少量であり、なおかつ小破片であったため図化できなかった。

7. 急須

I類：胴部形態がほぼ球形を呈しており、1対の板状三角把手や三角錐状の脚も貼付する。有文のものと無文のものがある。

II類：「アンビン」と称される大型の急須。

8. 酒器

I類：胴中部が丸型を呈しており、底部が上げ底状になっている。

II類：胴中部か胴下部で屈曲し、算盤形を呈する。

9. 灯明皿

小型で浅い皿。胴部途中まで鉄軸が施される。

10. 火取

底部から口縁部にかけてストレートに立ち上がり、直口口縁で筒型の形状となっている。

11. 火炉

筒状の形態を示し、玉縁状に肥厚する。口縁部内面に器物受けを貼付する。

12. 蓋

急須の蓋や器種が不明の蓋が確認できている。

第10節 沖縄産無釉陶器

一般的に「荒焼」と呼ばれ、基本的には施釉をせずに焼き締められた陶器である。今回の調査で確認できた器種は碗・皿・鉢・擂鉢・急須・甕・瓶・壺・火炉・蓋・灯明皿などであった。また、得られた遺物点数が566点で、さらにその多くが小破片であるということから、特徴的な資料を優先に抜き出した。下記で概要を述べ、個々の詳細については観察表（第5・9・27表）に示した。

1. 碗（第20図54・第54図433）

高台内の抉りが浅く、緩やかに湾曲しながら立ち上がる。第20図54は口唇部断面が舌状となる。

2. 皿（第54図434）

見込み部や外底面が盛り上がる。

3. 壺（第54図435）

比較的小型で高台内が円錐状に抉られる。

4. 鉢（第26図150・第54図436～439）

I類：頸部がすぼまり、口縁部断面が三角状に肥厚するもの（436・437）、肩部直下に波状文を施すものもある（第26図150）。

II類：口縁部を折り曲げ、鎧縁状に成形するもの（438・439）。

5. 擂鉢（第54図440・441）

口縁部に丸彫りをすることで、直下の三角状突部を際立たせる。また、口縁部内面に櫛目を施さない。

6. 急須（第54図442）

筒形に近い形態を示し、蓋受けを有しない。

7. 甕（第20図55・第54図443）

I類：口縁部を外側に折り曲げ、逆L字状に成形されたもの（第54図443）。

II類：口唇部を広く仕上げることで、口縁端部が内外両側に突出したもの（第20図55）。

8. 蓋（第 54 図 444～446）

I 類：屁上面にマウンド状にふくらみを持たせ、端部が張り出すもので、屁頭部には撮みを有すると思われるもの（444）。

II 類：屁がハの字形に傾斜するもので、穿孔されるもの（446）とされないもの（445）。

9. 火炉（第 54 図 447・448）

底部からほぼ直線的に立ち上がり、肩部で内側に屈曲する。1 対の把手や火窓を有するものなどがある。

10. 灯明皿（第 54 図 449）

小型でなおかつ口縁部内外に煤が付着していることから灯明皿と思われる。

11. 瓶（第 26 図 151）

口縁部がラッパ状にひらく。

第 11 節 土器

当調査では、グスク土器・瓦質土器・アカムヌーなど、計 919 点（5.6 kg）の土器が得られている。出土点数は、アカムヌーが最も多く、750 点余りが得られているが、小片が多いため、出土量は 3.2 kg（1 点あたり約 4.0 g）である。概ね搅乱を受けた地点からの出土だが、輸入陶磁を伴う遺構からの出土資料も多数得られている。

1. 遺構に伴う土器

i) 集石遺構

集石遺構から出土した土器は、グスク土器と瓦質土器で、計 9 点である。アカムヌーは出土点数が多いものの、当遺構からは出土していない。

a. グスク土器（第 42 図 232～234）

グスク土器は、計 6 点（接合後の累計）得られており、特徴的な 3 点のみを図化した。

232 は、口縁直状の壺形の資料である。肩部はナデ肩で、全体的に丸味を帯びた器形を呈し、底部は平底になると思われる。法量は、口径約 17.4 cm、最大胴径約 26.0 cm を測る。紐作りの土器で、粘土紐は概ね約 1.5 cm の単位で成形される。調整は、粘土が生乾きの状態で、約 1.3 cm 幅の箇状工具によってヘラ削りが施されており、ナデは徹底していない。外面頸部以下は左から右方向の横方向調整が行われるが、口縁部は右上がりの調整によつて口縁部を整えている。このことから、製作者は右利きである可能性が高いと思われる。なお、内面調整は全て横方向であり、工具痕はナデ消されているため不明瞭だが、向かって右から左方向に施されると思われる。

胎土は粗く、0.2 cm 以下の赤色粒子や、0.5 cm 以下の粘板岩の他に、0.1 cm 以下の砂粒を多く含む。外面では混入物が剥落し、いわゆるアバタ状を呈する箇所が散見できる。また、焼成は不良で、触れると指先に胎土が粉状に付着するため、吸水性は高いと思われる。

233 は、鉢形もしくは鍋形土器と思われる資料である。口縁は“く”の字形に屈曲し、口縁背面部は平らに成形される。胴部は、球形に張る器形が想定される。内外面には、木口のアタリが散見されるが、横方向のナデにより工具による調整痕は不明瞭である。しかし、器面は歪に仕上がっているため、ハケまたはケズリは徹底されていないと思われる。

234 は、底部片である。歪に成形されるため、底面は厚い箇所と薄い箇所で約 0.4 cm の差がある。しかし、立ち上がりは明瞭で、底面外縁に明確な稜を形成する。

b. 瓦質土器（第 42 図 235～237）

235 は、青森県尻八館遺跡の出土例から（大橋 1981）、風炉の胴下部と思われる資料である。断面形状の異なる突帯が連続して貼付される。断面カマボコ状の突帯には、半長円文が配され、破片下部には突帯文間を花菱文が廻る。本土産、もしくは本土から渡来した工人によって造られたものと思われるものである。

尻八館遺跡で出土している風炉形瓦質土器は、青磁牡丹文大香炉などと共に伴っている。この青磁牡丹文大香炉は、韓国新安沖海底遺跡の出土例と同時期のものと考えられ(大橋 1981)、14世紀前半の年代が与えられている。また、首里城跡二階殿地区でも同様の資料が検出されており、出土状況から14世紀後半～15世紀前半・中葉に位置付けられている(瀬戸 2005)。

236・237は、火炉あるいは香炉と思われる資料である。236は、若干外傾する直状の口縁部片である。口径は約12.4cmである。器形は円筒状を呈すと思われる。時計回りのロクロによる成形である。237は、平面觀が三角状になると思われる脚部である。範状工具によって成形されると思われるが、ユビオサエも著しい。大型の製品になると思われる。

ii) その他の遺構

門番詰所・中門・寄満地区 第13図12は、蓋と思われる資料である。端部は斜めに成形されるが、滑り止めは造り出されない。

後之御庭地区 第20図56も、口縁内面を肥厚させて口唇を広くするものである。器面は磨耗のため判然としないが、口唇直下に陰圈線が廻っており、おそらく菊花文を挟む2条の圈線が施されたと思われる。口唇にはススが付着する。同図57は、口縁直状で肩の張る壺形の資料である。口唇は微弱に肥厚し、上面は平坦に成形される。ロクロは使用されず、粗雑に造られる。内外面とも、横方向のハケで調整される。

石匂遺構 第26図153は、瓦質土器の壺である。頸部下位(破片上部)には羽状文が廻る。また、その下方に廻る圈線に沿って、幅約1.1cmの板状工具を反時計回りに4回重複させた押圧文を1つの単位(約0.5cm)とした文様を、反時計回りに施す。

石積み遺構3 第34図194は、アカムヌーの火炉である。球形の器形を呈し、高台を有するものと思われる。白色化粧土による圈線が施されるが、剥落のため不明瞭である。

2. 遺構外出土の土器

i) グスク土器(第55図474)

474は、グスク土器と思われる底部片である。底面外縁の稜を明確に形成するが、内面には段を作らず緩やかに立ち上がる。胴部は球形に張ると思われるが、底部上方で角度を変える。外面は縦方向と横方向、内面は横方向の調整が行われているが、内外とも工具による調整痕はナデ消されている。外面には、巻貝が剥離した痕が残る。

ii) 瓦質土器(第55図451～459)

451・452は、菊花文を配す火鉢の口縁部片である。451は、口縁内面の肥厚が微弱なもの、452同様に口唇を広く成形し、胴部でC字状に屈曲する。菊花文は、上下2条の陰圈線を伴う。452は、口縁内面を肥厚させて逆L字状を呈し、胴部が張る器形となる。菊花のスタンプ文を配した後、器面を磨いていると思われる。これらは器形の特徴から、本土からの移入品、もしくは本土の工人によって造られたものと思われる。

453は、火炉と思われる資料である。口縁内部を肥厚させるもので、円筒状の器形を呈す。ロクロによる成形で、回転方向は反時計回りである。454は、第42図235のような風炉形資料の格子文の部分と思われる資料である。胎土の特徴から、235とは別個体と考えられる。

455は、幾何学的な文様が施された器種不明の胴部片である。456は、蓋と思われる資料である。胎土は粗いが、器面は丁寧に調整される。ロクロの回転方向は、時計回りと思われる。

457～459は、底部片である。457の器種は判然としないが、鉢になると思われる。底面外縁には稜が作られるが、内面は丸味を帯びるため立ち上がり部が不明瞭である。458は、植木鉢の底部片である。断面方形の高台に、弧状の抉り込みを入れる。底面中央部には径約1.4cmの孔を穿つ。高台脇は段を形成する。459は、火炉と思われる資料で、馬蹄形になると思われる。焼成は甘く脆弱であるが、丁寧に成形される。457と同様、底面外縁には明確な稜がつくられ、立ち上がりは急である。一方、内面の立ち上がり部は丸味を帯びる。

iii) アカムヌー(第55図460～469)

前述した通り、今回得られた資料は小片が多く、器形を復元できるような資料は得られなかった。所見は第28表のみに記した。

iv) 扁平蓋 (第55図470・471)

遺構外から、2点の資料が得られている。これらの資料の所見も第28表のみに記した。

v) その他土器 (第55図472・473)

上述したいずれの土器にも当てはまらない資料が2点得られた。両資料とも器種不明の製品で、アカムヌーの範疇に含まれる可能性もあるが、胎土が一般的なアカムヌーとは異なる。472は、外傾する口縁部で、混入物は半練のそれに近似する。473は、胎土が泥質であり、扁平蓋に類似するものが多い。器形は、壺状となると思われ、底面は傾斜している。側面の波状紋はルーズで、文様というより落書きに近い。

vi) 土製品 (第55図475)

得られた資料は人形の破片と思われる資料1点である。部位は不明であるが、形状から土器の把手などではないと思われるため、「土製品」として扱った。

第12節 屋瓦

屋瓦は基本的には遺構出土資料と、それ以外の搅乱層の2つに分けて報告する。ただ、遺構資料と造成層資料では、前者が細片で僅少であるため、全体の形状の捉えやすい後者を先に順次説明する。

A. 造成層並びに搅乱層出土の瓦

本調査区から得られた屋瓦は造瓦技術別に分けると、高麗系瓦、大和系瓦、明朝系瓦の3種類になる。出土量は高麗系瓦(101点)：大和系瓦(675点)：明朝系瓦(2530点)=3%：20%：77%となり、前者2種類の中世瓦に比べ、後者の近世以降の瓦が圧倒的に多い。これは明らかに当該地区の時間の推移を示しているものである。以下に種類別に内容を紹介する。

a 高麗系瓦

高麗系瓦はいずれもおおよそ3～7cm台の破片で、接合して全体の形を示せるものはない。出土資料は器面全体に風化が進行し、摩滅したものや、必要以上の加熱のため形をこわしたものもみられた。特徴的な軒丸瓦、丸瓦、平瓦の部位を確認し図化した。

軒瓦

軒瓦は軒丸瓦の1点で、軒平瓦は今回は含まれていない。第56図476に示す軒丸瓦の細片で瓦当面に珠文と鏹形の蓮弁が一部残る。いわゆる蓮華文瓦当文様である。本地区ではこの1種類のみである。

丸瓦

凸面に羽状叩き文がみられる資料で全部で13点である。いずれも細片のため図化は割愛した。筒部側面に分割の破截面が残り、瓦刀を内面側から切り口を入れた部位片もみられる。

平瓦

平瓦片は81点出土している。凸面に羽状打捺文を有する資料で、これら資料中に「癸酉年高麗瓦匠造」刻銘瓦12点、「格子文様」1点を認めた。第56図477が「癸酉年高麗瓦匠造」で、479が「格子文様」である。480は筒部側面側の破片で、分割面の状況や凹面に残る水平方向の細い紐压痕の状況がみられた。

b 大和系瓦

大和系瓦では軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦、雁振瓦の5種類が確認された。出土量は高麗系瓦よりは若干多い。しかし、保存状況はほぼ同様に細片化と風化が進み全形を示せるものはみられない。

軒瓦

軒丸瓦は6点得られ、巴文と蓮華文の2種類が認められる。前者が2点、後者が2点、不明2点である。巴文様は第56図481に示す資料で、蓮華文瓦当は482である。軒平瓦は唐草文様の一部を残す瓦当資料で5点出土している。瓦当文様は中心飾り文様が5弁を成すタイプの1種類が確認できる。第56図483・484がそれである。

丸瓦

丸瓦の破片は148点を数え、その代表的なものを図化した。玉縁破片が第56図485・486で、筒部片等は同図478・487・488と、第57図489～491である。凸面に残る叩き文様は縄目文と羽状文の2種類である。羽状文は第56図478と486、第57図491で、縄目文は第56図485・487・488、第57図489・490と後者が多数認められる。この型式の特徴としていずれも凹面側には刺網状の紐圧痕がみられ、これらも紐圧痕の幅や網目の大小で違いが観察される。

平瓦

平瓦は415点の破片を確認した。器面はすべて無紋であるが、僅かに無紋の叩き板痕を残すものが認められる。平瓦は厚みに差があることから分類を試み、3種類に分けた。a類は薄手、b類は中間、c類は厚手である。また、筒部側面にも形態的違いがみられることから、これも分類した結果、3種類に大別した。さらに、凹面の端部にも面取り部に違いがあることから、長いもの、短いものの2種類に分類した。

雁振瓦

雁振瓦の資料は第57図492～494・496・498の5点の破片である。492・493は小さいアーチをみせる丸瓦部分で、凹面には縱位の指撫で痕が残る。494は側面の破片である。496・498は側面と端部資料である。

c 明朝系瓦

本系統に分類できた資料は最も多く、軒丸瓦(101点)、軒平瓦(78点)、丸瓦(904点)、平瓦(1428点)、役瓦(19点)の5種類が出土している。色調の違いと造形の違いで細分した。まず、焼成別で分けると、灰色系瓦が1116点、赤色系瓦が1414点と出土に差が認められる。出土量比率が44%:56%となり、後者の赤色瓦が多い。内容別にみると灰色瓦には軒丸瓦と軒平瓦の瓦当文様は各1種類が識別され、後者の赤色瓦には軒丸瓦は4種類、軒平瓦は2種類が確認された。また、赤色瓦にはマンガン釉を薄く塗り黒色を帯びる資料もみられた。以下、灰色系瓦と赤色系瓦に区別して概略する。

c-1. 灰色系瓦

灰色系瓦は軒丸瓦(21点)、軒平瓦(14点)、丸瓦(271点)、平瓦(803点)、役瓦(7点)の4種類が得られている。

軒瓦

灰色系瓦の軒丸瓦当文様は1種類のみである。瓦当面側のみが残るもので丸瓦部分は欠落している。瓦当は厚手と薄手があり、瓦当裏には指撫で整形の痕が残る資料が多い。第58図504の資料である。

軒平瓦も軒丸瓦同様に文様は1種類のみである。

丸瓦

玉縁を有する丸瓦である。玉縁の平面形態や凹面端部の面取り整形に特徴があるため、分類を後述する。

平瓦

全体形状の分かる資料2点を図化した。凹面に桶の紐圧痕がみられる。第63図532は5個、第64図533は6個である。その他破片も含め、紐圧痕の長さと桶との関係に注目し、分類を試みた。

c-2. 赤色系瓦

赤色系瓦は軒丸瓦(80点)、軒平瓦(64点)、丸瓦(633点)、平瓦(625点)、役瓦(12点)の5種類が得られている。

軒丸瓦

瓦当文様はA～Dの4種類である。Aタイプは側視型の花文で第58図502・503、第59図505～507である。Bタイプは側視型の花であるが、花部分のみの花文で第59図508～511、第60図513・514である。花芯部の形状でaの509、bの508・510・511・513・514に細分される。Cタイプの構図は前Bタイプと共通するが、花柄が異なる第60図515。Dタイプは第59図512で大きく破損するが、明らかに前述の花文様とは異なるものである。

成形技法では頸の成形や瓦当裏面の調整技法および施釉の有無で細分される。

軒平瓦

文様はA、Bの2種類に分類される。第60図516～520、第61図521・523～526はAタイプの文様の軒平瓦で、中央の花文の両側に配される葉文が、ソテツの葉状に葉脈の尖りが強調されたものである。第61図522はBタイプで、瓦当面の細片であるが、葉の部分が丸みをもつ部分が観察される。類例が久米島仲間切藏元出土資料がある。Aタイプは整形、マンガン釉の有無で2タイプが確認される。

丸瓦

玉縁のある丸瓦である。玉縁の平面形態や凹面端部に施される面取り状況にバリエイションが認められることから分類を試みた。詳細は後述する。

平瓦

第64図534～538を図示した。大きさの明確な資料でみると、高さ約26cm、広端部22cm、狭端部約16cm、重量は1.3kgである。凹面に認められる広端部側の桶板紐圧痕を形状と数に着目し、桶の形状を推定した。紐圧痕の明確に個数が分かるものでは7個であった。さらに、その圧痕の形状と圧痕の距離を計測し、分類を試みた。これについても後述する。

役瓦

この種類は雲形飾瓦、花形飾瓦からなる。雲形は粘土のヒダを渦巻き状に整形し、花びら状にもみられるが、その端部に尾が形成される瓦である。渦巻き部分が頭、端部を尾とする。完全な形をみせるものはないが、破片の大きさからA：大形と、B：小形の2タイプに大別される。

Aタイプは破片のため型式分類是不可能である。第66図539・541は雲の頭部分で、ヒダを整形する手捏ねになる。543は尾部分である。Bタイプは同図540が細かいヒダ状を呈し、542は太い凹線で花弁を表現する。544・545が尾である。その他に、547は葉状を造るもので、明瞭に葉脈が表現されている。また、同図546は牡丹の花をほぼ正面から描くもので、中心から三輪の花輪で表現している。

明朝系瓦の丸瓦と平瓦

本地区での出土量の多い、明朝系の丸瓦と平瓦について、とくに灰、赤色両瓦にみられる整形痕や道具痕に関する部分について取り上げてみた。

丸瓦

丸瓦は玉縁の形状および凹面端部の成形に変化が認められ、さらに漆喰の有無で注目される。

玉縁の平面形態からは3種類に分類できる（第37表）。a類が頂部に面をもつもの。b類が玉縁がやや台形で、頂部に僅かながら面をもつもの。c類が玉縁が弧を描き、頂が斜面ないし、鋭くとがるものとする。

また、凹面端部に行われる面取りの有無、また、その大きさにより第38表に示すように細分してみた。

検討結果、灰色瓦の玉縁はa、b類で、端部の面取りも5～1cmとバリエイションがある。赤色瓦はa、b、cの3種類で、端部面取りは4～1cmと、殆ど行われていないものになる。つまり、灰色瓦は玉縁の成形を四角にとり、凹面側の端部面取りもしっかり行う傾向がある。一方、赤色瓦の場合は玉縁が丸く薄くなる傾向があり、さらに凹面端部の面取りも小さく、または手を付けないものに変化している。これは屋根における葺き構造の違いとみられる。釘留めから漆喰留めへの型式変化として理解される。今回の資料は2～3cmの範囲で赤色と灰色混在であり、分かれ目と判断される。

平瓦

平瓦は凹面にみられる広端面側に桶紐痕の形状や窪みの数、その間隔で分類を試みた。紐痕の明確に数えることが可能な資料では桶紐痕が6個のものと、4個のものが確認された。さらに、その紐痕の形状と窪痕の距離を計測し、分類を試みた。相関関係は第39表のとおりである。

窪みの形状はすなわち瓦桶を構成する細く長い台形状の板を留める麻紐の跡あり、その紐の太さと大きさから、桶の形状を推測されるのである。当紐痕の形状が、親指を垂直に押し当てた程度の丸い形状のものをa類（横長さ1.8cm前後）、親指を斜めにしっかりとタブレットをb類（横長さ2.3cm前後）とした。

さらに、その間隔は①類を2~3cm、②類を3~4cm、③類を4~5cmとした。

これにより、灰色瓦にはa類①、②、b類②、③が存じ、その間隔の種類では灰色瓦では②類が多いものの、むしろ①、③類とバリエーションが認められる。赤色瓦では②類は多いが①類もその次に多く、③類は極端に微量を示している。b類については②類を中心として周辺にはみられない。

桶の板は短冊形で細い台形を呈するものである。その広端部側の幅を示すもので、窪みの間隔は即ち板幅を示している。したがって、灰色瓦では太く丸紐が使用され、桶板の規格が細いものから幅の広いものまであることを意味する。その点で、赤色瓦の場合は桶板の幅がやや統一されているものである。

B、遺構出土の瓦

屋瓦が出土した遺構は3区を中心とする。①門番詰所・中門・寄満地区と②後之御庭地区、③集石遺構である。しかし、瓦の種類や量的には違いが認められ、とくに、報告に耐えうる資料の出土した②と③の資料は代表的なものを分類し、第20・21図、第42・43図に図化し、第5・6、第15・16表に観察所見を掲載した。

瓦の種類と遺構の出土量をみると、高麗系瓦と大和系瓦はいずれも③集石遺構から集中的に得られ、まさに集石の一部を構成するかたちをなしている。他の地区で②地区にやや大和系瓦がみられるが、殆ど僅かなものである。また、近世相当期の明朝系瓦は遺構からの出土は極めて微量であり、後世の混入の状況を呈してゐる。ほとんど表面採集ないし搅乱層からの出土で時代が異なることを示している。以上、遺構から出土した資料で残存状況のよいものを概観し、詳細は観察表に掲載する。

S R O 2

第15図18は玉縁側の丸瓦である。玉縁は短い。凹面側には布目痕があり、とくに玉縁裏側には横位に6条の縦い目痕が集中してみられる。

後之御庭地区

第20図58・59は高麗系瓦の平瓦である。58は刻銘が一部認められる。59は凸面側に羽状叩き文があり、凹面に横位の細い紐痕がみられる。同図60~62は大和系瓦の丸瓦片である。いずれも凸面側に繩目打捺文が残る。凹面には刺網状の紐痕があり、60は細く、61・62は太いタイプに分けられる。同図63・64は大和系瓦の平瓦である。64は比較的大きな破片で、側面に糸引き面と笠による面取り面の二面がみられる。また、凹面に無紋の叩き板痕が残る珍しい資料である。

第21図65~67は明朝系軒丸瓦である。65・67は灰色で薄手に仕上げられる。瓦当裏の頭部分が丁寧な撫でが行われている。全体に風化が著しく、漆喰が使用された瓦である。66は赤色で厚手の瓦当を形成する。

集石遺構

第42図238・239と第43図240~246までは高麗系瓦である。『癸酉年高麗瓦匠造』刻銘の一部が第42図238・239と240~242までにみられる。同図243は格子模様一部が認められる。244は凹面に布目痕と横位の細紐痕が観察できる平瓦である。245・246は端部片で、凹面側に大きく面取りがなされている。

同図247~257は大和系瓦である。軒丸瓦片が247・248で、巴文と蓮華文の二種類の存在を確認できる。250・251は大和系軒平瓦で中心飾りが5弁のタイプを認める。同図252・253は凹面に繩目叩き痕をみせる丸瓦である。同図255・256・257は側面部に特徴を有する雁振瓦の平瓦片である。

第37表 明朝系丸瓦 玉縁部（凸面）出土状況

分類	a タイプ	b タイプ		c タイプ		不明	合 計
		長	短	長	短		
色調	灰色	3	3				6
	赤色	1	1		1	1	4
イ	灰色		11	6	3	1	21
	赤色		1	27	12	9	53
ロ	灰色						0
	赤色			5	26	14	45
ハ	灰色						0
	赤色						45
不明	灰色		1				12
	赤色			3			25
合 計		4	17	41	42	25	41
注 長 : 4.5cm以上 短 : 4.5cm未満							
170							

第38表 明朝系丸瓦 端部（凹面）出土状況

分類	色調	面取り幅						不明	合 計
		5cm～6cm未満	4cm～5cm未満	3cm～4cm未満	2cm～3cm未満	1cm～2cm未満	1cm未満		
灰色			11	11	18	10		5	8 63
赤色		1		6	31	55	8	33 7	141
合 計		1	11	17	49	65	8	38 15	204

第39表 明朝系平瓦 凹面の紐圧痕出土状況

分類	間隔	①類2～3cm未満			②類3～4cm未満			③類4～5cm未満			不明	合 計
		a タイプ	b タイプ	不明	a タイプ	b タイプ	不明	a タイプ	b タイプ	不明		
灰色	a タイプ			18		45		6		52		121
	b タイプ		1			40		25		48		114
	不明									254		254
	小 計			19		85		31		354		489
赤色	a タイプ			24		41		10		53		128
	b タイプ		10			36		4		20		70
	不明									191		191
	小 計			34		77		14		264		389
合 計				53		162		45		618		878

凡例 a タイプ: ○ b タイプ: △

第 13 節 塼瓦

塼瓦は123点余出土している。保存良好なものは第66・67図に掲載し、第33・34表に観察表を載せた。出土した資料は僅かに全形を残すものが3例あるが、他はすべて破片である。形の判断できる資料からみると、正四角形、三角形、長四角形の3タイプが存在する。また、色調別にみると灰色73点、赤色50点と2種類が存在する。使用の方法としては2種あることが想定される。一つは敷瓦で、長く使用したため、表面は摩滅していて、裏面は製作当時の粗面のままに残る。また、側面は裏面側にいざれも傾斜が認められ、はめ込みを意識した細工が観察される。二つ目はレンガの様に積み上げて壁を構成するもので、一面のみが露出するように他の漆喰で覆われたものがある。

第66図548は赤色の四角形タイプで完全形である。側面に二分の一近くまで土の付着痕が残り、敷瓦であるこ

とが確認される。549 は灰色の破損品で、前資料と同タイプの厚さをなす。550・551 は漆喰の付着が著しいもので、前者は表裏面にみられ、後者は一面に付着する厚手のタイプである。壁の仕様が想定される。552 は灰色の三角形をなす資料である。敷瓦の隅部に使用されたものと考えられる。第 67 図 553～555 は長方形になるもので、とくに 553・554 は側面の一面のみを残して他に全てに漆喰がめぐる赤色資料である。これらも壁的な仕様が予想される。555 は灰色は一側面を丁寧に削り取りされていて、まさに現場あわせで加工されたものである。当初は四角形製品の可能性がある。

第 14 節 金属製品

今回釘が、612 点出土しており、そのうち角釘 26 点を図示する。

釘は断面の形状と頭部から先端部の長さで分類した。以下に分類基準を示す。

A 7 寸(20.25～21.75cm 未満)	B 6 寸半(18.75～20.25cm 未満)	C 6 寸(17.25～18.75cm 未満)
D 5 寸半(15.75～17.25cm 未満)	E 5 寸(14.25～15.75cm 未満)	F 4 寸半(12.75～14.25cm 未満)
G 4 寸(11.25～12.75cm 未満)	H 3 寸半(9.75～11.25cm 未満)	I 3 寸(8.25～9.75cm 未満)
J 2 寸半(6.75～8.25cm 未満)	K 2 寸(5.25～6.75cm 未満)	L 1 寸半(3.75～5.25cm 未満)
M 1 寸(2.25～3.75cm 未満)	N 分類不可能	O 破損品

この分類は、第 56 表に反映させた。

第 15 節 銭貨

銭貨は後之御庭地区・石積み遺構・石開い遺構・掻乱層などから検出されているが、中でも後之御庭地区からまとまって大量に出土している。また、本地区の出土銭貨の多くは小破片の資料が目立ち、さらに工具を使用したような痕も見受けられていることから、故意に削られたものと思われる。なお、後之御庭地区的出土銭貨の初鋳年をみてみると、五銖（紀元前 118 年）が最古のものとして認めることができ、明朝錢の永樂通寶（1408 年）が極めて新しい銭種となっている。このような出土例は本地区の南西側に位置する城跡内の詰所地区と同様な事例となっている。量的には北宋錢の方が多いようにみえるが、銭種ごとに分けると洪武通寶が最も多く得られている。なお、後之御庭地区以外の地点で出土する銭貨は比較的の残存率が高く、加工銭も目立たない。

本調査で出土した銭貨を各地区の銭種ごとに抽出し、個々の資料を観察表（第 6～9・12・16・35 表）にて紹介する。

第 16 節 骨製品

当調査では、骨鱗 2 点とボタンが 1 点得られている。第 68 図 577 は出土地不明、同図 578・579 は掻乱層からの出土であり、いずれも出土地区は不明である。

骨鱗の形態は、沖縄諸島では菱形式と丸（きり）形式の 2 種が報告されているが（安里・大城・花城 1984、照屋 1985、上原 1990）、本調査で得られたものは 2 点とも菱形式である。菱形式骨鱗は今帰仁城跡主郭からも出土しており、出土層の年代は、14 世紀後半～15 世紀前半に位置付けられている（金武・宮里・松田 1991）。

骨鱗は、浦添城跡の調査によって鉄鱗を模した可能性が指摘され（照屋 1985）、勝連城跡出土資料の検討によって、その可能性が支持されている（上原 1990）。これは、鉄鱗の絶対数を補うものであろうと考えられる（安里 1985）。実際、骨鱗は革製の鎧に対して十分な貫通力があったとの指摘もあるため（上原 2003）、骨鱗の製作意図には合理的な説明が成されている。ただし、沖縄諸島における骨鱗の出土例は、管見で 6 遺跡から 60 点を数える程度であり（勝連城跡出土資料が 65% を占める）、先島諸島の出土状況（盛本 2005）に比べて極めて少ないことが留意される。また、形態も先島諸島の様相と異なり、沖縄諸島では菱形を呈すものが主体を占める。

第40表 沖縄諸島出土骨鐵

出土遺跡		刃部形態		素材	出土点数	備考	文責／報告年
今帰仁城跡	主郭	菱形	菱形	ジュゴン・肋骨	3	14C後半～15C前半に比定。	金武・宮里・松田 1991
		菱形	菱形	ジュゴン？	2	両刃。	
	二の丸北	菱形	方形	ジュゴン？	4	片刃。	安里・大城・花城 1984
		丸形		ジュゴン？	6	太形と細形がある。	
	二の郭	丸(きり)形？	(不明)		2	未製品。	
	三の郭	菱形	菱形・六角形	ジュゴン・ウシ・ウマ	23	未製品11点含む。 菱頭式鉄鐵の模倣品。	上原 1990
		丸きり形		ジュゴン・ウシ・ウマ	4	丸きり頭式鉄鐵の模倣品。	
浦添城跡	—	菱形	菱形	(不明)	3	両刃に刃を作り出す。	
		丸形		(不明)	1	全体を研磨。	黒屋 1985
	北殿跡	菱形	菱形	(不明)	1	完品。	
	瀧刻門	菱形	菱形	ジュゴン	3	墓部が残存する資料あり。	上原 1995
		菱形	六角形	ジュゴン	1	刀部中央平坦に成形。	
	用物座	菱形	菱形	ジュゴン	2	墓部が残存する資料あり。	比嘉 2001
	木曳門	？	？	ジュゴン	1	未製品。表面スス付着。	
	東のアザナ	菱形	菱形	ウシ脛骨？	2	成形のち、研磨。	盛本 2004
	御内原	？	？	(不明)	1	刀部欠損。	喜多 2006
	御内原西	菱形	菱形	ジュゴン？・ウシまたはウマ	2	刀部・墓部欠損それぞれ1点。	本報告
天界寺跡	本堂	菱形	菱形	(不明)	1	ほぼ完品。	仲宗根 1999
稻福遺跡	上御頤	菱形	菱形	(不明)	1	刀部欠損。	当真 1983

第 17 節 玉製品

総数31点が出土している。最大径が5mm以上のものを丸玉(第13図13・第26図157・158・第68図580・581)、5mm以下のものを小玉(第34図201・202・第68図582)として扱った。材質はすべてガラス製で、色調は白・黒・半透明・水色・緑色などがあり、水色、緑色がほとんどである。白色・黒色のものは披熱のため色調が変化したものと思われる。

第 18 節 煙管

本製品のすべては羅字煙管のタイプで、素材も土製品・沖縄産施釉陶製・沖縄産無釉陶製の雁首や吸口などがある。

観察表(第12・13・35表)にて個々の資料について述べていく。

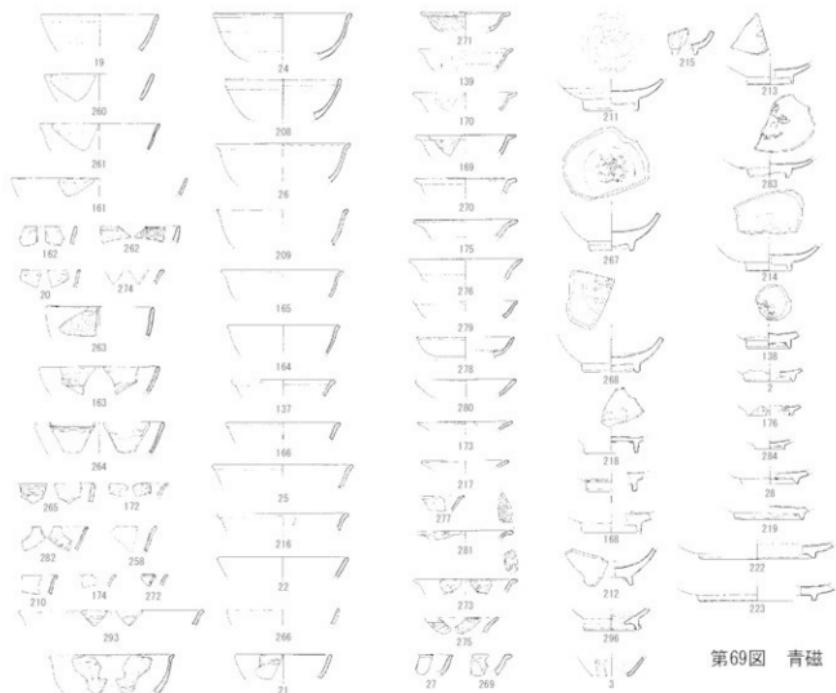
第 19 節 石製品

今回の調査において出土した石製品は、ピット6から敲き石1点が得られており、また搅乱層から硯片5点、有孔製品1点が確認されている。なお、硯の部位名称は『首里城跡一下之御庭ほか一』に倣った。

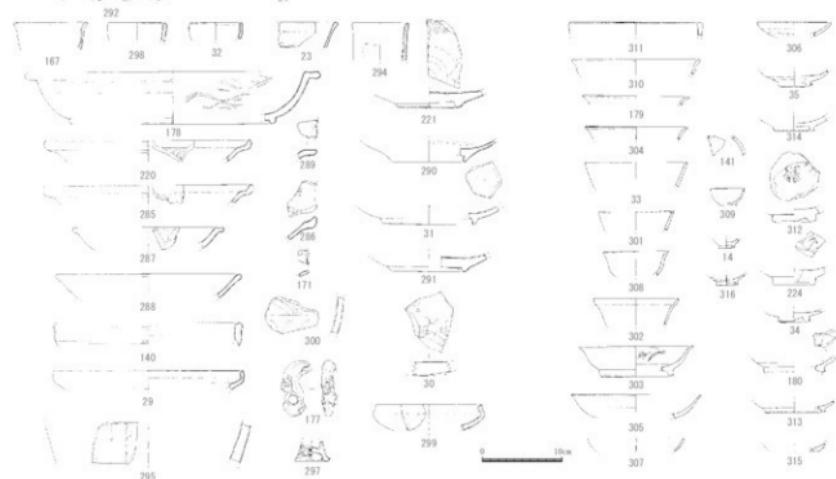
第 20 節 円盤状製品

円盤状製品は総数16点が出土している。出土地別にみると、門番詰所・中門・寄満地区から沖縄産無釉陶器製1点、瓦製1点、集石遺構から瓦製1点、搅乱から青磁製2点、沖縄産無釉陶器製2点、中国産褐釉陶器製3点、タイ産褐釉陶器製1点、黒釉陶器製1点、中国産染付2点、瓦製2点となっている。

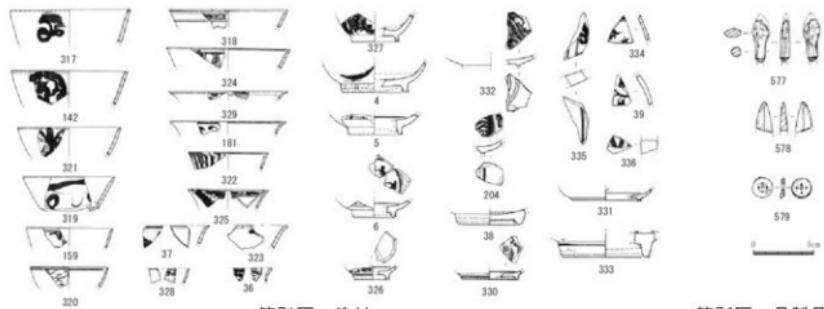
また大きさから分類すると、最大径が3cm以上6cm未満のもの(第23図136・第68図592・593)、2cm以上3cm未満(第68図590・591)のものと大きく2タイプに分けられる。



第69図 青磁

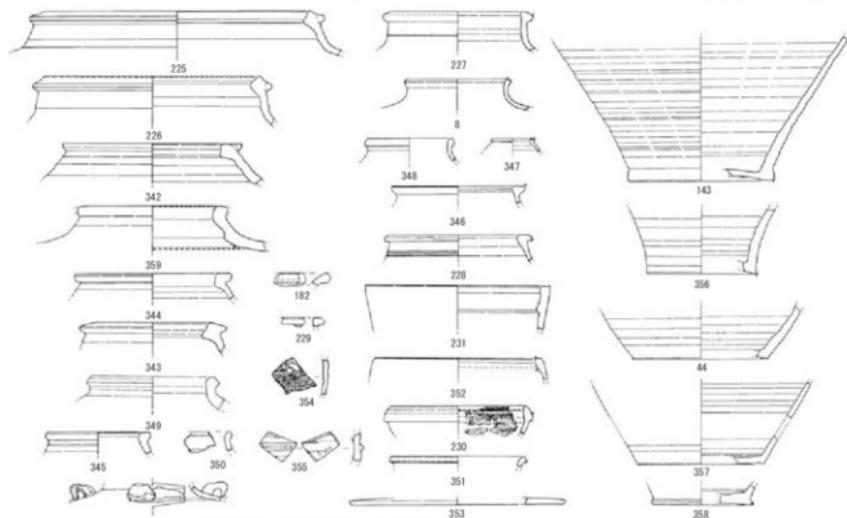


第70図 白磁

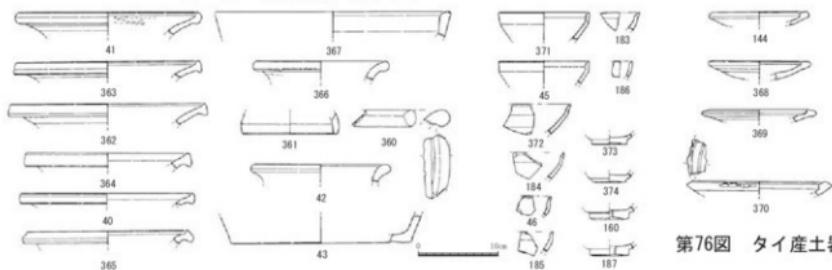


第71図 染付

第74図 骨製品

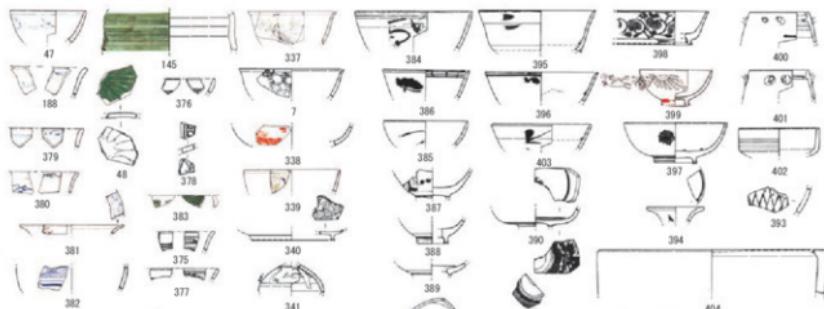


第72図 褐釉陶器 (中国産)



第73図 褐釉陶器 (タイ産)

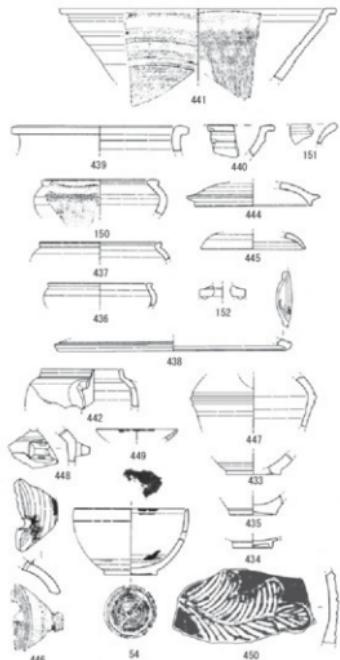
第75図 黒釉陶器



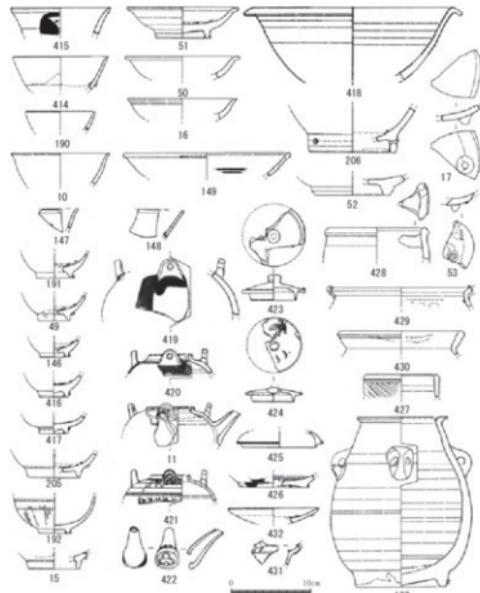
第77図 その他の輸入陶磁器



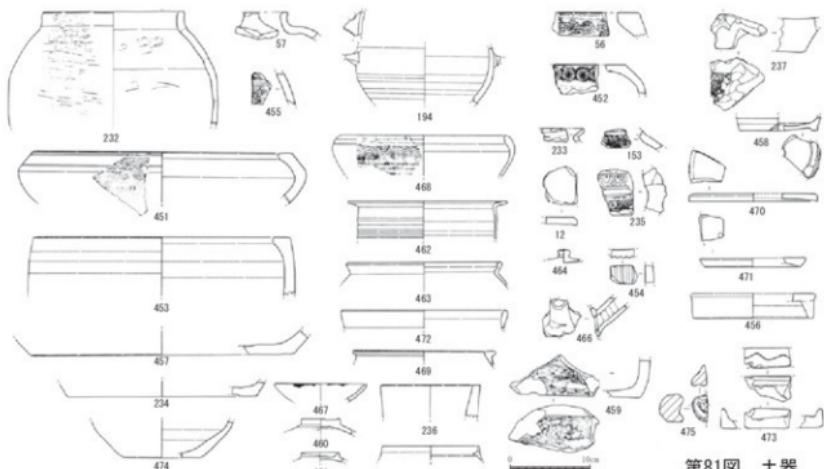
第78図 本土産陶磁器



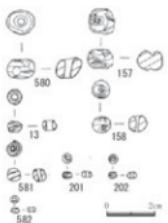
第80図 沖縄産無釉陶器



第79図 沖縄産施釉陶器



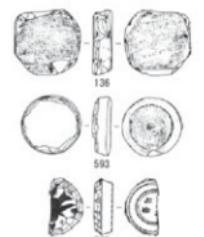
第81図 土器



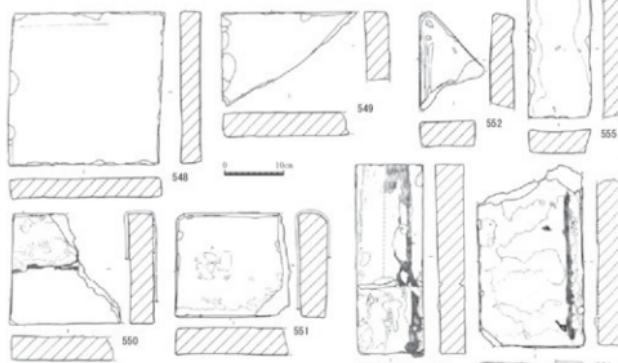
第82図 玉製品



第83図 石製品



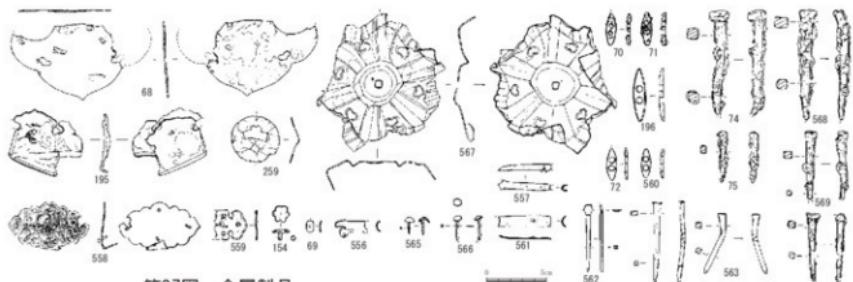
第85図 円盤状製品



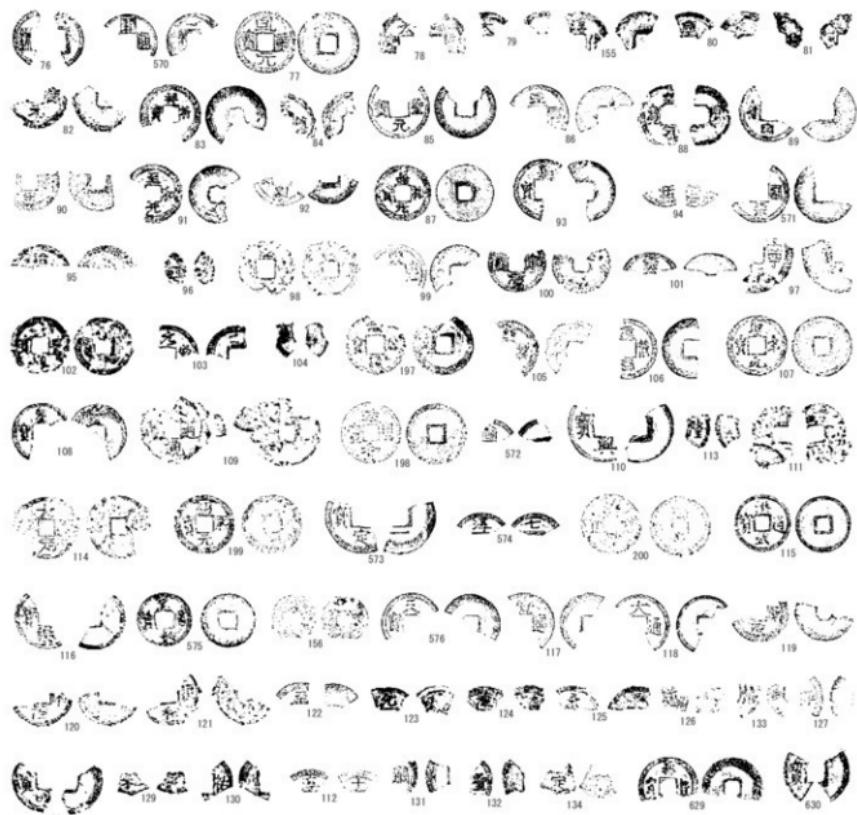
第84図 塙瓦



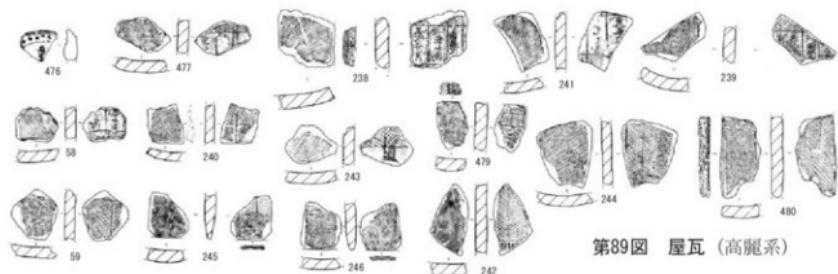
第86図 煙管



第87図 金属製品



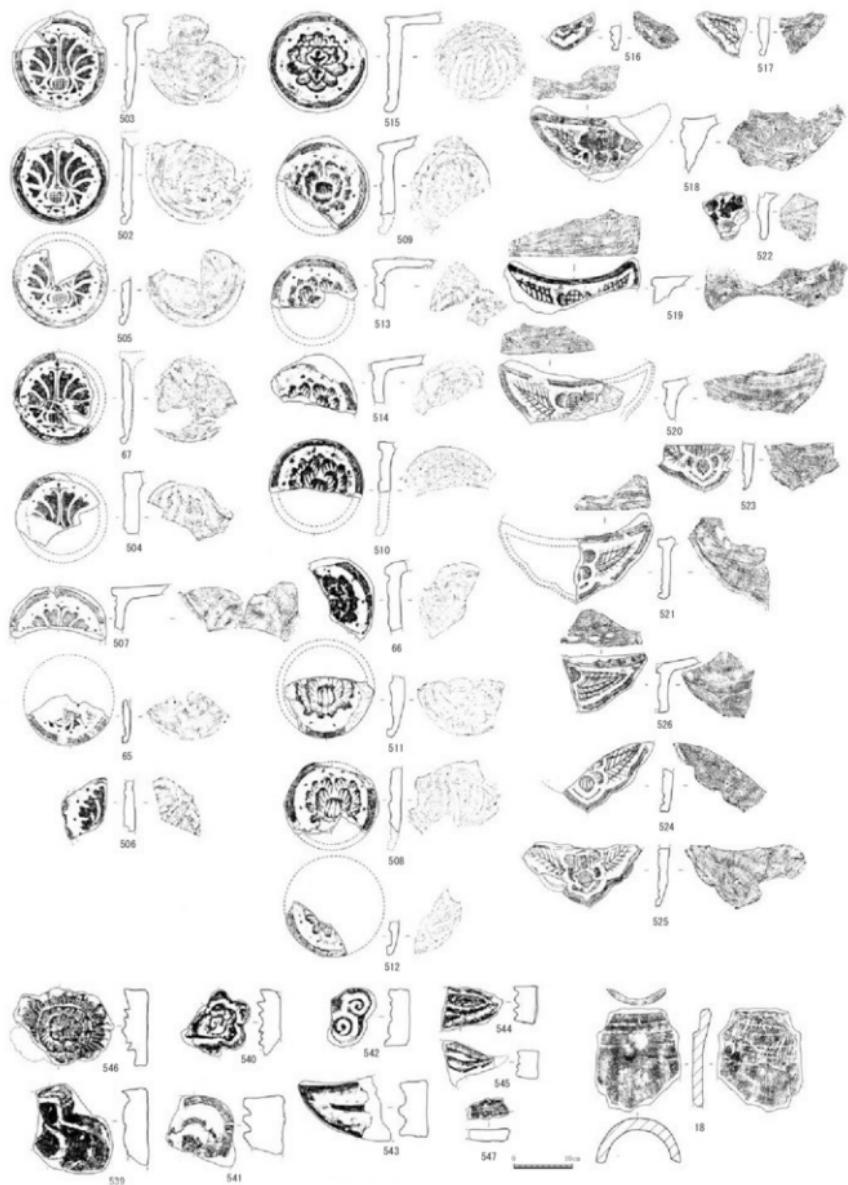
第88図 錢貨



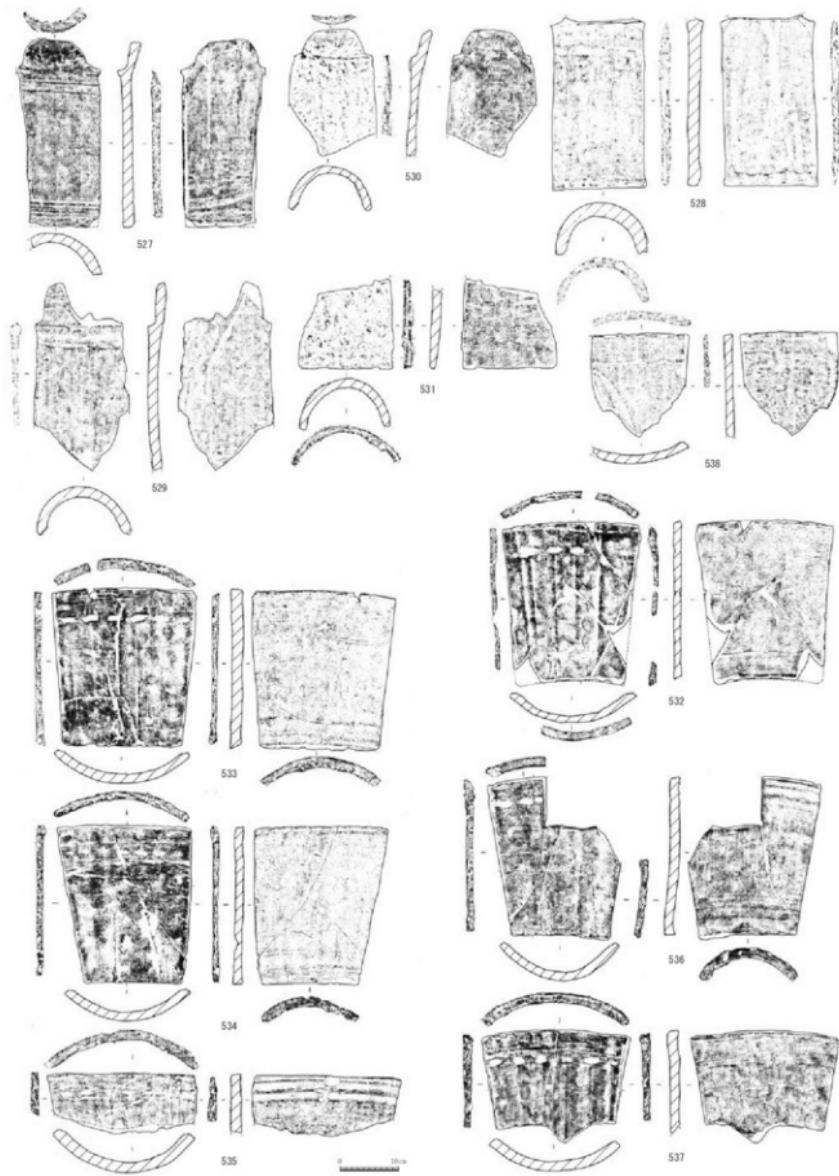
第89図 屋瓦 (高麗系)



第90図 屋瓦 (大和系)



第91図 屋瓦（明朝系） 1



第92図 屋瓦（明朝系）2

第41表 青磁出土狀況

第42表 白磁出土状况

第43表 染付出土状况

出土地		門番詔所・中門・ 書院地区		SR02 後之御庭地区				石圓い道構		石列 道構		石積み 道構		石疊 道構		集石 道構		G-8～ J-8柱		ビット No 不明		表様		複乱		不明		合計	
沿種・分類	E -	レジナ		C -	C -	トレンチ		4	3	2	B -																		
	ビット	10 10	9 + 10 2	ビット	2	4	1	4																					
礎	暗褐色土	濃内	1層	明褐色土	8層	1層	2層	3層																					
	I	口縁部		1	2				1	1		1	1													42		50	
皿	II		1						1	1																35	1	41	
	III	胴部	1		3	2			2	4	1	5													1	139	4	162	
鉢	IV	底部			2		1			1																11		15	
	V	口縁部																									1		1
盤	VI	胴部																									2		2
	VII	底部	1						1																	9		9	
杯	VIII	底部																									10		13
	IX	胴部																									1		1
瓶	X	底部																									1		1
	XI	胴部																									1		1
瓶?	XII	底部																									2		3
	XIII	胴部																									1		1
大瓶	XIV	底部																									1		1
	XV	胴部																									1		1
蓋																											1		1
合計		1	1	4	5	2	1	1	4	8	1	7	1	2	1	1	2	1	1	1	259	5	308						

第44表 褐釉陶器出土状况

() : 重量/g

地盤・土壌	後之御前地区												石原・清瀬												石舟・清瀬												喜多・清瀬												宇都・穴川												芝原・											
	D-			H-7			I			J			K			L			M			N			O			P			Q																																									

第45表 本土產陶磁器出土狀況

（）：重量/g

第46表 沖縄産施釉陶器出土状況

第47表 沖縄産無釉陶器出土状況

第48表 土器出土狀況

第49表 その他の近現代磁器出土状況

出土地 部位	S R O 2		後之御庭地区			石圓い 道構		石積み構造		石板 道構		表 保	複 乱	不 明	合計			
			C-			トナリ		理土		B-								
	2	5	7	8	8	1		2	1	3	1							
	1層	6層	岩盤 流土	岩盤 直上	褐色 土層	1層	栗石 内	栗石 理土	観察略 1	栗石 理土	5	内						
口～底														3	3			
耳														(39. 9)	(39. 9)			
口縫部	2 (1, 3)	1 (3, 3)	1 (0, 4)	1 (2, 2)	1 (0. 7)			1 (11. 9)	1 (2. 6)	1 (0. 6)	3 (4. 5)	95 (31. 1)	6 (13. 2)	113 (351. 8)				
脚部	2 (3, 1)	1 (1, 1)	1 (0, 3)	2 (1, 8)	1 (2. 8)	3 (17. 0)		1 (0. 4)	1 (1. 2)	4 (11. 2)	2 (3. 3)	128 (39. 5)	4 (4. 6)	156 (463. 2)				
底部			1 (11. 9)			1 (2. 0)			1 (9. 4)		1 (13. 9)	55 (424. 5)	1 (1. 3)	60 (468. 0)				
注口														2 (20. 4)	2 (20. 4)			
蓋														1 (24. 2)	4 (20. 2)			
不明	1 (8. 1)				1 (2. 6)									28 (156. 2)	30 (166. 9)			
合 計	5 (12. 5)	1 (1. 1)	2 (3. 6)	3 (3. 7)	1 (0. 4)	2 (5. 4)	5 (21. 2)	1 (0. 7)	1 (1. 2)	7 (56. 7)	1 (2. 0)	31 (39. 9)	11 (38. 3)	369 (3150. 8)				

第50表 明朝系瓦出土状况

分類		出土地		門番筋所・中門・寄棟地区		後之御庭地区		石開い造構		石積み造構		集石造構		表探	搅乱	不明	合計				
		E-		トレンチ		9・10		1		2		3									
		溝内		1層		2層		埋土		埋土		栗石									
軒丸瓦	灰色	A		1		2						7		10							
		不明		1								10		11							
	赤色	A		1								34		35							
		a						1				4		5							
		b		1								5		6							
		不明										12		12							
		C										1		1							
		D										1		1							
		不明						1				19		20							
	小計		1		2		3		1		0		0		93		0				
軒平瓦	灰色		A								2		9		1		12				
	不明										1		1		2						
	赤色		A		1		2				1		3		55		63				
	B												1		1						
役瓦	小計		0		1		2		0		0		1		5		66				
	灰色												7		7						
	赤色												11		1		12				
合計				1		3		5		1		1		1		5		177			
														3				198			

第51表 明朝系丸瓦出土状况

第52表 明朝系平瓦出土状况

第53表 大和系瓦出土状況

第54表 高麗系瓦出土状況

種類・分類	出土地 門番詰所・中 門・寄満地区	後之御庭地区										集石遺構										推 測	不 明	合計			
		E-		B-		C-		D-		ビット	1番		B-		C-												
		9・10	5	7	5	6	7	5	1		1	4	5	5	6	6											
		溝内	10層	赤褐色 粘質土	6 層	6 層	赤褐色 粘質土	岩盤 直上	10 層		7層	C	D	A	A 10 層	B	D	A	C	A							
軒丸	瓦当部																						1	1			
丸瓦	玉縁左片																						1	1			
	側面片					1	1	1									1	1	1			2	1	9			
	筒部片					1																2		3			
	小計		0	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	0	4	13			
平瓦	広端左片																			1				1			
	側面片											1	1		1	1					2	5	1	12			
	西年刻銘片							1									3	3	2	1	1	1		12			
	羽状打捺文のみ		1	1	1	1		1	1	1		1		1		4	4	3	4	2	3	1	18	3			
	格子文様片																							1			
	狭端左片																1							1			
	狭端右片																1							2			
	狭端部片																1							1			
	上下端片																1		2	2				5			
	小計		1	1	1	1	0	2	1	2	1	1	1	1	1	7	0	11	6	3	9	1	27	4			
細片(加熱版)																				1	1		1	3			
	合計		1	2	1	2	1	3	1	2	1	1	1	1	1	7	1	12	7	4	11	1	32	9			
			1																					101			

第55表 埠瓦出土状況

分類	出土地 門番詰所・中 門・寄満地区	後之御庭地区										石圓い 遺構		石積み 遺構		集石遺構		表探	捲 測	合計	総 合計						
		E-	E-	B-		C-		トレンチ		埋土																	
		9+10	9	2	3	4	6	1		1	4	5															
		溝内	褐色砂 質土	2層	1層	1層	6層	1層	1層	2層		C	A														
A類	灰色								1										2(1*2)	3(1*2)			6				
	赤色																		5(2)	5(2)			7				
B類	灰色							1											1(1)	2(1)			3				
C類1	灰色																		(4)	(4)			4				
C類2	赤色																		(2*1)	(2*1)			3				
	赤色	2		3(1)	1	1	(2)	1		3	1				1	1	1	4	16(21*1)	35(24*1)			60				
	赤色	1	(*)						1		4(1)								18(8*2)	24(9*3)			36				
合計		2	1	3(1*1)	1	1	(2)	1	1	5	1	4(1)		1	1	1	4	42(40*9)	69(44*10)			123					
総 合 計		2	1	5	1	1	2	1	1	5	1	5	1	1	1	4	91		123								

() : 漆喰の付着、* : 漆喰とセメント付着

注 A類: B類: C類1: C類2:

第56表 釘出土狀況

第57表 玉製品出土状況

分類	出土地	門番詰所・中門・寄溝地区		S R O 2		後之御庭地区		石開い 遺構	石積み遺構		撹乱	不明	合計		
		D-	E-	トレンチ	D-	E-			1	3					
		10	9・10	2	9	9			観察畦1						
		暗褐色土	溝内	3層	焼土直上	焼土			1層	栗石内	埋土				
		丸玉		1			2					4	1	10	
		小玉	1		1	1			1	1	3	12	1	21	
	合計		1	1	1	1	2		2	1	1	3	16	2	31

第58表 玉製品計測一覧（実測外）

遺物番号	種類	材質	色調	残存状態	法量(mm/g)				出土地				
					高さ	最大径	孔径	重量	E-9		撹乱		
1	小玉	ガラス	水色	破	1.7	2.0	0.8	0.02		E-9		撹乱	
2					2.0	2.4	1.1	0.04		E-9		撹乱	
3					2.0	2.5	0.7	0.03		C-4		撹乱	
4			完	完	1.5	2.5	1.2	0.01			不明		
5					2.1	2.6	0.5	0.02		E-9		撹乱	
6			水色	破	1.3	2.7	1.2	0.01		石積み遺構	3	埋土	
7					1.9	2.8	1.6	0.01	門番詰所・中門・寄溝地区	D-10		暗褐色土	
8			完	完	2.8	2.9	1.6	0.02		S R O 2	トレンチ2	3層	
9					2.1	3.4	1.2	0.04			撹乱		
10			うす黄色	完	2.0	3.7	0.9	0.06	後之御庭地区	D-9		焼土直上	
11	丸玉		水色	破	3.1	3.7	1.3	0.07		B-4	撹乱		
12					2.3	3.8	1.2	0.08		B-5	撹乱		
13			緑色	破	3.0	3.8	1.3	0.03		石積み遺構	1	観察畦1 1層	
14			水色	破	2.3	4.0	2.0	0.03		石積み遺構	3	栗石内	
15					3.1	4.3	1.4	0.04			撹乱		
16			緑色	完	3.3	4.3	1.0	0.08		C-8		撹乱	
17					3.1	4.4	1.7	0.11			撹乱		
18					4.0	4.7	1.6	0.17			撹乱		
19			緑色	完	3.0	5.1	1.8	0.14			不明		
20			水色	完	5.2	8.3	2.3	0.48	後之御庭地区	E-9		焼土	
21					3.8	8.7	2.2	0.23	後之御庭地区	E-9		焼土	
22			白	破	9.0	9.8	2.0	0.77		D-10		撹乱	
23			水色	破	8.3	10.8	2.1	1.11		D-10		撹乱	

第59表 貝類出土狀況(1) 卷貝

第60表 県類出土狀況(2) 二枚貝

は、完形と仮説の右同士を同士を足して、多い方を個体数とした。(破片でのみ出土した貝殻についてでは、最少個体数1と数えた)

第61表 魚類出土量

目・科・種名	出土地	後之御庭地区										骨格	不明	合計								
		門番所・中野・新潟地区		D-		E-		B-		C-												
		ビック	10-9-10	ビック	5	4	5	7	8	9	3	2	3	1	2							
メジロザメ科	新潟色上 岩崎上岸	新潟色上 岩崎上岸	6層																			
メジロザメ目	サメの一種	サメの一種	サメの一種	サメの一種	サメの一種	サメの一種	サメの一種	サメの一種	サメの一種	サメの一種	サメの一種	サメの一種	サメの一種	サメの一種	サメの一種							
エイ目	科不明	エイの一種	エイの一種	エイの一種	エイの一種	エイの一種	エイの一種	エイの一種	エイの一種	エイの一種	エイの一種	エイの一種	エイの一種	エイの一種	エイの一種							
タツノ科	タツノ科	タツノ科の一種	タツノ科の一種	タツノ科の一種	タツノ科の一種	タツノ科の一種	タツノ科の一種	タツノ科の一種	タツノ科の一種	タツノ科の一種	タツノ科の一種	タツノ科の一種	タツノ科の一種	タツノ科の一種	タツノ科の一種							
ハタ科	ハタ類	ハタ類	ハタ類	ハタ類	ハタ類	ハタ類	ハタ類	ハタ類	ハタ類	ハタ類	ハタ類	ハタ類	ハタ類	ハタ類	ハタ類							
ダイ科	クロダイ	主上顎骨 R L	主上顎骨 R L	主上顎骨 R L	主上顎骨 R L	主上顎骨 R L	主上顎骨 R L	主上顎骨 R L	主上顎骨 R L	主上顎骨 R L	主上顎骨 R L	主上顎骨 R L	主上顎骨 R L	主上顎骨 R L	主上顎骨 R L							
スズキ目	ハマフカヒギ科	前上顎骨 R L	前上顎骨 R L	前上顎骨 R L	前上顎骨 R L	前上顎骨 R L	前上顎骨 R L	前上顎骨 R L	前上顎骨 R L	前上顎骨 R L	前上顎骨 R L	前上顎骨 R L	前上顎骨 R L	前上顎骨 R L	前上顎骨 R L							
タグリ目	タグリ科	口蓋 R L	口蓋 R L	口蓋 R L	口蓋 R L	口蓋 R L	口蓋 R L	口蓋 R L	口蓋 R L	口蓋 R L	口蓋 R L	口蓋 R L	口蓋 R L	口蓋 R L	口蓋 R L							
ペラ科	コブタクイ	下顎頭骨 R L	下顎頭骨 R L	下顎頭骨 R L	下顎頭骨 R L	下顎頭骨 R L	下顎頭骨 R L	下顎頭骨 R L	下顎頭骨 R L	下顎頭骨 R L	下顎頭骨 R L	下顎頭骨 R L	下顎頭骨 R L	下顎頭骨 R L	下顎頭骨 R L							
ブダイ科	ナンヨウブダイ	上頸頭骨 R L	上頸頭骨 R L	上頸頭骨 R L	上頸頭骨 R L	上頸頭骨 R L	上頸頭骨 R L	上頸頭骨 R L	上頸頭骨 R L	上頸頭骨 R L	上頸頭骨 R L	上頸頭骨 R L	上頸頭骨 R L	上頸頭骨 R L	上頸頭骨 R L							
カワリハギ科	カワリハギ科の一種	カワリハギ科の一種	カワリハギ科の一種	カワリハギ科の一種	カワリハギ科の一種	カワリハギ科の一種	カワリハギ科の一種	カワリハギ科の一種	カワリハギ科の一種	カワリハギ科の一種	カワリハギ科の一種	カワリハギ科の一種	カワリハギ科の一種	カワリハギ科の一種	カワリハギ科の一種							
ハイキンギ科	ハイキンギ科の一種	ハイキンギ科の一種	ハイキンギ科の一種	ハイキンギ科の一種	ハイキンギ科の一種	ハイキンギ科の一種	ハイキンギ科の一種	ハイキンギ科の一種	ハイキンギ科の一種	ハイキンギ科の一種	ハイキンギ科の一種	ハイキンギ科の一種	ハイキンギ科の一種	ハイキンギ科の一種	ハイキンギ科の一種							
ツバメウオ科	ツバメウオ科の一種	ツバメウオ科の一種	ツバメウオ科の一種	ツバメウオ科の一種	ツバメウオ科の一種	ツバメウオ科の一種	ツバメウオ科の一種	ツバメウオ科の一種	ツバメウオ科の一種	ツバメウオ科の一種	ツバメウオ科の一種	ツバメウオ科の一種	ツバメウオ科の一種	ツバメウオ科の一種	ツバメウオ科の一種							
アユ科	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ	アユ							
合計	4	1	2	3	2	1	1	1	1	2	2	1	1	5	1	7	1	1	1	46	2	96

第63表 ニワトリ出土量

注 () ; 破片、○; キズあり

第62表 ウミガメ出土一覧

第62表 ウミガメ出土一覧					
部位	右/左	出土地			個数
頭蓋骨		集石遺構	B-5	A	1
椎骨	左	複乱	複乱	複乱	1
椎骨	右	後之御庭地区	B-5	10層	1
助骨板		集石遺構内			1
背甲骨		後之御庭地区	ピット内	上層	1
破片			106, 107		1
			複乱		1

第64表 トリ類出土一覧

種類	部位	右/左	残存部位	出土地		個数
				石棺み遺構	石棺み遺構	
キシホクト	中手骨	右	頭椎	後之御庭地区	C-8	栗石内 岩盤面上
	腰骨		不明	石棺み遺構	3	栗石内
不明				後之御庭地区	C-4	栗石内 8層
				破片		塊乱

第67表 ブタ出土量

注():破片、○:呑ズあり

第65表 ネズミ出土一覧

部位	右/左	出土地		個数
		石積み遺構	栗理土	
下顎骨	左		3	1
	右	門番所・中門・竪溝地区	E-10	1
上脣骨	右	後之御庭地区	B-5	6層
	左	石積み遺構	3	栗理土
大腿骨	左	門番所・中門・竪溝地区	E-10	暗褐色(岩盤上層)
				1

第66表 イヌ出土一覧

部位	右/左	残存部位	出土地		個数
大齒		後之御庭地区	D-5	10層	1
			B-7	赤褐色粘質土	1
上腕骨	左	骨体	石積み遺構	3	栗石埋土

第68表 ブタ歯出土一覧

部位	右/左	理学部位	出典	個数
上脇骨	左	t^1 大歯 $\frac{1}{2}$	門脇筋中門・赤濱地区 C-4	ピット83 視乱
	左	I_1 大歯 $\frac{1}{2}$	後之御庭地区 C-7	灰色粘質土 視乱
下脇骨	左	$d_{m_1} F_1 \cdot M_1$ $M_{1,2}$	栗石造構 後之御庭地区	B-5) B F-7) 濱山
	右	I_1	B-7 C-5	視乱 報亂
右	右	I_2	D-10	視乱

第71表 ウシ出土量

部位	出土地		個数	後之御庭地区										石器遺構		集石遺構										搅乱	不明	合計				
	E-			C-		D-		F-		2		下		4		B-		5		5												
	9・10	5		7	5	6	5	7	下	4	5	地山	暗褐色土	C	D	A	B	B	7層	A	C											
	溝内	6層	赤褐色 粘質土	3層	7層	灰色粘質土	10層	地山	暗褐色土	C	D	A	B	B	B	7層	A	C														
右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明			
頭骨	角																															
頭骨	破片																															
下頸骨	筋突起																															
下頸骨	下頸骨																															
椎体	胸椎																															
椎体	腰椎																															
棘突起																																
近位～																																
肋骨	第1																															
軟骨	破片																															
肩甲骨	肩甲骨																															
肩甲骨	破片																															
上腕骨	近位部																															
上腕骨	破片																															
桡骨	近位部～遠位部																															
桡骨	骨体																															
中手骨	近位部																															
中手骨	近位部～遠位部																															
中手骨	遠位端																															
中手骨	破片																															
大腿骨	骨頭のみ																															
大腿骨	骨体																															
胫骨	近位部																															
胫骨	遠位端骨のみ																															
胫骨	1																															
膝骨																																
膝骨	胫骨																															
足根骨	中心																															
足根骨	第5・3																															
中足骨	破片																															
中足骨																																
基節骨																																
中節骨																																
合計	0	0	1	0	1	0	1	0	2	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	1	1	0	13	12	35				

注 ()：破片、○：キズあり、□：半欠、()：幼

第69表 ジュゴン出土一覧

部位	出土地	個数
B-3	搅乱	1
肋骨	C-5 C	1
棘突起	B-5 D	1

第70表 ウマ出土一覧

部位	右/左	出土地	個数
肋骨		集石遺構 C-5 A	2
		後之御庭地区 C-2 明褐色土	1
上腕骨	左	B-5 D	1
基節骨		B-5	1
種子骨		B-3	1

第72表 ウシ歯出土一覧

部位	右/左	残存部位	出土地	個数
上顎骨	右	M ²	搅乱	1
		M ³	集石遺構 C-5 A	1
		M ₁	集石遺構 B-5 D	1
		M ₂	搅乱	1
		M ₃	集石遺構 C-5 C	1
		M ₄	集石遺構 B-5 D	1
		切歛	搅乱	1
		M ₂	搅乱	1

第73表 ヤギ出土一覧

部位	右/左	残存部位	出土地	個数
下顎骨	右	P ₃ M _{1,2}	石積み遺構 3	1
		M ₁	搅乱	1
基節骨	左		搅乱	1

第5章 結語

今回の調査区域はかつて後之御庭が存在していた南北28m×東西8mの北地区と世説殿、門番詰所、中門、寄溝が存在していた南北約12m×東西約28mの南地区の2地区、調査面積は565m²に相当する。平成12年度調査では当該調査区の北側600m²を調査しており（沖縄県立埋蔵文化財センター2006）、御内原の中核部のほぼ全城が今回の発掘調査によって明らかにされたことになる。本章では周辺部分の成果もあわせて今回の調査成果をまとめていきたい。

首里城跡御内原西地区では前章まで触れてきたように御内原のかつての様相をある程度窺い知ることができる遺構が多く検出され、文献資料あるいは近世の絵図等との比較検討がかなり可能になった。平成12年度の御内原地区発掘調査では戦前・戦後の破壊や造成等によって、近世期にはいくつか存在していた御内原の建物に係る遺構は検出されていないことから、今回の調査で寄溝、中門、門番詰所の遺構が確認できたことはかつての近世における首里城の姿を知ることのできる重要な成果をあげたと言える。

以下に改めて時期別にそれらの成果を述べていくことにする。

1. 中世相当期の遺構群

中世相当期の遺構群としては北地区から検出された集石遺構をまず挙げができる。地山直上に石灰岩の小礫を敷き詰めており、上面を簡単に填圧して、平坦に仕上げている。この石灰岩の小礫内には大量の高麗系瓦と大和系瓦が、少量であるが土器、陶磁器、獸骨、金属製品、錢貨が混入していた。これらは全て小片であることから廃棄物として、石敷きの構成材料として利用された蓋然性が高い。陶磁器は中国産青磁と備前の擂鉢、瓦質土器が確認されており、これらから概ね14世紀末から15世紀前半に石敷きの構築時期を設定することができる。以上のことから高麗系及び大和系瓦が首里城に持ち込まれた時期、そして14世紀代における首里城跡の建造物について検証していく上で重要な遺構並びに一括遺物であると言える。

南地区からは石積み、石列、集石が確認されている。これらの遺構は複雑な切り合い関係にあり、全て近世以降の搅乱を受けている。石積み、石列については面石を加工しており、それぞれ東西軸、南北軸にほぼ合うように構築されている。集石は調査区の南西隅、寄溝跡付近東西3m×南北4mの範囲で確認されている。石積み3～6、石列1～4がこれらの集石によって埋没していた。うち石積み3～6、石列1、2が中世相当期まで遡ることができるものと思われる。

これら石積みに関しては石積み6、4、5、3の順で構築されたものと思われる。また石積み3栗石内から青磁盤と天目が確認されることから15世紀中頃、遅くとも15世紀後半頃までにこれら南地区的石積みは構築されていたものと考えられる。また、これら石積み及び集石の下部から焼土層が確認されており、更にその火災層には大量の錢貨が含まれていたのが確認された。錢貨は全て破碎されており、無文錢が主体を占める一方でわずかではあるが判読可能な宋錢、明錢の破片資料も確認できる。これらのことから現在のところ1453年の尚布里・志魯の乱時の火災層に比定することができる。因みに南に隣接する二階殿地区発掘調査においても宋錢、明錢の破片資料が多量に出土しており（沖縄県立埋蔵文化財センター2005）、当該地区との関連性を今後、検討していく必要がある。

石列に関してはその変遷について、切り合い関係から石列2の後に石列1が構築されているものの、出土遺物が極めて少なく、その明確な時期を窺うことができない。但し石材の一部に火を受けていた部分が見られ、1660年もしくは1709年の火災時の痕跡と考えた場合、18世紀初め以前に遡ることが想定される。少なくとも寄溝に係ると思われる石矧い遺構に切られていることから近世の絵図等には見られない施設の一部であると言える。

そして最後に北、南地区あわせて154基もの柱穴が確認されていることも触れておきたい。柱径は大小様々で、

明確なプランを把握することができないため、これらの柱穴の機能については不明である。但し、多量の炭が混入しているものや岩盤まで掘り込んでいるもの、複雑に切り合っているものが見られたことから、その機能は多岐に及ぶものと考えられる。

今回の調査で中世相当期における御内原地区は幾度かの変更がなされていたことが確認されたとの集石遺構内から一括遺物が得られたことが大きな成果であったといえる。とくに集石遺構から出土した大量の大和系、高麗系瓦は隣接する正殿地区の発掘調査で報告されている14世紀の第1期正殿基壇（當眞嗣一、上原靜1987）に関係する可能性も出土位置並びに集石遺構の年代から十分に指摘できる。このことから琉球王国の拠点となる以前の首里城がどのような姿であったのかを考察していく上で集石遺構内及びそれに伴う一括遺物は重要な資料であると位置付けることができる。

2. 近世期の遺構群

まずは近世期の絵図資料等に見られる御内原の施設に関する遺構について触れていく。

北地区では後之御庭の床面が一部確認された。他方で西側が戦後の搅乱層によって岩盤まで削られていたことから、幸いにも断面観察を行うことができた。庭の造成状況としては拳大の自然石を大量に込め入れ、その上から黄褐色微砂と黄白色微砂を交互に突き固めた版築状の造成がなされており、さらにその上面には珊瑚織が薄く敷いているのが確認された。珊瑚織を敷くのは古墓の墓庭、そして玉陵や円覚寺といった王府に関わる施設に見られることから、後之御庭が文献資料で窺われるような聖域的要素を含んでいることを改めて認識させられた。加えて床面のほぼ全面からは1660年若しくは1706年における正殿周辺火災時の痕跡と想定される焼土面が検出された。この焼土面を覆うようにして前述の版築状の造成がなされていることが確認されたことから、火災後もそのまま位置を変えずに庭として利用され続けていることも判明した。最後に庭の北側を画するSR02も検出された一方で、その下部から柱穴列が石積みと並行して検出されたことも触れておきたい。柱径と並びから東西方向に柵列が2条設置されたものと思われる。おそらくSR02構築以前に柵列で後之御庭の北側を画していたものと思われる。

南地区では門番詰所、中門、寄溝の建物基礎が検出された。これらは御内原地区の中で主要施設ではないもののその実態については殆んど知られていない施設であるため今回、確認された遺構群の資料的価値は高いと言える。また、二階殿地区SB04北東側で確認されている方形の岩盤掘り込みが門番詰所の北東隅に設置された柱穴であることが確認されたことは今後の史跡整備に向けて重要な材料になってくるものと思われる。

一方で周辺施設としては門番詰所北側と寄溝南側の石垣、中門から後之御庭へ下りる岩盤削り出しの石段（図版1）や石疊が確認されている。これらの施設も『横内家文書』に記載されていることから、改めて『横内家文書』の信憑性の高さを認識させられた。

他に美福門に入った正面に配置されていた石積みの確認も平行して行ったが、戦後の搅乱が著しく根石は全く残存していなかった。しかし、門番詰所近くで根石を据えた岩盤の加工痕が窺えたことにより、根石は岩盤に直接据えられていたことが確認された。また門番詰所と当該石積みにかかる遺構がかなり接近していたことから、御内原と二階殿並びに美福門との間がこれらの施設によって完全に画されていましたとも判明した。

残念ながら世添殿に伴う遺構は戦前、戦後の搅乱によって、平成12年度調査成果も含めて全く確認することができなかった。その実態の解明については今後における新史料の発見等に委ねることになる。

3. 集石遺構の一括遺物について

集石遺構からは陶磁器53点、褐釉陶器53点、土器9点、錢貨5点、高麗系瓦55点、大和系瓦335点、埠瓦2点、金属製品5点が一括して出土しており、首里城御内原がいつ頃から機能し始めたのかを知る上で重要な材料を提供している。陶磁器は青磁、白磁、褐釉陶器が確認されている。青磁は無文外反碗（金武分類無文外反碗II、上田分類D-II）、無鏽蓮弁文碗（金武分類無鏽蓮弁文碗、上田B-II-a）、櫛描蓮弁文盤が、白磁はピロー

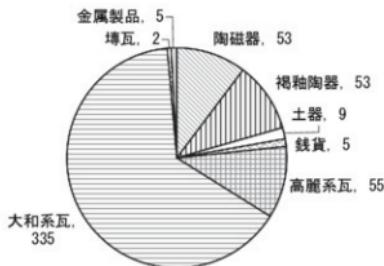
スクIV類（森本、田中 2004）とされる外反碗が確認されている。瓦質土器は青森県尻八館出土の風炉と類似する底部近くの小片が確認されている。何れも 14 世紀後半から 15 世紀前半にかけての資料である。これらは青磁、白磁のように小型で造りが粗雑な雜器や土器が見られる一方で、褐釉陶器の大型壺や瓦質土器では大型の風炉といった高級品も含まれていることから、雜多に城内で使用された製品を廃棄した一括資料であると言える。

また大和系瓦、高麗系瓦の使用年代に関して重要な問題を提起している。まずは年代の問題であるが、沖縄本島における使用開始年代に関しては三島格、関口広次、小渡清孝各氏が検証しているが、その下限については上原静氏が触れているに過ぎない（上原 1996）。これは首里城跡西のアザナの調査結果を踏まえたものであり、同地区の古期の造成状況と II 期正殿跡が非瓦葺建物であったことを考慮して、高麗系、大和系瓦の下限を 15 世紀前半としている。今回、高麗系並びに大和系瓦と共に陶磁器がまとまって出土したことにより、下限を 15 世紀前半とする蓋然性が高まったと言える。また、高麗系と大和系瓦には使用年代に差があるとの見解も出されてきたが（大川 1978）、今回の調査において、ほぼ同時期に首里城跡では使用されていたという事例を提起することができた。この高麗系と大和系瓦との関係については理化学分析を含めた産地の問題について考えていく必要があるが、かつて「高麗系瓦の影響を受けた大和系瓦や、逆に大和系瓦の技術を一部採用した高麗系瓦の存在、生産段階で融合した製品が製作される事実」と上原静氏が提言しているように（上原 2002）瓦の形態が必ずしも生産地に結びつかないこと、そして製作技術の伝播を指摘している。近年、高麗系瓦、大和系瓦、グスク土器の薄片観察並びに蛍光 X 線分析を実施し、鉱物成分は 3 成分の含量でまとまり、鉱物組成は「沖縄本島の地質構造と矛盾しない」との結果が出されている（浦添市教育委員会 2005）。

今回の調査においても高麗系瓦、大和系瓦、明朝系瓦、グスク土器、瓦質土器、沖縄産陶器の薄片観察並びに蛍光 X 線分析を実施し、浦添市教育委員会の結果とほぼ同様の結果が得られた。紙数の都合で概要のみ触れておくが、鉱物組成については高麗系瓦、大和系瓦、明朝系瓦においては石英、斜長石が主体となる点で一致した。グスク土器においては瓦に見られる鉱物組成も含まれていたが、全体的に個々はばらつきが見られた。それに対して沖縄産陶器は石英が主体で斜長石が極めて限られる組成にまとまっていることが窺えた。話はやや外れたが、高麗系瓦、大和系瓦、明朝系瓦の鉱物組成に違いが無いことから、全て沖縄本島で製作されている可能性が指摘できる。後日、これらの詳細について報告していきたいと思う。

このように集石遺構の一括遺物は今回の報告以上に首里城跡の起源を考察していく上で更なる情報を内包している余地を残している。よって初期の首里城跡の実態を知る資料として今後も注視していく必要があることは言を俟たない。

集石遺構出土遺物構成比

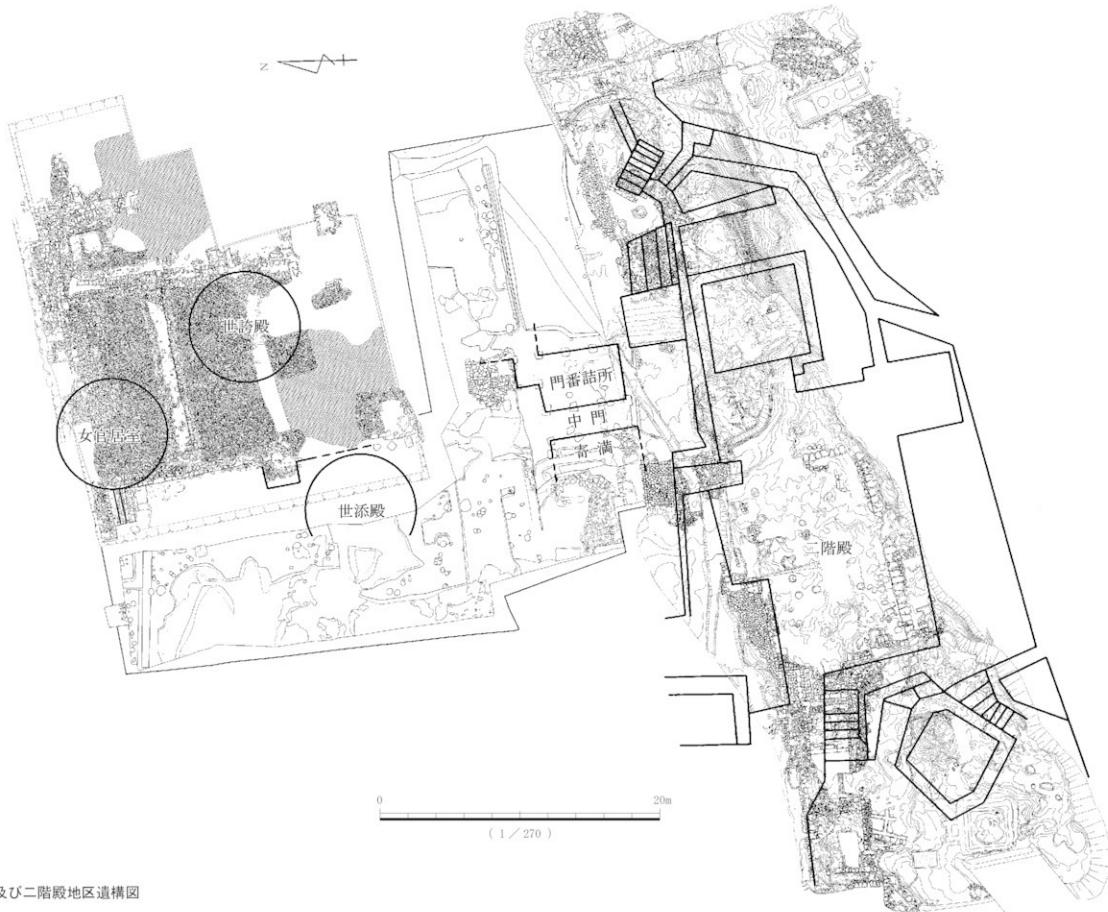


4. 今後の課題

御内原地区は第2章で触れたように明治期に各建物が撤去され、大正期に沖縄神社として大幅に改変がなされていることから、正殿や北殿、南殿、二階殿等で見られる沖縄戦前に撮影された写真は当該地区ではほぼ皆無である。また、聞き取り調査においても大正期以前の首里城跡の様子については全く話を得ることができなかつた。このようなことから調査前はどのような遺構がどの場所から検出されるのか、資史料が乏しいためほぼ手探り状態の中で発掘作業を行つた。また今回の調査成果が当該地区的復元整備に果たす役割は大きいことは調査前から指摘されていたことから、かなり慎重に遺構検出を行つた。幸い、二階殿地区、黄金御殿地区、御内原地区といった隣接地区の発掘調査が既に完了していたことから遺構面並びに遺構の状況をある程度、想定することができた。これを基にして上記のような多くの調査成果へ結び付けることができた。

今回のように資史料が極めて限られている地区的発掘調査が近い将来、首里城跡で数箇所、予定されている。調査担当者の実感としてこのような調査区が広域に及び、且つ長期間、継続する遺跡の発掘調査において過去の調査成果がかなり重視されてくることが改めて理解するに至つた。よって担当者はこれまでに調査された隣接地区の発掘調査成果をよく把握しておく必要があることは言うまでもない。このことから今後の調査を意識した意味内容、あわせて大局的な視野を報告書に盛り込んでいく必要があり、その成果を簡潔にまとめていくことの重要性を強く感じた。加えて遺跡全体の中における調査区の特質、そして位置付けを明瞭し、周辺における未調査区の状況が想定できる、遺跡全体を常に意識した視点を持つことがこれから更に重要になっていくものと思われる。

最後に中世相当期の遺構の問題について掲げておきたい。過去において首里城跡で確認された中世相当期の遺構は石積みや石列、集石をはじめとして多岐に及ぶ。それらの殆どが機能不明の遺構群であり、首里城の遺構評価の中で取り上げられることは余り無かつた。各地区から検出されている遺構に関して安直に評価することはできないが各地区検出遺構の相関関係を見出す作業を行っていく時期にあるものと思われる。今回は諸事情でその作業を行うことができなかつたので、次回以降の課題としておきたい。



第93図 御内原及び二階殿地区遺構図

参考文献

(五十音順)

- 安里嗣淳 1985 「沖縄グスク時代の文化と動物」『季刊 考古学』第11号 珠雄山閣出版
- 新垣 力 2004 「遺跡出土の茶道具跡からみた茶道の展開」『グスク文化を考える』新人物往来社
- 新垣力・瀬戸哲也 2005 「沖縄における14世紀～16世紀の中中国白磁の再整理 付. 14～16世紀の青磁の様相整理メモ」『紀要 沖縄埋文研究』3 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 池宮正治 1995 『琉球古語辞典混効験集の研究』第一書房
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 上原 静 1994 「首里城城郭、西のアザナの調査」『文化課紀要』第10号 沖縄県教育委員会文化課
- 上原 静 1996 「首里城跡の高麗系瓦と大和系瓦」『文化課紀要』第12号 沖縄県教育庁文化課
- 上原 静 2002 「沖縄諸島のグスク時代における瓦の需要」『読谷村立歴史民俗博物館紀要』第24号 同資料館
- 上原 静 2003 「第1部 沖縄諸島の先史・原始時代 第4章グスク時代 第5節-主な武器と武具 1 鐮」『沖縄県史』各論編 第2巻 考古 沖縄県教育委員会
- 大川 清 1978 『琉球古瓦抄報』『沖縄文化財調査報告書』那覇出版社
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁学会
- 角川書店 1986 「47 沖縄県」『角川日本地名大辞典』
- 金武正紀 1989 「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」『沖縄県立博物館紀要』第15号 沖縄県立博物館
- 金武正紀 2005 「舶載陶磁器からみる琉球の海外交易」『やちむん会誌』第14号 同会
- 久手堅憲夫 2000 「首里の地名」第一書房
- 久保智康 2002 「飾り金具」『日本の美術』第437号 至文堂
- 須藤利一 1974 『異国船来航記』法政大学出版
- 平良 啓 1994 「沖縄県旧首里城図について」『首里城研究』No.1 首里城研究会
- 田中克子 2003 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁(その三)宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』
- 野々村孝男 1999 「首里城を救った男」ニライ社 第11号 博多研究会
- 津波古聰・池田栄史 1991 「灰釉碗の話」『沖縄県立博物館紀要』第14号 沖縄県立博物館
- 照屋善義 2000 『沖縄の陶器—技術と科学—』
- 當眞嗣一・上原静 1987 「首里城正殿の調査」『文化課紀要』第4号 沖縄県教育委員会
- 永井久美男 1994 「中世の出土銭－出土銭の調査と分類－」兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男 1996 『日本出土銭総覽』兵庫埋蔵銭調査会
- 那覇市立壺屋焼物博物館 2001 『掘り出された壺屋』
- 真榮平房敏 1993 「近代の首里城」『甦る首里城』首里城復元期成会
- 水澤幸一 2004 「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究』No.24 日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 森本朝子 1994 「博多遺跡群出土の天目」『唐物天目』茶道博物館
- 森本朝子・田中克子 2004 「沖縄出土の貿易陶磁の問題点」『グスク文化を考える』新人物往来社
- 盛本 熱 2005 「宮古・八重山諸島のグスク時代出土の骨鐵様製品考」『紀要 沖縄埋文研究』第3号 沖縄県立埋蔵文化財センター

参考報告書

(五十音順)

- 糸満市教育委員会 1994 『佐慶グスク・山城古島遺跡－喜屋武・山城線道路改良工事に伴う発掘調査報告－』糸満市文化財調査報告書 第8集
- 浦添市教育委員会 1985 『浦添城跡発掘調査報告書』浦添市文化財調査報告書 第9集
- 浦添市教育委員会 2005 『浦添ようどれⅡ』浦添市文化財調査研究報告書
- 沖縄県教育委員会 1986 『旧首里城跡正殿位置確認調査報告』
- 沖縄県教育委員会 1993 『浦田古窯跡(1)－駐守舎行政棟建設に係る発掘調査－』
沖縄県文化財調査報告書 第111集
- 沖縄県教育委員会 1983 『稲福遺跡発掘調査報告書(上御願地区)』沖縄県文化財調査報告書 第50集
- 沖縄県教育委員会 1995 『首里城跡－南殿・北殿跡の遺構調査報告－』
沖縄県文化財調査報告書 第120集
- 沖縄県教育委員会 2003 『沖縄の陶器類関係資料調査報告書』平成14年度沖縄県史料調査
シリーズ第3集 沖縄県文化財調査報告書 第142集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第1集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『天界寺跡(1)－首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査－』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第2集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『首里城跡－下の御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発
掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群－県営かんがい排水事業(カンジン地区)に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書－』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第6集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 『首里城－城の下地区発掘調査報告書－』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第18集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 『与那国島 嘉田地区古墓群－嘉田地区は場整備事業に伴う緊急発掘調
査報告－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第21集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 『首里城跡－書院・鎖之間地区発掘調査報告書－』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第28集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第29集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 『首里城跡－淑順門地区発掘調査報告書－』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第33集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 『首里城跡－御内原地区発掘調査報告書－』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第34集
- 勝連町教育委員会 1984 『勝連城跡－南貝塚および二の丸北地点発掘調査－』勝連町の文化財 第6集
- 勝連町教育委員会 1990 『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査－(1)』
勝連町の文化財 第11集
- 国営沖縄記念公園事務所 2002 『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』内閣府沖縄総合事務局
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1998 『沖縄のやきもの－南海からの香り－』佐賀県立九州陶磁文化館
- 玉城村教育委員会 1991 『糸数城跡－発掘調査報告Ⅰ－』玉城村文化財調査報告書 第1集
- 今帰仁村教育委員会 1991 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書 第14集
- 那覇市教育委員会 1999 『天界寺跡－首里城線街路事業に伴う緊急発掘調査報告－』
那覇市文化財調査報告書 第42集
- 南風原町教育委員会 1996 『クニンドー遺跡－第1・2・3次範囲確認調査報告書－』
南風原町文化財調査報告書 第2集

図 版



図版2 発掘前の調査区全景（東から）



図版3 完成後の調査区全景（東から）



図版4 調査区北側全景



図版5 調査区南側全景



調査区北側全景（北から）



トレンチ1 焼土面検出状況



S R O 2付近検出の柱穴郡



後之御庭床面検出柱穴郡（北東から）



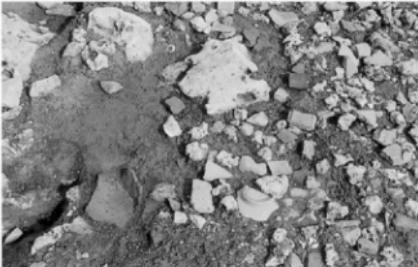
S R O 2全景（南東から）



S R O 2裏込め状況



調査区北側集石遺構（南から）



C-5 集石遺構

図版6 調査区及び遺構検出状況（1）



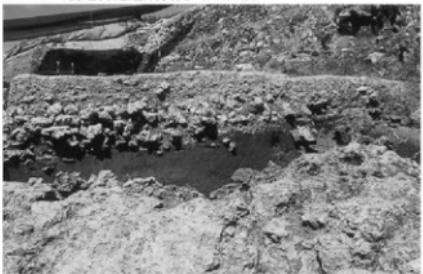
C-5 集石遺構（瓦、獸骨集中部）



D-5 後之御庭造成状況（西から）



D-4 後之御庭造成状況（西から）



D-6 後之御庭造成状況（南から）



調査区北側全景（南西から）



石壠 1 全景（北から）



石壠 2 全景



石壠 2 基部造成状況（北から）

図版7 遺構検出状況（2）



石積み1（北から）



石積み1、階段遺構（北から）



石積み3 全景（西から）



石積み3 全景（北西から）



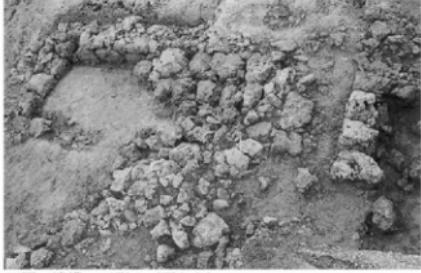
石列1 全景（東から）



石列2 全景（北東から）



石積み2、3、4 全景（南西から）

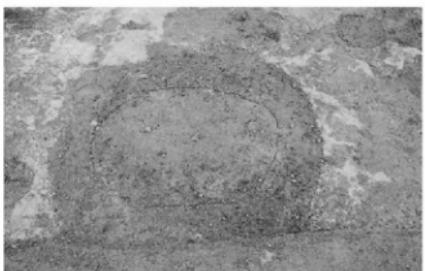


石囲い遺構、石列2（西から）

図版8 遺構検出状況（3）



石開い遺構（東から）



ピット133



ピット125、126、128



ピット106、107



栗石内銅貨出土状況



金属製品出土状況（北から）



柱穴検出状況（北東から）



柱穴検出状況（南西から）

図版9 遺構検出状況（4）



表土堀削状況



遺構検出状況



発掘作業状況



遺構実測風景



実測風景



土壤サンプリング作業

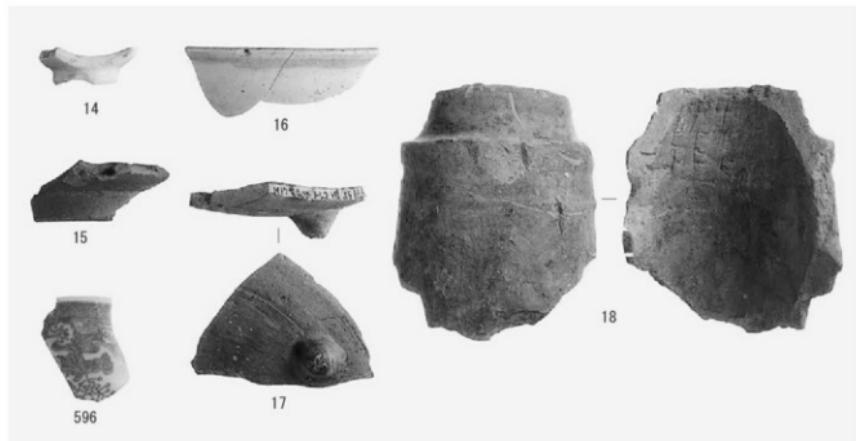
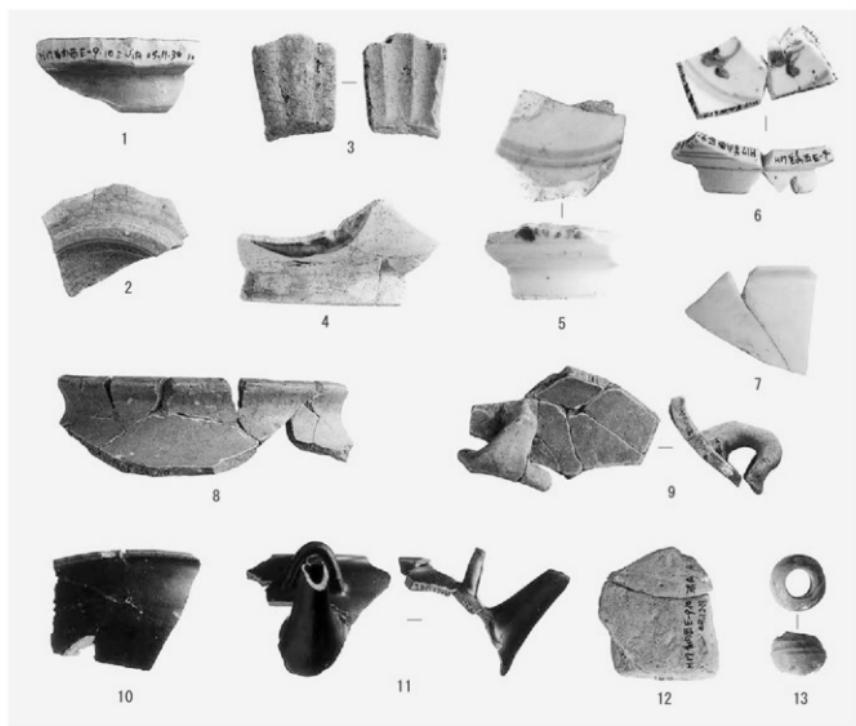


空撮風景

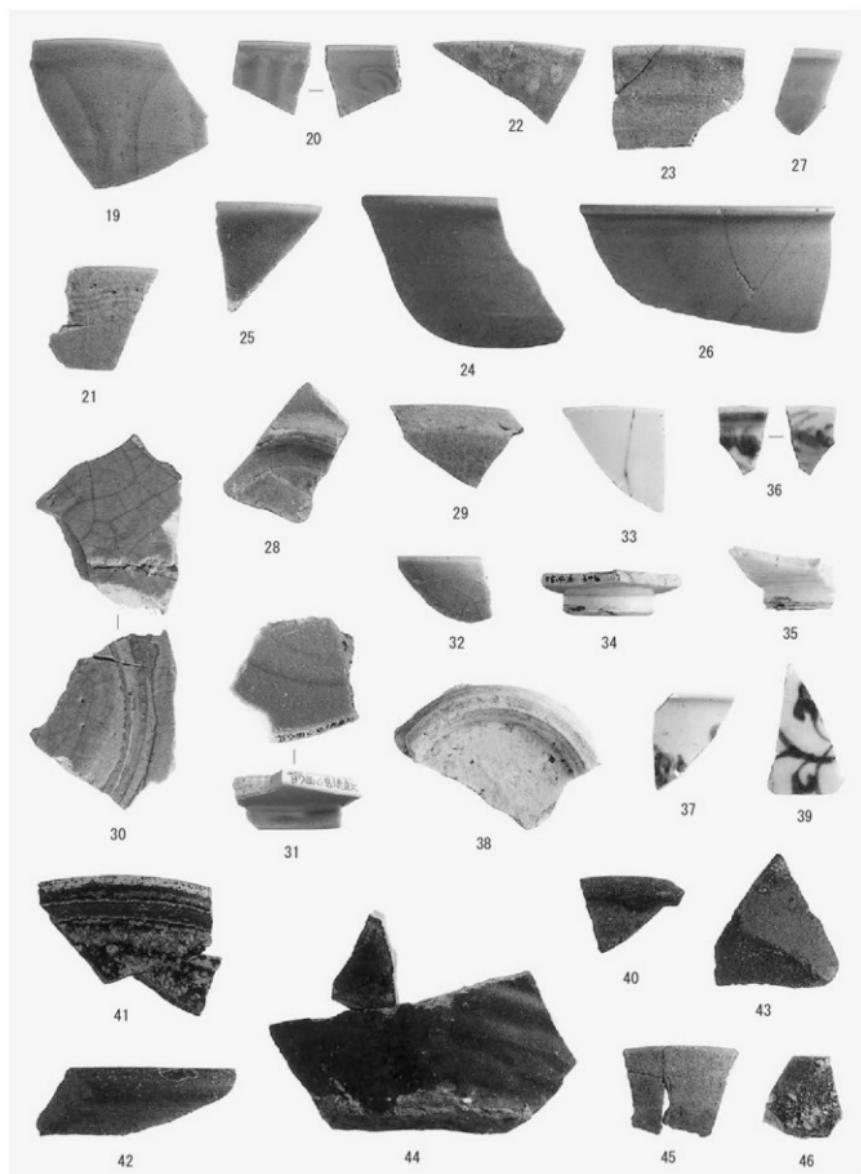


出土不発弾

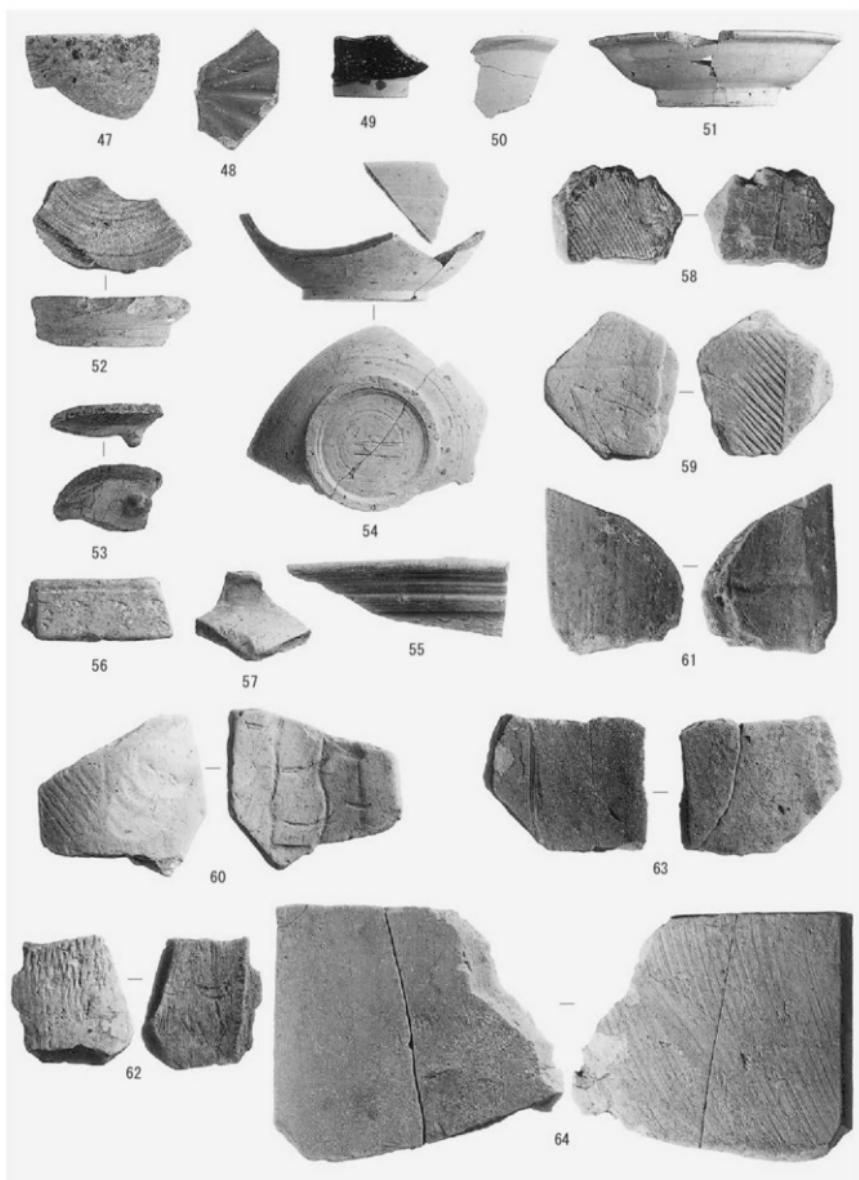
図版10 調査風景及び出土不発弾



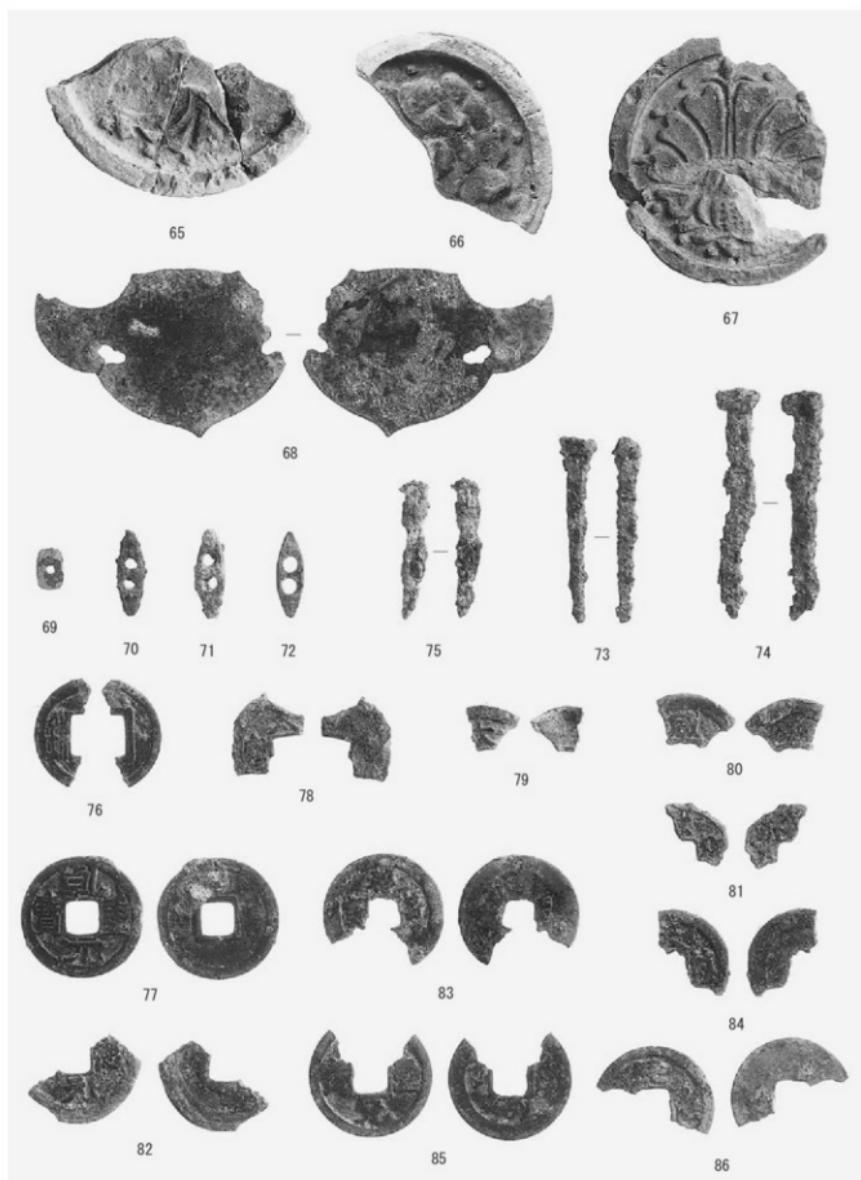
図版11 上：門番詰所・中門・寄満地区 下：S R O 2 出土遺物



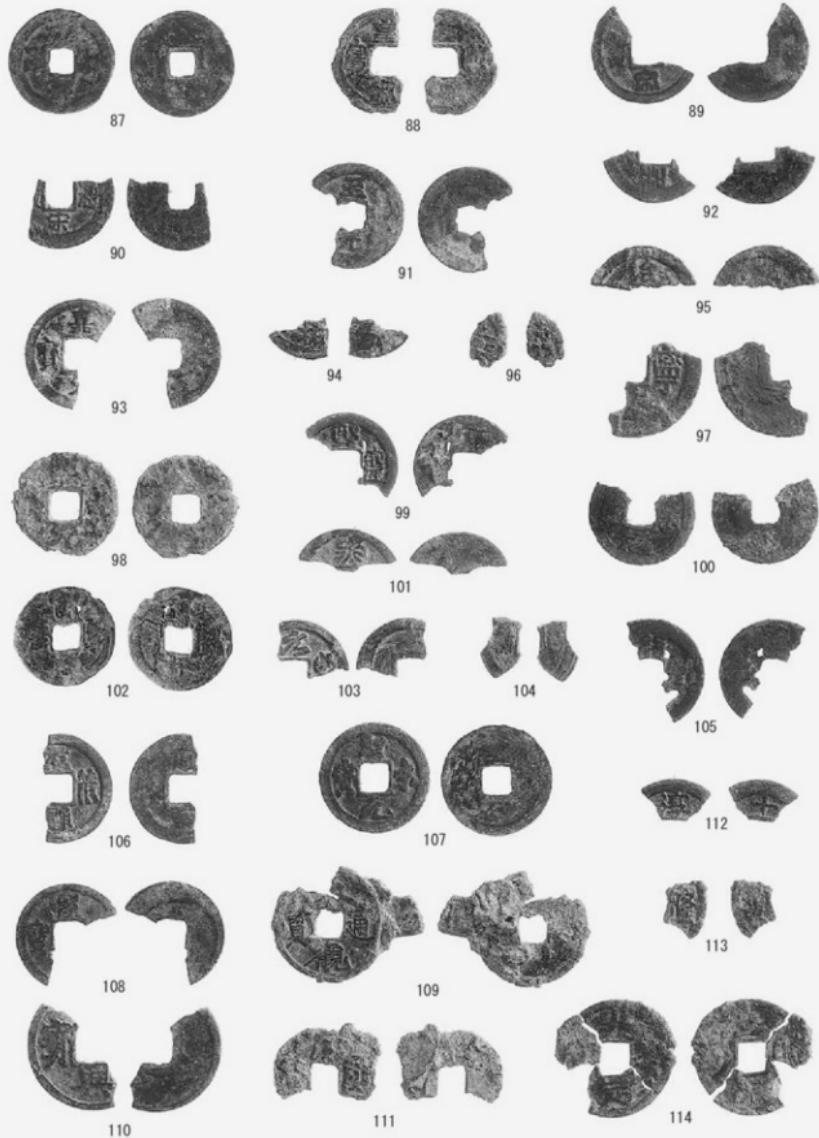
図版12 後之御庭地区 出土遺物（1）



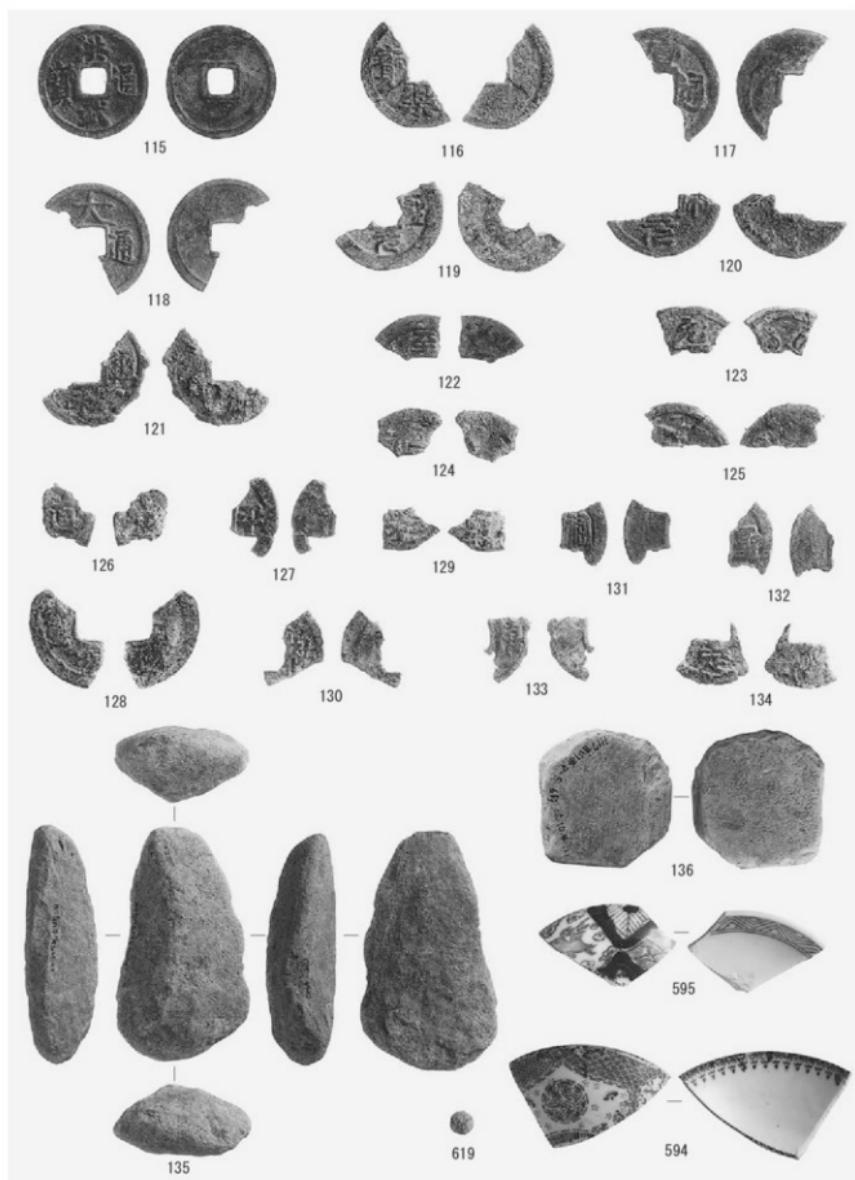
図版13 後之御庭地区 出土遺物（2）



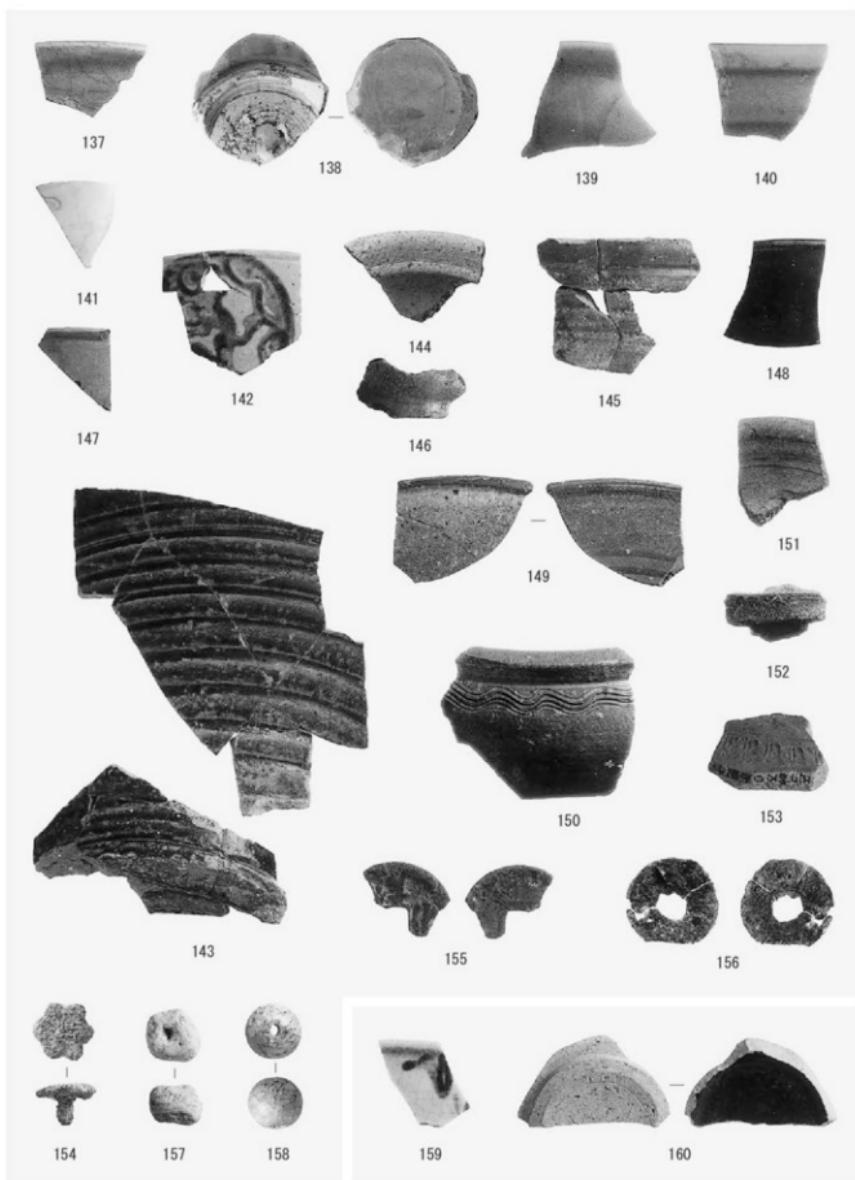
图版14 後之御庭地区 出土遗物 (3)



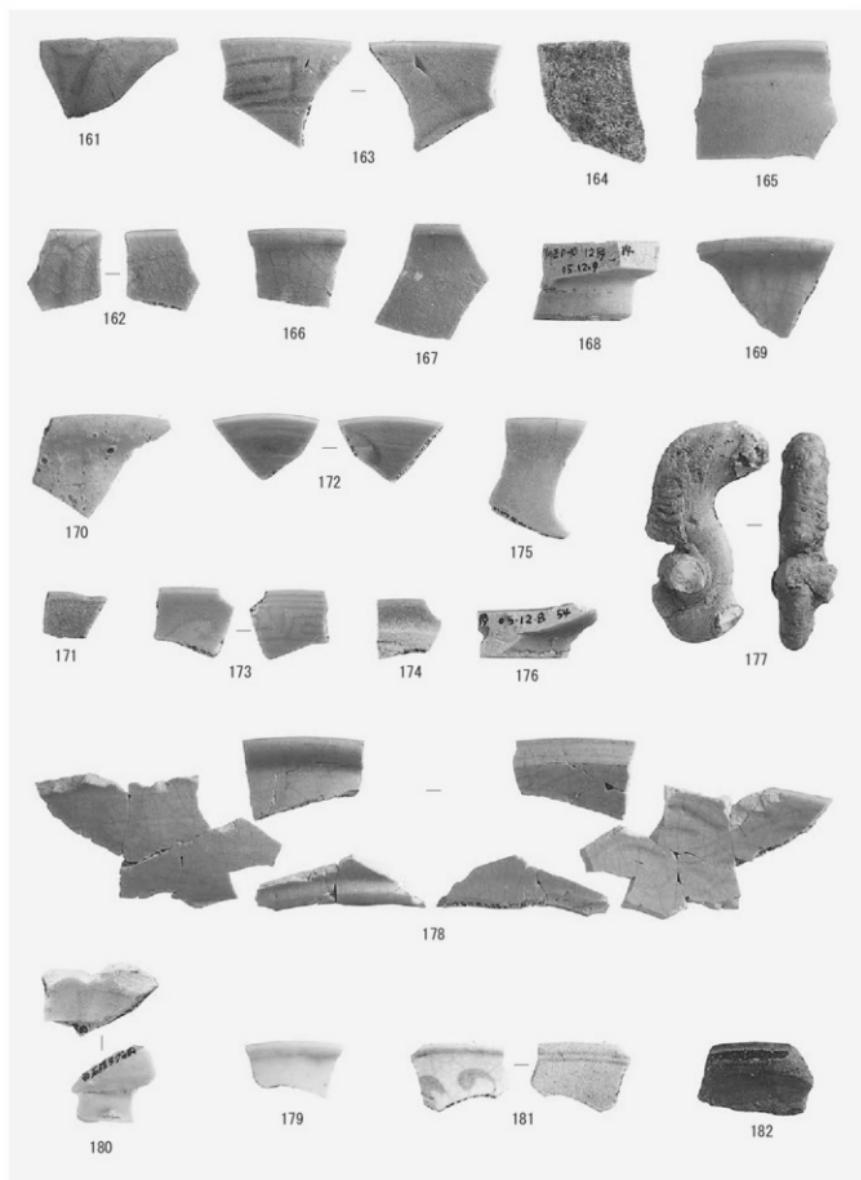
図版15 後之御庭地区 出土遺物（4）



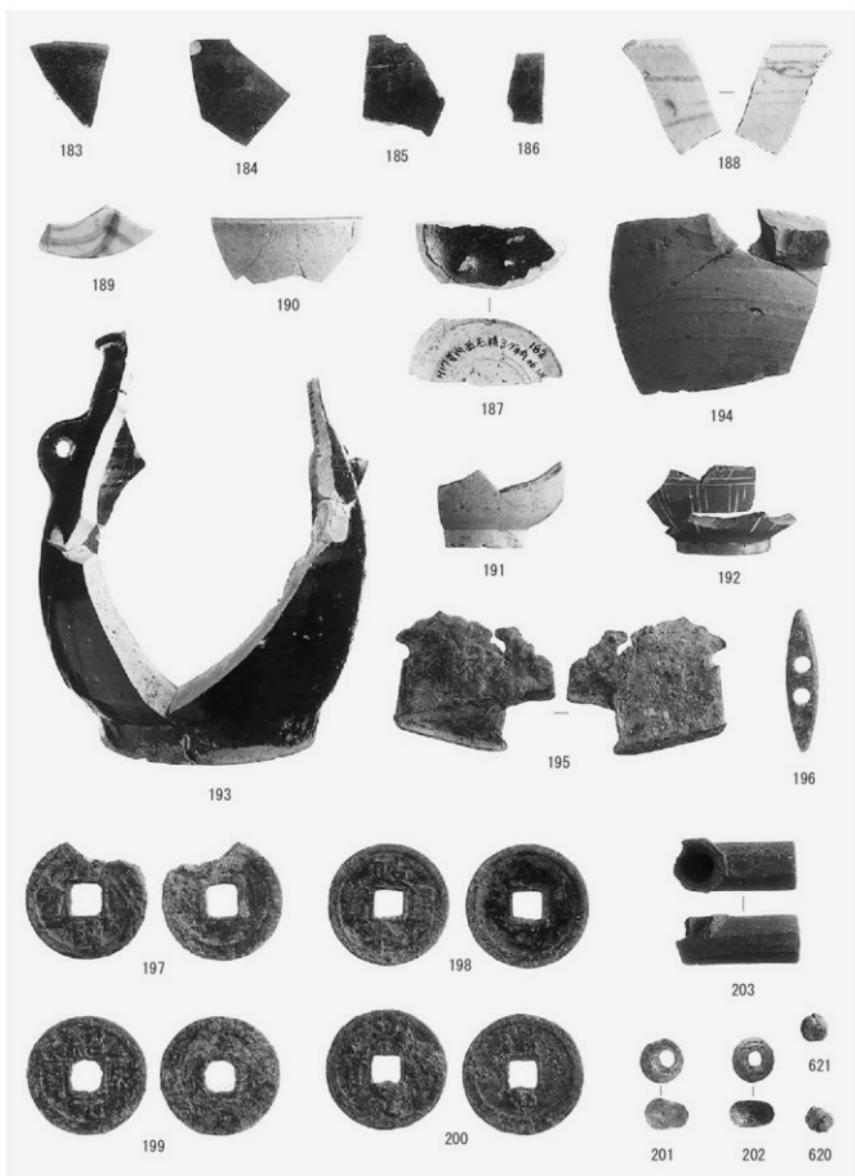
図版16 後之御庭地区 出土遺物（5）



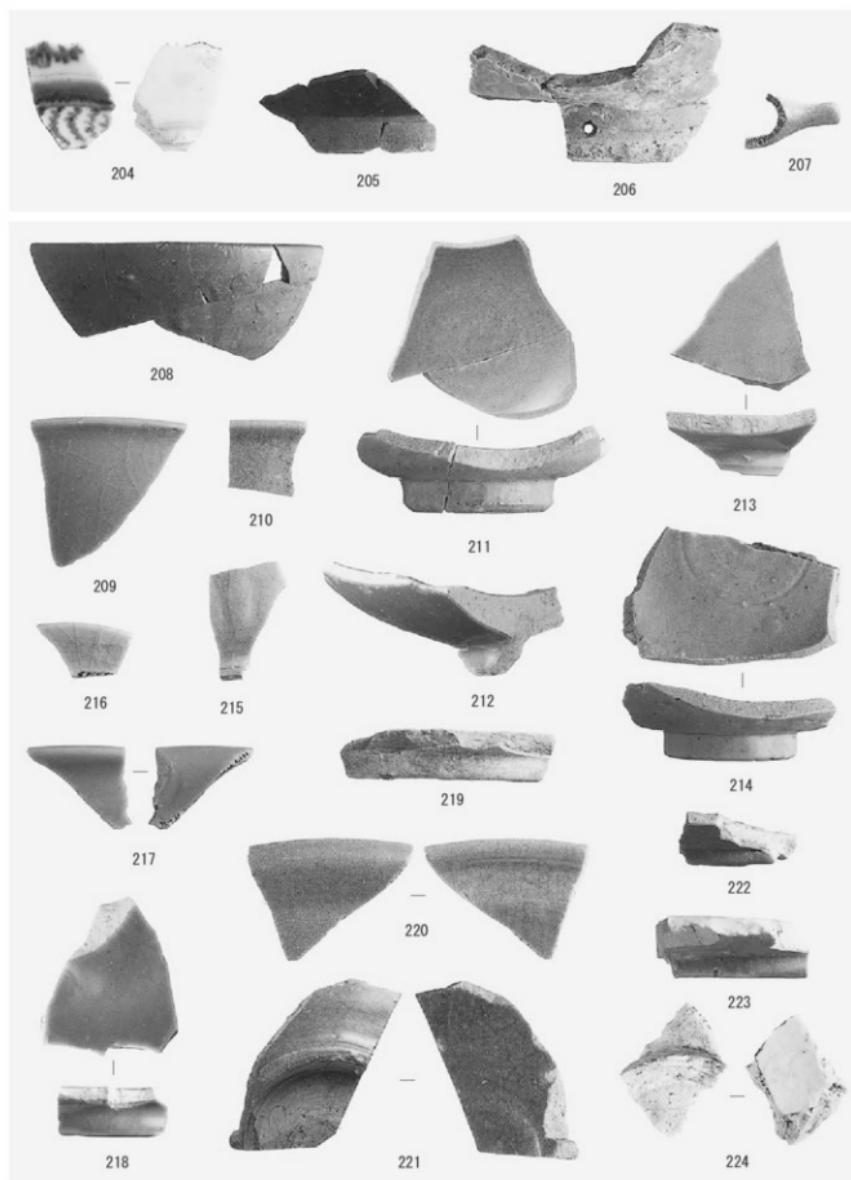
図版17 上：石圓い遺構 下：石列遺構 出土遺物



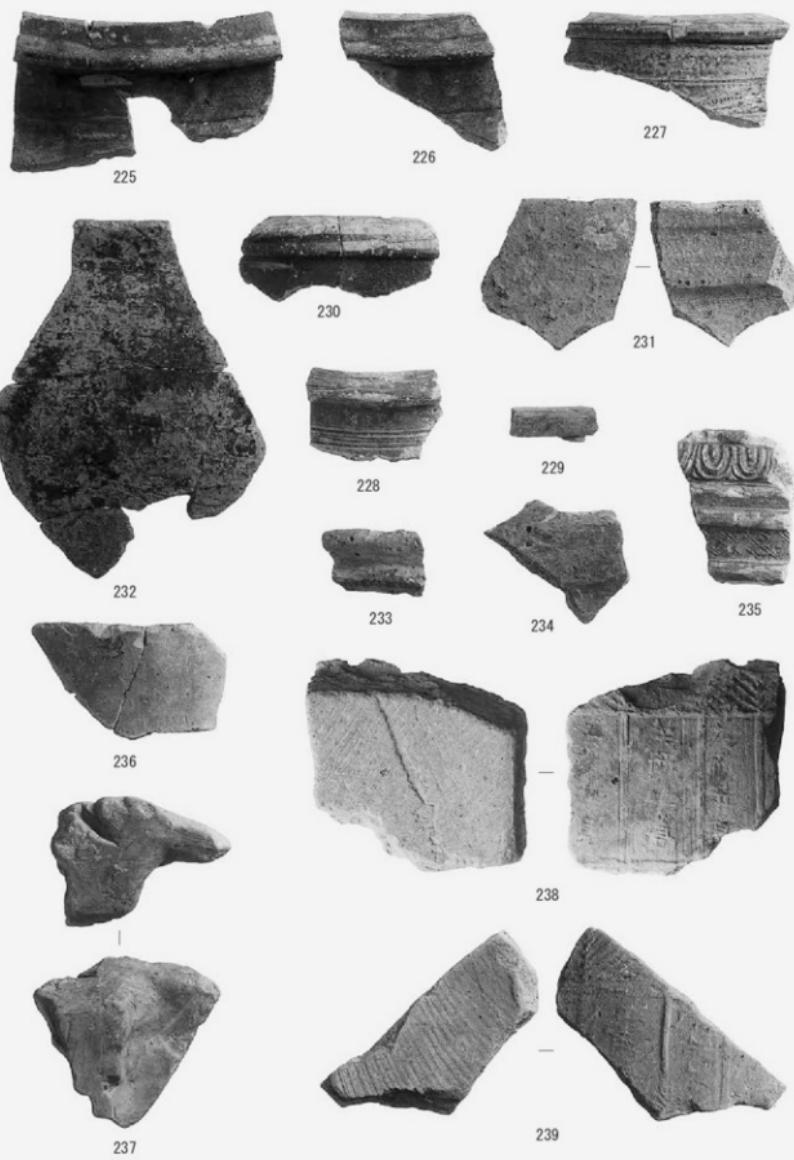
図版18 石積み遺構 出土遺物（1）



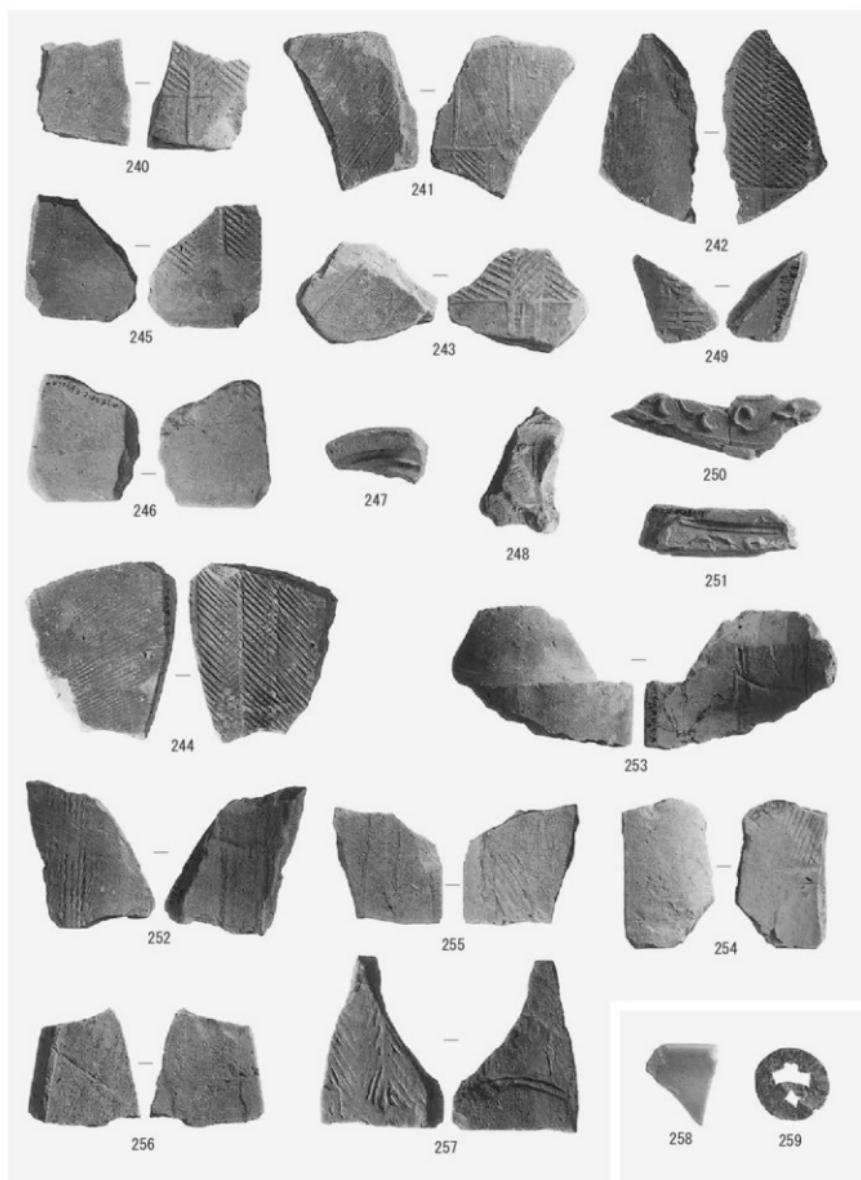
図版19 石積み遺構 出土遺物（2）



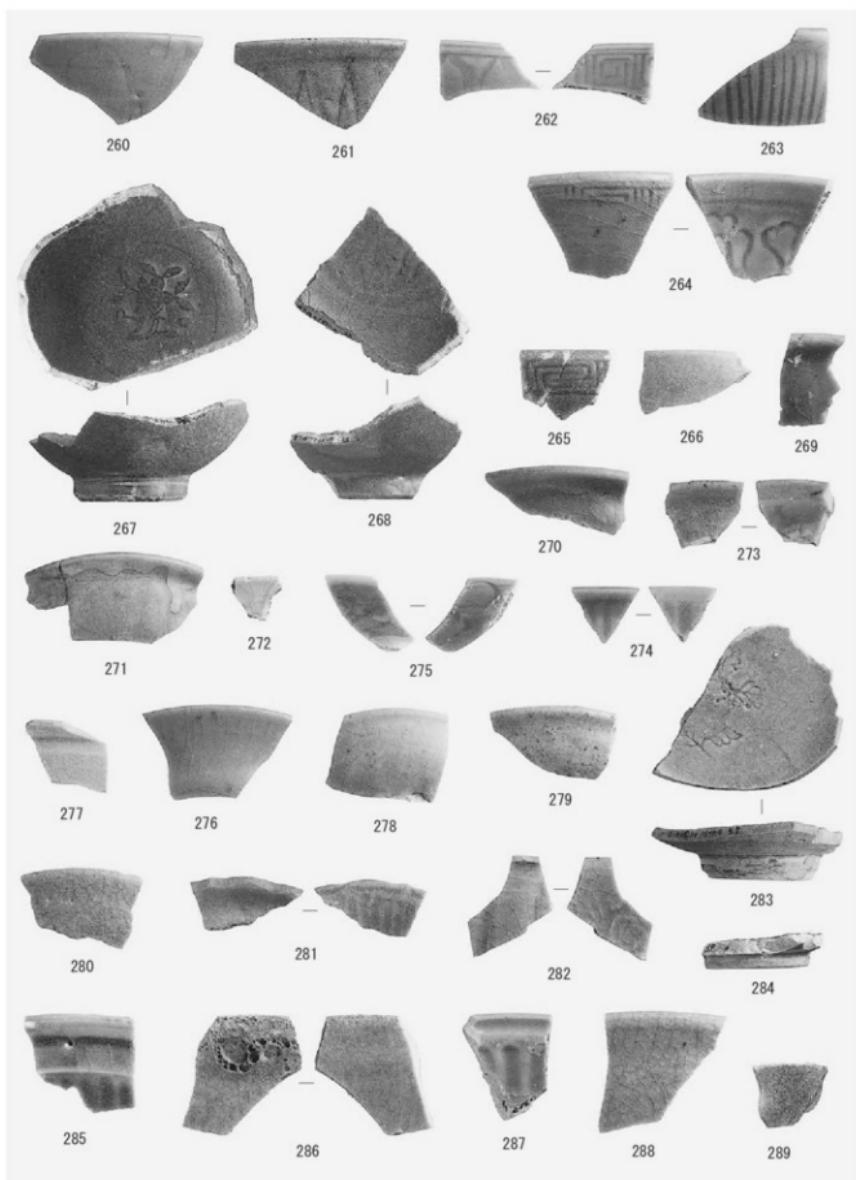
図版20 上 : 石疊造構 下 : 集石遺構 (1) 出土遺物



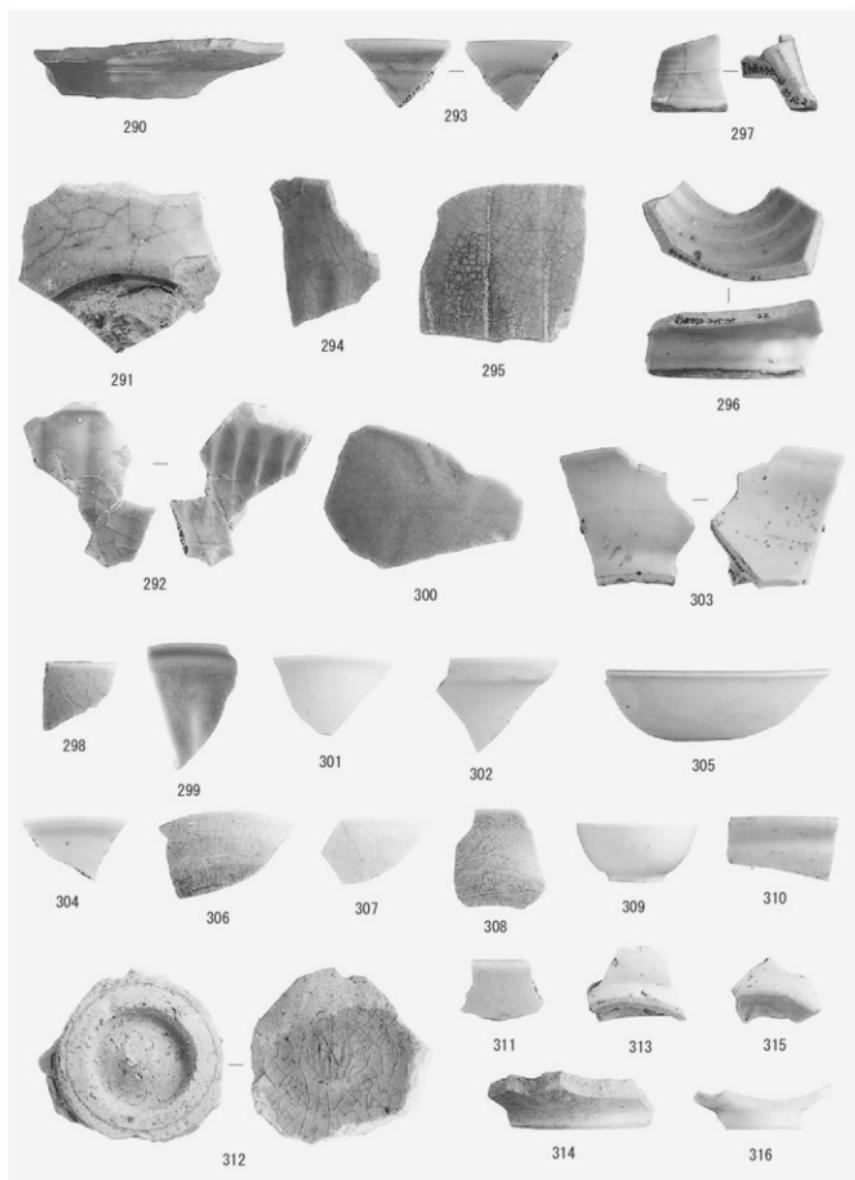
図版21 集石造構出土遺物（2）



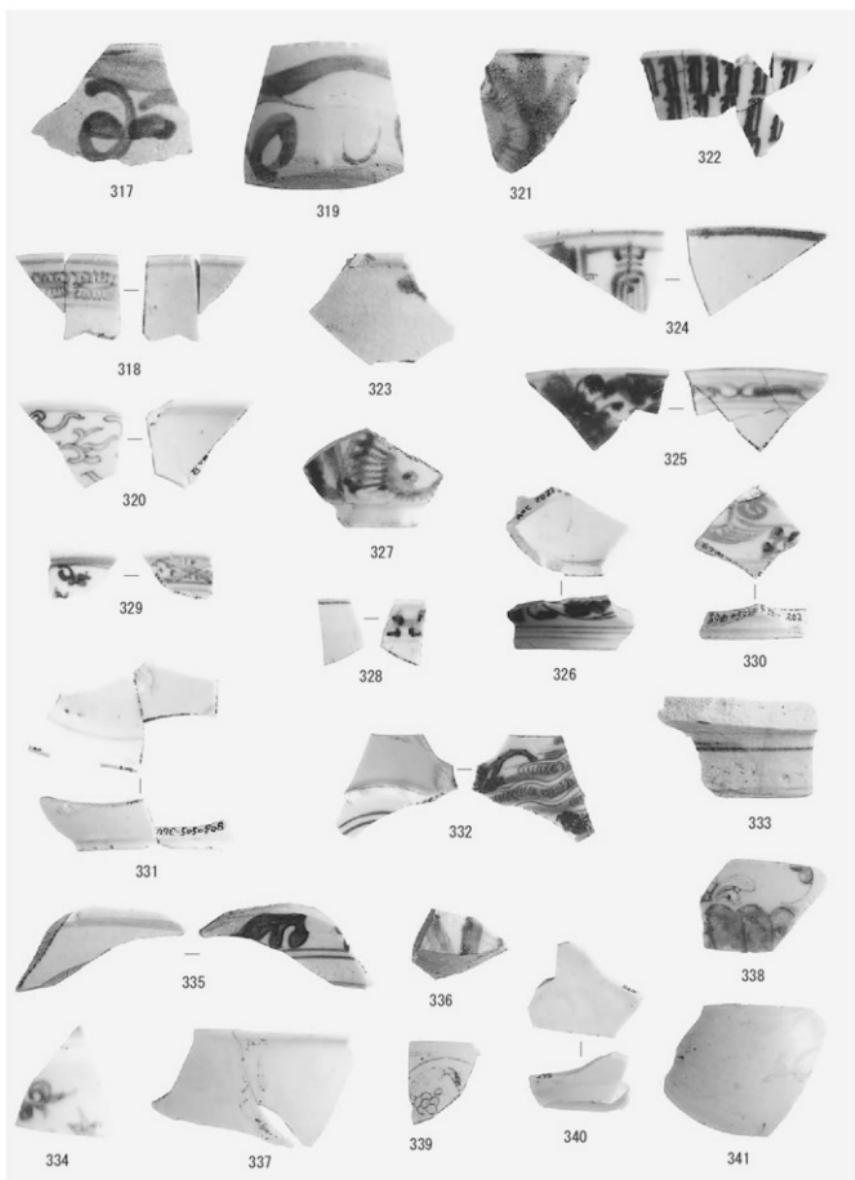
図版22 上：集石造構（3） 右下：G-8～J-8 柱穴群 出土遺物



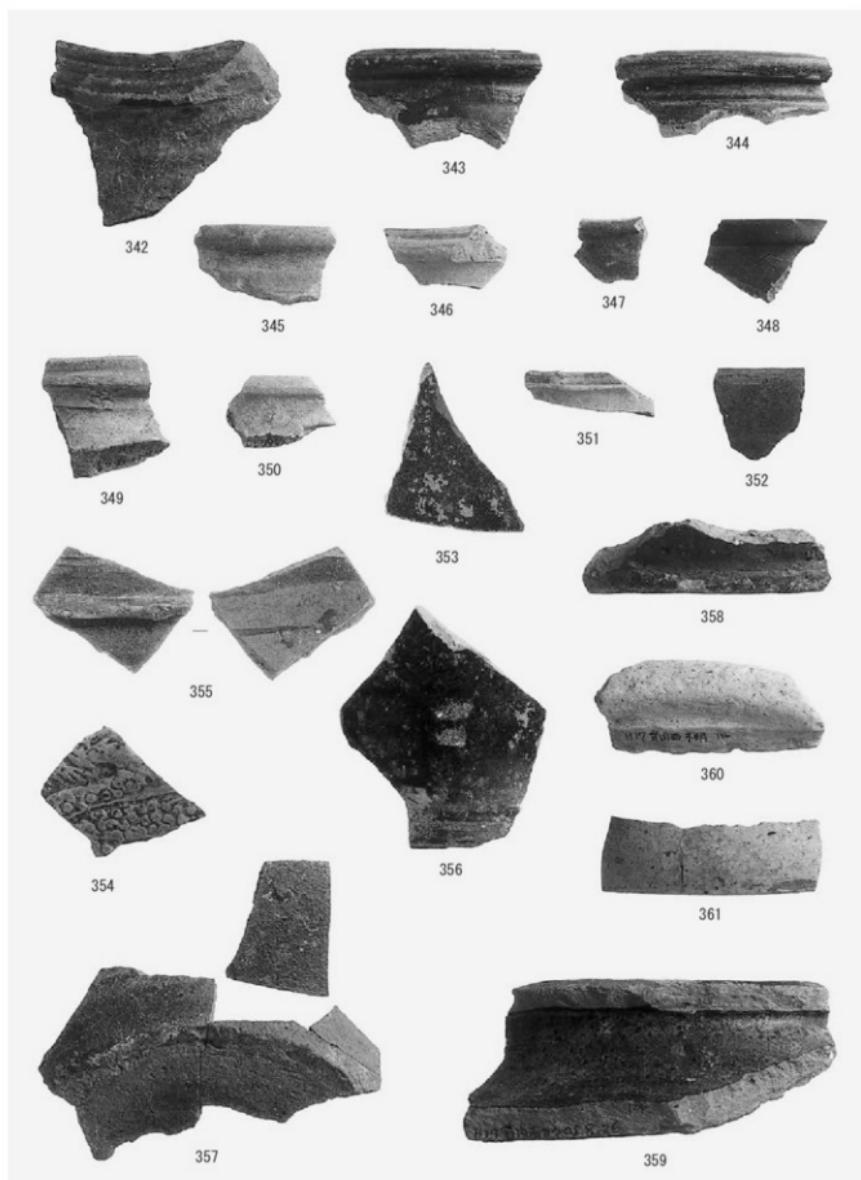
図版23 搅乱層等の出土遺物（1）



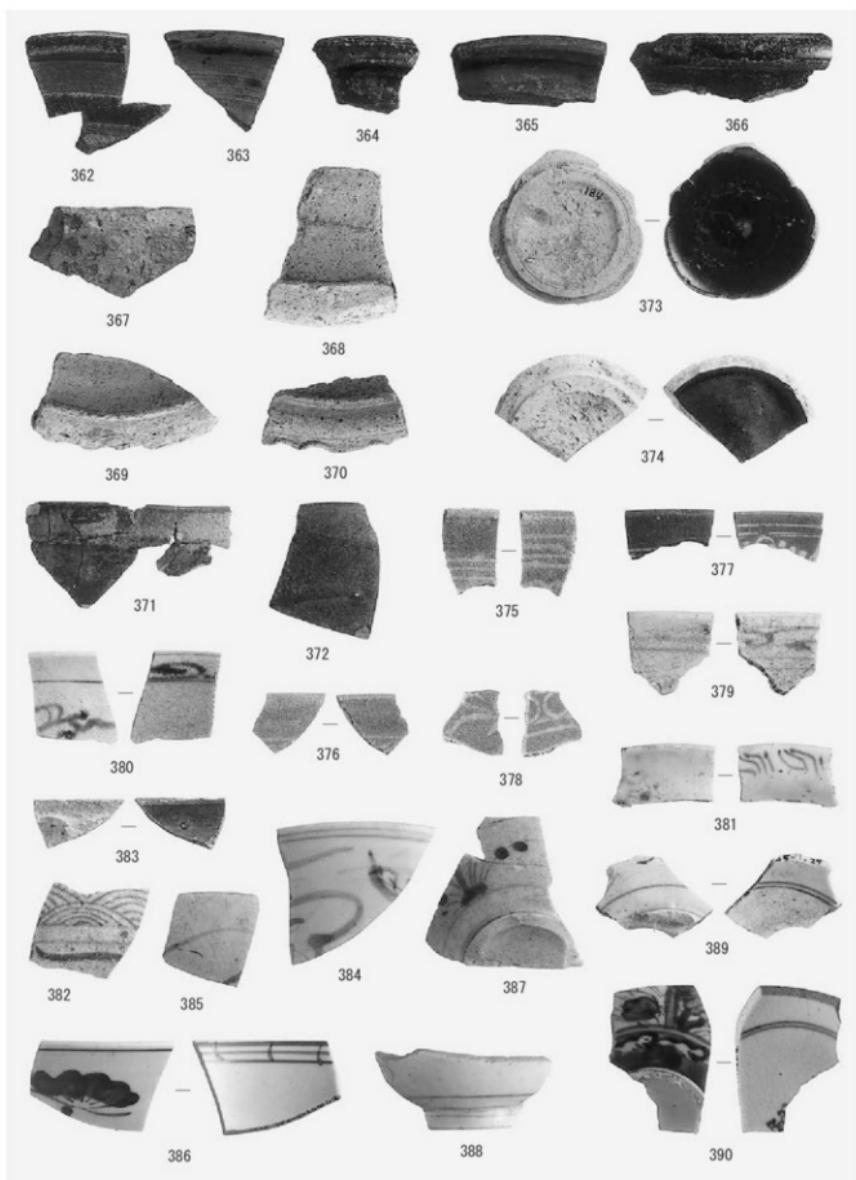
図版24 搅乱層等の出土遺物（2）



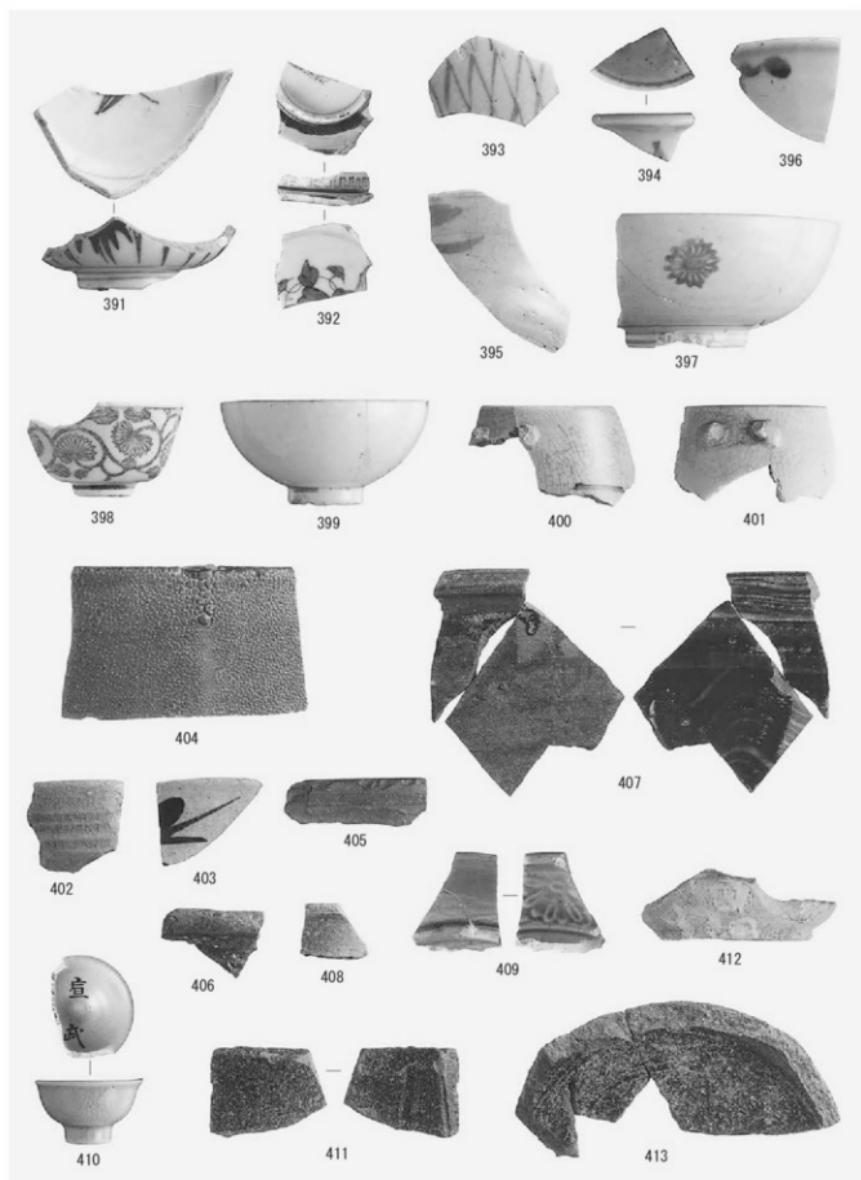
図版25 搅乱層等の出土遺物（3）



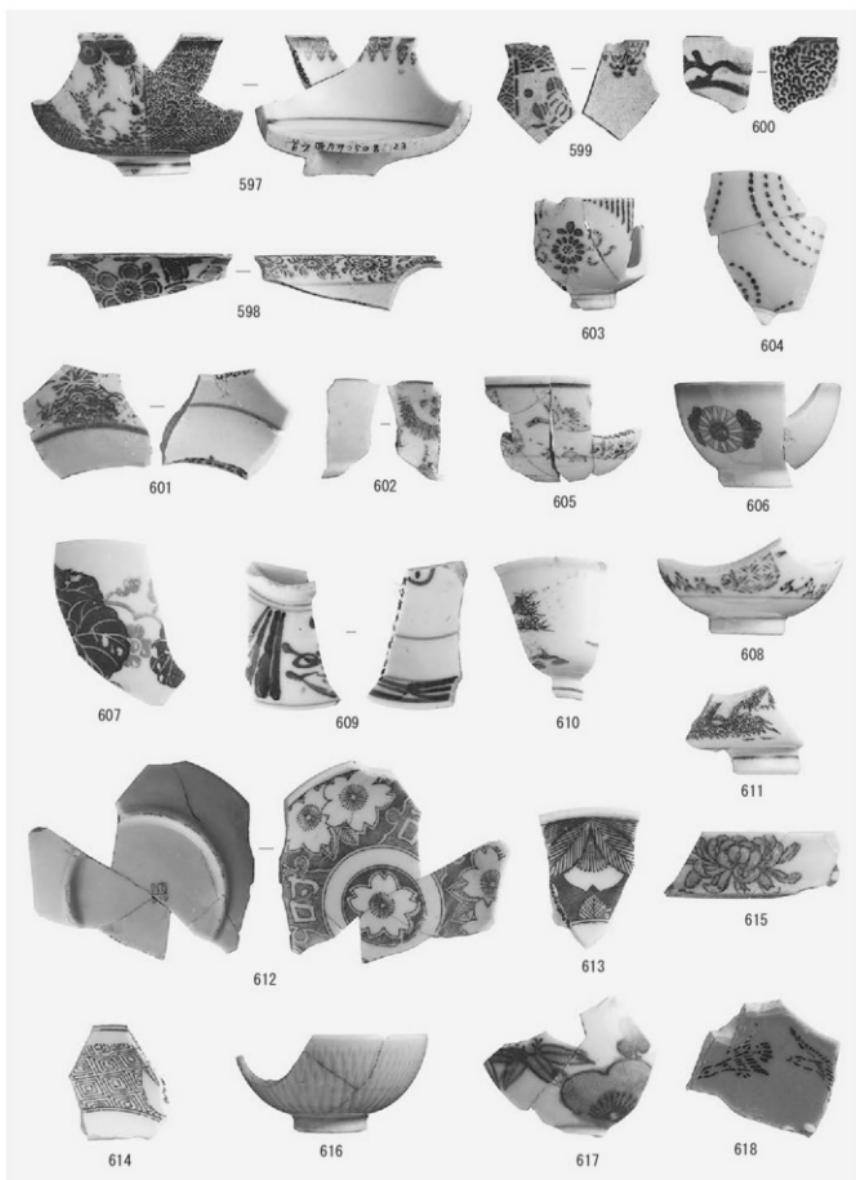
図版26 搅乱層等の出土遺物（4）



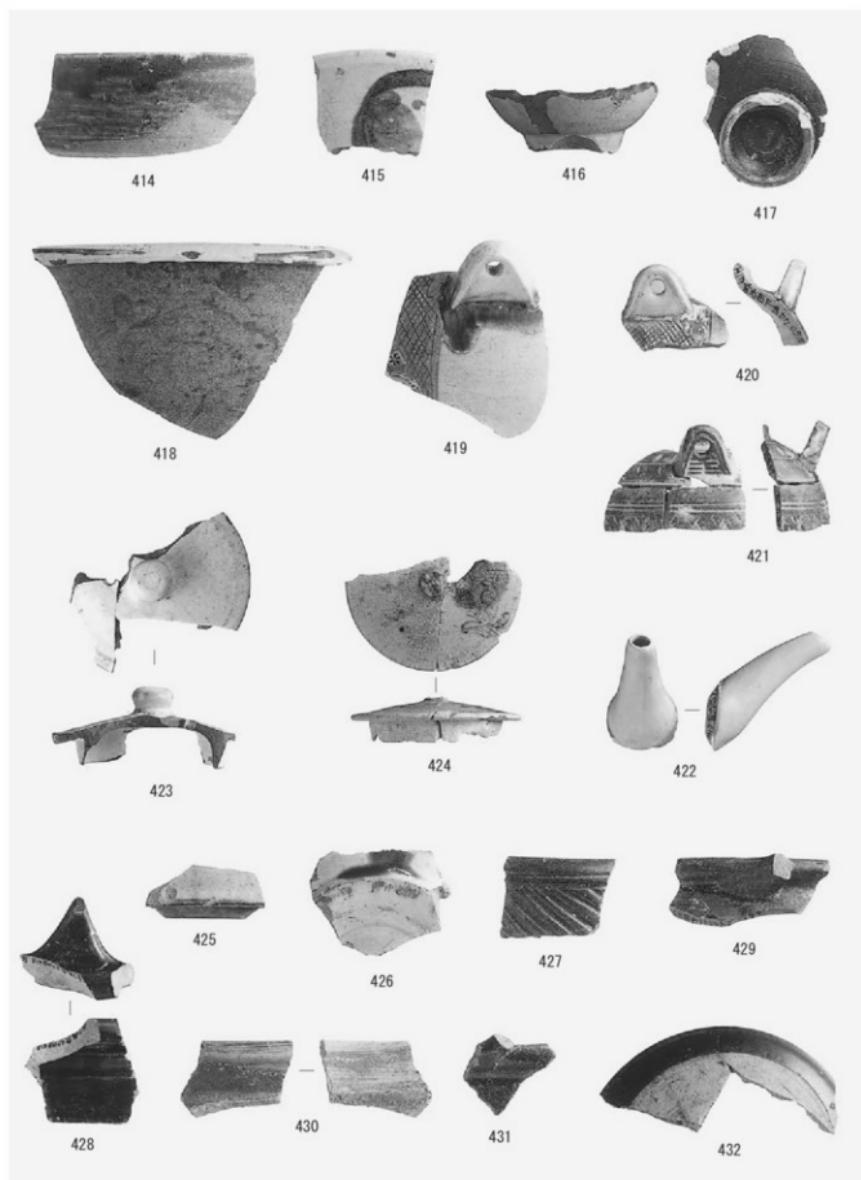
図版27 搅乱層等の出土遺物（5）



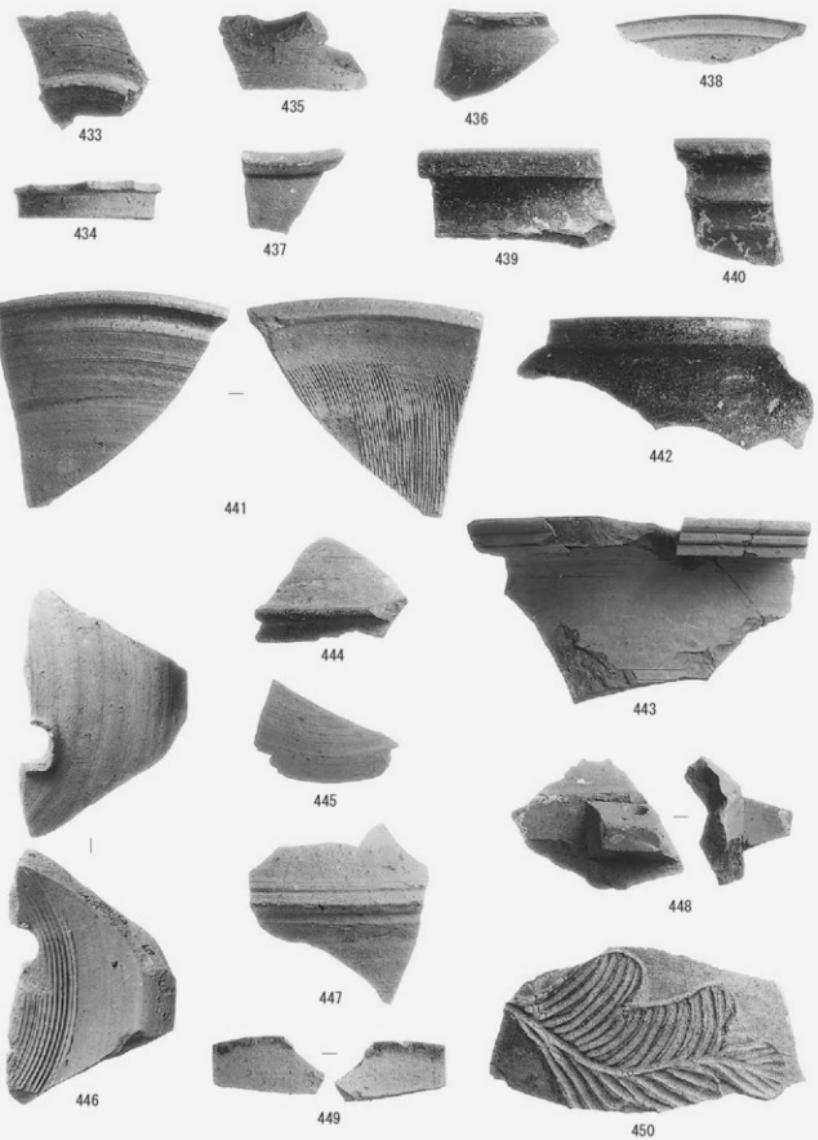
図版28 搅乱層等の出土遺物（6）



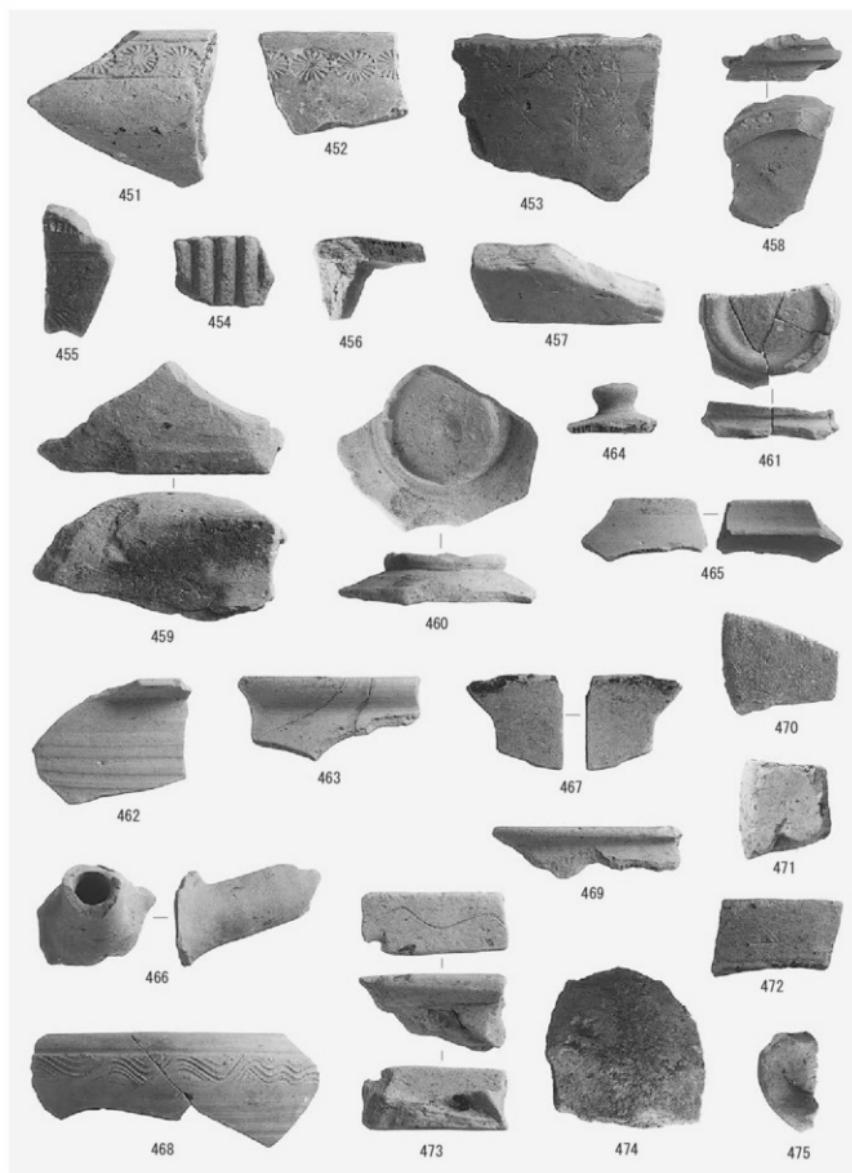
図版29 搢乱層等の出土遺物（7）



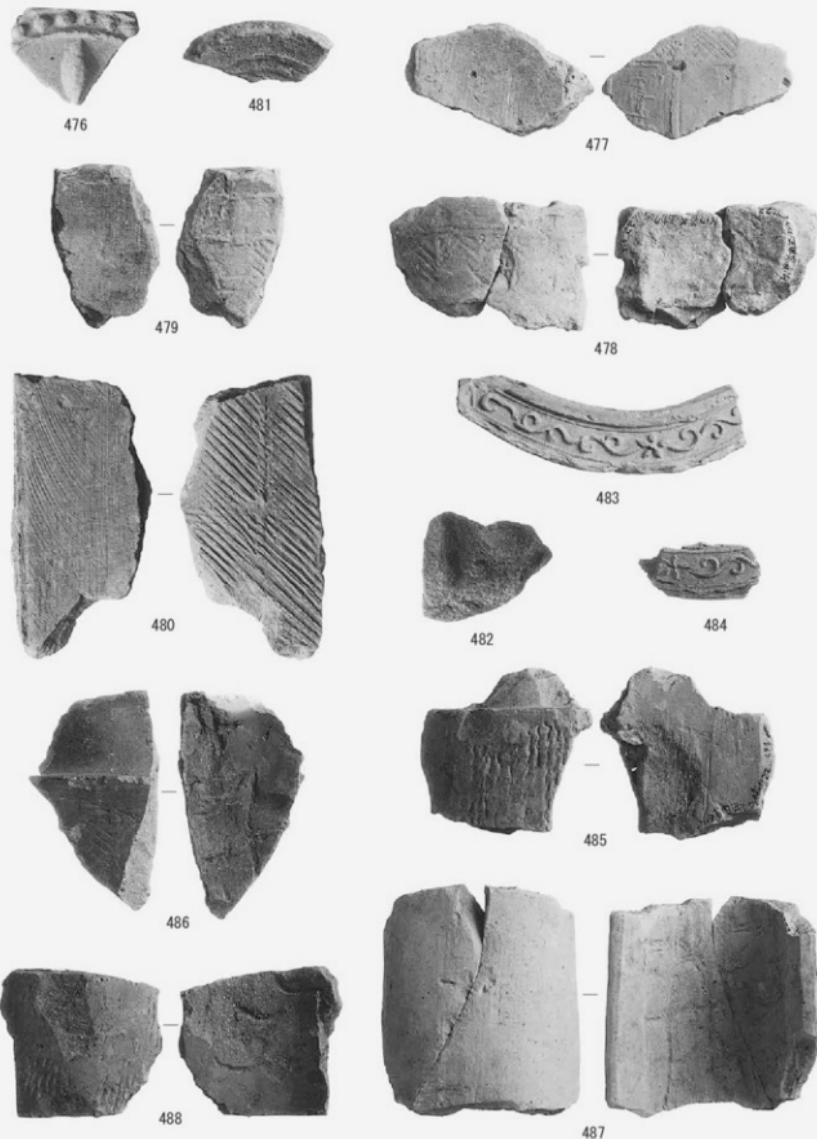
図版30 搅乱層等の出土遺物（8）



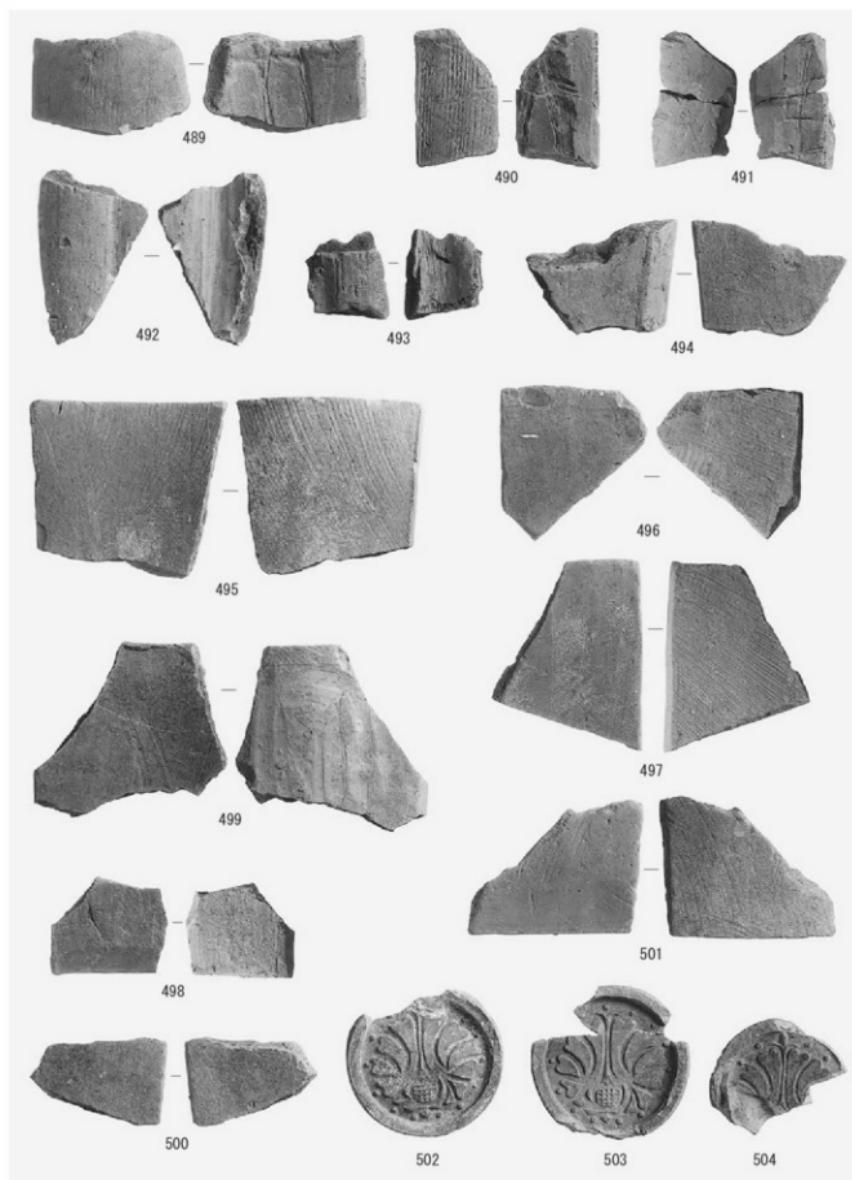
図版31 搅乱層等の出土遺物（9）



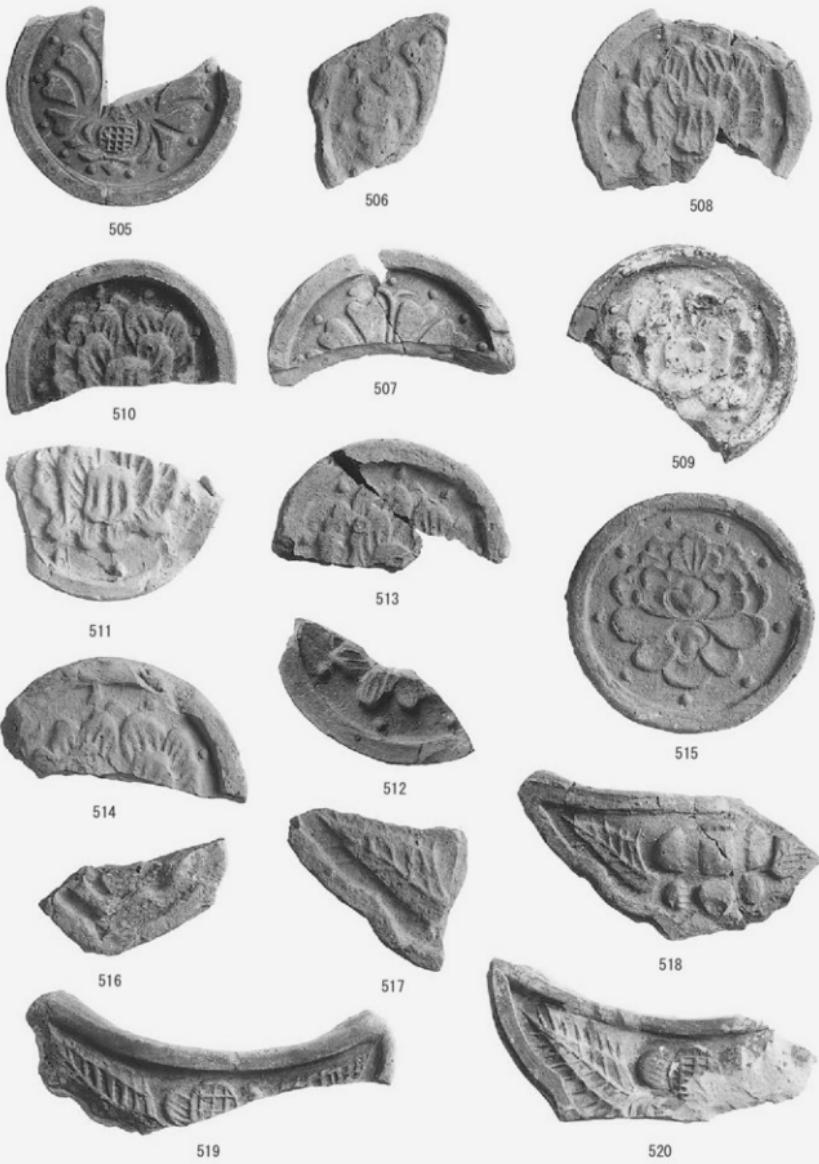
図版32 搅乱層等の出土遺物 (10)



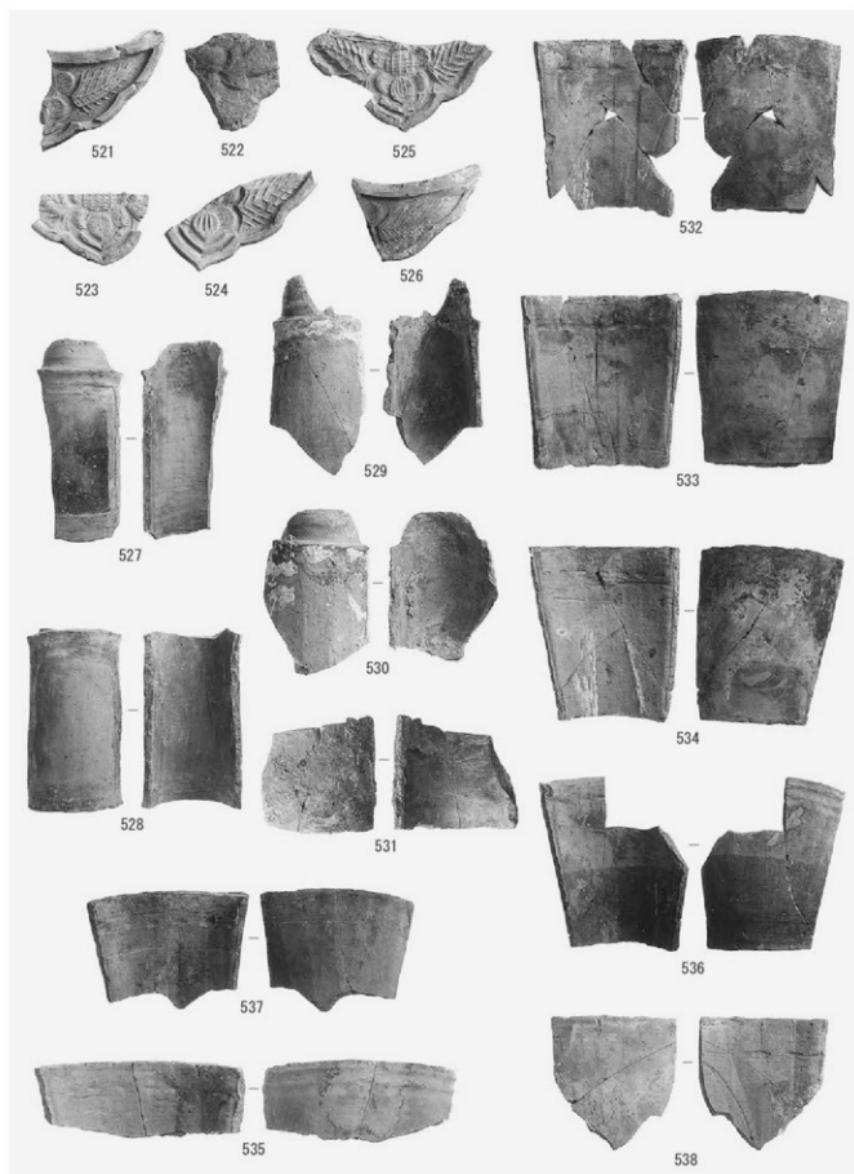
図版33 搅乱層等の出土遺物（11）



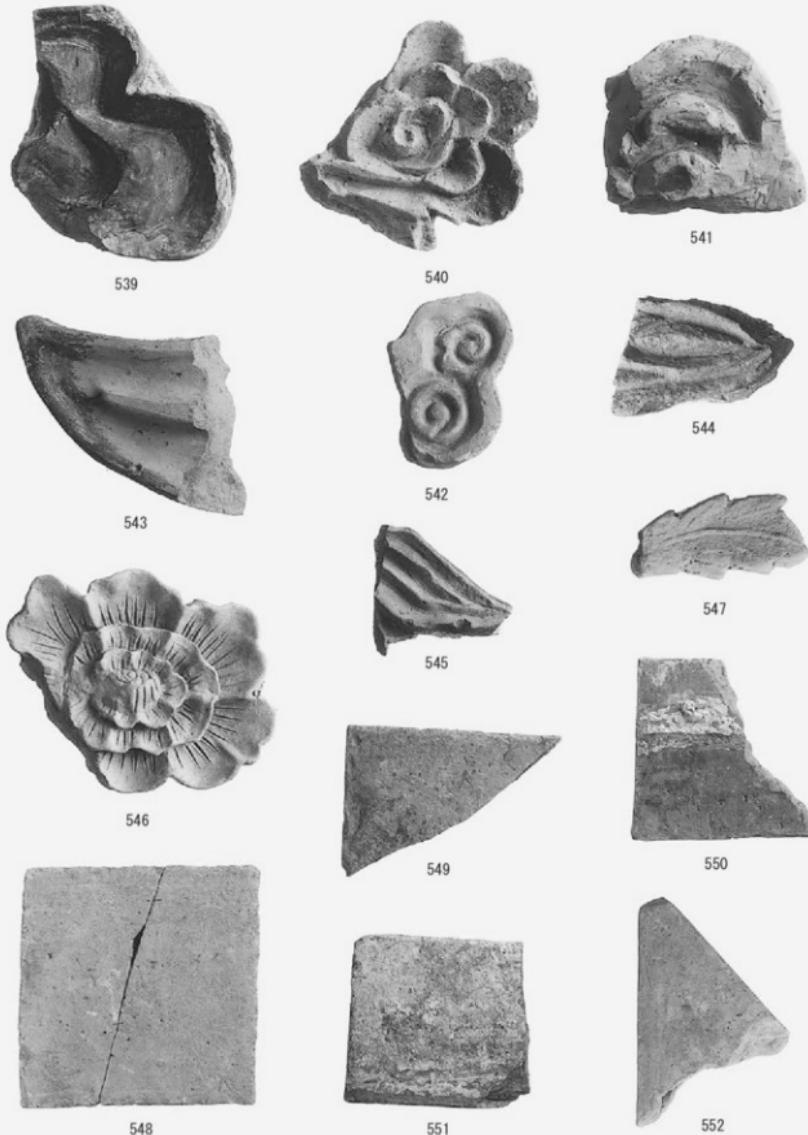
図版34 搅乱層等の出土遺物 (12)



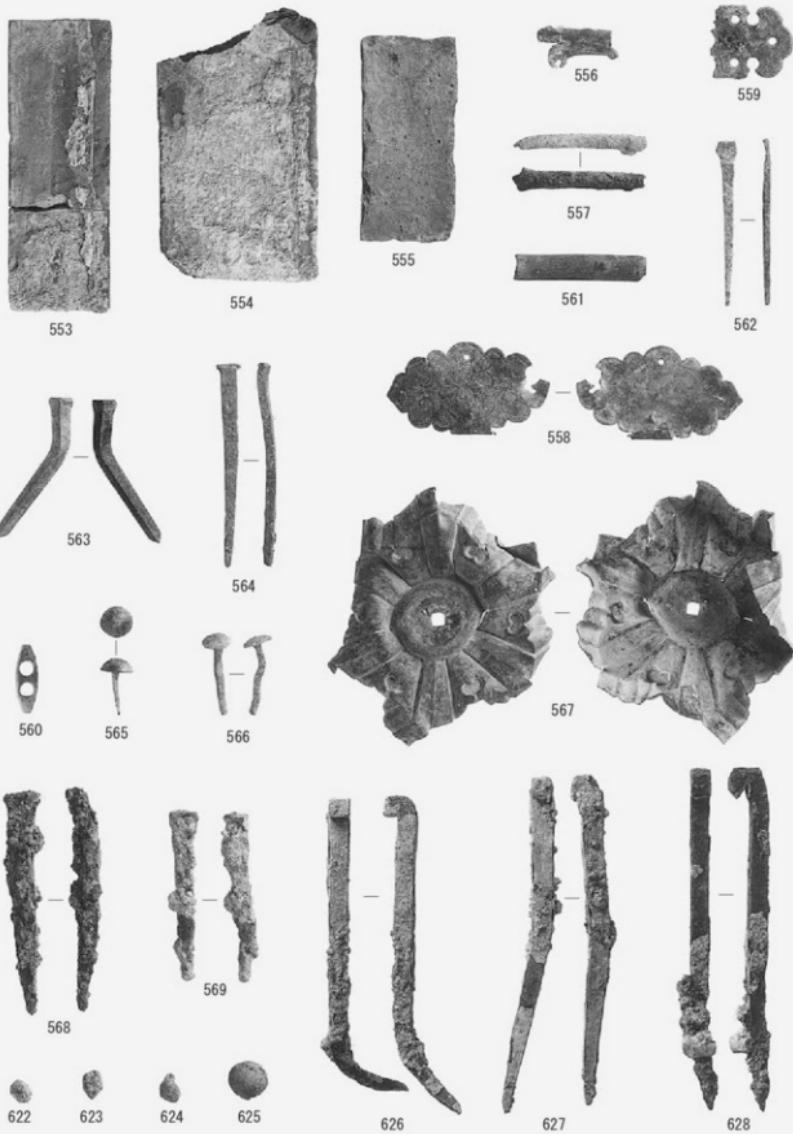
図版35 搅乱層等の出土遺物（13）



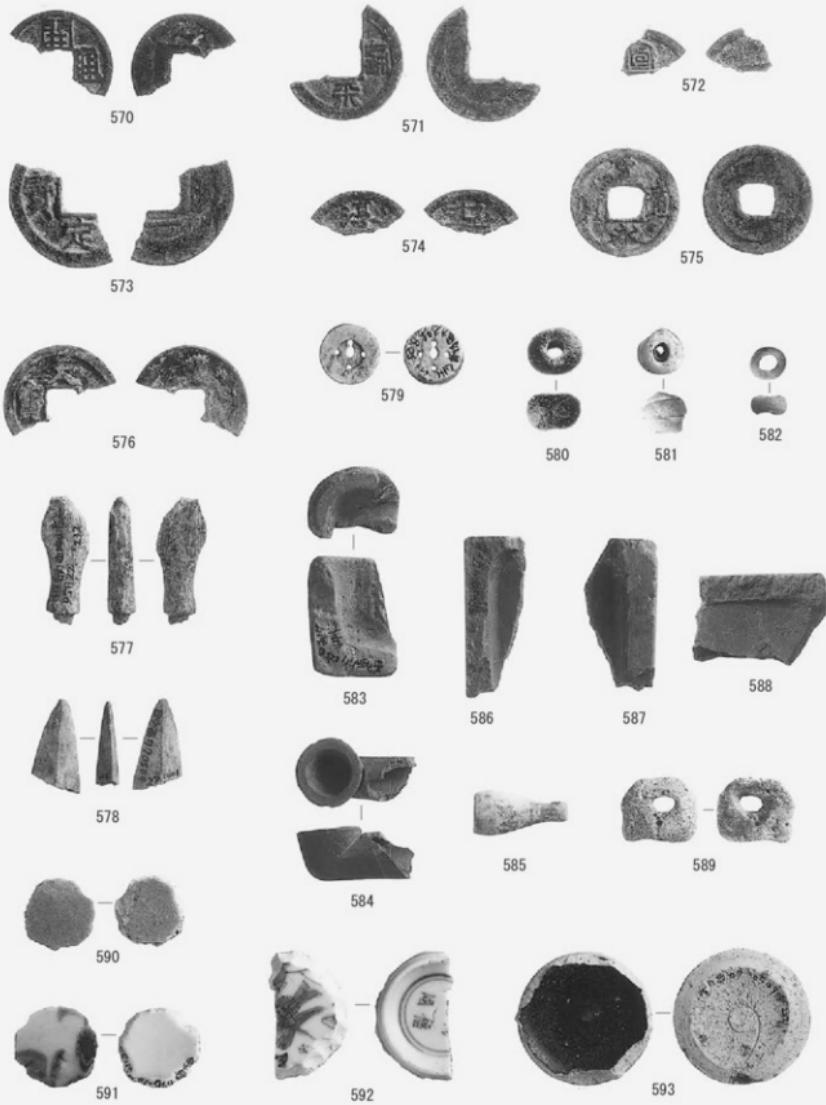
図版36 搅乱層等の出土遺物 (14)



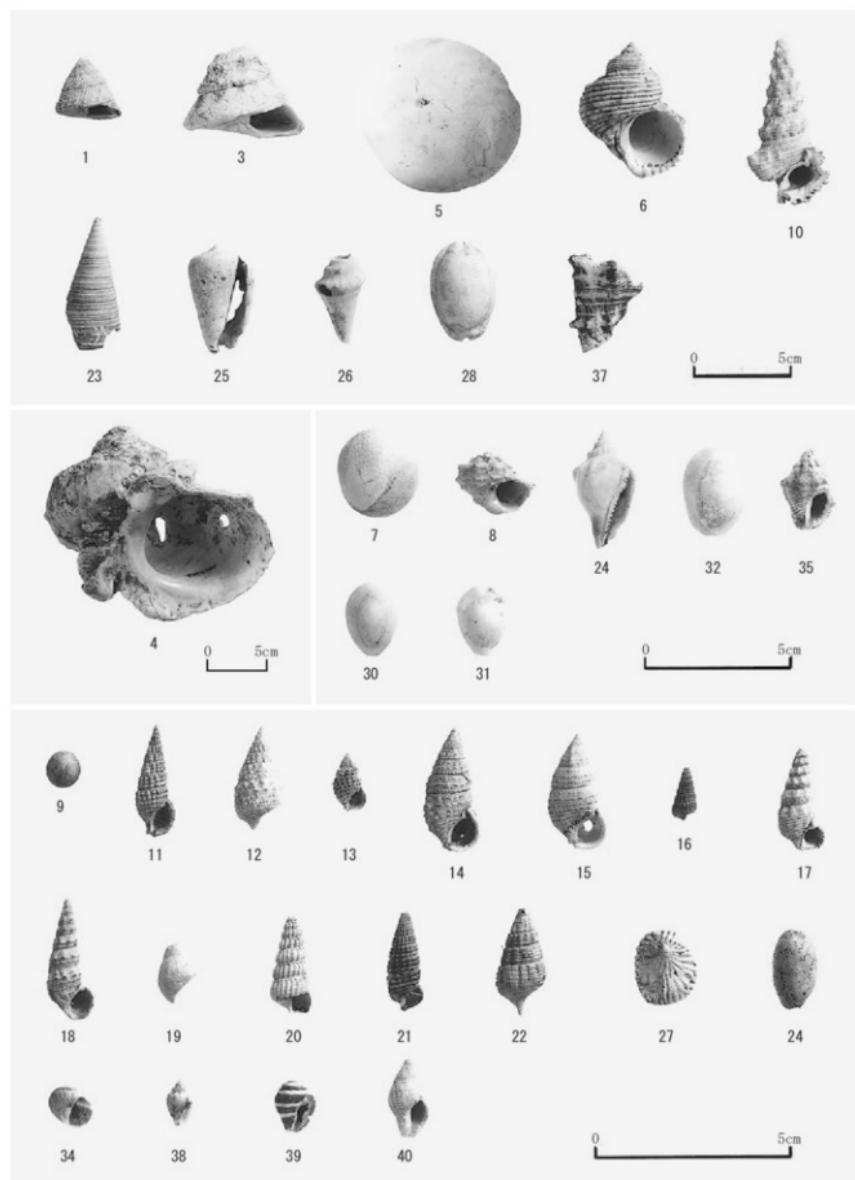
図版37 搅乱層等の出土遺物（15）



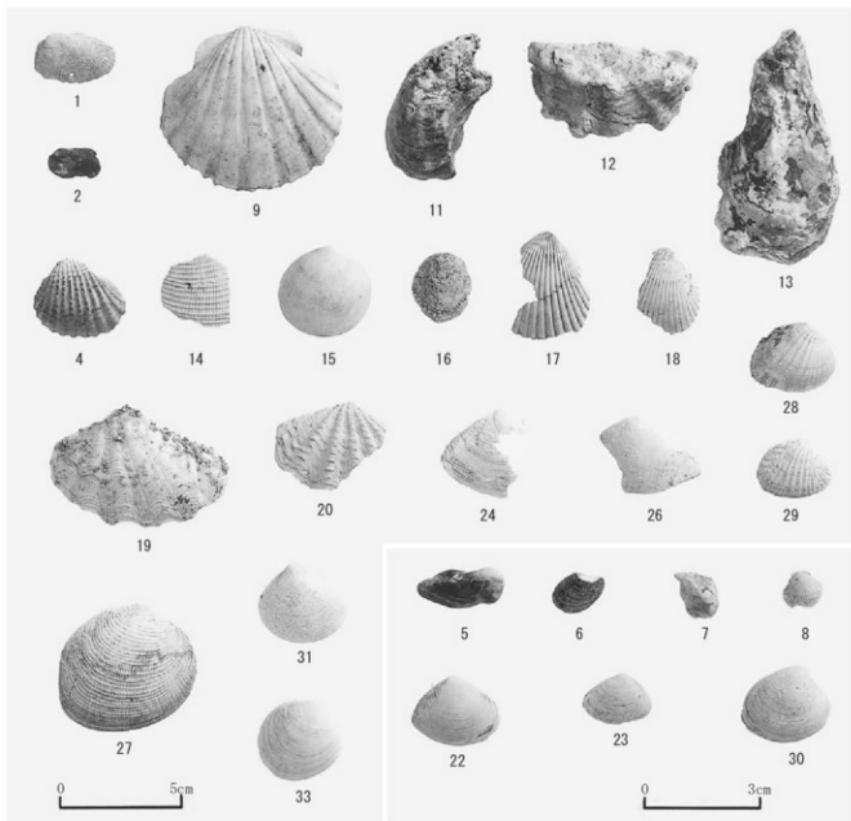
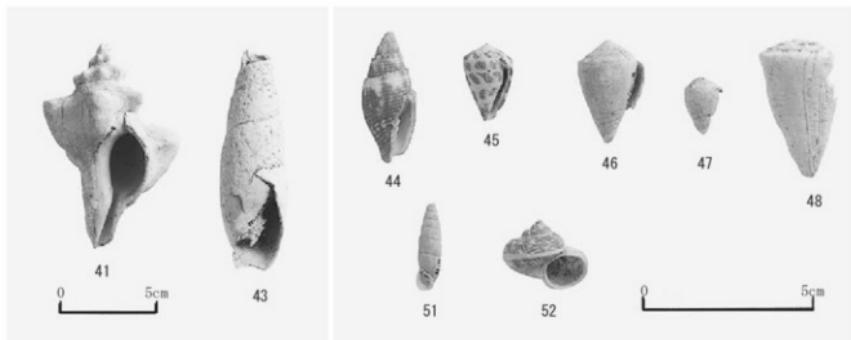
図版38 搅乱層等の出土遺物 (16)



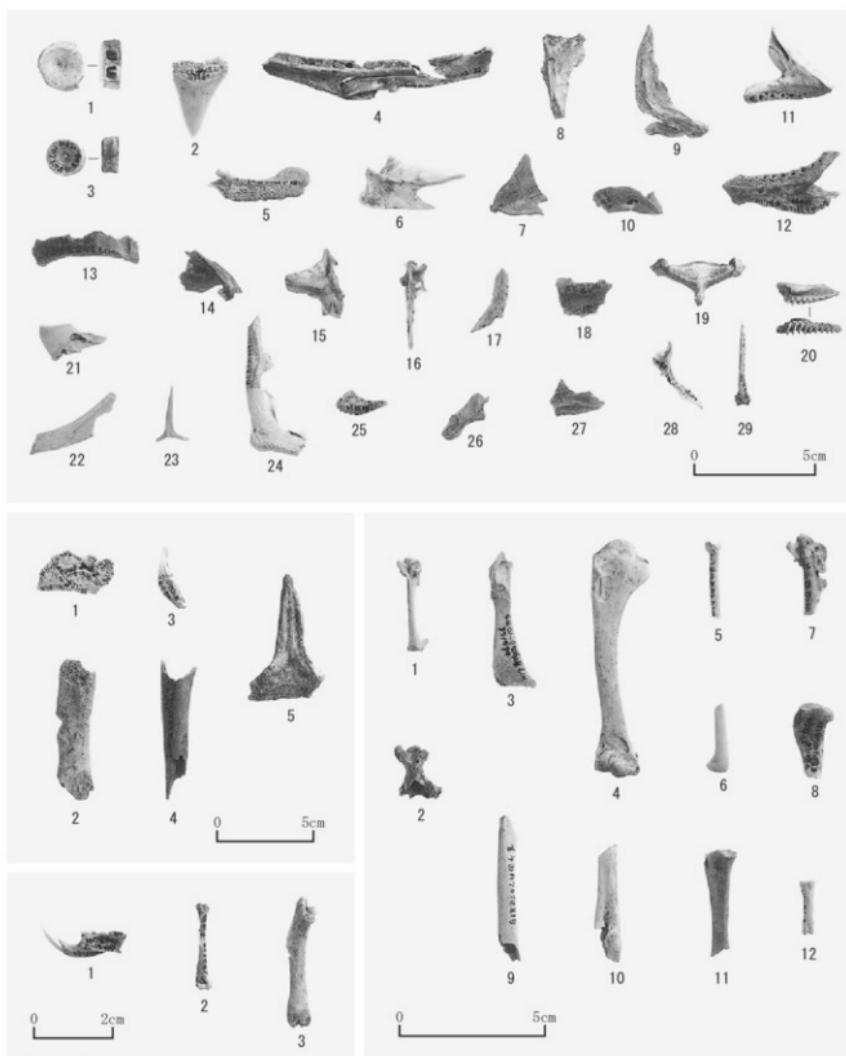
図版39 搅乱層等の出土遺物（17）



図版40 貝（1）巻貝（番号は表と一致）



図版41 貝 (2) 上:卷貝 下:二枚貝 (番号は表と一致)



図版42 骨(1)

上: サカナ

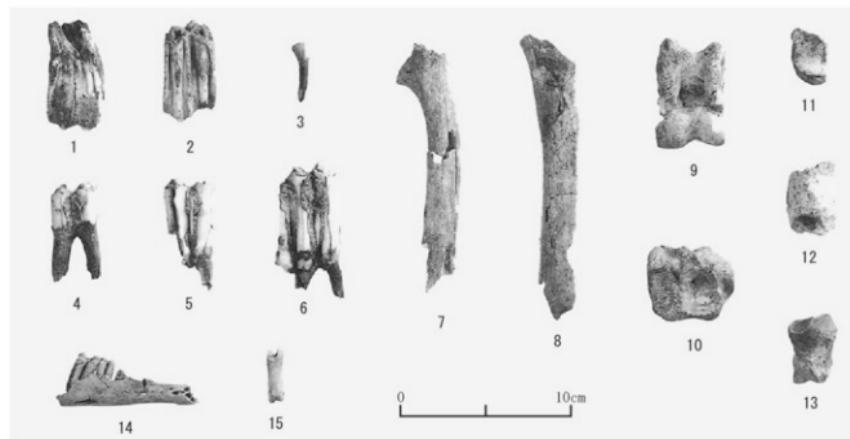
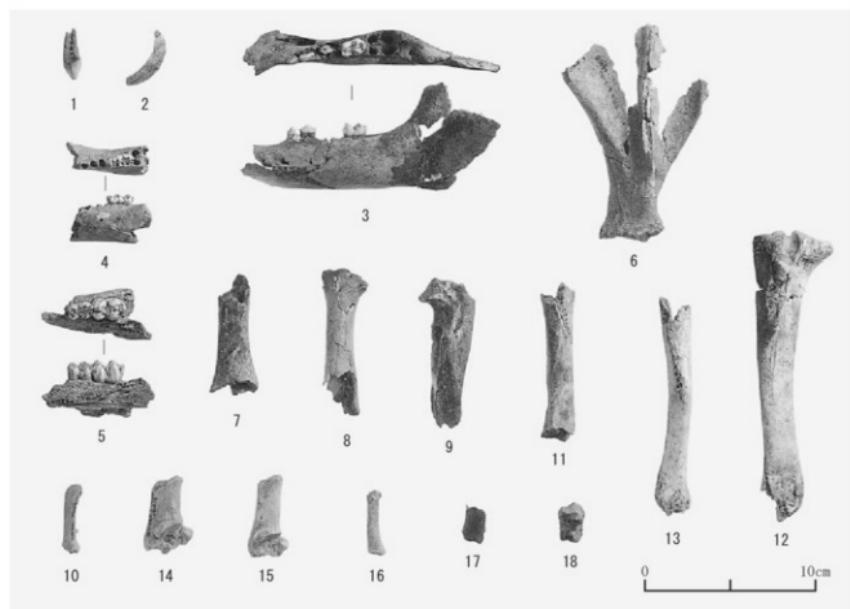
メジロザメ 1. 脊椎骨 サメ 2. 齧 エイ 3. 脊椎骨 ダツ 4. 右 齧骨 ハタ科 5. 右 前上顎骨 6. 右 角骨
 7. 左 方骨 8. 右 舌頭 9. 右 前鰓蓋骨 クロダイ 10. 右 主上顎骨 ハマフエフキ 11. 左 前上顎骨 12. 右 齧骨
 13. 右 主上顎骨 14. 右 口蓋 15. 左 角骨 16. 右 舌頭 17. 左 前鰓蓋骨 18. 左 主鰓蓋骨 コブダイ 19. 下咽骨
 ナンヨウクダリ 20. 左 上咽頭骨 ブダイ科 21. 左 齧骨 カワハギ類 22. 腹帯 ハリセンボン科 23. 緩 種不明
 24. 左 前上顎骨 25. 右 前上顎骨 26. 左 口蓋 27. 左 角骨 28. 右 眼頭骨 29. 背鰓棘(第1 or 2)

左中:

左下: ネズミ

右下: トリ

ウミガメ 1. 頭蓋骨 2. 右 椅骨 イヌ 3. 大歯 4. 左 上腕骨 ジュゴン 5. 緩突起
 1. 左 下顎骨 2. 右 上腕骨 3. 左 大腿骨 キジバト 1. 右 中手骨 ニワトリ 2. 頭椎 3. 左 烏口骨 4. 右 上腕骨 5. 左 椅骨 6. 右 椅骨 7. 右 中手骨
 8. 右 大腿骨 9. 右 大腿骨 10. 左 腰骨 11. 左 中足骨 12. 趾骨



図版43 骨(2)

- 上: ブタ
 1. 左 上顎骨 大歯 卵 2. 左 下顎骨 大歯 卵 3. 左 下顎骨 dm₃ P₄ M₁ 4. 左 下顎骨 dm₃ 5. 左 下顎骨 M₂
 6. 右 肩甲骨 7. 左 上腕骨 8. 右 楔骨 9. 左 尺骨 10. 左 中手骨 V 11. 右 大腿骨 12. 左 脛骨 13. 右 脛骨 14. 左 跗骨
 15. 左 踵骨 16. 左 中足骨 V 17. 右 基節骨 18. 左 中節骨
 下: ウシ
 1. 右 上顎骨 M₂ 2. 右 上顎骨 M₃ 3. 左 下顎骨 切歯 4. 右 下顎骨 M₃ 5. 右 下顎骨 M₆ 6. 下顎骨 M₆
 7. 左 肋骨(第1) 8. 右 楔骨 半欠 9. 右 距骨 10. 左 中心足根骨 11. 左 2+3足根骨 12. 左 基節骨 キズあり 13. 左 中節骨
 ヤギ
 14. 右 下顎骨 P₂ M₁ 15. 左 基節骨

報告書抄録

ふりがな	しゅりじょうあと						
書名	首里城跡						
副書名	御内原西地区発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第44集						
編著者名	山本正昭、岸本竹美、伊藤圭、長濱健起、上原靜						
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター						
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL 098-835-8751						
発行年月日	平成19(2007)年3月23日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
しゅりじょうあと 首里城跡	沖縄県那覇市 しゅりじょうあと 首里当蔵町 3丁目1番	472018	26° 12'	127° 43'	2005.8～ 2006.1	565m ²	国営首里城公園整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
首里城跡	城跡	グスク時代 ～ 近代	石積み 集石 石段跡 石囲い遺構 石列 柱穴	青磁 白磁 染付 褐釉陶器 タイ産土器 黒釉陶器 その他の輸入陶磁器 本土産陶磁器 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 土器 屋瓦 埠瓦 金属製品 錢貨 骨製品 玉製品 煙管 石製品 円盤状製品 貝類遺存体 動物遺存体			

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第44集

首里城跡

—御内原西地区発掘調査報告書—

発行年 平成19（2007）年3月23日
編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7
TEL 098（835）8751
<http://www.maizou-okinawa.gr.jp>
印 刷 （有）福琉印刷
〒900-0012 沖縄県那覇市泊2-19-8
TEL 098（867）1989

この報告書は、500部製作し、1部あたりの経費は3,990円です。

©沖縄県立埋蔵文化財センター 2007 Printed in Japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。